

夜の魔術師

R. F. Boiran

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

東京レイヴンズの二次創作です。

神様に魔法の右腕をもらったオリ主が、夏目の弟に転生して原作に絡んでいくお話です。

思いつきで素人が書いてみました。

目次

第一章

1 0.	プロローグ	1
1 1.	過去話	11
1 2.	陰陽術	18
1 3.	姉の相談	27
1 4.	泰山府君祭	37
1 5.	祭の後に	65
1 6.	間話1 お仕事	75
2 1.	入塾（前編）	88
2 1.	入塾（中編）	97
2 1.	入塾（後編）	122

2 2.	邂逅（前編）	134
2 2.	邂逅（後編）	149
2 3.	魔術	162
2 4.	陰陽庁（前編）	185
2 4.	陰陽庁（後編）	198
2 5.	戦闘	218
2 6.	その後	237
2 7.	召喚	259
2 8.	魔術回路（前編）	285
2 8.	魔術回路（後編）	304
2 9.	出発	330
2 10.	時を越える者	350
2 11.	後日談	373

503	2	479	2	455	2	428	2	414	2	2
	1		1		1		1		1	1
	3.		3.		3.		3.		3.	2.
	陰		陰		陰		陰		陰	轉換期
	陽		陽		陽		陽		陽	
	塾		塾		塾		塾		塾	
	襲		襲		襲		襲		襲	
	擊		擊		擊		擊		擊	
	(5)		(4)		(3)		(2)		(1)	

第一章

1—0. プロローグ

こんな結末なんてあんまりよ——

あたしはあたしが手を出したものの結末に愕然とした。

泰山府君祭。

それはあたしの手には余るシロモノだった。

あいつに殺されたお兄ちゃんを蘇らせようと必死になって研究し、そして泰山府君祭を行つた。

あいつが死んだ今、もう誰もお兄ちゃんとあたしを傷つける者はいない。

あたしはお兄ちゃんを生き返らせて今度こそ2人で幸せになるんだ。

そう夢見ていた。

でもそれは決して開いてはいけなない禁断の箱を開けるに等しいことだった。

そう。あたしが夢見ていたものは幻想だったんだ。

現実是非情だ。

そんなあたしの夢は儚くも崩れ去り、お兄ちゃんが生き返ることはなかった。あたしは目の前が真っ暗になった。

今までそのことだけを思い描いて生きてきたのに。

それが……それがこんな結末なんて……

ふつつつと湧き起こる自分自身に対する怒り。

あたしが泰山府君祭をしたばつかりに、関係のない二人を巻き込んでしまった。

土御門夏目。 土御門春虎。

いま霊災たちに襲われている二人だ。

この状況、生きて帰すことができないかもしれない。

最初は泰山府君祭に必要な土御門夏目の霊気を少しもらう程度にしか考えていなかった。

でも結果的にこの状況に巻き込んだ形になってしまった。

邪魔する者たちは行動不能にして、あたしはあたしの目的を果たせばそれでいい。

殺し、殺されるようなことになるなんて思っていなかった、なんて言い訳にもならない。

そのことに対しての責任を酷く感じる。

目の前に蔓延る霊災たちを見据える。

霊災たちは今、土御門夏目と春虎を襲っている。

あたしが泰山府君祭を行ったときにあたりは膨大な霊気に包まれた。

すると空から霊災が一つ、また一つと降ってきた。

それは現時点で十三体。

まだ増えるかはわからない。でも今のところは止まっている。

霊災たちはここに降りたあと、すぐにあたしたちを襲い始めた。

さらに悪いことに、ここに溢れている霊気を浴びた霊災たちはたちまちの内に実体

化、異形と化していった。

霊災の一体を見る。異様な影、歪な四肢と胴。長い尾。

全長はおそらく10メートル。

他の霊災も似たようなものだ。

間違いなくフェーズ3ね。

いったい何の冗談だっというのよ。

フェーズ3が13体？ これじゃあまるで上巳じょうしのおおほろえの大祓よ。

これじゃあ、あたしが憎んだあいつと同じことをあたしはやってることじゃない。

い。

なんて皮肉なの……。

あたしはそのことで自分自身が心底嫌になった。

でも、今はそんな感傷に浸っている場合じゃないわ。

あたしはここで倒れてもいい。

でも土御門夏目や春虎は関係ない。

絶対に助けてみせる。

意を決しあたしは一冊の本、聖書を手に取る。

そして、

胸の内に抱えている怒りを力に変えて聖書を靈災に向かって投げつけた。

「あたしが追い求めてきた結果がコレだっていうの!? ふざけんな!!!」

あたしの力ある言葉に反応し、聖書が跳ね上がり、そして爆発した。

中のページがマシンガンのように乱れ飛び、この山の頂上を式神で埋め尽くすように

舞った。

さつきまであたしたちに迫っていた靈災たちは、この式神によって完全に分断され

た。

これはあたしのオリジナル。

攻撃力はほとんどないけど、今ここにいる靈災たちを足止めするにはこれが効果的だった。

いくらフェーズ3といってもあたしのこの拘束から逃げられるわけない。あたしは自分の力に絶対の自信を持っていた。

「土御門夏目、春虎っ！ いまのうちに——」

そこから逃げてと言いかけたそのとき、霊災たちは式神をいとも簡単に破りそしてあたしに向かつてきた。

なんで……

頭の中はそれしか考えられなかった。

そして、その考えは衝撃と共に一瞬のうちにかき消えることとなった。

「きゃああああああああ——」

あたしは霊災の一体に体の横から殴られて数メートル飛ばされた。

「くっ——」

あたしはすぐに自分の現状を把握した。

体を少し動かすと全身に痛みが走った。

骨は折れていないようだけど……ダメだわ。力が入らない。

あたしは腕の力を何とか入れて起き上がろうとした。

くそっ——

早くしないと、霊災がくる。

こんなんじや、あの二人を助けられない。

このままじや、靈災にみんな殺されちゃう。

脳裏でそんな言葉が延々と連鎖する。

絶望が絶望を生んでいった。

泰山府君祭という希望の詰まったパンドラの箱は開けてみたら絶望という皮肉。

自分の無能さに、自分の無力さに。

あたしは目頭が熱くなるのがわかった。

お兄ちゃんごめんなさい、そして——

「こんなことになるなんて……。巻き込んで、ごめんなさい——土御門夏目、春虎

……」

ふと声が聞こえた……

泰山府君祭の祭壇近くから声が聞こえた時、すでに彼は、ただそこに存在していた。最初からいたようにも思えたし、突然現れたようにも思えた。

「……いつらを排除するには……」

「……」

あたしはなにか話そうとして……

でも、なにも言葉を紡ぐことが出来ずにいた。

年はあたしと同じくらいかな。

ジーパンに海人とプリントされた赤いTシャツのセンスのかけらもないふざけた
フアツション。

男の子にしては長いボサボサの手入れされていない髪。

もつとなんとかならないのか思う反面、

彼のダークブルーの瞳からは、自身が吸い込まれるような、圧倒的なまでの意志の力が宿っていた。

「——ット……」

彼が何か呟いた瞬間、彼の右腕は青く光り、彼の周囲には何かよくわからない文字で書かれた円盤のようなものが回転しながら漂っていた。

そして流星のような青い何かが出たと思ったときには、激しい爆発音と共に辺りは爆風に包まれていた。

倒れた体勢のまま顔を低く爆風から身を守る。

爆風によって発生した小石が飛んでくる。

それはあたしの頭を掠めていった。

爆風が収まり、あたしは顔を上げた。

すると今までここにいた、ここに蔓延していた霊災がいなかった。一体も残らず。そう、さっきの彼の攻撃でここにいた全ての霊災が一瞬にして消滅したんだ。

信じられなかった。

このあたしが足止めすらできなかった霊災を一瞬で、しかも十三体同時に消滅。

助かったという安堵よりも目の前の信じられない事象に心を奪われていた。

あたしはただただ、それをやった彼を目で追うことしかできなかった。

突然現れたその彼はその余韻に浸ることなく次の動作に移っていた。

流れるような動きで、彼は地面に左手をつけ、こちらには聞こえない声で、また何かを呟いた。

その瞬間、彼の右腕と彼の足下、そして中空にさっきよりも巨大な幾何学模様の円盤が回転しながら展開していた。

いったいこれはなに……

十三歳にして難関中の難関である「陰陽一種」試験をクリアし、史上最年少で「十二神将」の一人に数えられ「神童」とまで呼ばれるようになった。

そのあたしの知識を持ってしても、こんな術式みたことも聞いたこともない。

理解の外にある術式の円盤は高速で回転していき、彼は右手を空、霊脈の根元に広がる黒い影に向けた。

そして、

「—— 一気に貫けえええッ!!!」

意志の籠もった声と共に、彼の右手から青白い光が放たれ、圧倒的なまでの光は黒い影に寸分違わず命中し、一気に貫き、そして天上との繋がりを絶った。

その瞬間、祭壇が巨大な光に包まれ、あたしは意識を手放した。

気がつくあたりには充滿していた膨大な霊気の気配が消えてきた。

「っ——」

どうやらあたしは気を失っていたみたいだ。

閉じていた目を開き、辺りを見回し、隣には先ほどの彼が座っていることに気が付いた。

視線を上げて彼を見上げる。ふと彼と目があつた。

そこには先ほどみた吸い込まれるような瞳はなく、まっすぐ穏やかにこちらを見据えていた。

さ、さつきは彼の行動に驚いて声をかけそびれたけど、今度こそっ!

あたしは意を決して、

「あんた……一体だれよっ!?

それにさつきの——」

彼は一瞬考えたような仕草をとり、

「僕は土御門碧。

土御門夏目の弟です」

彼は笑いながらそう答えた。

1—1. 過去話

僕が幼い頃の話。

僕はそれまで、土御門宗家の第二子として、なんの疑問を抱かず、ただただ毎日をごしていた。

土御門宗家として恥じないようにと、姉さんと共に陰陽術の鍛錬の毎日だった。

優秀な姉に比べ僕は陰陽術の才能がなく、鍛錬を始めてから1年経った時点でも簡易式の操作すら危ういものという状態だった。

1年も同じことができないとなると、子供の僕でも気がついていった。正直に言えば向いていないな、と。

そんなある日のこと、

10年前のあの日、姉の夏目と屋敷の庭で陰陽術の練習をしていると、唐突に右腕から痛みを感じた。

——虫にも刺されたのだろうか？

はじめは気にするものでもなかったが、痛みは次第に広がっていき、右腕全体に及ぶ

までになっていた。

さすがに無視できなくなり

「……いったい急になんだっていう——」

息を呑んだ。

それはそうだ。

右腕が突如入れ墨のように青白く淡い光を放っていたからである。

そして唐突に思い出した。

この世界に生まれてから忘れていた記憶が——

頭にかかっていた霧が晴れるように、すべてを理解した。

僕は一度死んだ身であること。

そして、神様から貰ったこの右腕のこと。

そう、

僕はこの右腕を持って世界に転生したのだ。

——僕は屋敷の広間で、父と姉さんに見守られながら寝ていた。どうやらあのあと気を失ったようだ。

「夏目から聞き、倒れているお前を見つけ此処に運んだ。

気分はどうだ？ 痛むところはないか？」

「——少々、貧血を起こしたようですが大丈夫です。

でも少し身体が重いので、少し休ませてもらいますね」

「そうか……お前がそういうのであればそうなのだろう。

では私は書齋にいるから、何かあつたら夏目に頼んで呼ぶように。

夏目、頼んだぞ——」

「は、——」

父は僕の様子を確認し、居間から退出していった。

父は寡黙ではあるが僕ら姉弟を大切にしてくれているのだ。

土御門家宗主の忙しい身であるのに可能な限りかまってくれたり、今回みたいに何かあるとすぐに駆けつけてくれる。

ただ寡黙である為、本意が伝わりにくく、姉は苦手としているみたいだが。

——姉さんの手の温もりが伝わってくる。

どうやら姉さんは僕の手をずっと握っていたらしい。

姉さん、土御門夏目は僕の一つ上の姉で、いつも優しく接してくれている。

偶に過保護と思うコトもあるのだが……

不安そうに見つめる姉さんに手を握りかえし「……大丈夫。ありがとう」と伝え、姉の不安が少し和らいだところで、

思い出した記憶を整理してみた。

早い話、

死んだ身の僕は、神様によって魔法の右腕もらい、この世界に転生したということらしい。

らしいというの、

いろいろなことを知識としては思い出すように理解できたが、自分のこととして実感が湧かないというか、過去の自分を第三者的に見てしまう自分がいた。

これは僕が思うに、土御門碧として生を受けてから現在までに確立した自我が既に在るからではないかと考える。

既に在るものにあとから記憶を付け加えても、それが主になるものではないということなのだろう。

……まあ。

過去の僕がどうだったのか、というよりも、陰陽術の才能がないことも相まって、この知識と右腕を使いこなせたら面白いだろうって、子供の僕はそっちの興味が強かったわけ——

あれから10年、僕は土御門家の義務を果たしつつ、知識や右腕を使い「魔術」を使いこなすための鍛錬を行ってきた。

そう「魔術」である。

この右腕に宿るは魔術刻印。この身には魔術回路を宿す。

スイッチ入れてブン回すとファンタジーなことが出来てしまうアレである。

神様転生でもらったこの魔術刻印には様々な魔術が管理されており、単純に魔力をぶつける魔弾や収束砲の他にも一般的な魔術やルーンまで使えるようになっていた。

行使したことはないが、魔法も行使できるようになっている。

この僕だけの特性を活かすべく、陰陽術を覚える傍ら、積極的に魔術の鍛錬を行ってきた。

この右腕の存在は僕だけの特性であることから、積極的に隠すつもりはないが、しかし

今のところは隠匿すべく人前での行使は避けている。

現時点で僕の魔術を知る人間は姉さん、父さん、小父、小母の4人のみである。

話が逸れたが、小さい頃から始めたこの鍛錬のお陰で、今では魔術刻印、魔術回路を意のままに操れるようになったのである——

——扉を叩く音がした。

そのあとに、すーっと心地よい音とともに襖が開かれた。

「碧。いますかー?」

足音と共に、姉さんが近づいてくる。

「………呆れた。まだ寝てたんですか?」

「………んあ? おはよう——」

あれ、姉さん東京から帰ってきてた、の——？」
焦点の定まらない目で姉さんを見つめながら言った。

「はい、おはよう。」

夏期休暇なので一週間ほど、戻ってきたんです。

それより——」

「朝食の用意は出来ています。」

さあ、一緒に食べましょう——」

姉さんは僕の手を引いて、笑顔でそんなことを言った。

——まったく、父さんが出張つてて家にはいないから思う存分惰眠を貪っていたというのに、そんな笑顔で言われたら眠気も吹き飛んでしまう。

くだらないことを考えている自分に呆れながら、おとなしく姉さんの小さな手に引かれていった。

1—2. 陰陽術

朝食を取り終え時刻は午前9時。

寝巻きからTシャツ、ジーパンの普段着に着替えてから庭へと出る。

毎日の日課である陰陽術の鍛錬に入るためだ。

地元の名士である土御門家は屋敷を構えており、人里とは少し離れたところにある。屋敷というだけあって敷地はかなり広い。

僕はむかしからこの広い屋敷の庭で陰陽術の鍛錬をしている。

静かな場所でも誰にも見られることもなく、鍛錬をするには都合のいい場所だ。

陰陽術は一般の人から特異なモノとして認識されている。

陰陽術を管理している組織が陰陽術そのものを隠匿しているというわけではない。

だが一般人は陰陽術が身近にあるわけではないのだ。

だとするならば、なるべく人目の付かないところで鍛錬するに越したことはないだろう。

特に僕の陰陽術は見た目が派手なのだから——

僕は陰陽術の才能がなかった。

いや特定の陰陽術に特化しているといった方が正しいか。

姉さんみたく器用に術を操作することができないのだ。

普通の陰陽師なら簡単に習得できる術でも、僕にはそれをするのができなく、何度も、何度も、術に失敗していた。

それでも最後には必ず報われる——

そう自身に言い聞かせながら、繰り返し、繰り返し、鍛錬していったが、成功することとはなかった。

やはり僕の起源と関係があるのだろうか——？

土御門家の義務とはいえ、失敗の繰り返しで、子供の頃の僕は少しナーバスになっていった。

そんな僕を察してか、ある日、父さんがとある女性を連れてきた。

うち何度か来る見た綺麗な若々しい女性、土御門分家の千鶴さん、僕の小母にあたる人だ。

優秀な星詠みでもある父さんは、僕がこうなることが分かっていた様子だった。その解決策を示してくれたのが小母さんである。

小母は僕に在る術を見せてくれた。印を切り、

「ノウマク・サンマンダ・ボダナン・インドラヤ・ソワカ！」

激しい雷鳴が轟く。

視界は激しい雷撃により、真っ白に覆われた。

雷撃は辺り一面を焼き尽くし、庭にクレーターを作りながら破壊していった。

圧倒的な白……、雷の嵐。

破壊の限りを尽くした雷撃は次第に収まった。

すべてが終わった後、小母は、

「碧くん、今見せた術はキミに希望を与えてくれるかも知れない。

でも、同時に人を傷つけてしまうこともあるの。

大事な人を傷つけてしまうかも知れない。

——それでも、前に進む勇氣はある？」

今問われれば、少し考えたりもするかも知れない。でもあの頃の僕は子供だったのだ。

子供の僕の心を奪うのにそれは十分だった。

——綺麗だった。

ただ本当にそれだけだったんだ。

深い理由なんか無い。

子供なんてそんなものだろう？

「僕も小母さんみたいに術を使いたい！」

目を輝かせながらそう返した僕の言葉。

小母は苦笑しながら、受け入れてくれた。

そのあと、庭をボコボコにした小母さんは父さんにやり過ぎだと、怒られていたが

……

その日から僕の陰陽術における世界は変わっていった。

相変わらず陰陽術の才能はないが、ある特定の陰陽術だけは使うことができるようになった。

小母さんの術のように破壊に特化したモノだ。

やはり僕の陰陽術は、僕の起源と深く結びついているようだった。

原因が分かれば対応も取ることができ、コツをつかんだ後は土御門家にある書物を漁りながら、いくつかの術を習得することができた。

あれからどのくらい経っただろう……

日々積み重ねた鍛錬によって、僕は下手なりに陰陽術を扱うことができるようになった。

そして——

帝釈天の印を切る。

インド神話の軍神インドラを指す印だ。

あの日、小母さんに教えてもらった、土御門家に生まれた僕に必要な特別な術——

「ノウマク・サンマンダ・ボダナン・インドラヤ・ソワカ！」

その瞬間、視界は激しい雷撃により、辺りは真っ白に覆われた——

「……相変わらず、すごい威力ですね」

姉さんから声が掛かった。

僕は振り向き、

「姉さん、見てたの？ 声かけてくれたらよかったのに。」

——まあ、僕ができる陰陽術は壊すことしかできないし」

「でもすごいよ。」

私こんなこととても出来ないから……

……でもこんなにできる弟がいて誇らしいです」

「——おだてても何もでないよ。」

……それで、朝からソワソワしているみたいだけど僕に何か用？」

姉さんはいつもそうである。

悩みごとなどを自分で抱え込んでしまう癖があるが、姉弟だから話しやすいのか、悩みごとがあるときには僕に相談に来ることがある。

もつとも姉さんが僕に相談することなんて、大体は春虎兄さんのことなのだが——

「……やっぱり碧にはわかるよね。」

実は北斗のことで相談があるの——」

「北斗？ 竜……ではなく、あの姉さんが使っていた簡易式のことですか？」

——簡易式の扱いなら僕より姉さんの方が上手いのでは？」

「そうじゃなくて……そうじゃないの——」

うん？

姉さんらしからぬ、齒切れの悪い悩みだな。

聡明な姉さんはいつもなら要点を上手く伝えてくれるハズだが……

「——わかった。」

少し長くなりそうなら僕の部屋で聞くよ。

庭を元に戻すから少し待ってて」

「うん」

どうやら話が長くなりそうなので、部屋で聞くことにした。

その前に先ほどの術で作ったクレーターを元に戻す。

ぱちん、と指を鳴らす。

右腕の刻印に火を入れる。

「準備。復元、終了」

「呟いたとたん——庭の荒地が整備されるように——いや、元の状態に戻っていった。」

庭が元に戻ったことを確認し、

「——おまたせ、姉さん。じゃあ、行くかうか」

「……はあ」

まるで魔法ですね。まあ今更ですケド——」

何度も見てきた術だというのに呆れるような顔をして、ため息を付いていた。

姉さんは僕の「魔術」を知っている一人だ。

僕の「魔術」を知っているのは、姉さん以外に父さんと、小父さん、小母さんに限られる。

陰陽術とは系統の違う僕の唯一無二の特異性を、第三者に知られることで発生しうる問題や混乱を起こさないためだ。

しかしまあ、この手のものはいつかはバレるものだ。

その時期がいつか、ということはまだ分からないが——

「まあ、僕のことはいいいから」

「姉さんの悩み相談といきましょう」

「わっ！」

僕は姉のやわらかな小さな手を引いて、屋敷へと足を向けた。

1—3. 姉の相談

「——春虎兄さんと北斗が仲良くなつてしまつただけど、見鬼の才能がない春虎兄さんには北斗が式神だということはわからなくて、姉さんも式神だということを伝えていない、と」

北斗は式神である。

土御門家の跡継ぎは男として振る舞うべしという、よくわからない土御門家のしきたりにより、姉さんが男装するための練習用として作り出した簡易式だ。

むかし春虎兄さんが好きだったボーイッシュな女の子をモデルに作り出した、女の子らしい姉さんとは正反対の性格の北斗——

ここまでなら、別段、北斗が式神であることに問題はないが——

「春虎兄さんと北斗がデートをして親密になつていのに、北斗が自分だと打ち明けられなくて悶々としている——

あげく、昨日の夕方、春虎兄さんと姉さんがバッタリ会つてケンカしてしまつた、と」
内容は分かつた。

が、

「つまり、僕に何をしろと？」

結局のところ、姉さんがどうしたいか、ということになる。

言うまでもないが、姉さんは小さい頃から春虎兄さんにゾッコンである。

周りに歳の近い子供が僕を除けば春虎兄さんくらいしか居ないのではそうなるのは必然。

中学になってお互いを意識するようになったためか、今は少し疎遠になっているようだが——

「は、春虎君と仲直りしたいんだ。

そのために、碧に協力して欲しい」

「それはかまわないけど、僕は何をするの？」

「……その、碧の魔術で

——ケンカしたことを忘れさせる、とか」

物騒だな……おい。

姉さんが暴走気味である。

「それは出来なくはないけど、根本的な解決になってないよ。

いや、そもそも痴話げんかに魔術使うつもりはないよ……」
「ち、痴話げんかかって……」

私と春虎君はそういう関係じゃ——」

結論から言つて魔術で人の記憶を改ざんすることは可能である。

だが、記憶の辻褄を合わせるために、忘れた記憶のつなぎ合わせをしなければならな
いたため時間がかかるし、記憶を改ざんする相手を拘束する必要があるのである。

それに仲良くなりたいたいだけなら、そうなるように暗示をかけてしまえば——
いや話が逸れた……

そうではなく、つまり、魔術はただの痴話げんかに使用するようなものではないのだ。
つまるところ、当人同士で話し合うのが妥当か。

「じゃあ、ここうしようよ、姉さん。」

明日春虎兄さんと合つて北斗のこと含めて話し合うつていうのはどうかな？

もちろん春虎兄さんの予定を聞いてからになるけど——」

姉さんは目を見開き

「ええー！ 明日つてなんでそんなに急にっ!？」

「だつてこつちいうのは早いほうがいいじゃん。」

それにこつちに一週間しかいられないんでしょ？

なら早く仲直りしてデートでもしたらいいじゃないか」

「う、うう……分かった。

そうだね。 碧の言うとおりかも。

やつぱりこういうのは私から直接言うしかないよね

いや、でもやつぱり……」

何やら自分の中で葛藤しているようである。

僕はポケットからスマホを取り出し、春虎兄さんに電話をする。

「——春虎兄さん？ お久しぶりです。

実は姉さんのことで相談したいコトが——

え？ 春虎兄さんも姉さんのことで相談が？ ああ、そういうことだったんですか

……

いえ、こちらの話です。 では、時間は——

場所はアーネンエルベというところなんです、分かります？ ああ、よかった。

——ええ、では明日また」

どうやら二人とも考えていることは同じだったようだ。

お似合いだよ、ホント。

僕もこういう恋人が欲しいなあなどと、この田舎じゃ出会いがあるはずもなく

陰々滅々たる憂鬱な気分を、ため息と共に吐き捨てる。

「——はあ……姉さん、段取りできたよ。」

明日夕方に隣のアーネンエルベという喫茶店で」

「ええー!? ホントに明日やるの!?

うー、まだ心の準備が……」

「あー、春虎兄さんも姉さんとケンカしたこと気にしている様子だったよ」

「ホントですか! よかったー」

「じゃあ明日でも問題ないよね」

「うっ……それとこれとは話は別ですっ」

「ですよねー」

まあ、春虎兄さんのことで姉さんがグズるのは分かっていた。

しかしもう一押しといったところか。

それなら——

「ちなみにここに水族館のチケットが2枚あります」

僕は机に置いてあった封筒の中にある紙を2枚、姉さんに見せつけるように取りだした。

先日とある筋から送られてきた水族館の入場チケットだ。

この水族館が最近やりはじめたイルカの催し物が大変人気で連日大盛況となっており、

たくさんのお客がイルカ目的に来場しているため、イルカのイベントは完全予約制で1ヶ月待ちの状態となっている。

ちなみにこのチケットにはイルカイベントの予約優先権付きで当日予約でも大丈夫というものである。

愛らしいイルカ、定番のスポットということで、デートスポットとして大変人気である。

どうせ僕には不要なモノだし、目の前に使ってくれる人がいるなら喜んで渡そう。

「っ———そ、それをドコで!？」

いや、そんなことよりも———」

「とある筋からもらってね。

いまデートスポットとしてすごく人気があるようだね。

でも残念だなー。僕は一緒に行ってくれる当てがなくて。

捨てるのもつたいないしどうしようかなあー」

白々しく言い放つと

「ああ、もうっ！ わかりました！

明日春虎君と仲直りしてきますから！

だから、ね——」

どうやらようやく観念したようである。

なんか疲れた……。

「はあ……とにかくまずは二人が仲直りするところからだね。

店は落ち着いていた雰囲気のところだから、話し合うには丁度いいかと。

店員さんは空気読める人達だから、痴話げんかするもよし、張り倒すもよし——」

「そ、そんなことできるわけないでしょ！ バカ碧っ！」

「ま、その勢いで行けば大丈夫だと思うよ。がんばって姉さん」

「……うん。ありがとう碧」

あとのことについては姉さんと春虎兄さん次第だ。

ああ、僕も早く彼女欲しい……。

そう思っていると唐突にスマホが反応した。

応答して内容を聞くと、どうやら緊急の呼び出しのようだった。

「ごめん姉さん、用事できたから行ってくるね。

たぶん明日の夕方まで戻れそうもない、かも……」

「え!? そんな急に——」

ガサガサと急ぎ身支度をしながら準備をする。

「はい、これチケット。」

どうも緊急みたいなんだ。

「これでよし、と」

姉さんに水族館のチケットを渡しつつ荷物をブチ込んだ鞆を持つ。

「それじゃ行ってくる。」

明日はがんばってね」

姉さんが呆けた顔でこちらを凝視しているが、まあ、大丈夫だろう。

あとのことは、姉さんと春虎兄さんに丸投げし、所用の為、一路東京へ出発する——

☆

「ああ、いつちやった……」

一度物事を決めると、あつという間にやりきってしまう——

私が悩んでいることなんて、なんでもないように一瞬で解決したりする。ほんと、頼りになる私にはできた弟だ。

小さい頃からこうである。

陰陽術の鍛錬でも、超高難度の呪術でも、突風のようにあつという間に習得してしまうのである。

それが顕著になったのは、やはり10年前のあの事件からだろうか——

屋敷の庭で碧と陰陽術の鍛錬をしていたら、急に碧が倒れた。すぐに父を呼んで部屋に運んでもらい、幸いにも碧はその後、すぐに目覚めてくれた。碧は貧血だと言っていたが、当時の私は目の前で倒れた弟を前に不安で不安でたまらなかつた。

目覚めた碧が手を握ってくれて落ち着くことはできたのだが。

——少し話がそれたが、それからだろうか。

それからの碧は、陰陽術以外にも魔術という独自の呪術体系の開発、陰陽術の鍛錬以外にも、私はあまり詳しいことはわからないけど、自分でコンピュータの会社を興したり、また性格も以前よりも大人びるように成って、よりいつそう私には計ることのできない存在になっていった。

私が東京に出てからも相変わらずだったようだ。

歳が一つ下の弟というより、頼りになる兄のような存在。

あ、いやでも、落ち着きがない点を見ると、やはり私にとって可愛い弟だ。

でも、まあ——

「せっかく碧がいろいろ用意してくれたんだから、春虎君と仲直りして、北斗のことも伝えられるといいなあ……」

淡い期待をしつつ、明日のことを思う。

1—4. 泰山府君祭

「ただいま——」

と、玄関に入る。

玄関で靴を脱ぎながら気配を探る。

どうやら、姉さんは外出中、父さんはまだ出張から帰っていないみたいだ。

「春虎兄さんとデートでもしているのかな」

独り言を呟きながら家の中に入っていく。

しかし、いくら人里離れた山に在る屋敷とはいえ、それなら鍵は掛けようと思いつつ、

——ふと、覗いた部屋にあったソレが無くなっている事に気づく。

土御門家の呪具である護身剣がないのだ。

泥棒か？ —— いや、それにしても綺麗すぎる。

これは姉さんが持ち出したのだろうか……？

と、その時、屋敷裏の山から膨大な霊気の気配がした。

玄関から飛び出し、屋敷の裏手に回ると、裏山から天空に向かって、いや、天空から

裏山に伸びた霊気と共に黒い何かが降りてこようとしていた。

あそこには泰山府君祭に使う祭壇が——泰山府君か!?

いったい誰がそんなことを……

父さんが居ない時に、タイミングの悪いことこの上ない。

くそつ、と内心で毒づきつつ、屋敷外へ走りながら、ぱちん、と指を鳴らす。

家にもともと設置してあった人払いの結界を起動させ、

屋敷の裏手から跳んだ——

「軽量、重圧——」

右腕の魔術刻印を起動させ、術式を再現させ、自身の魔力回路に繋ぐ。

体の軽量化と重力調整。

この一瞬、羽と化した体は軽々と大きく跳び上がり、裏手の急勾配の坂を一気に下り

続けて魔術を組み上げ、

「戒律引用、重葬は地に還る——」

着地と同時に走らせ、そのまま祭壇へと繋がる階段を駆け上がっていく。

☆

階段を駆け上がっていくと、中腹に装甲鬼兵が転がっていた。どうやら破壊されて機能を停止しているようである。

「装甲鬼兵まで持ち出すとは——

いや、今はそれよりも」

頭上に広がるアレを何とかしなければならぬ。

思考を切り替え、身体を強化し階段を駆け上がるスピードを上げた。

☆

「うおおおおおっ！」

春虎君の喉から、虎の如き咆哮があがる。

全身にあらん限りの力を込めて、春虎君は護身剣を振り上げ、靈災の一匹を斬りつけた。

が、——

グオオオオオオオオオウ——！

靈災は気にした様子もなく反撃し腕を振り上げた。

とつきに護身剣を前に構え迎えるが、勢いよく振り下げた腕は護身剣もろとも春虎君を叩き潰した。

その一撃は重く春虎君を行動不能にするには十分だった。

「がはっ——」

「っ、春虎君!!!」

——突然、空から降ってきた靈災はすぐに私たちを襲いだした。

数は全部で13。そのどれもが異形のカタチをしている。

悪いことに、止まることのない勢いで溢れ出る靈気のせいで、靈災がどんどんと巨大化していき、さらに異形と化そうとしている。

幸い、降ってきた靈災はここに留まっているため、周りへの被害は今のところではないはずだ。

ならば、と、

「——ここで絶対に食い止めます！」

急急如律令!!!」

春虎君を叩き潰した靈災に向かって火行符を投じる。

鮮烈な猛火が渦巻き、靈災を覆う。

しかし、火の粉を払うように腕を振るい、まるで効いていない。

と、そこに追い打ちで鈴鹿の符術が靈災を打つ。

「あたしが追い求めてきた結果がコレだっというの!? ふざけんな!!!」

全方位に向けて展開した怒濤のように押し寄せる式符が靈災の注意を引く。

この一瞬を見逃さず素早く春虎君に近寄り、治癒符を使った。

「——あ、づつ……サンキュー、夏目。助かったぜ。怪我はないか」

「ええ、あの子のおかげで何とか……」

でもこのままでは非常にまずいです。

今はあの子がこの場の均衡を保っています——」

1匹なら北斗を使って何とかなるかも知れないが、これだけ数が多いと焼け石に水である。

それに私の靈気ももう限界に近い……

早くなんとかしないと取り返しの付かない事態に——

そう考えていると

「きゃあああああああああ——」

背後から彼女の悲鳴が聞こえてきた。

わずかな均衡が破られた瞬間だった。

まずい。 まずい。 まずい。 まずい。

考えている暇はない。

北斗——

召喚された竜は主に迫る霊災に向かって行き、なぎ払った。

が、複数の霊災に取り付かれ敢えなく消滅した。

呆然とする私と春虎君。

土御門家が誇る竜が瞬く間にやられたのだ。

こんなデタラメな霊災達をどうしろというのか……

襲い来る霊災。

咄嗟に火焰印、知拳印、三胡印を切る。

「オン・キリキリ・ウンハッタ！」

春虎君に覆い被さるように、私と春虎君を対象として、呪的霊的影響力を遮断する結

界を展開した。

せめて春虎君だけでも！

目を瞑りながら迫り来る霊災の攻撃に備えた——

☆

祭壇に到着し、辺りを見渡す。

蔓延る霊災。その数13。

なるほど、忌まわしい数字だ。

仰向けに倒れている春虎兄さん、それに覆い被さっているように防護結界を展開させている姉さん。

祭壇近くで倒れている少女、その横に突っ立っている死体。

「これは——」

見た限り、その少女が死体を復活させようとし、泰山府君祭に失敗したようである。いや——そもそも術式が間違っているのか、泰山府君など眉唾ものなのか。

土御門家にいるとはいえ、泰山府君祭の術式の正否など、詳細について知らない僕のと知るところではない。

しかし、いまのこの状態は非常に不味いといえた。

憑代として機能している死体の許容量を超えた霊気が漏れて、この辺り一帯に充満し

ているのである。

どこからか溢れ出た靈災が靈気を浴びて強化され異形と化していた。

この靈気はこの山全体を覆うまになっ
て、街に被害が起きる可能性がある。

だとしたらやることは一つ。

「はい、つらを排除するには……」

僕の持っている陰陽術の手札では無理か……

数が多すぎるし、一体一体が一陰陽師の対処できるレベルを越えた靈災だ。

だとしたら他の手で破壊し尽くすまで——

「ルイト刻印、セツト接続」

ふたたび、右腕の刻印に火を入れる。

「魔弾、展開」

蔓延る靈災の頭上に魔弾を展開する。その数13。

それは流星のように、異形のモノたちを寸分違わず撃ち抜き消滅させた。

爆発の余波で激しい暴風が僕を襲う――

続けて――

「――ディレクト直接数紋、一層、二層。

魔力提供、大源に固定」

地面の上に紋様が刻まれていく。

術式の中心に膝をつき左腕を地に付け、辺りの霊気、いや「魔力」を急いで、それについて慎重に吸収していく。

これだけの魔力量を僕の体内に取り込むのだ。身体にかかる負荷は相当なモノになるだろう――

「うっ、ふう――」

体内に流れる魔力に一瞬、顔を歪め声を上げてしまうが、呼吸をして落ち着かせる。

この状態を維持しつつ魔力の循環に問題はないことを確認、術式は安定している。

大丈夫だ、問題ない。

破壊対象を見上げ、右腕を霊脈の元、黒い影に向ける。

辺りに充満している膨大な霊気……いや、大源を急速に吸収しながらさらに回路の回

転を上げていき――

「ツアーブラン魔弾形式、スターマイン収束投射」

!!!!
回路が快音を上げながら霊脈が撒き散らした周囲の魔力を吸収し尽くした——

そして——

「—— 一気に貫けえええッ!!!」

夜空に一本の青い花火が上がる。

圧倒的な破壊力を伴った魔弾は空に広がる黒い影に寸分変わらず命中。

一気に貫き、天上との繋がりを絶つたのだ。

その瞬間、魔術行使の余波による暴風と共に祭壇は巨大な光に包まれた——

光が晴れていき、それまで天上から降り注いでいた霊脈や充填していた霊気は吸い尽くされて収まっていた。

「さて——」

辺りを見回すと気を失っている、姉さんと春虎兄さん、それに謎の女の子。霊脈が絶たれた事により事切れた死体が崩れ倒れていた。

この状況をどうするか——

まずは状況の確認からだ。

「姉さん、起きて姉さん、春虎兄さん——」

二人の身体を軽く揺すってみると反応があった。

「う……碧か？ ツ！ つう——」

「ん、う……碧……？」

「よかった。二人とも無事みたいだね。」

少しじつとしてて——」

急急如律令^{オーダー}——と、治療符を押しつけ負った傷を治していく。

魔術で治すことができれば一番いいのだが、治療に関する魔術を僕は知らない。

面倒ではあるが、このように治療符を持ち歩くことで多少の怪我には対応することが出来るようにしている。

「これでよし。」

外傷についてはこれで治ったはずだけど、他に痛むところはないかな？」

「ああ、助かったぜ碧。夏目はどうだ？」

「私も大丈夫です。それより——」

「どうして、碧がここに？」

二人仲良く聞いてきた。あんたらもう結婚しろよ。

「それはこっちのセリフだよ。」

用事が予定よりも早く終わって東京から戻ってきたら家には誰もいないし、家の呪具は無くなって、

膨大な靈気を察知してここに駆けつけてみたら、靈災はいるわ、二人と、あの女の子が倒れているわで——

「いったい何があったの？」

二人は顔を見合わせ——

「えーつと、話せば長くなるんだけど——」

姉さんと春虎兄さんから説明を受ける。

「どうやら、そこに倒れている女の子——大連寺鈴鹿が、泰山府君祭を執り行い、兄を蘇生させようとしたらしい。」

姉さんと春虎兄さんはそれを阻止しようとしたが、装甲鬼兵や式神の邪魔に合い儀式の阻止ができなかった。

しかし手順が間違っていたのか、結果として失敗してしまい、その影響がこの周辺一帯に夥しいまでの靈気が蔓延して靈災が集まり、それを止めようと三人でなんとかしよう、呪具まで使ったがダメだった、と。

「——事情についてはわかったよ。

なんにせよ姉さん、春虎兄さんお疲れ様でした。

とにかく二人が無事でよかった。

この件については父さんに僕から話しておくよ。

「この辺りの浄化を含めてやってもらうこともあるし、それに——」
少し気になることもある。

「なんにせよ、ここにいた靈災はすべて片づけたし、今のところ靈脈も安定しているみたいだ。

あとは呪搜官に任せてもいいんじゃないかな」

「そう……だね」

夏目と春虎兄さんが倒れている女の子に目を向ける。　大連寺鈴鹿だ。

「ああ、そうだね。　少し様子を見てみるよ」

彼女のそばで腰を降ろし、状態を確認する。

多少の裂傷を負っているが、命に別状はなく、息もすっかりしている。
 急急如律令と、治癒を行う。

そこで気が付いたのか、反応があり、

「——っ」

頭を押さえながら辺りを確認していた鈴鹿と目があった。

怯えるような、そう、まるで迷子の子供のような目をしている。

ああ、そうか——彼女はこの日のために、兄が生き返ると信じて今日まで生きていたのかも知れないな……

過去に土御門家の文献や資料で見ただことがあるが、少なくとも今まで泰山府君祭で完全な蘇生を成し遂げた人物は存在しない。

泰山府君祭で本当に死んだ人間が生き返るのか、僕は知らない。

だが——得体の知れないものに縋る時点で、これはもう呪いの域だな。

——かわいいそうに。

僕にはこの忌まわしい禁呪にまで手を出した彼女の重みを知ることとはできない。

できないが、土御門家の人間としてしっかりと彼女に伝えるべきだと、そう思った。

そう考えていたときに、彼女から、

「あんた……一体誰よっ!？」

それにさっきの——」

そう、だな。

土御門家の人間として——

泰山府君祭に関わった彼女にはできる限り応える必要があるだろう。

もつとも勝手に彼女を哀れんでいる僕個人としてできる範囲でだが。

「僕は 土御門碧。

土御門夏目の弟です」

困惑している彼女の顔を見ながら

さて、どう答えたものかと考えつつ、なるべく不安にさせないために僕は笑顔を作り

そう答えた。

「霊災については僕が対処したし、いまのところ霊脈は安定しているので、ひとまずは大丈夫ですよ」

鈴鹿に完結に状況を伝える。

さらに今回の発端となった泰山府君祭について説明する。

兄の死を受け入れられないことから泰山府君祭に手を出してしまった鈴鹿に、彼女が

望むカタチでの蘇生ができないことを伝えるためだ。

「どういう経緯で泰山府君祭を行おうとしたのか、姉さんから聞きました。

——僕には君の気持ちを測ることはできないので、なんと応えたらいいかわかりませんが、今回君が行おうとした泰山府君祭について少しだけ。

泰山府君祭に関わる土御門家の過去の文献や資料を見る限り、結果として完全な形で死者の蘇生は一度も成功例はありません」

「ちよ、碧つ——」

僕が土御門家を取り仕切る術式のことについて話そうとしたため、姉さんが止めに入ろうとするが構わず続ける。

僕は一瞬目配せをして「ここは任せて」というと姉さんも引いてくれた。

「あの天才と言われた土御門夜光でさえ泰山府君を完全に制御した事実はありません」

鈴鹿が目を見開き愕然とした表情を浮かべる。

「君がどういう経路から泰山府君祭を調べたのかわかりませんが、泰山府君祭で死者を蘇らせることはできません」

僕は非情な事実を鈴鹿に突きつける。

鈴鹿は涙を浮かべた目をしながら

「——だ、だって、夜光は自分自身を土御門夏目に転生させたって……」

あいつの研究資料には——それであたしは……」

「まず姉さんが夜光の転生体かどうかは分かりません。

噂程度には僕も知っています。

仮に噂が本当だったとしてどういうカタチで転生するのか、人格が夜光になるのか、はたまた記憶だけなのか。

少なくとも現時点では姉さん本人はその意識はなさそうという事実のみですね」

一呼吸置いて続ける。

「次にあいつが誰か分かりかねますが、先ほども言ったように泰山府君祭で死者を完全なカタチでの蘇生した事実はありません。

これは文献で確認したことです。泰山府君祭とは死者蘇生というよりも魂の操作をする呪術のようでした。

魂を操作することにより器となる肉体に移したりすることでの復活というわけです。式神などの使役に使っていたのでしよう。

ただそれも対象が死んでから短時間で行う必要がある時間制限ありの限定されたモノになります。

詳細については不明ですが、何年も前に亡くなっている君のお兄さんの場合はもう――

「そ、そんなことって……」

だったら、だったらあたしはどうすればよかったのよ!？」

とんっ!

僕は胸の辺りに僅かな衝撃を覚えた。

「ねえ……あんたならお兄ちゃんを生き返らせることができるんじゃないの？」

土御門の人間なんですよ! 泰山府君祭に詳しいじゃない!!」

鈴鹿が涙で顔を汚しながら、僕の胸を叩いていた。

「ごめん……」

「なんでなのよ……」

鈴鹿が崩れ落ちながら、泣いた。

絶望に打ちひしがれ僕の胸に顔を埋めながら嗚咽をもらした。

そんな彼女の様子を見て何もできない僕は、嗚咽を漏らす彼女の背中をしばらくさすり続けた。

5分10分経つただろうか。しばらくして落ち着いたみたいだ。

「……あ……ごめん」

そう言いながら僕から離れ、若干赤くした彼女の顔は充血させた目に涙を浮かべていた。

「大分落ち着いたみたいだね」

「……うん」

「——1つ質問いいかな？」

「……なに？」

「さっき言ってた研究資料を作ったあいつって？」

「っ——」

大連寺至道……あたしの父親よ。

あいつはお兄ちゃんとあたしの身体で実験を繰り返していた。

そしてお兄ちゃんを殺した。

あいつは霊災テロの首謀犯としてももう死んでるけど、あいつが残した研究資料の中に泰山府君祭について書かれた資料を見つけて、その研究資料から、お兄ちゃんを蘇生するための術式を構築したの。

結果は失敗しちゃったけどね」

「——なるほど。」

事情は分かりました。言いくらいこと聞いてごめん」

「べつに——」

「それと——」

「まだ何かあるの?」

「色々と落ち着いたらさ、兄さんの葬儀あげないとな」

鈴鹿が目を見開き、すすり声と共に涙を流した。

しかしそんなすすり声の間に、

「……うん」

と小さな声で返事を返したのを僕は聞いた。

☆

「お疲れ様。 終わったんだね」

背後から姉さんの声が掛かった。

「そうだね。」

久しぶりの大規模な魔術行使だったから少し疲れたよ……」

まさか帰ってきてすぐにこんなことになるとは想像していなかったため、苦笑と共に振り返りながら肩を揉む仕草をし応える。

これだけの大源を使った大規模魔術の行使は最近の記憶にはないため肉体的にも精神的にも少々疲れた。

「ふふっ、お疲れ様でした」

姉さんも苦笑しながら労いの言葉を掛けてくれる。

この何気ない言葉だが、なぜか少しだけ疲労が和らいだ気がした。 姉さんマジ天使。

「——冬児——春虎君の知り合いが呪捜官を連れてもうじき此処に来るみたいなんだ」

そういえば、と思い出す。

姉さんは対外的には男っていう設定だったっけ……。

今の巫女姿を見ると、どう見ても女の子にしかみえないね。

この状態を誰かに見られるのは確かにマズい。

うん、理解した。

「ああ、そうだね。 気が付かなくてごめん。

呪捜官への説明とか諸々の後処理は僕がやっておくよ。

姉さん、いや春虎兄さんも怪我してるし二人とも家に戻ってて大丈夫だよ。

二人からこれまでの経緯も聞いたしね」

もっとも呪搜官の取り調べに対してまともに応えるつもりは全くといってない。

まだ不明な点だらけではつきりとしたことは分からないが、今回の事件は不審な点が多すぎる。

まず鈴鹿は父親の研究資料を調べて、わざわざこんな地方で泰山府君祭を行ったが、泰山府君祭をするだけならここに来る必要はない。

必要なモノを事前で用意するか、既に在るモノを使えばいいはずだ。

その研究資料になぜ間違った方法が書いてあったのか、この辺りを調べてみる必要がある。

そもそも鈴鹿が暴発したときに、止められる人間がいないというのは有り得ない。

いくら鈴鹿が十二神将とはいえ、戦闘に特化しているとは思えない鈴鹿を止められる人間など陰陽庁にはいくらでもいる。

そいつらはただ寝ただけなのか？

いや、必ず何かあるはずだ。

現時点で言えることは、実行犯は鈴鹿だが、そうなるように仕向けた連中が複数いるということだ。

目的は姉さんへの接触か？

いずれにしてもこの辺りは父さんに報告する必要があるそうさ。

何かよくないことが起こりそうな気がする……。

「ごめんなさい碧。あとはお願いしますね」

申し訳なさそうに姉さんは応え、春虎兄さんと一緒に雪風に乗って家へ戻っていった。



嵐が去って静寂の闇夜に包まれた。

しばらく夜風に当たりながら視界を埋め尽くす星空を眺めていると麓がざわつき始めた。

どうやら呪捜官達が到着したようだ。

「……ねえ、あんた」

先ほどまですすり泣いていた鈴鹿から声が掛かった。

僕は振り返りながら鈴鹿の顔を見た。泣いていたためか、目元が少し赤くなっていた。

「ん？」

「鈴鹿」

「？」

「あ、あたしのこと鈴鹿って呼んでもいいわよっ！」

「お、おう……」

いきなりの鈴鹿の発言に僕は戸惑いを隠せなかった。

あ、あれか、ツンデレってやつか？

と、僕が脳内でいろいろと考えていると鈴鹿が

「今度からは名前で呼んでよねっ！」

ずっと君、君言ってたからかな。

どうやら名前で呼んだ方がいいみたいだ。

とりあえずこの件はあまり深く考えないでおこう。

「——それで、あんたが使ってた術式なんだけど、

十二神将のあたしでさえ知らないんですケドー」

この魔術は現時点で僕だけの特異性だ。

そしてこのことは無闇矢鱈に広めていいことではない。

が、今回はやむを得ないとはいえ、鈴鹿が居たことでその現場を見せてしまった。

「あの術式は僕のオリジナルだから、鈴鹿が知らなくて当然だよ——
あ、ごめん。鈴鹿ちゃんの方がよかった？」

回答としては無難だと、思う。

少し話をそらすことで、本件にあまり突っ込んで欲しくないと願いつつも鈴鹿の反応を伺う。

「っ——ちゃんはやめろ！ キモイ！ 鈴鹿でいいし！

じゃなくてっ！ アンタのそのオリジナル！

普通の陰陽術とは系統がまるで違う気がするんだけど。

腕光ってたし円盤があったし……」

「悪いけどその質問には答えることができないな。

少し特殊な術式だからね」

「まさか禁呪？」

「ノーコメントで」

こんなやりとりがしばし続いたあと、鈴鹿がとんでもないことを言い出した。

これから来る呪捜官、その組織である陰陽庁へ僕の魔術を話すというのだ。

もつとも魔術を十二神将に見られた時点で、こうなることは必然か。

「わかった。じゃあどうすれば鈴鹿は黙っていてくれるの？」

「そうねえ……」

少しだけ考える仕草をし、真剣なまなざしを僕に向けた。

「その術式、あたしにも教えて」

やはりこうなるよな。

だが、しかし、僕の回答はこうだ。

「断る」

「なんでよっ?! いいの? アンタの術式バラすわよ!?!」

「……この術式を知りたい目的を教えてもらえるかな」

「研究のためよ。あたしは研究が本業だから。」

あたしと同じくらいの年齢で、あたしが知らないことを知っているなんて癪に障るだけよ。

だからアンタのオリジナルを研究するの」

「……まずこの術式は誰もができるものじゃない。」

この術式を使うための特別な条件があつて初めて使うことができるものなんだ。

さらに術式を起動するだけで命を落とす危険性もある。

それでも鈴鹿はやる?」

「やるわ! もともと死ぬはずだった命よ。」

そのくらいの覚悟はできてるわ」

即答か……。

いいだろう、とりあえず魔術に適正があるかみてみるか。

その結果どうなるか見てみよう。

「分かった。まずはこの術式を鈴鹿が使えるかみるだけみてみよう。

ただ、それは次に会った時になるけどね」

「——え？」

話し終わると、階段を登ってきた呪捜官達が一斉に鈴鹿と取り囲んだ。

呆けた顔の鈴鹿は特に抵抗もしなかったため、あつさりと拘束された。

そのあと、呪捜官が鈴鹿を伴って下山しようとしたとき、僕は鈴鹿に向かって

「東京にはたまに行くことがあるから、気が向いたら陰陽庁に寄ってみるよ。

日中はそこに居るんだろ？」

僕の言葉に振り向いた鈴鹿は顔を綻ばせ

「っ——絶対にきなさいよ！

来なかつたら——もぐぞ!!」

笑いながら鈴鹿は応える。

もぐつてナニをもぐんですかねえ……。

「それと、碧。

今度会うときは、僕のコトも名前前で呼んでくれよ鈴鹿」
鈴鹿は一瞬驚いた顔をして、

「うん。必ず来なさいよね碧……」

小さな声で、しかし確かに聞こえた声だった。

その後、鈴鹿は呪搜官に促されその場をあとにする。

1—5. 祭の後に

呪捜官からの取り調べは翌朝まで続いた。

僕からは、姉さんや春虎兄さんから聞いた話を、こちらが不利にならないようにボカして話した上で、魔術の部分は一切話すことなく、霊災や霊脈は勝手に消滅したということにした。

呪捜官も現場に居なかったとはいえ、あれだけの規模のモノは察知していたらしく、霊災や霊脈については発生したという事実のみ答えた。

そのあと呪捜官からはいくつか質問されたが、よくわからないということでも話を終わらせた。

そんな内容だったので、話自体は夜のうちに終わっていたが、今回の事件の重要参考人ということで翌朝まで拘束された。

結局、出張から帰ってきた父さんと小父、小母に迎えに着てもらい、ようやく拘束が解かれた。

その足で家に帰るやいなや、今回の事件についての報告をおこなった。

あまり聞かれない内容もあるため姉さんと春虎兄さんには席を外してもらって

いる。

三人とも驚きながら聞いていたが、結果的に被害もでなかったということもあり

「まずは私たちが留守の間、よく対処してくれた」

代表して父さんが言った。

「いえ、僕も東京から戻ってから、たまたま異常に気が付いて結果的に間に合っただけですから。」

姉さんと春虎兄さんが時間を稼いでくれたおかげです。

ですが、やむを得ないとはいえ魔術を大連寺鈴鹿に見られてしまいました。

一応口止めはしましたが、どこかで漏れるかも知れません」

「そうか——」

僕は一息つき

「それよりも、今回の事件は不審な点が多すぎます。

まず今回の実行犯である大連寺鈴鹿。

彼女は父親である大連寺至道の研究資料をみて泰山府君祭を執り行ったそうです。

その研究資料には土御門の靈氣や祭壇を、泰山府君祭に必要なモノとして書かれてあったようですが、本来、泰山府君祭にはそんなものは必要としない、自分で必要なモノを用意すれば済みます。

研究資料を書いた大連寺至道はなぜそのような記述をしたのか……。

次に実行犯の大連寺鈴鹿は研究が本職で戦闘が得意なタイプの陰陽師ではありませんでした。

持ち出した兵器は装甲鬼兵・土蜘蛛1体のみ。

十二神将とはいえ、研究が本職の陰陽師一人を陰陽庁が止められないはずがありません。

それこそ噂に聞く十二神将の木暮という方などを出せばいいのですから。

これは陰陽庁が意図的に彼女を見逃したとしか考えられないです。

これら二つの事から、研究資料を作った大連寺至道、大連寺鈴鹿を見逃した陰陽庁、しかも絶妙なさじ加減で呪捜官に指示を出せる人間、それなりの人物が繋がっている目的のために今回の事件を起こしたと僕は考えますが、父さん、小父さん、小母さんの意見を聞きたいです」

三人とも驚いた表情をしていたが、

それまで静かに聞いていた小父さんが僕に質問してきた。

「……私たちの意見を言う前に碧に聞きたい。

最後の“ある目的”を碧はどう考えている？」

「小父さんが考えている通りです。」

姉さんへの接触が目的でしょう。

父さんや小父さん、小母さんが不在、姉さんの帰郷——。

このタイミングで事件を起こし、実行犯と姉さんの接触、しかも泰山府君祭というおまけ付き。

姉さんを巻き込み当事者に仕立て上げて、事件は収束。

呪捜官が姉さんを確保、というのが陰陽庁と大連寺至道のシナリオといったところでしようか。

土御門夜光の生まれ変わりといわれている姉さんを、今回の主謀者が見ておきたかったのと、あわよくばそのまま夜光への覚醒を狙ったのでしようか。

何れにしてもその思惑は外れたのですが」

僕の意見を述べる。

一通り話し終えると、父さんが口を開いた。

「現時点では全て推測の域を越えない。

——だが、留意する必要があるようだ」

三人は一瞬目配せをして、父が話を切り出してきた。

「夜光信者、というものは知っているな？」

夜光信者……夜光復活を目論む狂信者の集団だったな。

大連寺至道が起こした霊災テロもこいつらが主謀者だったはずだ。

「ええ」

「その夜光信者の組織を双角会という」

「双角会……ですか」

聞いたことのない名前だな。

少なくとも一般には知られていない名前のようなのだ。

「そうだ。」

その双角会だが、先の霊災テロを起こした主犯、大連寺至道を筆頭に彼らが動いていた。

霊災テロでは多くを逮捕したが、今現在も双角会は存在しており——未だ陰陽庁に数多くいると見られている」

なん……だと？

国家機関である陰陽庁にテロリストが所属している？

「それは一体……」

「私達も調べてはいるが、誰が双角会のメンバーなのかなどはわかってはいない。

だが、しかし、陰陽庁内で相当な権限を持つ人物も双角会のメンバーであることは間違いない」

「国を守る機関がテロリストの巣窟？

はは……笑えない冗談だ——っ」

これは一体何の冗談だ。

表では霊災から国、国民を守っているが、裏では霊災テロを起こし多数の死傷者を出す。

行動に一貫性がない。

こいつらは一体何がしたいんだ。

夜光信者の目的、夜光の覚醒と、この矛盾した裏表。

夜光の覚醒だけならこんなことをする必要があるのか？

——いや、まてまて、夜光信者の目的は夜光の覚醒ではない。

夜光信者は夜光の考えに酔狂しているのだ。

覚醒は過程であって彼らの目的ではない。

では、夜光の目的とは……夜光は生前何をした？

陰陽道、密教、修験道、神道……日本における呪術の総括、独自の術式による新たな

呪術体系の確立。

軍の要請により夜光はこれらをやり遂げ、帝式陰陽術を作り上げた。

そうだが、もともと現在の陰陽術は太平洋戦争前の帝国陸軍上層部からの意志によりで

きたものだ。

ならばその目的は何か？

考えるまでもないか。

「つまり双角会は陰陽術を使って、この国を再び軍国化させたい、と」

夜光の作り上げた強力な呪術体系を用い、当時の帝国にはできなかったことを現代で成し遂げようというモノ。

その強力な陰陽術を使用しての霊災テロ。

これはその布石か。

一呼吸を置き、父さんが話し始めた。

「……そこまでは分からん。それも双角会の選択肢の一つなのかもしれない。

だが双角会は夜光とその夜光が作った陰陽術という武器を使って何かをしようとしている」

「今回、夜光の転生体といわれている姉さんに接触したのもそのためということですか」

まったく迷惑な話だ。

そんなものやりたいなら自分たちだけで成し遂げてみろって話だ。

「……最初に言ったように、現時点では推測に過ぎず断定はできない。

そのため、こちらから表だって動くことはできない」

確かにそうだ。

想像の域を出ない以上、被害届など出せるはずもない。

いや、そもそも陰陽術絡みの被害など警察では対処できない。

かといって、双角会の息の掛かった陰陽庁など当てに出来る筈もなく。

つまるところ、こちらから動くことができないのだ。

「——だが」

「ん？」と、思慮のために下に向けていた顔を上げ、父の顔を見る。

視線はこちらをまっすぐに見ており、何か嫌な予感がした。

「だが、保険は掛けておかねばなるまい。」

碧、あと半年で中学は卒業だが、卒業後は、夏目の通う陰陽塾へ入塾してみてもどう

だ？」

「っ——ああ、やつぱりこうなるんですね……」

「単純な戦闘ならお前に勝る人物もいないだろうし、夏目が近くにいる方が守りやすいだろう？」

それに今までお前から進路について相談されたことはなかったが、進路について決めかねていたからだろうか？」

「ええ、まあ、それはそうなんです」

父さんの言うとおりに、僕は進路を決めかねていた。

陰陽塾、普通の高校、はたまた中卒……。

土御門家としては陰陽塾以外の選択肢はないのだろう。

だが僕の陰陽術は既に一定のレベルに達し、国家資格・陰陽2種も取得している。

そのため父さんも今まで何も言うことは無かったし、陰陽塾に行く意味はあまりなかったのだ。

そんな父さんが、今回の事件を切っ掛けに陰陽塾を薦めてきた。

確かに姉さんが近くにいれば守りやすくもあるが……時間というモノは有限である。

本当にこれでいいのか？他にやれることがあるのではないかと、僕がうんうん唸っている、今まで静かに成り行きを見守っていた小母さんと小父さんから声が掛かった。

「いいじゃない。陰陽塾。」

碧は確かに私たちに引けを取らない——ううん、それ以上の術師だわ。

でも、同じ年代の子たちと陰陽術について話すことも勉強になるわよ。

とりあえず入塾してからやりたいことを考えてみるのもいいんじゃない？」

「かあさんの言うとおりだ。」

碧は背伸びが過ぎることがある。

今回のこともそうだ。

俺たちも助かつてはいるが、年相応に過ごすことは大事だ。

碧が将来何をするかはわからない。

だが、陰陽塾は名家が多い。

見返りを求めるわけではないが、交友関係を作っておくことにこしたことはないだろう」

確かに、陰陽塾に通ったからといって将来が決まるわけではない。

僕自身将来何がしたいのかを探すために陰陽塾に通うのもいいのかもしれないな。

「そう、ですね。

——僕自身、まだ何をやりたいか決まっているわけではありませんが。

わかりました。陰陽塾へ入塾します」

僕の進路が決まり、三人とも喜んでくれた。

そんな三人をみて、僕も自然と笑顔が漏れた。

1—6. 間話1 お仕事

僕が——役員だけが使用する会議室に出向いたとき、およそ経営に関わる顔が集まっていた。

この会社、スターマイン社は、10年前のあの日、手に入れた知識を利用し、僕が創設した会社だ。

当時、まだ普及していなかったインターネットを利用した検索エンジンを開発し、全世界に向けて公開したのだ。

当初は個人用のパソコンを利用し、個人でできる範囲でサービスを提供していたが、公開したあとの反響は大きく、利用者は爆発的に増加していった。

当然広告などで得られる収入も膨大なモノとなっていき、順調な滑り出しになったのだが……、

利用者増加に伴いインフラ環境を整備していく中で、メンテナンス作業など、運用面での負荷が大きくなり、次第に個人でできる範囲を大きく超えていったのだ。

そこで僕は会社を立ち上げた。

仲間と共に協力して既知の問題に取り組んだ結果、それまで僕が抱えていた問題は一気に解決。

さらに検索サービス以外にも様々なサービスの展開、新たな分野の開拓にも成功した。

その調子で会社の規模はドンドン膨れあがっていき、5年後には市場への上場、10年経った今では売上ベースで1000億ドルという世界有数のモンスター企業にまで成り上がったのだ。

会社の規模が大きくなるにつれて、僕がこの会社で技術的に何かをすることは皆無になった。

経営に専念していたからだ。

だが僕はもともと会社経営にそこまで興味はなかったので、アツサリと後任に席を譲った。

それが上場から2年後。

僕はこれ以上この会社の経営に関わらないため、会社内に一切の影響を残さないよう保有株式の一切を手放し見返りに僕は莫大な創設者利益を得た。

これで後腐れなくこの会社を後にできると考えていたのだが……

周りからの要望もあり、相談役に留まることで落ち着くこととなった。

とはいえ、今後も会社の運営に直接関わるつもりはなく、いわば名誉職として籍だけ置いている形になっている。

僕はTシャツ、ジーパンといういつもの格好で、いつもの席に座った。

僕の他はスーツで、僕だけが異質の存在だったが、周りは気にする様子もなく話を進めてきた。

「わざわざお越しいただきまして、ありがとうございます」

話し始めたのは、社長の黒田。創業メンバ一の一人だ。

技術面でも秀でているが、もともとは経理が本職の人間だ。

本人は生真面目で堅苦しい性格なのだが、そのお陰か、経営には向いているらしく、今では会社の舵取りの殆どを任せている状態だ。

「——それで、緊急の用件ってなんですか？」

専属秘書から連絡を受けて呼び出されたのが今朝方の話。

既に一線から退いている僕にとって、緊急な呼び出しを受けるのはわりと珍しいことだった。

「はい、こちらが今回の資料となります。

——今後の弊社の新たなサービスについて相談役に是非とも同席いただきたくてお呼び致しました」

渡された資料を元に説明を行う黒田。

資料を見ながら静かに黒田の話に聞き入る。

その内容とはこうだ。

今後の展開として新分野の開拓を行い、その前準備として新設部門を設立する。

その新分野とは陰陽術を使ったサービスの展開だ。

現在、日本は陰陽法と呼ばれる法律があり、その枠組みの中で陰陽術を使った商品の開発や販売して成功しているのは、ごく一部の企業のみ。

ほぼ独占の状態になっていた。

人材的な理由から技術的な面でどうしても独占企業など比べ大きな隔たりがあるのだ。

それがどういうわけか、近頃、陰陽法改正の動きが出てきていて、どうやらこの人的な問題が解消されるようなのだ。

これはうちのような新規参入企業にとってはチャンスである。

うちとしてはその動きに合わせて、優秀な人材をかき集めて現在独占となっている市場の切り崩しを計るのが狙いというわけだ。

「……説明ありがとう。」

うちとしては、この法改正の動きに合わせて、新部門を設立して商品開発、法改正と

同時にこの部門を子会社にするわけですね」

「はい。」

新部門は来年度に正式に予算を組んで設立、それまでに人員の確保などを行いたいと考えています。

今年度に関してはその前準備ですね」

「スケジュール感については資料にも書いてあるからわかります。

——しかし、その人員について、アテはありますか？

資料にはそのあたりに触れていないので現時点では判断しようが……」

何気ない、しかし気になって投げかけた一言。

その問いかけに対し、会議室にいるメンバーは一斉に僕を見て何かを言いたそうにしている。

そしてそれを代表するかのように黒田が、

「実はそのことで相談役にお越しいただきました。

単刀直入に言います。

相談役にはこの新部門の部長、ゆくゆくは新会社を率いていただけないでしょうか？」

僕は黒田の発言を吟味する。

陰陽術を使った商品開発。

それには必要不可欠な物がある。

陰陽師である。それもプロの。

だがそれらは陰陽庁に所属しているか、既に企業・団体に所属しているか、もしくは一線を退いた人間に限られる。

プロの陰陽師で、しかもフリーな存在など、ほぼとっていいほど皆無なのだ。

そこで白羽の矢が立ったのが僕である。

僕は既に陰陽二種を取得しているが、どこにも所属していない割とレアな存在なのだ。

しかも家柄も由緒正しい名門である。

そんな僕が目付けられるのは必然と言えば必然なのだが……

「だが——その案は実現しないでしょう。」

……僕はこの会社で役割が終わった人間です。

ですから僕が陣頭に立って何かをする気はありません」

愕然とした周りの表情。

しかしこれが僕の回答である。

だが、まあそうだな……

「でも、そうですね……」

案自体は悪くはないと思います。

ですので、技術アドバイザーとして新部門のサポートくらいなら——」

曇っていた表情が晴れる。

僕はかまわずに続ける。

「僕一人いたところでどうにかなる問題でもないでしょうし。」

とにかく喫緊の問題は人……

こればかりは何とかしないと」

「相談役はアテがあるのですか？」

「陰陽庁に一人。」

他はまあ……人伝手に聞いてみます」

一人は陰陽二種の試験で偶然知り合い、そのときに術式の話で盛り上がり妙にウマがあつたため、現在もよくやりとりをしている。

名前は山城隼人。

歳は17で僕より3つ上だ。

まだ若い話をしていると非凡な才を感じさせる。

つい先日、やることのなくなった陰陽塾を辞めて陰陽庁に入ったそうだが、配属先が

どうにも暇な部署らしく愚痴をこぼしていたのを思い出した。

このタイミングでこの話、実際問題彼は適任だと思う。

僕は彼を勧誘するため、連絡を入れ直接会うことにした。

幸いなことに夜に時間が取れるとのことだったので、飯でも食べながら今回の件を話すことにした。

僕は隼人に会うまでに、基本計画をまとめ上げて、会社に提出した。

会社としては他に選択肢はなく、特に異論はないようだ。

僕は会社に提出した書類と同様のコピーを鞆に入れ、会社をあとにし、約束の場所へ行った。

☆

「直接会うのは久しぶりだな」

彼、山城隼人はそう言いながら僕の対面の席に座った。

細身の体には黒のスーツを纏い、切れ味鋭い眼光を見せながら僕を見る。

見た目はエリート然としているイケメンである。

「そうかな？ よくやりとりしてるからあまりそんな気はしないけど」

「それで、話ってなんだ？」

「ああ、そのことなんだけど、僕の会社知ってるよね？」

そこからの打診なんだけど、今度の陰陽法改正の動きに合わせてうちの会社でも陰陽術の研究開発や商品化の動きが出ててさ——」

はい、これ資料、と言って鞆から基本計画書を取り出し隼人に渡す。

「んで、そのプロジェクトを進める上で陰陽師が居なくて。

ほら、フリーの陰陽師ってあまり居ないからね。

そこで隼人にとってみないかって相談なんだけど……」

僕はそこでいったん区切り、水を一口喉に通したあと、

「待遇は部長。

部署設立の目的はウィッチクラフト社が独占状態の市場の切り崩しになるけど、それに反しない限り内容は問わない。

つまり隼人が自由にやりたいことを決めていい。

もちろん僕もサポートに入るし、他の陰陽師の確保も当たってみる。

報酬……給与だな、これは隼人が陰陽庁から受けている10倍出す。もちろん税抜きだ。

条件面ではざっとこんなところ。

隼人が陰陽庁でくすぶっているよりはずっといいと思うけどどうかな？」

隼人は啞然とした表情でこちらを見ていた。

僕は一気にまくし立てて隼人に決断を促すつもりだったが、どうやら少し性急すぎたようだ。

「あー、悪い。今すぐに結論を出す必要はないよ。

そうだな……1週間後くらいに応えを出してくれたら——」

そう言いかけたが、隼人の中では既に結論が出たみたいだ。

「いや、その話受けた」

「決めるの早いね」

「お前のことだ。退屈はさせないんだろう？」

「そこは保証するよ。もっとも退屈する暇はないと思うけどね」

「面白い。やってやろうじゃないか。」

条件も破格のものだしな」

「じゃあ、決まりだね」

僕は隼人の気が変わらないうちに鞆から契約書を取り出して、条件に相違ないことを確認した上で合意のサインをもらった。

これで隼人は早ければ来月からうちの会社で新部門の主軸となり働くことになる。

が、今年度に関して言えば、陰陽術の研究開発よりも、人材の確保や部署の基盤作りが主になるだろう。

十分余裕を持つて体制を整えるだけの時間はある。そう甘く見ていたのが発足当時だった。

そして月日は流れ、新年度の春――

それはついに始動を始めた。

「あー、改めてこの部門を任せられることになった山城隼人だ」

珍しく緊張しているのか、隼人の表情は硬い。

まだ若いためあまりこういう経験といたのがないのだから仕方がない。

いま僕は新年度と同時に発足したスターマイン社の新部門「陰陽事業推進部」の立ち上げの場にいる。

あれから半年、この部門の立ち上げに奔走して、なかなか忙しい毎日を送っていた。というのも、僕は僕で毎日ここへ来ることができるわけではないし、隼人は隼人で詳細な事業計画や必要な研修などを受けていた。

そんな中、問題となっていた人材の確保、実業務エリアの確保および必要資材の確保、内部統制など各種資料の策定などを隼人と一緒にしていたためだ。

しかし、一番の問題であった人材の確保……正確に言えば呪術の使える陰陽師の確保は未だ改善を見せていない。

人数に制限はなかったのだが、結局集められたのは僕と隼人を入れて10人。さらに、僕と隼人以外は陰陽術に詳しいが一般人と遜色のない人たちである。

そんな中に年の頃が10前後のひとときわ目を引く小さな女の子がいた。なぜこんなところにこんな小さな女の子が、と思うだろう。

実はこの子、人材確保のために各地を回っていたときに、いわゆる闇寺と呼ばれる、世間とは隔絶した場所にあるところで託された子なのだ。

託されたといえば聞こえはいいが、要は面倒ごとを押しつけられた感じである。

だが、こんな小さな子を放置するわけにもいかず。

それに、この子には二つほど問題があった。

一つは生成り……霊的存在に憑かれた状態であることだ。

これは封印術を施すことである程度改善が見られたからよかった。

だがもう一つは戸籍がないということだった。

これには僕も隼人も困った。

そこで救いの手を差し伸べてくれたのが僕の専属秘書。

この手のものに詳しいらしく、土御門家の養子として迎え入れることができた。

ここまで出来れば本人のためにも、父さん若しくは小父さん小母さんに任せなかったのだが、どうも僕や隼人に懐いたらしく、今では僕と隼人のどちらかが交互に面倒を見る形ですつと行動を共にしている。

この部署のメンバーは当初9人だったのだが、きりが悪かったため、隼人が「こいつも入れてしまえ」と言ったのが切っ掛けで、部門マスコットの存在として迎え入れられたのだ。

まあ、今春から学校にも通わせるため、学校が終わってからの出社というカタチになりそうだ。

そうこう脳内で考えていると、どうやら隼人の演説が終わった。

次は僕の番だ。

隼人に代わり僕が皆の前に立つ。

そして、

「相談役兼技術アドバイザーの土御門碧です——」

十分とはいえないが土台はできた。

いまこの瞬間、僕らの新たな戦いが始まろうとしていた。

第二章

2—1. 入塾（前編）

それは何年も前の話。

姉さんが風邪で寝込んでいたその日に、親類が集まったときのこと。

僕は縁側に座り魔術の鍛錬のため瞑想していたところ、唐突に春虎兄さんから声をかけられた。

「リボンを探しているんだ。 あおいも手伝ってよ」

春虎兄さんのリボンだろうか？

まさか春虎兄さんにそんな趣味が……

などと不審なことを考えていたら

「ぼくのじゃないぞ。 ぼく男だぞ」

顔に出ていたのだろう。

春虎兄さんはすぐさま否定し、僕もその否定の言葉に安堵した。

じゃあ一体誰のだろう。

そんなことを考えていると、春虎兄さんのうしろから、いかにもお嬢様な女の子が顔

を出した。

「かのじよが庭で落としたみたいなんだ。

でも二人で探しても見あたらなくて……

なつめちゃんも病気だから起こしちやよくないと思つてさ」

ああ、なるほど。そこで僕の出番なんですね。

「事情はわかりました。それで？ そちらのお嬢様は？」

今まで静かに見ていた女の子に話を振つてみた。

女の子は

「あたしは倉橋京子。あなたはここの子？」

「ええ、そうです。土御門碧といいます」

京子は興味なさそうに、へえーとかさうなのとか呟いたあとに、僕に何をして欲しい

のかを声高に主張した。

自分は倉橋であなたとは親戚にあたり、ここに客として呼ばれた大事なお客様である。
る。

その大事なお客様が、庭で遊んでいて大事な大事なポンを無くしてしまった。

大事なお客様の大事なリボン無くさせたこの家の子であるあなたは、いったいどう

してくれるのか？

見てくれもお嬢様だが発言もお嬢様という貴重な体験をした僕は一瞬呆然としてしまった。

ただまあ、これが大人なら僕も何か文句の一つでもいうが、このくらいの女の子が言う分にはかわいらしいからまあいいやと納得した。

「……お嬢様の要求はわかりました」

僕はおもむろに立ち上がり、二人に「少し待っててください」といって席を外した。

部屋に戻り、この屋敷一帯の見取り図と、一本の鎖の先に繋がっている三角錐の銀細工を用意し、二人の元へ戻っていった。

「おまたせしました」

二人は縁側に座り何やら楽しそうに話していた。

僕が声を掛けると二人ともこちらを振り返った。

「なにしてきたんだ」

「捜し物をするのに丁度いい道具があったので持ってきました」

二人に部屋から持ってきた道具を見せる。

「なにこれ？」

「見ての通り、この屋敷一帯の見取り図と銀細工です」

「……これでなにをするの？」

「これで落とし物を捜します」

春虎兄さんはわからない、という表情をし、京子に至っては、

「バカにしないでくれる!?! こんなものでどうやってリボンを探すのよ!」

バカにされたものだど勘違いをして怒鳴り散らしてきた。

僕はまあまあと言つて京子を落ち着かせた後、見取り図を床に置き、京子に鎖で吊した銀細工を持たせる。

そして鎖で吊した銀細工で見取り図の上を移動させる。

するとこちらとは対面に位置する縁側の場所で銀細工が揺れた。

「ああ、どうやらここにがあるみたいですね」

「?!!」

僕は反応を示した場所へ移動する。

二人は何が何だかわからないといった怪訝な表情をしながら僕のあとに続く。

問題の縁側へ到着した後、僕は一通り調べてみた。

すると、縁側の石の物陰に見慣れないリボンが落ちていた。

僕はそのリボンを拾い上げ、汚れをはたいた後、京子へ返した。

「これがお望みのモノでしょうか? お嬢様」

京子は顔を赤くしながらリボンを受け取り、大事そうに抱えた。

そんなに大事なモノなら無くすなよ……マジで。

そもそもリボンは頭飾りなんだろ、どうやったたら無くすんだよ。

などと、女の子の事情などまるで知らない僕は、内心毒づきながら、二人に「じゃあ僕はこれで」といつつ元の縁側へ戻っていく。

これで邪魔されずに瞑想の続きができると思っていると、なぜか二人とも付いてきた。

「——まだ何かありますか？」

「あの、……探してくれて、ありがとう」

おや、これは意外だ。ちゃんとお礼ができる子だったんだな。

僕は京子への評価を改めた。

僕が感心していると、またまた春虎兄さんが唐突に聞いてきた。

「あおい、さっきやったやつなに？」

「何っていうほどのものじゃないですよ。」

「ダウジングってやつです」

「なんでアレすると無くしたものがみつかるの？」

なかなか難しいことを聞いてくる人だな。

僕はなるべく説明を噛み砕きつつ春虎兄さん、途中から耳を傾けていた京子にも伝え

た。

「……無くしたモノを探しても見つからないのであれば、見つかりにくいところにソレはあるんですよ。」

それなら闇雲に探すのではなく、当たりを付けて探せばいいですよね」

二人はふんふん言いながら聞いている。

「ここで使うのがダウジング。これを使うことで捜し物が見つかるわけですが——」

「でもそんなことで捜し物が見つかったら、捜し物なんてすぐ見つかるじゃない。誰も苦労しないわよ」

京子が間髪入れずに突っ込んでくる。

「ええ、ですからこれには条件があります」

「——どんな条件よ」

「落とした本人にやってもらうことです。」

これはモノを落とした本人が、落とした場所を、潜在的……頭の片隅では知っているということですよ。

つまり、本人には自覚がないだけで、落とした場所を無意識にわかっている……

今回京子さんはダウジングをすることで、落とした場所に無意識に反応したんです」

「京子はビックリした顔をして声を詰まらせ、反対に春虎兄さんはすげーすげーといいなながら笑っている。」

「なんていうのかな、これも乙種呪術っていうのかな。 まあ一種の暗示です。詳しい分類はわからないから、僕にとってはどうでもいいことだけれども」

「あおいはスゲーな！」

「——ん、まあまあね」

僕は春虎兄さんの唐突さがすごいと思うよ。そして京子、相変わらずだな。などと、説明や雑談に明け暮れ、時間があつという間に過ぎていった。

日が傾き、庭が夕日に染まり、二人が帰るまで応対に追われ、結局、瞑想ができず仕舞いだった。

☆

——夢を見た。 遠い昔の夢だ。

カーテンから差す日の光が僕の顔を照らす。

「——つ」

適温に設定された空調が、眠りから醒めようとする僕をサポートする。

僕は今、都内渋谷のホテルの一室にいる。

ベッドの中で伸びし、固まった体をほぐしながら起き上がる。

あの日、僕は陰陽塾に入塾することになったのだが、入塾する今日までドタバタな日々が続き、入塾後に寝泊まりする部屋なども決まっていなかった。

仕方なく昨日の最終の飛行機で東京行きに掛け乗り、身一つでこちらに向かったのだ。

手元にあるのは制服と入塾当日に必要な書類のみ。

急いでいたとはいえ、何着か着替えを持ってきた方がよかつたなどと後悔するが、いまさら後悔しても遅いと過ぎた考えを振り払う。

時刻は7時を少し過ぎたところ、まだ入塾式まで時間があるな、と確認し余裕を持って身支度を行う。

寝ぼけた顔を洗い、髪を整え、着慣れない制服を纏う。

普段は容姿に気を使わない方だが、今日ばかりはそうはいかない。

土御門家の人間として、最低限こういった儀式的なところはしっかりしなければならぬと父さんに言われてきた。

鏡を見てどこもおかしなところがないことを確認して、朝食をとるためにホテルのラ

ウンジに行く。

軽くお腹を満たして、部屋に戻り、今度はチエックアウトをするために受付へ赴く。チエックアウトを済ませた後、ホテルから出ると、さわやかな風に揺られながら桜が中空を舞っていた。

「よし、それじゃあ行きますか」

立ち並ぶ桜、心地のよい風、この清浄しやうじやうめいけつ明潔が僕の心を満たしていく。その終わりが、陰陽塾いんやうじゆくにいることを、このときの僕はまだ知らない。

2—1. 入塾（中編）

「あら？ あなた、入塾生？」

陰陽塾に到着すると、背後から声がかかった。

女子の白い制服に身を包み、栗色の髪をハーフアップにまとめた闊達そうな女子生徒。

「ええ、本日からこの陰陽塾へ通うことになりました。

あなたは？」

京子は「ん、ん……」と軽く咳払いをして

「あたしはこの陰陽塾の二年、倉橋京子といえます。

きみは——」

倉橋、倉橋……

——昔、家の庭でリボンを無くしたあのお嬢様か。

なるほど、よく見てみると、むかしの印象そのままじゃないか。

勝気そうな、お嬢様然とした雰囲気。

昔みたあの子がそのまま大きくなったような、そんな感じだ。

「僕は土御門碧です。

—— お久しぶりです、お嬢様」

それを聞いた瞬間、京子は電撃に撃たれたかのように固まった。

「……僕もそのうち会うとは思ってはいたんですよ。 倉橋のお嬢様ですし。

でも、まあ、まさかこんなに早く、しかも初めてあつた塾生がお嬢様とは想像できませんでした」

あの日、自分でなくしたりボンを僕に強制的に探させた記憶が蘇り、ちよつと意地悪してやろうと魔がさしたのである。

それがいけなかった。

「つゝつゝちよつと、そのお嬢様っていうの、やめてくれない？」

羞恥と後悔が入り交じった表情をしながら、しかし視線だけで僕を今すぐココで殺れるような顔をし、僕に訴えてきた。

少し調子に乗りすぎたようだ。 うん、先輩を弄るのはよくない。

「ごめんなさい、調子に乗りすぎました。

許して下さい京子先輩」

僕はすぐさま弄つたことを素直に謝つた。

彼女はため息をつきながら、「もういいわ」と呟いた。
どうやら許してくれるようだ。

「でもホント久しぶりね」

「そうですね、10年ぶりくらいですか?」

そんなわけないでしょ? あなた適當ね、などと僕が適當に言ったことに対して軽く突っ込みを入れられながら、昔話をしていく。

そんな話の中、京子から

「そういえば、碧くんって夏目くんの弟なの? 宗家なのよね?」

こんな質問をされた。

夏目くん、ね。

どうやら姉さんは彼女には男で通しているみたいだな。

「ええ、夏目は僕の兄さんです。ちなみに春虎兄さんは従兄弟にあたります」

「……ちよつとびつくりね。あのバカをちゃんと兄さんと呼ぶ弟がいるなんて。な

んか新鮮だわ——」

「そうですか? 春虎兄さんしつかりしていると思うけどなあ」

姉さんに対する接し方を見てても二人はお似合いだと思おうし、人当たりの良さとか見

でも尊敬の対象になると僕は考えている。

勉強が出来て尊敬されるタイプではなく、その性格から人気者になるタイプなので軽く見られがちなのかもしれない。

「ふーん……まあいいわ。」

それよりも中に入りましょうか？」

あ、軽く流された。あまり興味ないのかな。

あの日、一緒にリボン探したというのに、不憫だ。

そんなことを考えながら塾舎の入り口に向かった。

塾舎の正面入り口は、間に短いスペースを置いた二重の自動ドア。

大きな会社や美術・博物館などでみられる風除室を備えた構造になっていた。

しかし、この塾舎の風除室は本来の建物内に風が吹き抜けるのを防ぐという役割とは別の意味があった。

左右に配置された獅子の石像。

ただの石像ではない。式神だ。

「京子先輩、これは？」

「これ？ あたしのお祖母様……塾長の式神で右がアルファ、左がオメガというのよ」

「左様。とはいえ、そこいらの市販品と同様に見てもらっては困る」

「然り。 我ら、塾長自ら呪力を吹き込まれし高等人造式、アルファとオメガである。 主命により、陰陽塾開塾以来、その番を司つておる」

狛犬の石像がしゃべる、しかもちよつと偉そうにしゃべる珍しい姿を見て、僕は感嘆のあまり発する言葉を失つた。

見た目は石で作られた狛犬の彫り物に過ぎない彼らがしゃべる姿は、まるで精巧な3D映画を見せられている気分だった。

「自己紹介どうもありがとうございます。」

なかなか石像がしゃべる姿はお目にかかれるものでもないので驚きました。

僕は土御門碧です。 今日この陰陽塾へ入塾することとなりました。

これからよろしくおねがいます」

「よろしい。 土御門碧。 声紋と霊気を確認し、登録した」

「我らは汝を歓迎する。 学友と切磋琢磨し、よき陰陽師となるべく精進するがよい」
アルファとオメガは偉そうにいて、しかし礼儀正しく告げた。

このアルファとオメガがこの塾舎のセキュリティを司っているようだ。

外部の人間は最初にここで自己紹介することで、予め来訪が予定されていた人間を照合、この塾舎のセキュリティ登録処理が施されるのだろう。

「それじゃあ行くわよ」

京子に促されて入り口に歩みを進めると、
「待て」

と横からオメガから止められた。

それから少しの間を置いて口を開いた。

「我が主が、汝らをお呼びだ。 汝らは直ちに塾長室に向かうがよい」

☆

「……っつちよ」

塾長室があるのは、塾舎の最上階だった。

エレベーターを降り、僕は京子に促されるままに後をついて行き、廊下を奥に進む。

この塾舎の中に入ってから感じていたことだが、塾舎内の内装は意外なほどシンプル
な作りをしていた。

所々に呪物や呪具が飾られており、博物館や美術館を連想させるようにも見えた。

壁に飾られた鎧甲や煤けた錫杖、金欄の包圍、封のされた日本刀、などなど。

しかしこれらはただ飾られているだけ。

人、物、呪的、靈的存在に対して何か影響を及ぼす……端的に言えばトラップと呼べ

るものは一つもなかった。

陰陽塾という国内最大の陰陽術師の育成機関というからには、もつとこうドロドロとしたものを想像していたし、

何やらすごいトラップなどがあるのかと考えていた僕にとっては少し拍子抜けであつた。

そんなことを考えながら歩いていると、どうやら塾長室の前に辿り着いたようだ。

味気ないごくごく普通のドアに、シンプルな「塾長室」のプレート。

京子が「ここよ」と呟いたあと、ドアをノックする。

少しの間があつた後、

「どろどろ」

中から声が出た。

「失礼します」

京子がドアをつかみ、声を掛けてドアを開けた。

僕も京子に続き中へ入る。

「」

部屋の中の雰囲気は先ほど歩いてきた外とはまた違ったもので、セピア色で統一されたレトロな部屋だった。

部屋の両側には壁を埋め尽くす書架。

まるで書架の道であるかのような、その大きな道の奥にこの部屋の主が存在していた。

この方が京子のお祖母さんで、この陰陽塾の塾長ですか。

なるほど、一見して品のいい小柄なお婆さんではあるが、その実、この部屋に足を踏み入れた時から僕を値踏みするかのようには部屋のあらゆるところから視線を感じていた。

そんな態度とは裏腹に塾長は

「ようこそ。お待ちしていましたよ」

何もなかったかのように言ってきた。

この婆さん……

僕は油断しないように婆さんを見る。

「土御門碧さん。初めまして、塾長の倉橋美代です。

そちらにいる京子さんの祖母でもあります」

「……どうも」

隣の京子は何か言いたげであった。

素っ気ない挨拶になってしまったが、こんな腹の探り合いのようなことをされれば仕

方がない。

僕が挨拶をし、そして、倉橋塾長に促されるままに、彼女のデスクの前に移動した。塾長の前に立つ。

そんな僕をしげしげと眺めた後、不意に唇を綻ばせた。

「なるほど」

なるほど、じゃねーよ。

内心で毒づきつつ塾長の言葉を待った。

すると、先ほどから感じていた視線が突然消えた。

「ごめんなさい。あなたのことに興味があつて少しばかり観察させてもらったわ」

倉橋塾長はケラケラと笑いながらそんなことを言い放った。

京子はギョツとした表情をして顔をこわばらせていた。

「……できれば今後はやめていただきたいですね。」

この部屋に入った時から何をされるのかと思つて警戒してしまいました」

「ごめんなさいね。」

土御門碧さん。あなたのことは泰純さんや鷹寛さん、千鶴さんから聞いています。

それに夏目さんからね。

——それで少し試してみたくなったの」

僕は頭を抱える。

人づてに何を聞いたのか知らないが、入塾生捕まえて何をしているんだ、この婆さんは。

隣でも京子が何やら抗議している。

お嬢様な性格の京子でもこの婆さんには思うところがあつたのだろう。

「……倉橋塾長、あまりいい性格とはいえないみたいですね」

「あら、そうかしら？ 私は面白かつたのですが」

あんたが面白かつただけか！

なるほど、陰陽塾の塾長クラスともなれば、こういうことも平気でしてくるわけか。

まつたく、いい勉強になつたよ。

「……もういいです。」

それで、僕をここに呼んだ理由をお聞かせ願いたいのですが」

「あら、つまらない。

もつと突つ込んでくるかと思つたのに。

……まあいいわ」

塾長は一呼吸置いた。

そして

「陰陽庁にいる知り合いから、昨年の夏にあなたの実家で起きた事件について聞きました」

京子は何、何の話？　といった表情である。

夏に起きた事件。

大連寺鈴鹿が起こした泰山府君祭未遂事件である。

彼女の起こした事件は世間一般には伏せられている。

いや、揉み消されたといった方が正しいか。

建前としては彼女が未成年だからという理由になるが、実際の事情はより政治的で、世論に与える影響を最小限に留めるためだ。

大連寺鈴鹿は国家一級陰陽術師——通称「十二神将」の一人であり、陰陽師の中でもエリート中のエリートだった。

陰陽庁としては、そんなエリーートの不祥事を、可能な限り隠蔽したかったのである。

——表の理由としては。

「あなた、あの事件で大連寺鈴鹿さんと顔を合わせていますね？」

「ええ。ですが、それが何か？」

「その大連寺鈴鹿さんが、あなたと同じく、この塾舎へ入塾します。」

「これは陰陽庁の意向で決定しました」

陰陽庁の意向……ね。

表向き、先の事件のペナルティといったところか。

僕は話の続きを静かに聞く。

「そこであなたに頼みたいことがあります。

大連寺鈴鹿は周知の通り国家一級陰陽師として有名ですが、実は彼女、家庭の事情からこういった人の集まるところで学んだことがあります。

それに陰陽庁の知り合いからは性格も難しい子だと聞いています。

「そんな彼女には塾舎でサポートしてくれる方が必要だとは思いませんか？」

「思いません」

僕は間髪入れずに、そう言いきった。

あの大人を相手にしてもやっていけそうな勝ち気な性格ならどこに行っても大丈夫だ。

僕は純粹にそう思っている。

「あら？ あなた案外冷たいのね。でも……」

「なんだ？ 今度は何を言い出すつもりだこの婆さん。」

「あなた、陰陽二種を取得していましたね？」

「取得しましたが、それが何か？」

「二種を取得していて、この陰陽塾に入塾する必要があるのでですか？」

「それは僕の都合で、そちらが特に気にすることではないのではないのでしょうか？」
「でも、この陰陽塾は陰陽師育成機関なんですよ。」

既に二種を持っているあなたが、この陰陽塾で何を学ぶというのです」

「……何がいいたいのでしょうか？」

倉橋塾長は一呼吸付いた後、権限を最大限に利用した暴挙に打って出た。

「私の権限であなたの入塾を拒否することもできるのですよ？」

一見、職権乱用とも取れるこの行動だが、実に効果的な手だった。

会話の中でもあるように倉橋塾長は陰陽庁との繋がりがあつた。

しかも先の事件を知っているごく一部の関係者との繋がりがあつた。

もしかしたら双角会とも繋がりがあつたのかもしれない。

そうでなくともアルファとオメガが言っていたように開塾以来ずっと塾長という地位にいる時点で、一塾生の入塾を握りつぶすなど造作もないことなのだろう。

別に入塾を潰されたところで、中卒になるだけで別段困ることはないのだが、せつかくみんなが陰陽塾へ入塾することを喜んでくれたんだ。

いいだろう……

この婆さんのやり方は気に入らないが、ここは倉橋塾長の案を受け入れよう。

「——わかりました。大連寺鈴鹿のサポート役をやればいいんですね」

「理解が早くて助かるわ」

見た目は上品で温厚そうなお婆さんのだが、ずいぶん物言いをする人だ。

もつともこういう人でないと、この陰陽塾の運営はできないのかもしれない。

僕は溜息をつく。

この婆さんとのやりとりは精神的に疲れるな。

話が終わったのなら、早々に立ち去りたいところだ。

僕はこの場から離れるために話を切り出す。

「——話はそれだけでしょうか？ なら——」

「ああ。あと、もうひとつ。

これは老婆心からのアドバイスですが」

と、やや意味ありげな口ぶりで前置きをしてから、面白がるような眼差しで僕を見つ

めた。

いや、この婆さん完全に面白がっているな。

「夏目さんにまつわる噂について——」

噂というのは、姉さんが土御門夜光の生まれ変わりだということだろう。

「土御門夜光の生まれ変わりという噂ですね」

倉橋塾長は首肯にて反応を示す。

「そうです。」

あの噂のせいで、夏目さんは塾内でも特別な関心を持たれているわ。

それは時として悪意を持った人たちに関心を持たれ、様々な事件に巻き込まれたりすることもあるわ。

京子さん、あなたも関わっているからわかるわね？

——そしてそれは、夏目さんの弟であるあなたにも向かうでしょう」

父さんから話は聞いていた。

姉さんや春虎兄さん達が、双角会からの襲撃を受けたり、霊災を修祓するために陰陽庁にかり出されたりしていたらしい。

「何か困ったことがあれば相談に乗るし、私に言いにくいようなら担任の講師か——」

「そうですね、京子さんや夏目さんの担任の先生でもある大友先生、彼に相談して下さい。」

「私たちに出来る範囲で、力になります」

一応、塾長という立場から僕のことを心配してくれているらしい。

ありがたい申し出だと思う。

これが、普通の、一般の人から言われたのならば——。

僕はげんなりしながら溜息をついた。

何か困ったことがあれば、倉橋塾長や講師の力を借りられる。

純粹に言葉だけを聞けば、塾生という立場からすれば実に頼もしい。

ありがたい申し出に聞こえる。

だが、しかし、この申し出には表向きの好意とは対照的な、悪意……とまでは言わないが、裏がある。

姉さんを巡って発生しうる問題に巻き込まれる可能性の高い僕にとって、倉橋塾長の後ろ盾は魅力的な力になるだろう。

だがそれは、僕が倉橋塾長を頼むということは、僕がそれだけ倉橋塾長に依存すること他ならないのである。

これからの塾生生活において些細なことでも頼ってしまうことがあるかもしれない。

そして一度その力に頼ってしまうとなし崩し的に頼ることになってしまい、倉橋塾長への依存度が増していく。

倉橋塾長は僕の深層心理に、自分との関わりを絶てなくするよう「呪い」をかけたのだ。

「私としては、あなたには、そういうことにも早くなれて欲しいと思っています」

と、この婆さんは面白いがるような表情をしながら言ってくる。

話した内容と表情が一致していないのだが……

「……なるべく塾長をはじめ、講師の方々に面倒をかけないようにします」

「あら、つれないのね。夏目さんはもつと純粋な子でしたよ」

「つ、——兄さんは真つ直ぐにすくすくと育った純粋な人なんです。

僕や倉橋塾長みたいにドロドロとしていませんから」

「まあ、いいでしょう。

でも、これから先ずっとこの問題はつきまとうことですからね」

自分の力を過信するわけではないが、自分と周りにいる人間くらいなんとかするさ。

今までそうしてきたように、これから先も。

土御門宗家に生まれた時点で、その覚悟はできていたはずだ。

そう自身に言い聞かせながら、先ほどの倉橋塾長の話に強く自制をかけようと心に決めた。

そんな僕を倉橋塾長は見つめ、あきらめとも取れる表情をしたあと、穏やかな表情をした。

そして、

「ところで、これは好奇心から聞くのですが、あなたたちは土御門夜光に対して、どんな

印象を持っていますか？」

「さあ……どんな印象と言われても——」

僕にとってはやっつかいごとの種でしかない。

夜光信者などはその最たる物である。

しかし、これは夜光……というよりも、周りが作り上げた夜光の虚像によつて起きた問題だ。

僕にとつて土御門夜光個人の印象は、そうだな……

「ご先祖様という印象しかないですね。

夜光個人がどのような人物だったのか僕は知りませんので」

倉橋塾長は「なるほどね」と呟いた。

「——将棋がね、好きだったんですよ」

塾長は言った。

「でも弱くてね。

へば将棋つていうのかしら？ 弱いのにすきでやろうやろうつて——

そのくせ負けると拗ねるもんだから、みんなとても迷惑していましたよ。

もつとも、私は感謝していますけどね。

あの人が無理矢理教えてくれなければ、たぶん生涯将棋なんてわからなかつたでしよ

うから」

懐かしむように笑いながら言った。

土御門夜光……大戦前に名を馳せた、現代陰陽術の祖であるが、まだ60、70年前のことである。

現代に夜光に会っている人が生存していてもおかしくないが、目の前にいる人物がそれだったことに僕は少し興味がわいた。

「倉橋塾長は夜光とは親しかつたみたいですね。」

その夜光の話、興味があるのですが、夜光はどのような人だったんですか？

先ほど言ったように、僕にとって夜光はご先祖様でしかありません。

それ以外ではやつかいごとの種を持つてくるといった感じでしょうか。

とにかく、夜光個人についてまったく知らないのです」

「そうですね……。」

あなたはご先祖様と、遠い歴史上の人物を語るように言いますが、あなたと同じように、土御門家に生まれ、青年時代を送り、それから才能を開花させて、時代の激流に飲み込まれて行ったんです。

尋常な人生でなかったことは確かですけど、笑えば泣きもする。

「普通の人間だったのよ」

夜光に酔狂する人が現代にもいるくらいだから、もつと狂気的な人物だと思っていたが、才能があつただけの普通の人のようだ。

夜光個人がどうというより、周りの人間が作り上げた虚像が優秀だったのかもしれない。

「……意外です。もつと狂気的な人物かと思っていました」

「そんなことはないですよ。」

でも、夜光本人は普通でも、夜光を英雄視し、神格化している人たちがいることを、あなたは知っていますか？」

「ええ、夜光信者と呼ばれる人たちですね」

「そう、彼らは夜光にも普通の人格があつたことを無視し、盲目的に彼を祭り上げる。」

……残念なことに、夏目さんのことは彼らにも知れ渡っていて、実際に接触されたこともありません」

「……父から話は聞いています。」

その節は兄絡みの事件に京子先輩も巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした」僕は隣にいる京子に視線をやり、謝罪をする。

事の発端は夜光信者が陰陽塾の講師に扮し姉さんに接触したときのこと。

姉さんは捕まり、姉さんを追つた人たちの中に京子も含まれていたことだ。

夜光信者は強力な式神を繰り出し、一歩間違えば死んでいたかもしれない事件だけに、身内の問題に京子を巻き込んだことを申し訳なく思う。

京子は両手をぶんぶん振り、「全然、あたしが好きでしたことだから」と言ってくれた。倉橋塾長も、

「京子さんが好きでやったことなので、そのことはいいいのです。身内としては心配ですが……」。

それにこれは陰陽塾内の事件なので、生徒を守れなかった私に一番の責任があります。す。

ただ、今後もこのような危険性は続くでしょう。

私たちもそういったものからできるだけ守れるようにしようと努力します。

しかし情けない話になりますが、完全にそれを消し去ることはできません。

理不尽なことなのかもしれないですけど、それが現実ですからね」

倉橋塾長は厳しい表情で告げる。

倉橋塾長の言わんとすることはわかる。

たとえば塾内であっても誰が夜光信者なのか特定できるわけではない。

陰陽塾は陰陽師育成機関、つまり陰陽庁の組織の一部である。

陰陽庁が陰陽塾に夜光信者の講師を送り込んだりすることは造作もないことで、そん

な環境の中、完全に姉さんと夜光信者を引き離すのは不可能だ。

「承知しています。」

夜光信者が何を目的に行動しているのか、僕は知りません。

——しかし、彼らが盲目的に夜光を見てしまう。

そして兄さんを中心に事件を起こす。

誰が仕組んだことなのか今はまだわかりませんが、このようなこと——

いえ、このくだらない乙種呪術を続けるのであれば、僕は——」

一呼吸置く。

「僕は、どのような手段を使っても必ず彼らを叩きつぶす。」

——それが誰であろうと、絶対に」

隣にいる京子から息を呑む声が聞こえる。

イメージとは時として悪意を持つものであり、それは無関係の人を巻き込む凶器になり得るのだ。

その凶器の中心にいる僕の身を案じた塾長に対して、僕はこの場で明確に答えを出した。

真つ直ぐに倉橋塾長を見る。

そんな僕に倉橋塾長は厳しい表情で、しかし唇の端に笑いを挟んでいた。

「……どうやらあなたには無用な心配だったみたいね。

泰純さんたちから聞いていましたけど、ええ、本当にあなたは私たちと同じ陰陽師なのですね。

頼もしい気持ちと同時に、少しだけ寂しくもあります。

——でも、碧さん、この陰陽塾にいる間、あなたは塾生でもあります。

せめてこの陰陽塾にいる間は塾生の生活を満喫して下さい。

塾長としても、また私個人としても、あなたのことは楽しみにしていますからね」
そう言つて、塾長はにっこり笑つた。

その直後だ。

まるでタイミングを見計らつたように、背後のドアがノックされた。

「すみません……」

と声が掛けられ、部屋に一人の男が入ってきた。

「塾長、そろそろ時間ですけど、まだ掛かりそうですか？」

「あら、お待たせしたようですね。ごめんなさい、先生。

いま終わつたところですよ」

「そらちようどよかった」

部屋に入ってきた男は、眼鏡を掛けて髪に癖のある長身で細身の杖を持った男だった。

スーツを纏っているが、着古したシャツとネクタイに、よれよれのジャケットとスラックス。

せっかくスーツを着込んでいるのに台無しである。

僕と同じく、身なりにはあまり気を遣わない人なのだろうか。

歳は20代中盤くらいだろうか？ いやもう少し上かもしれない。

妙に枯れている雰囲気だが、砕けたもの言いなどから若く見える。

しかし、この男のある一点に視線が集中してしまう。

右足は木製の棒状になっているのである。

そう、彼の右足は義足なのだ。

僕の視線に気がついたのか、男は笑いながら右足を掲げて見せた。

「僕も塾講師とはいえ、陰陽師の端くれやさかい。このくらいのかっこいい負傷はおうてるで」

「失礼しました、先生。」

少々、めずらしかったものですから……

倉橋塾長、こちらの先生は？」

「こちらは、京子さんや夏目さんのクラスを担当して下さっている、大友陣先生。こう見えて、とても優秀な方なのよ」

「こう見えてはないでしょう、塾長。」

まあ、ええわ。とにかく、そういうわけやから、よろしゅう。

学年は違うけど仲良くやっていこうやないか」

そう言つて、大友先生は笑つた。

いかにも人懐っこい笑顔だ。

「とにかく、行こか。」

そろそろ入塾式も始まる頃やし。

——塾長、ほなら失礼します」

大友先生はぺこぺこ頭を下げると、僕と京子を連れて塾長室をあとにする。

2—1. 入塾（後編）

あたしは塾長室にいる。

塾舎の入り口で久しぶりに再会を果たした碧くんと一緒にお祖母様から呼び出されたためだ。

そしてその彼は今、お祖母様とやりとりをしているのだが、

——二人の会話が、あたしの胃を終始押さえつけていた。

それは塾長室にはいつてからのこと。

碧くんが素っ気ない挨拶をしたのでそのことを咎めたのだが、実はこれには理由があった。

その後、お祖母様から観察していたという謝罪の言葉があり、わたしも先ほどの彼の態度の理由に気がついた。

つまりこれはお祖母様から仕掛けてきたことだったのだ。

これに対していくらお祖母様でもやりすぎだと抗議したのだが、やんわりと躲されるだけに終わった。

そのあとも、お祖母様が強権を使って碧くんの入塾を拒否するだとか、夏目くんを巡る問題のことについて、

あたしも部分部分にしか理解が及ばないけど、二人がとんでもない内容を話しているのは節々に感じる事ができた。

胃が痛いわ……

でも、

それと同時に、あたしのことをからかつていつも子供扱いするお祖母様に対して渡り合ってる碧くん。

子供のころ、あたしの大事なリボンを乙種呪術で探した、あのとときのイメージそのまま成長していたことに、あたしは胸が躍った。

年はあたしの下だけど……、彼なら家柄も人物的にもお祖母様は納得する……かな？

高鳴る心中を必死に押さえ込みながら、二人のやりとりを横から静かに眺めていた。

しばらくすると、大友先生がこの部屋に入ってきた。

どうやら入塾式が始まる時間のようだ。

碧くんあたしは大友先生に連れられて、塾長室をあとにした。

「君すんごいやつちやな」

廊下に出て歩き始めるなり、大友先生は僕に聞いてきた。

「……話聞いていたんですか？」

「すまんな、聞くつもりはなかつたんや。耳に入つてもうたわ」

つまり、ずっと盗み聞きしていたのか。

油断しているつもりはなかつたが、この人の隠形……全く気がつかなくなつたな。

見た感じ軽い感じはするが、実はすごい人なのかもしれない。

「……まあいいです。あまりいい趣味とはいえないと思いますが。」

「ところですんごいって、何がですか？」

「あのバア様に対して、あれだけの会話できるってことや。」

君ホンマになにもんや？」

「何者もなにも、今年の入塾生ですよ。」

土御門碧、夏目兄さんの弟です」

「君の事情については塾長から聞いていたが、いや、にしてもアレは……」

あまり少ない情報で、誤解されるのもあれなので、僕から話を切り出すことにした。

「僕は夏目兄さんとは違って、陰陽術の実技についてあれこれと器用にすることはでき

ませんが、知識については実家の資料や文献を見るのが好きだったので色々知っていますよ。

そのおかげで陰陽二種も取得できました。

それに倉橋塾長とは親戚なので、事情については知っていました。

京子先輩とも子供の頃、一緒に遊んでいたときもあるくらいですからね」

正確に言えば、京子と遊んだのはリボンを探したあの日1度だけ。

塾長の事情も知ったのは、アルファやオメガに聞いたこと、塾長との会話の中で推測しただけだ。

だがまあ、この大友先生の言い方を鑑みるに、この業界での倉橋塾長の立ち位置というの、だいたいその想像で合っているようだった。

「なんや、京子クンとも昔からの顔見知りやったんか？」

……いくら聞きたいことはあるが、時間もなくて今はそういうことにしといたろ」
僕と京子の顔をしげしげと見ながら、渋々納得といった表情である。

「まあ、ええわ。とりあえず、悩み事とかあつたら、遠慮せんと言うてな」
と、大友先生は言った。

そんなこと言われても、素性の知れない人に悩みなんか相談できないよ。

内心でそう思いながらも口には出さず、さすが陰陽塾というべきか、倉橋塾長といい、

この大友先生といい、どうにも癖がありそうな人ばかりだ。

陰陽塾に着いて、まだ3人しか会っていないのに、やれやれ、最初でこれではこの先が思いやられそうだ。

そのあと、騒がしかった大友先生は、それ以降は一言も無駄口を叩くことは無かった。エレベーターに乗って地下に階を移り、大友先生の案内で僕と京子は廊下を渡る。

やがて、

「ハイヤ」

着いた先は塾舎の地下にある呪連場と呼ばれるところだった。

入塾式はここで行われる。

スタジアムのような造りで、アリーナを囲むように観覧席が並んでいる。

今は陰陽塾の塾生達が整列している最中だった。

観覧席には、新入生の両親だろう人達の人影も見える。

ちなみに今回、僕の保護者として小母の千鶴さんがくる予定になっている。

「碧クンはアリーナの前方で、京子クンは後ろの集団の左側や。」

もう時間もないし、とりあえず早よ行ったりー」

「じゃあ碧くん、よかつたらあたしのクラスにも遊びにきてね」

「ええ、では、また後ほど伺います。」

大友先生、案内ありがとうございます」

京子、大友先生は手で合図をして別れ、僕はそそくさと前方の集団に紛れ込んだ。すると、まもなくして入塾式が始まりをみせた。

☆

新入生への訓辞が終わりを見せた。

演説を行っていた講師が壇上から退きながら拍手によつて送られる。

すると今度は倉橋塾長が前に出た。

「初めまして、皆さん。陰陽塾塾長の倉橋美代です——」

僕に鈴鹿を押しつけた張本人だ。

しかし壇上に立つ倉橋塾長は、先ほどとは異なり、挨拶は至つて普通の内容に終始していた。

「……以上で、私からの挨拶は終わらせて頂きます。

新入生の皆さん。また、新たなステージに昇級された皆さん。

自分を信じ、自分の力を伸ばすよう、精進なさつて下さい」

塾長が塾生への激励で場を締めると、再び会場から拍手が送られた。

意外なほど何もなく、至って普通に終わったな。

僕がそう考えていると、塾長はふと思ひ出したように再びマイクに話しかけた。
「あら、いけない。」

ひとつ発表することがあったのを、忘れていましたわ」
聴衆から拍手が途切れ、会場がわずかにざわつく。

「実は、今年度の新入生——第四十八期生には、一人変わった経歴の方を受け入れることになりました。」

すでに陰陽師としての資格を取得されているのですが、幾つかの事情があり、また本人の強い希望もあつたので、特待生として当塾への入塾を許可することとなりました」

一度静まった会場が、塾長のセリフを聞くにつれて、再びざわつき始めた。

特に、僕のいる前方のグループ、新入生のグループが、落ち着きをなくし、私語が飛び交いだした。

「せっかくですので、ご本人からも、一言、挨拶を頂こうかしら。」

ここにいる皆さんなら、多分彼女のご存じでしょうけど、一応ご紹介しますね。
現在、最年少の国家一級陰陽師で「神童」と呼ばれている——」

それまで静寂を何とか保っていた後方にいるグループまでもが一斉に瓦解し、入塾式

とは似てもつかない、まるで人気アイドルのライブのような異様な雰囲気にも包まれた。

「大連寺鈴鹿さんです」

☆

見覚えのある後ろ姿は長い金髪のツインテール。

その下は、女子用の白い制服に身を包んでいる。

僕のいる新入生グループの最前列から、鈴鹿が前方に歩み出る。

鈴鹿が壇上上がり、会場を振り返る。

懐かしい、去年の夏以来の見知った顔が映った。

鈴鹿はそのまま壇上へと向かい、場所を譲った倉橋塾長に代わり、マイクの前に立った。

そして辺りを見渡し――

「初めましてえ、皆さんっ。

倉橋塾長からご紹介に与りました、大連寺鈴鹿です！」

元気のいい、甘ったるい、それで響き渡る声で、高々と宣言した。

鈴鹿がかわいらしく微笑む。

会場のあちこちから歓声があがる。

「あたし、今日はすつごく緊張しちゃって……でも、とても嬉しいです！」

自分と同年代の人たちと陰陽術に取り組むことって、ずっとあたしの夢だったんです。

今日、その夢が叶いました！

クラスメイトの皆さん。それに、諸先輩方。

陰陽術のことなら、あたしでも皆さんに教えて上げられることがあるかもしれません。

ですから、皆さんもどうか、あたしにも色んなことを教えてくださいね」

鈴鹿は長々しいセリフに詰まることなく言つて、最後にもう一度、かわいらしく微笑む。

その瞬間、会場は異常とも思えるほどの喝采に包まれた。

それに応えるように小さく手を振る鈴鹿。

まるでテレビで見る人気アイドルである。

たいしたもんだ——

僕は率直にそう思った。

世渡りが上手だとは思っていたが、まさかここまで演じきるとは……
そういうえば、陰陽庁の広報担当としても活躍しているんだっけ……？

そう思っていたときだった。

それまで会場に手を振りながら眺めていた鈴鹿の視線が、僕の視線と交差した。

止まる視線。 止まる手。

完全に硬直した鈴鹿に会場はなんだなんだと騒ぎ始めた。

僕は人差し指を口元に立て、そのまま何も言わずやり過ごすように促す。

その瞬間、鈴鹿は僕から視線を切り、わずかに狼狽した。

鈴鹿でも狼狽えることがあるんだな。

僕は彼女を見ながらそんなことを考えていた。

しかし、そんな狼狽した姿も一瞬のこと。

次の瞬間、鈴鹿は元の表情に戻り、再び会場を見た。

ただし、先ほどの笑顔とは違い、唇の先を吊り上げた悪い笑顔だ。

そしてその表情のまま再び僕を見る。

ああ、これアカンやつや。

直感的にそう感じた。

鈴鹿はすうっと息を吸い込むと、

「あれー？　そこにいるのは土御門碧くんじゃないですか！」

鈴鹿の視線に誘導された会場の視線が一斉に僕に突き刺さった。

鈴鹿はわざとらしく瞳を潤ませながら、

「嬉しいっ！」

ここに来ればきつとまた会えるって、あたしずつと思ってたんです！

あの日、交わした約束……

あたし、ずつと待っていました。

でも、その約束が叶うことはありませんでした。

でも、それでも、

あたし諦めきれなくて——」

おい、バカ、よせ、やめろ。

涙ぐむ鈴鹿に対して口には出さないが内心では暴言を吐く。

が、そんな内情もむなしく、周りは勝手に僕を追い詰めていく。

会場はどよめき、その異様な雰囲気はピークに達しつつあった。

土御門碧？　誰だ　女を泣かすなんて最低だな　野郎か　汚物は消毒だーヒーハー

……そんな言葉が、あちこちで呟かれる。

そしてその呟きは一つの疑問へと変わる。

あの二人の関係は、と。

そんな疑問を代弁するかのよう、先ほど鈴鹿に壇上を譲った倉橋塾長が、白々しくも三文芝居に打って出た。

「あら？　鈴鹿さん、彼とはお知り合いだったのかしら？」

……この婆さん、俺に恨みでもあるのだろうか。

鈴鹿は、待つてましたといわんばかりに、マイクを握りしめ、

「はいっ」

と、澄み渡った声で、元気よく応えた。

そして、

「あたしの——あたしのたった一人の思い人です！」

鈴鹿の放ったその一言は、僕に終わりを告げるには十分すぎる一撃となった。

かくして僕の塾生生活が幕を開けた。

2—2. 邂逅（前編）

「まさか碧くんのごことで笑わせられるなんて思ってもみなかつたわ」

そう言いだしたのはケラケラ笑っている小母の千鶴さん。

入塾式が終わってすぐに小母さんと合流し雑談中である。

僕はあまり弄られたりすることとは程遠い印象なのでどうにもつぼにハマったようだった。

「……僕もまさか入塾当日にこんなことになるなんて考えてもみなかつたですよ」

こんなこととは塾長や鈴鹿にしてやられたことだ。

最初からこうではこの先どうなることやら、などと今からとても重い気分だ。

そんな僕を見て笑い済んだのか、一息つき、

「は——つ……。」

ごめんごめん、ちよつと笑いすぎたわ。

それで住むところは決まったの？ ほら、ずっと忙しそうにしてたじゃない」

そうなのだ。

僕は入塾を決めてからこの半年、東京を行ったり来たり、地方に飛んだり、ドタバタな毎日を過ごしていた。

そんな状態で入塾後の生活など考える暇もなく、当然住むところなど決まるはずもなく……。

寮なども紹介されたが、僕とは別にもう一人住まなければならないため、これは除外した。

それに陰陽塾と関わりのある施設に身を置くなど、先ほどまでのことを考えるとまさに恐怖でしかない。

「まだ決まっていませんよ。午後から探しに行く予定です。」

ほら、秋乃もいることですから、ちゃんとした物件を二人で見ってから決める予定です」
秋乃……数ヶ月前に闇寺で託された女の子だ。

年の頃、10歳くらいの小さな子で、どうにも懐かれてしまった。

それから僕ともう一人でこの子の面倒を見ているのだが、秋乃の今後の生活のこともあるし、それにこれからは僕も東京に拠点を移すのだ。

「そうよねー。秋乃ちゃんいるものねえ。」

あの子、今月からこつちで学校通うのよね。

そうなるよ、たしかにしつかりとした生活拠点は必要ね」

「今まではホテル暮らしでしたけどさすがにね——」

「私も一緒に行こうか？」

「いえ、千鶴さんも忙しいと思いますし大丈夫ですよ」

「そう？ 碧くんならそのあたりしつかりしているから心配はしてないけど、まあ何かあつたら電話で呼んでちょうだい。」

昼から春虎たちに会って、それから帰るから、夕方まではこっちにいるわ」

「お気遣いありがとうございます。」

「じゃあ何かあつたら電話しますね」

と、話し込んでいたら、どうやら時間がきたようだ。

これからクラスに行き新入生向けの話を聞く。

僕は小母に別れを告げ、一路目的地へ足を向けた。

☆

僕の顔を見ながらヒソヒソと周りから声が聞こえてくる。

僕はゲンナリしながら、しかしあまり気にしても仕方がないと諦めの気分でクラスに入っていく。

既に目立ってしまったためあれだが、これ以上目立ってたまるか、小さな反抗心で部屋の隅の窓際の席へ座った。

すると、一人の女子生徒が僕に向かって歩いてきた。

全ての元凶、大連寺鈴鹿である。

おもむろに僕の隣に座る鈴鹿。

周りがキヤーキヤーと騒ぎ立てる。

「久しぶりね、碧」

「どういうつもりなんだよ……」

僕はため息をつきつつ鈴鹿に問う。

「あんた、結局一度もあたしに会いに来なかったじゃない。

自業自得よ」

決して忘れていたわけではないが、こちらにも事情というものがある。

「それについては、まあ、なんだ。

ごめん——

でも僕にも時間的余裕というか、事情があつて……」

鈴鹿は僕を反眼で見たあと、目尻に涙を浮かべて、

「そんな！ あたし、ずっとあなたのこと待っていたのにつ！」

僕に抱きつきながら、周りに聞こえる声でこんなことを言いはなった。ダメだこいつ、早く何とかしないと。

本気でそう思った。

が、今は完全なアウエイだ。

周りから突き刺さる敵意の目。

耐えられなくなった僕は、

「わかつた！ わかつたからモウヤメテ……」

もうどうにでもなくれ。もはや自暴自棄である。

そんな僕を見て満足する鈴鹿。

「わかればいいのよ。」

そんなことよりも、あんたの術式よ。

今日、これが終わったあとに教えなさいよ」

そう、事の発端は鈴鹿に魔術を見られてしまったことに起因する。

口止めするために魔術を教えると約束したこと。

それを今日まで放置していたことが悪いのだ。

ああ、そうだよ。全て僕が悪いのだ。

「今日は用事が……」

「今度じゃだめか？」

「ダメに決まつてるじゃない。」

「あんた、そんなこと言つてまた逃げるつもりでしょ。」

「今まで半年も音沙汰なかつたんだから。」

「大体あんたの用事つて何よ」

「住むところがまだ決まつていないから家探しをするんだよ」

「はあつ!? あんたバカじゃないの!？」

「あんた今までいったい何してたのよ……」

「いや、ほんと、自分でもそう思うけどさ。」

「時間がなかつたんだよ、ほんとうに」

「……ふーん。」

「まあ、いいわ。じゃあ、あんたのその家探し、あたしも付いていくから」

「いや、だめ……いえ、なんでもないです。ぜひ一緒に来てください……」

「キツつと睨まれて怯む僕。」

「最初から素直にそういえばいいのよバカ。」

「……でも碧に会いたかつたのはウソじゃないんだからね」

「顔を俯けながらそんなことを言う鈴鹿。」

しばらくこの場に静寂が続く。

それを打ち破ったのは講師が入り口から入ってきたときだった。

「ほんと、ごめんな鈴鹿——」

とにかく話はこれが終わってからだ」

「うん」

僕と鈴鹿は話を切り上げて講師の話に耳を傾けた。

☆

「それで、あたしたちは今どこに向かっているのよ」

そう言いだしたのは鈴鹿。

新入生としての義務を果たした僕たちは、同級生の質問攻めの猛攻をやりわり躲しつつ、今は姉さんたちの教室に向かっているといるところだ。

「姉さんたちのクラスだよ。」

忙しくて全然会えてなかったし、顔見せに少しだけ。

それに先ほど会った京子先輩——倉橋家のご令嬢にも遊びに来てって誘われて
てね」

「呆れた——」。家族とも顔会わせてなかったって、どんだけ忙しかったのよ、あんな……。

で、その倉橋家のお嬢様とあなたはどのような関係？」

「どういう関係というほどでもないよ。」

親戚同士で子供のころ一度だけ遊んだことがあって、今日入塾式の前に偶然会って少し話しただけだよ」

「ふーん……」

そうこう話しているうちに、姉さんの教室が見えてきた。

僕は引き戸の扉に手を掛けの中に入る。

辺りを見渡し、見知った容姿をした数人が固まっているグループを見つけた。

僕は鈴鹿を伴って、そのグループに近づき声を掛ける。

「久しぶり——」

「あ、碧っ！」

「あっ、碧くん」

「お、碧じゃん」

「えっ？ 誰？」

「ほう、こいつが噂の……」

姉さん、京子、春虎兄さん、他2名と続き、それぞれの反応を見せる。

「少しだけ顔見せにきたよ」

「もうっ！ 半年も何してたの！」

会うなりいきなり怒られてしまった。

父さんには会っていたが、姉さんとは入れ違いになつたりして、この半年一切会っていないかったのだ。

今までこういうことはなかったのに、怒るのも無理ないのかもしれない。

とりあえず謝っておくか。

「ごめんごめん。東京や地方を飛び回っていたら会いそびれてしまったね」

「まったく……」

素直に謝ったのが功を奏し、これ以上の追求は避けられたようだ。

「——夏目くんと碧くん、半年も会っていなかったんだ？」

「そうなんです。主に僕のせいなんですけど——」

「あれ？ 京子と碧仲いいんだな？ 知り合いか？」

唐突に聞いてくる春虎兄さん。

あなたいつたい何いつてるんですか……う？

「何いつてるんですか春虎兄さん。」

子供のときに京子先輩と遊んだときに春虎兄さんも一緒にいたじやないですか」
「はあっ!?!」

「ええ!?!」

「忘れたんですか? つて、京子先輩も忘れてたんですか!?!」

——ほら、京子先輩がリボン無くしたときに三人で探したじやないですか」

「ああっ!! あの時か!!」

「ええっ!! あの時の男の子が春虎だったのっ!?!」

「二人とも今まで何やってたんですか……」

ダメだこの二人、早く何とかしないと。

二人のボケを聞かされながら、口にはしないがそう思った。

僕が呆れて二人を見ていたら、それまで黙って成り行きを見ていた額にバンダナを巻

いた男から声がかかった。

「へえ——面白いことになってんじやん」

「あなたは——」

「俺は阿刀冬児。お前のことは夏目や春虎から聞いてるぜ」

「これはご丁寧にありがとうございます。」

僕は土御門碧。ご存知と思いますが、夏目兄さんの弟です」

「夏目……兄さん？」

どうやら鈴鹿は、僕が姉さんのことを兄さんと呼んでいることに違和感を覚えたようだ。

僕は会話を被せるようにもう一人の眼鏡をかけたおとなしそうな男に声をかける。

「えつと、そちらの方は？」

「ぼ、ぼくは百枝天馬。夏目君とはクラスメートだよ」

「阿刀先輩と百枝先輩ですね。」

夏目兄さんと春虎兄さんがいつもお世話になっています。

「これからも仲よくしてくださいね」

「い、いえ、とんでもない。お世話になっているのは僕の方で——」

「これは、保護者か何かか……？」

「ちよ、ちよつと碧！ 何言ってるの、もうっ！」

僕の掛け声に付き合つて、それぞれ感想をいう二人。

そしてそれを止めに入る姉さんという構図。

「ごめん姉さん……」

鈴鹿の疑問をかき消すためとはいえ、姉さんを利用したことを内心で謝罪しつつ、それは決して口には出さない。

そうこうしているうちに、冬児の興味は鈴鹿に移ったようだ。

「それで、そちらの嬢ちゃんが噂の——」

「ああ、そうです。ほら、鈴鹿」

「うつ、は、初めまして——大連寺鈴鹿……です」

いきなり話を振られて、入塾式でしたようなことができずに慌てふためいてぎこちな
い対応をしてしまう鈴鹿。

そんな彼女を見て疑問に思った二人。

「なんか前にあつたときと大分印象違うな……」

「そうですね、入塾式の時とも……」

先ほどの衝撃から立ち直った春虎兄さんと、姉さんがそれぞれの感想を言う。

そんな彼らの疑問に答えるようにそれとなくフォローを入れる。

「鈴鹿は少し人見知りなところがあつて、慣れるまで少し時間が必要かも」

「う、うつさいし！」

どうやら鈴鹿特有の条件反射で素が出てしまったようだ。

しかし、周りはそのようなことにはあまり興味はなく、

「そうよ、それ、さっきの衝撃で忘れるところだったわ。」

それで、あなたたち付き合ってるの!？」

みんなが気になっていようであろう疑問を代表して、これまた先ほどまでフリーズしていた京子が聞いてきた。

こればかりは僕が答えるものでもないし、疑問を広めた張本人に答えてもらおう。そう考えた僕は、鈴鹿に話を振る。

「どうなの、鈴鹿？」

「な、なわけねーし——、あつ！」

顔を真っ赤にして否定する鈴鹿。

しかし最後のあつ！っていうのはなんだろう。

僕はすつとぼけるように深く考えないようにして、頭からこの疑問を打ち消した。

「くつくつく、こいつはいいな」

悪い顔をして面白がる冬児の言葉が辺りに響き渡った。

☆

「それで、碧はこれからどうするんだ？」

俺と夏目はこれからおふくろに呼ばれているけど碧も行くか？」

「いえ、千鶴さんとは先ほど会って話をしましたし、それにこれから家探しなんですよ」

「家って……男子寮じゃないのか？」

「男子寮だと都合が悪くて」

「そうなのか。にしても今から家探しか」。

「そんなに簡単に見つかるモノなのか？」

「ええ、知人に頼んでいくつか物件を見繕ってもらっているんです。

今日はその物件を実際にみて決めるだけなんですよ」

「ま、家決まったら教えてくれよ。みんなで遊びに行くから」

「ええ、そのときは皆さん歓迎しますよ。では皆さんまた」

春虎兄さんたちに別れを告げようとしたとき、うしろから声が掛かった。

「ま、まって！ 碧くん、その物件探しあたしも行っちゃだめかな？」

「どういうわけか、京子は家探しに同行したいらしい。

どうせ鈴鹿も同行するし、今更考えるだけ無駄だな。

僕は半ば諦めつつも、鈴鹿と、それに京子にも知って欲しい話があることを思い出し、この状況を前向きに考えながら同行を了承した。

「そうですね——まあ、鈴鹿もいるし、丁度二人にお話しすることもありますので別にかまわないですよ」

「やった——」

何が嬉しいのかわからないが、恐らく京子の想像する状況にはならないだろうと冷静に考える。

頭の中で澄ましたことを考えていると

「それとっ！」

「はい？」

「あたしのこととは先輩はいらないわ！ それに敬語も不要よ——」

え？ いいの？ と、戸惑いながらも、僕にとつてはその方が話しやすいため使わせてもらうことにした。

「——わかりました。いや、わかったよ京子」

そんなやりとりをしながら、僕たちは塾舎の外に向かった。

2—2. 邂逅（後編）

塾舎の外に出たあと、すぐにタクシーを拾う。

想定していたよりも時間を食ったようでも時間的にあまり余裕はない。

女性二人をうしろの席に座らせて僕は助手席に乗り込み、運転手にある場所を指定する。

タクシーでしばらく移動すると、目の前にそびえ立つ大きなビルが出てきた。

そう、スターマイン本社である。

ここで、一緒に物件を見て回る秋乃と待ち合わせをしていた。

僕は支払いを済ませ、ビルの前に立つ。

「あんだ……こんなところに用があるの？」

「ここってあれよね、IT系最大手の会社の……」

「うん。スターマイン社だね」

そう軽口をたたきながら僕は受付に足を向け、そんな僕に続く二人。

疑問でいっぱい二人を半ば無視するように受付に手で挨拶し、二人のためのゲストカードを用意してもらったあとセキュリティゲートを通してもらう。

エレベーターに乗り込み目的地へ向かう。

向かう先は最上階。

それからしばらくすると、どうやら最上階に着いたようだ。

僕たちはエレベーターから降りて、セキュリティのかかった扉を通る。

世話しなく動く従業員を横目に、僕たちは奥にある一室に入った。

「秋乃、スマン。遅くなった」

「あ、碧っ！ 遅いよもう。わたし待ちくたびれ、——っ!!」

あああ、そ、そちらの方々は……っ?」

そういつて秋乃は僕のうしろに回り隠れようとする。

土御門秋乃、僕が数ヶ月前から面倒を見ている眼鏡を掛けた背が小さな女の子である。

闇寺を訪問した際に託されたのである。

それからなんやかんやあった末、土御門の養子として迎え入れた経緯がある。

つまり僕の義妹にあたる。

そんな彼女は、闇寺であまりいい環境にはいなかったようで、極度の対人恐怖、というか人見知りをするのである。

しばらくすれば慣れるのだが、それまでが大変である。

「この二人は僕のお客さんだよ。

ほら秋乃、あいさつしな」

そういうと僕のうしろでもじもじしながら隠れていた秋乃が出てきた。

「ううう……は、はじめまして、土御門秋乃です……」

「うん、よくできました」

僕はそう言つて秋乃の頭をやさしく撫でながら簡単に二人に説明する。

「この子は数ヶ月前にちよつとした縁で土御門家の養子として迎え入れた僕の妹なんだ」

僕の発言に頭を抱える鈴鹿とこめかみに指をあてながら難しい表情をする京子。

「……いろいろと突つ込みたいんだけど、まあいいわ。その子のことから突つ込んで

あげる。ちなみにあたしは大連寺鈴鹿よ、秋乃っち」

「そうね、あたしもいろいろ突つ込みたいところがあるけど、その子のことを聞いてあげるわ。あたしは倉橋京子、秋乃ちゃんよろしくね」

ご丁寧に僕に会わせてくれる二人に応接用の椅子を勧めながら、デスクにある電話で内線を掛け用件を伝えたあと受話器を元の位置に戻した。

二人が椅子に座り、僕と秋乃も対面の椅子に深々と座り話を進めた。

「今言つたように、この子は僕の義理の妹にあたる子だよ。

数ヶ月前にとある閨寺を訪問したときに託されて、それ以来、僕ともう一人面倒を見ている男がいるんだけど、二人で交互に面倒見ている子なんだ。

本当は父さんや小父さん小母さんに預けた方がいいんだらうけど、懐かれちゃつて
「さ」

「ちよつと待つて。」

今の話だとその子と一緒に住んでるように聞こえるんだけど……」

「住んでるよ？」

それが何か問題でもと言わんばかりに二人に言い放つ。

「あ、あんた、こんな小さい子と暮らしていたの!? まさか、家飛び出していた理由つて

ソレ!？」

「碧くん、いくらなんでもそれはないわ……」

む、何か心外なことを言われた気がする。

「——確かに秋乃と一緒に行動していたけど、各地を飛び回っていたのはまた別の理由だよ」

「……一応聞いてあげるわ」

「碧くん、わたしは信じているからね……」

「二人も先ほどから気になっていると思うけど、このスターマイン社がその理由。」

——事の発端は昨年、鈴鹿と会う直前にあった出来事から。

そのとき緊急でここに呼び出されていてね、そこで新部署の立ち上げに関わってくれないかって依頼を受けて、それを引き受けたんだ。

以来、忙しくなって今に至るわけ」

そう言いながら、二人に名刺を渡す。

「はあ？ 何いってんのよ。そもそもなんであんたがこの会社と繋がりが——」

？ 相談役？」

「そうよ、碧くんと何の関係が——相談役兼技術アドバイザー……」

二人とも渡された名刺を見ながら、その中に印字されたとある文字列に気がついたようだ。

「この際だから言うけど、いや、少し前までは一般に公開されていた情報だから別に隠していた訳じゃないけど」

僕は言った。

「僕はこのスターマイン社の創業者にして、現、相談役、それと兼任して先ほど話した新部門の技術アドバイザーをしているんだ」

固まる二人。それもつかの間、騒ぎ立てる二人。それを見てひい、と怯える秋乃。

そんな状況を知ってかしらるか、トントンとノックをして入ってくる専属秘書。

人数分のお茶をテーブルに並べ、頼んでおいた資料を僕に渡して退室していく。何も突っ込まないあたりさすがプロだ、と僕が感心していると、どうやら二人も落ち着きを取り戻したようだ。

出されたお茶で一息つく鈴鹿と京子。
そして、

「——あんたといると、驚かされてばかりだわ……」

「——そうね。でも昔からそうだったし、まあ碧くんらしいわ……」

一応二人とも理解してくれたようで何よりだ。

「それで話を続けるけど——」

僕が忙しかったのはそういう理由から。

今までは僕自身向こうで学校に通っていたから、東京ではホテル暮らししていたけど、陰陽塾に入塾することで活動拠点が東京になったし、秋乃も今月からこっちの学校に通わせる予定でいる。

そうなつてくると、東京にしつかりとした生活拠点が必要なわけで。

それで今日まで東京で住むところが決まっていなかったの、先ほど秘書からもらったこれらの物件を実際に見て決めるつもりなんだ」

僕は専属秘書にもらった資料をばたつかせながら二人に見せる。

二人は首肯することで理解を示す。

「……だから男子寮はダメだったわけね」

「そうよね。さすがに男子寮やホテル暮らしはあり得ないわね」

「二人とも理解が早くて助かります」

僕は二人に謝意を伝えながら、次の話に移る。

「僕の話はこれまで。」

そして、ここからは二人に伝えておかなければならない話があつて」

「そういえば、そんなこと言つてたわね」と、二人は顔を見合わせながら怪訝な表情をす

る。

「姉さんのことで——」

「ああつ！ そう、それ！ あたしも気になつてたの。」

あれ、いったいどういうことよ」

鈴鹿は気がついたようだ。

あの時、塾舎での会話の中で、鈴鹿のふとした疑問を遮つたときの違和感を覚えてい

からだ。

その疑問とは、

「今後あらゆる場面において誤解されないようにしないために、二人には事前知って

もらうけど——

実は土御門夏目は性別を偽って塾生を演じているんだ。

——つまり、実際の性別は男ではなくて女ってこと」

鈴鹿はやっぱりといった表情をし、京子はまだ理解していない顔をしている。

僕は話を続ける。

「土御門家のしきたりで、土御門家の長子は男として振る舞わなければならないというものがあつて、姉さんは塾舎においては男として生活しているんだ」

「あたしも夏目つちに会つたとき、おかしいと思つたのよね。

最初に会つたときは巫女の格好した女の子で、あんたも姉さんって言つてたし。

でもここでは兄さんなんていつてるから、わけわかんなくつて。

でも変なしきたりね。土御門家の長子は男として振る舞うつて、なんなのそれ。

古式ゆかしい……ギヤグ？」

さすがは十二神将の鈴鹿、土御門家のしきたりに対して言いたい放題、物怖じしないところはさすがである。

しかし京子はいまだ理解が及ばないようだ。

「そんな……ウソよ。だって夏目くんは線は細いけど、どう見ても男の子で違和感がない……」

「京子が騙されるのは仕方がないね。」

というのも、姉さんの女性としての陰の気と、北斗……土御門家の竜の式神の陰の気が重なり合つて、男性としての陽の気を作り出して、知らない人が姉さんを見ると、一般人はともかく、見鬼の才に秀でた人ほど騙されてしまうものだから」

「……夏目つちが噂も相まつて男として認識されている分、これつて見た目以上になり強力な乙種よ。」

事情を知らないと普通わかるわけないわ」

鈴鹿が僕の説明に対してフォローしてくれた。

京子は未だに信じられない様子ながらも納得はしたようだった。

「でも、なんであたし達にこの話したのよ？」

「この話をした理由は、二人が姉さんの性別に疑問を持つ可能性があったからだね。」

鈴鹿は今年の夏に姉さんを目撃している。

京子は昔うちにきて姉さんを目撃もしくは事情を聞いていた可能性があった。

ふとしたことで思い出して後々混乱されても面倒だし、不確かなままにしておくより正確な情報を与えたほうが僕も対応しやすいからね」

二人は神妙な面持ちで頷いた。

ただ今の会話で触れられていない部分で気になった鈴鹿が、

「それにしても、なんでそんなしきたりがあるのよ？」

「そうよねえ。夏目くんが男装する意味あるのかしら？」

鈴鹿に続き京子も率直な疑問をぶつけてきた。

二人の疑問はもつともなのだ。

誰が何のためにこのしきたりを作ったのか。

僕個人としての意見はあるが、今の時点でそれは無意味だ。

根拠のない情報を与えて逆に混乱させる危険性がある。

「二人の疑問はわかるけど、そのことについて、はつきりとしたことは何も分かっていないんだ。

悪いけど今の時点では僕も納得させられるだけの回答は持っていないよ」

「そう……まあいいわ。とりあえずあたしたちは夏目っちの男装がバレないように接していればいいのよね？」

「そういうこと。特に同じクラスの京子が協力してくれると助かる」

「わかったわ。できるだけフォローするわ」

鈴鹿と京子、二人の協力を謝意を示す。

きつとこの問題では二人に迷惑を掛けてしまうこともあるだろう。

身内以外に弱みを見せることなく生活してきた僕には、誰かに頼るといふ意識が希薄

だった。

そんな僕が彼女らを頼る選択肢は少し前までは考えられなかったかもしれない。

そう、直感的とでも言うのだろうか。

この二人には僕の弱みをみせてもいい、このときの僕はそう感じていたのだ。



「ここが最後の物件か」

もうあと2時間もすれば日が沈む午後。

僕と鈴鹿、京子に秋乃を加えた4人は、不動産業者に連れられて紹介された物件を1件ずつ見て回っている。

ここが渡された資料に載っていた最後の物件だった。

僕たちは業者に促され数寄屋門を潜り敷地内に入っていく。

辺りを見渡す。

目の前に佇む大きな日本家屋。

右手奥には土蔵もあるようだ。

静寂に包まれた空間。

場所は渋谷に位置するところなのだが、大きな敷地のせいか都内の喧騒とはほど遠いものだった。

実家の屋敷とどちらが大きいだろう、などと、どうでもいいことを考えながら、業者の話の聞き流しつつ、秋乃をどう説得したものかだけを考えていた。

このとき僕の心は既に決まっていたのかもしれない。

だがそんな僕の考えも杞憂に終わった。

なぜならば——

「碧……ここがいいよ!!」

少し興奮気味の秋乃本人がストレートにここを所望したからだ。

それを聞いて顔がほころぶ業者と顔から血の気が引く女二人。

僕が秋乃に「いい物件だな」などと言いながら頭を撫でていると、

「ちよ、ちよつと。秋乃っちあんなこといつてるケド……」

「そ、そ、そ、そうよ。碧くん、さすがにここは辞めたほうがいいわよ」

「なんでさ?」

「だって絶対ここ高いわよ……いくらあんなだつて手が出せるわけ……」

「あたしもそう思うわ。いくら碧くんでもここは高すぎると思うわ」

「そうかなあ？」

——業者さん、ここいくら？」

業者から総費用の書かれた資料を受け取り、価格を見て納得する。

うん、安い、と。

後ろから除いている二人は青ざめた顔で価格を見ていた。

たしかに二人の言うように、価格だけを見たら決して安くはないのだろう。

だが、しかし、僕も秋乃も気に入った物件だ。

いま、この価格ですぐに買えるのならば、それは決して高いモノではなく、むしろ安いモノなのだ。

「よし、買った」

そう宣言した。

歓喜をあげすぐに契約書を差し出す業者。

それにサインをする僕。

喜ぶ秋乃。

呆然とする鈴鹿と京子。

それぞれがそれぞれの反応を示す中、ここに契約は成った。

これよりこの屋敷は僕のモノになった。

2—3. 魔術

秋乃を伴い居間の片隅に腰を下ろしながらこう考えた。

片方の約束を守れば角が立つ。

もう片方の情に棹さおされれば流される。

意地を通せば窮屈だ。

とにかく女性の心は複雑だ。

「あんだ、そんな隅っこで黄昏れていないで、この状況を、く、このつ——なんと、か、しなさいよっ！」

そう叫んでいるのは大連寺鈴鹿。

彼女は今、倉橋京子とじゃれ合っている最中で、僕の目の前ではなかなかかかましい光景が繰り広げられていた。

事の発端は僕の用事が終わり、まだ何も無い居間で休んでいたときのこと。

鈴鹿がああ得体の知れない術式について教えて欲しいと言ってきたことからだ。

当然、事情を知らない京子は、話の内容が見えないまでも、鈴鹿が知らない術式につ

いて興味を示し、この話に食いついてきた。

僕としては鈴鹿以外の第三者のいるこの場で教えることに抵抗があり、渋っていたのだが――

行動を起こしたのは京子だった。

「ほらあつ。何の話か教えてくれてもいいじゃない。女同士なんだし」

「ちよっ!? いい加減にしろよ、テメー!? どこ触りながら言つてんだよ!」

とても本日会つたばかりとは思えないほど仲の良い二人である。

しかも京子はずいぶんと慣れた手つきで鈴鹿を圧倒していた。

その圧倒していた京子は鈴鹿が口を割らないことから、少し話題を変えてきたようだ。

「ねえ? 「十二神将」さんを相手に恐縮なだけどさ。

やつぱり年下の後輩相手に敬語を使うのもむず痒いし、あたしも碧くんみたいに、名前前で呼んじやつてもいいかな?」

「知らねーよ、んなこと! 勝手にしろよ。だから、ちよ、やめっ!」

「ん。じゃあ、そうさせてもらうわ。鈴鹿ちゃん」

「また「ちゃん」!?!」

どうやら以前にも「ちゃん」と呼ばれたことがあるようだ。

はてさて、誰が呼んだのだろうか。

「いいじゃない、せっかくこんな風に仲よくなれたんだし」

「ぎげんな！ 仲よくなんなかってねーっの！ 身の程を知れよ！」

「そんなこと言ったらだめよ。 仲よくなるのに、身の程なんて関係ないもの。 ね、鈴

鹿ちゃん」

「ぐわー！ 何こいつムカツク！ 碧、早くこいつ、なんとかしろよっ！」

鈴鹿が絶叫しながら僕に助けを求めてくる。

が——この状況、僕に何ができるといふのか。

そんな僕には、この状況を冷静に分析するくらいしかできないだろう。

国家一級陰陽師として研究に追われていおり、研究室に引きこもっていた鈴鹿。

対して周りとうまくコミュニケーションを取りながら陰陽塾に通っていた京子。

どちらが有利かなのかはいうまでもない——

などと、本当にどうでもいいことを考えていたら、どうやら状況は次の局面を迎えた

ようだ。

「てーか、マジ、揉むのやめろ！ やめてよお！」

「んもうっ。 女同士なんだし、いいでしょお、いまさら？」

「女同士とかマジサイアク過ぎる！ 同じ趣味の他の女捕まえて、そっちで楽しめよ！」

「あら、酷い。あたし別に、そんな趣味ないわよ？　ただ、同姓なのに恥ずかしがる意味とか、あんまりわかんなくて——」

「黙れこの乳牛！」

「ちよつと、鈴鹿ちゃん？　あたし、そんな失礼なこと言われたの初めてだわ」

「誰も言わねーなら、またあたしが言つてやるよ、この乳牛がつ！」

「もうっ！　あたしなんか、どうつてことないわよ。　クラスの子にはあたしより大きい子いるもの」

「テツ、テメツ……!?　その発言自体が認めてるじゃんっ！　さらつと自分で大きいっていつてんじゃん!!」

「そんなこと鈴鹿ちゃんはまだ気にしなくても大丈夫よ。　まだまだこれから大っきくなるわよ」

「何その上から目線!?　マジ、ムカツクっ!!」

「いやあ、でも嬉しいな。　まさかあの「神童」と、こんな風にお喋りできるなんて」

「……あれ？　あたし何でこんなことしてたんだけ……？」

京子とじゃれ合っているうちに、なんでこんな状態になったのか忘れてしまったようだ。

「……僕が鈴鹿に術式を教えるという話をしていたんじゃないのか？」

僕の言葉にハツつと思ひ出した表情をする鈴鹿。そして一瞬のうちに京子の拘束から逃げ出す。

どうやら京子とじやれている間に記憶が飛んでたようだ。

「そうだよ、術式だよ。碧っ！ そんなところで見てないで、いい加減この女に何か言つてよっ！」

涙目をしながら訴えるように言つてきた。

そんな彼女を、すこし可哀想に思えてきて僕もこれまで以上に真剣に考える。

だが――

鈴鹿の約束を履行するといまの状況に陥り、

京子に教えるのも躊躇われる。

かといつて、僕が約束を反故にするのもどうかと思う。

この状況で彼女らを納得させることが果たして僕に出来るのだろうか。

このようなことを考えていたら、僕はもうどうでもよくなつてきたしまった。

つまり行き着いた答えは、

「はあ……、鈴鹿がいいなら京子にも教えるよ」

結局はいつものように状況に流されてしまうのだ。

「ありがとう、碧くんっ！」

と、また鈴鹿に抱きつく京子。

「またっ!?……………いつとくけど……………マジにつ、ガチにいつとくけどっ! あたし、そっちの趣味ないからねっ!」

「やだもー。 あたしだつてそんな趣味ないわよ。 あたしふつーに、男の子が好きだもん」

「だから、揉みながら言うなっ! はーなーせー!! やだー、こいつ、もー、やだー」
「おほほ、逃がさないわよ、鈴鹿ちゃん? それで? いいのよね?」

「わ、わかったから! だから、抱きつくな! 触んな! なんだよその手つき! やっ、だめ……………、ああああ、それ犯罪だろっ! そこっ、やー、もー!」

「ありがとっ、鈴鹿ちゃん。 やん。 かわいいっ!」
「やああああー!」

見ているこつちが恥ずかしくなる。

そんな現場を一瞬たりとも見逃すことなくバツチリと網膜に焼き付けながら、さて、どうしたものかと、この後のことについて考える。

「……………」

「……………やだ、ちよつと、恥ずかしいからそんなに見ないでよ……………」

今までさんさん鈴鹿と恥ずかしいことをしておきながらそんなことを言う京子。

どうやら考え事をしていたらガン見していたようだ。

……まあいい、二人が魔術を知ったあとにどういう選択をするにせよ僕が合わせれば済むことだ。

たいした問題ではない。

僕は秋乃の頭を撫でながら方針を決め、

「二人とも、その辺で、そろそろいいか？」

意識を切り替え、僕は二人に話しかけた。



「……僕としては二人にはあまり関わって欲しくないんだけどな——」

「碧、あたしも冗談で言ってるつもりはないよ」

「あたしだって——」

京子が興味を持っているのは興味本位からだ。

鈴鹿もそれと大差はないのだが、まだ実際に魔術を見て言ってきた分マシであ

る。

「……京子はともかく、鈴鹿がそれなりに本気なのは認める。

だけど、それでもだよ。

——はあ……まあ、二人とも、やるやらないは話を聞いてから決めてくれ。それからでも遅くはないだろうから」

僕はおもむろに立ち上がり、居間から外へ繋がる窓を開けた。

心地よい夜風が外から吹き込む。

「鈴鹿に見せた術式は魔弾というもの」

ぱちんつ、と指を鳴らし、魔術刻印を起動する。

右腕が疼く。

僕はその疼きを無視するように、自己の変革を告げる暗示を紡いだ。

「——行使、一層、直流数紋ディレクト」

何度も行ってきた慣れ親しんだ行為。

魔術刻印を術式再現するための紋様に変化させ、自身の魔術回路に接続する。

ゆつくりと目標に向かつて、砲身となった右腕を向け、そして、

撃て——

そう紡いだ瞬間、目標に向かって青い光が奔った。

数トンに相当する衝撃が、横幅が一メートルはあろう庭石を容赦なく砕く。

そして止まることのない青い閃光は周りの土もろとも呑み込んで土埃の中へと消えていった。

事が終わり右腕を下ろす。

振り返り、そして、

「これが僕の術式——魔術だよ」

居間の中央で啞然とする二人に、僕はこう宣言した。

☆

「とまあ、実演してみたわけだけど——」

「だーかーらー、あたし、あんな術式知らないんだって！」

「碧くんっ！ なんなの今の!?!」

「何から話したのか……」

「そうだな、まずこの術式は魔術と呼ばれるモノだよ」

「はあ？ 魔術？ 何、そのオカルトじみたものは」

「何いってんだ。陰陽術だって一般人からしたら十分オカルト、ミステリーじゃないか」

「なっ——」

土御門夜光が日本にあるオカルトや呪術を統括し実践的に使えるようにした現代陰陽術を学んできた陰陽師にとって、オカルト呼ばわりされるのは心外なのだ。

だが一般人からするなら陰陽術も魔術も不思議な現象を起こすよくわからないものだ。

事実は事実である。

そしてこれから話す魔術とはその陰陽術とは対極にあるものなのだ。

鈴鹿たちがこれから足を踏み入れる領域とはそういうところだ。

ごほんとか咳払いし、気を取り直して話を続ける。

「オカルト、ミステリー、まあ日本語で言うところの神秘という意味の M y s t ・ r e という言葉がある」

僕は鞆から取り出したノートから一枚破いて、そこにいま言った言葉の綴りを書いて二人に見せる。

「これはギリシャ語で閉ざすって意味なんだ。

閉鎖とか隠匿、自己完結を指す言葉。

神秘というのは神秘であるから価値があるんだ。

そう——魔術の本質は隠すこと。

これは公にしている陰陽術と決定的に違う。

そして正体の明かされた魔術というのは、いかなる方法を使つて再現したとしても神秘には成り得ない。

ただの手法に成り下がったものに意味はない。

そうなると、とたんに魔術は弱くなるんだ。

そうだな……例えば鈴鹿だけが火界かかいしゅ咒を使える場合と、鈴鹿と京子、二人が火界咒使えるのでは、後者の場合、その火界咒の価値というものは半分になる。

神秘と言う意味でね。

これは何も魔術に限らず、この世のありとあらゆることに共通することだと思うよ、僕は」

「……その神秘をあたしに、あたしたちに見せてもよかつたの?」

申し訳なさそうに鈴鹿が聞いてくる。

「鈴鹿に見られたあのときは陰陽術で対応できる術がなかつたから仕方がない。

それに今いったように正体が明かされたら問題があるけど、見られただけなら問題ないよ。

なぜなら僕以外に魔術を知らないのだから」

「じゃあ、あたしたちに教える気になったのは？」

「……ただの気まぐれ。かな。」

まあ、二人とも誰かに言いふらすようなこともしないと思うから大丈夫だろ？」

本当は二人の暴れる姿を見ていていたら、めんどくさくなつたなんて言えない……。

ただ、念のため釘は刺しておく。

が、僕が教えない限り、再現性がないためその心配はないだろう。

「あの、あたしからもいいかな？」

その隠すのが、魔術だっけ？ その魔術の本質なら、碧くんは自分しか知らない魔術

をこの先ずっと隠し通すつもりだったの？

それともあたしたち以外にも魔術を知っている人が既にいるの？」

いままで静かだった京子が聞いてきた。

「もちろん二人以外にも僕の魔術を知っている人はいるよ」

二人はその言葉にピクリと反応を見せた。

なんだ？

かまわず続ける。

「父さん、姉さん、それに小父、小母。それに、ここにいる秋乃の5人。」

そして魔術のことを知ってはいるけど、使うことはできないよ」

同時に安堵のため息をつく二人。

「いったい何なんだ？」

気にはなるが、かまわず続ける。

「ただ、京子のいうように僕は魔術を誰にも教えるつもりはなかったよ。

二人のことがなければ打ち明けるのは自分の子供に自分の魔術を託すときくらいだったと思うよ」

唐突に顔を赤くする二人。

何が彼女らをそうするのか分からないが、表情がころころ変わり面白い状況である。

しばらくして落ち着いたのか京子が聞いてきた。

「でも、変なことするのね。」

陰陽術ならむしろ広く使ってもらって、みんなの役に立てるようにするのに。

……誰にも知られる事なく識って、誰の役にも立たない。

これに何の意味があるのかしら」

広く使ってもらってみんなの役に立つ、か。

根が純粹な京子ならではの意見。

実にかわいらしい考えだ。

僕は苦笑いをしながら京子の問いに答える。

「意味を問われたら、無い、が回答になるよ。」

ただ目的はあるんだ。

魔術の最終的な目的は「根源の渦」への到達。

根源の渦というのは、あらゆる現象の源流。

全てはそこから生まれ、そして、始まりがあれば終わりも自ずと弾き出される。

ここは究極の知識と呼ばれるところなんだ。

全てがそこにあるのに、究極なんて言葉で結末を決めているからどうかと思うけど、

一番わかりやすい呼び方だからこう呼んでる」

二人は僕の話の静かに聞いている。

僕は秋乃の頭を撫でながら一息つき、再び話を続ける。

「もともと世界にあるオカルトとして噂される魔術系統は、この渦から流れている支流の一つに過ぎない。」

世界中に類似した伝承や神話があるのはそのためだよ。

大元は同じもので、それに色を付けたのは、それを汲み取った人達。

先ほど見せた数秘術、それ以外にも西洋占星術、錬金術、カバラ、ルーン、そして陰

陽術の祖の一つでもある仙術……

数えられない数の魔術だけど、元が同じだからこそ最終的には同じ目的に行き着くようになる。

そして想像してしまふんだ。

そこにあるモノが何かを。

魔術の最終的な目的は真理への到達に他ならない。

純粹に真理というものがどんなカタチをしているのかを知りたがり、そこに人間的な感情などは必要ない。

誰かに認められたい、誰かの役に立ちたい、そんなモノとは無縁で、永遠に報われることのない者。

世界はこれを魔術師と呼んだ。

そして僕はそれに習って、行動を同じくしているに過ぎない。

だから今回二人に教えようと思ったのも本当にただの気まぐれなんだ」

淡々と二人を見据えながら僕は言った。

二人は難しい表情をしたままだ。

そして鈴鹿が口を開いた。

「……いろいろ分らないことだらけなんだけど。

一番分らないのは、そう——

碧はなんで魔術なんてものを知っているのよ？」

今やオカルトとしてのみしか語られない魔術をどうして僕だけが知っているのか。

鈴鹿が口にしたのは当然の疑問だ。

そんな鈴鹿の疑問に僕は肩をすくめて、

「それは根源の渦に至ったからさ。」

僕が5歳の頃、偶然、根源に触れた。

そして識った。

僕が魔術を知っているのはその恩恵だよ」

「なっ——！」

驚愕の表情をする二人。

そんな二人の反応が予想できた僕は苦笑しながら話を続ける。

「だから僕は根源の正体を知っている。

でもそれは僕だけだ。

これから先、何十、何百年かあとに、僕のように偶然、根源に至る人間が出てくるか

もしれないけどね。

それと昔の人たちの中には魔術によって根源に至った人たちもいるんだと思う。

でもそれは古い話。

既にこの時代この世界では、魔術は風化して失われているから、これから魔術を知ったところで、根源に至ることはありえない。

「だから永遠に辿り着けない場所へ行くことが目的の魔術を知ること自体に意味はないんだ」

静まる空間。

肩をすくめて苦笑しながら話しに付け足す。

「ただ、魔術の目的に意味はないのだけれど、結局はそれを使う人の目的が重要になるんだ。」

特にこの世界においては。

二人が魔術を知ってそれをどう生かすのか、それは二人の使い方次第ってことだね」
その話を聞いて、黙ったままだった鈴鹿がそれを聞きたかったと言わんばかりに表情が晴れた。

「なーんだ、じゃあ、あたしたちの目的次第でその在り方は様々ってことね」
「ま、そういうことだね。」

ただ脅すつもりはないけど、魔術は常に死と隣り合わせなんだ。
使うだけで痛みを伴うし、失敗すれば死にもする。

人の常識とはかけ離れた神秘を扱うためには、それだけのリスクを伴っていることは

覚えておいて欲しい」

僕の長い話を聞き終え、それまで静かに聞いていた京子は「えっ!? 死ぬことがあるの!?!」などと騒ぎ出す始末である。

「ここまでの話を聞いて、それでも魔術を覚えたいならこの場に残ってくれ」
僕は二人の目を見ながら静かに言った。

☆

結局二人とも残ったのだが……

鈴鹿はともかく、京子は大丈夫なのか？

僕の心配をよそに残った二人。

ため息をつきつつ、僕は話を続けた。

「じゃあ、まずは簡単な話から。

魔術を使うのには魔力と呼ばれるものが必要なんだ。

これは鈴鹿と京子も身近に感じているものだからすぐ感じると思う」

「身近なものって何？」

「——あつ、もしかして靈氣のこと？」

「正解だよ、京子。」

魔力っていうのは魔術を発動させられるものなら、それら全て魔力と言い換えてもいいよ。

靈気はその代表格」

「ふくん。なんか陰陽術と似ているのね」

「それはそうさ。」

陰陽術も元々は魔術から派生したものなんだ。

動力が同じでも不思議じゃないだろ？」

「それって、さつき碧くんが言ってた、仙術もそれに含まれるのかしら？」

「そうだね。」

ただ夜光が作った帝式陰陽術には魔術から細分化した、より汎用的に洗練された術式が多いんだ。

その仙術にしてもオリジナルに改変を加えたものなんだよ。

まあ、そこが夜光が天才と言われる所以なんだろうけど……。

——少し話が逸れたけど、その魔力には二つに分類される。

一つは大源^{マナ}、もう一つは小源^{オド}。

大源は世界に満ちた魔力。

これは代価を用意して取引する魔術形式。

僕が見せた数秘術で、魔方陣を見たと思うけど、そういう外部から魔力を取り込んで行使するために使うんだ。

ただこういうのは知識がないと出来ないから、まずは二人には小源を使った魔術を教える。

小源は個人が生成した魔力。

例えばそうだな……」

僕はいったん話を途中で区切り、先ほど使った *Myst・re* と書かれた紙を手にした。

そして左手で紙の下側を持ち、二人に見せつけた。

そして二人と僕を挟んだ紙の裏側から余っている右手で直線のある文字を書いた。

すると、突然紙は燃えだした。

紙の上部からゆつくりと燃えだし、やがて紙を支えている左手に差し掛かろうとしたとき、僕は紙から手を離し、そして、

紙は灰も残らずにこの世から消滅した。

「……………」

二人は声を出すこともなく黙って事の成り行きを見ていた。だが表情はさえない。

鈴鹿はこめかみに指をあてながら、

「………なんで急に紙が燃えだすのよ」

一方、京子は、

「火界咒……じゃないわよね……？」

まるで信じられないものでも見たような顔をしながら言ってきた。

「陰陽術は真言そのものに意味があつてその効果を成す。

だけど魔術にそんなものは必要ない。

なぜなら魔術にとつて詠唱……陰陽術で言うところの真言は、その術者に対する自己

暗示に過ぎないんだ。

だから魔術を発現させることが出来るのなら、極端な話、詠唱なんて必要ない。

詠唱は自己の体に刻み込んだ魔術を発現させるためのモノで、その内容は使い手によつて千差万別。

その魔術を指す具体的なものさえ含まれていればいいんだ。

ただ、自己暗示といったように、自分自身に掛かる暗示が強力であればあるほど、自

分自身から引き出す能力も大きいのは事実。

だから詠唱を長くして意味づけする分だけ威力は大きくもなる」

「なんだか魔術つてずいぶん曖昧なモノなのね。自己暗示だなんて」

「そうよねえ。ちよつと抽象的すぎてわかりづらいかも……」

「じゃあ、具体的にどう使うかというところの説明をしようか。」

先ほど言ったように、小源は術者個人が作る魔力で、これを使った魔術を教えるわけだけど、この魔力を生成する機能を魔術回路というんだ。

この魔術回路は疑似神経とも呼ばれたりするモノで、存在する人と存在しない人がいるんだけど——」

「まさか、あたしたちには存在しないなんてことはないわよね!？」

「言っただろ? 魔力は霊気だつて。」

普段、陰陽術を使っている二人にはあるんだ。

その魔術回路を意識したことがないだけで二人には存在する。

ただその魔術回路を意識させるには——」

「させるには……」

ゴクリ、と息を呑む二人。

そして、

「いや、今日はここまでにしよう」

ズコーッと盛大に前のめりに床に突っ伏す二人。

「あ、あんたねえ……」

「……碧くん、ここまで話しておいてそれは無いわ」

赤くなつた額を抑えながらそれぞれの感想を言う。

「悪い悪い。」

ただもう夜も遅いし、それに僕にも準備がある。

それにそれをやると、恐らく二人とも二、三週間は体がだるくて身動き取れなくなるハズだから」

「そんなに!？」

「だからまた明日か、別に予定を立ててやった方がいいだろ」

鈴鹿と京子はしばらく考え込むような仕草を取り、

「ねえ、碧。明日塾が終わったらあたしに付き合ってくれない?」

「あたしも、明日のお昼に付き合つて欲しいな」

二人同時にお願いをしてきた。

僕は特に気にせず軽い気持ちで了承をしてしまったのだが、それが後に騒動に巻き込まれることになることとは、この時の僕はまだ知らない。

2—4. 陰陽庁（前編）

「……それで何で僕はお二人と一緒に食事をしているのでしょうか？」

京子から、今日の昼に付き合つて欲しいと言われたのが、昨夜のことだった。

僕は約束通り昼に京子のクラスへ行き、京子と合流したのだが……

そのあと京子に連れられてきたのがこの塾長室だった。

そして促されるままに席に着き、塾長と京子、そして対面にいる僕を挟んだテーブルに出された重箱を三人でつついているのだが、

「あら、せつかく京子さんが殿方を連れてきたというのに、つれないことを言うのね」

「ごめん、碧くん。迷惑だった……かな？」

からかうような悪い表情の塾長としゅんとした表情の京子。

「いや、まあ、迷惑じゃないけど……」

塾長はさておき、京子よ。

その言い方は卑怯だ。

そんなことを言われたら何も言えないじゃないか。

……いや、もうよそう。

深く考えるだけ無駄だ。

だいたいこの場は食事をしているだけに過ぎない。

これはごくごく普通のありふれた行為だ。

他意はない……はずだ。

それならば、と僕は話題を変えてみた。

「それにしても、このお弁当おいしいですね。」

倉橋家が雇っている料理人が作ったんですか？」

「え!? おいしいって本当!？」

うれしいなあ。碧くんに褒められちゃった」

キヤツキヤと顔を赤くして喜ぶ京子。

「あらあら、まあまあ。」

よかったですね京子さん。

碧さん、このお弁当は京子さんの手作りなんですよ」

ご丁寧にも、作り手が誰なのかを教えてくださいますよ。

どうやら地雷を踏んだようだ。

あまり塾長から弄られるようなネタを自分から提供するようなことはしたくなかつ

たのだが……

だが、まあいい。

相手は塾長なのだ。

最初からこうなることは想定済みだ。

かといって何か対策を講じているかというところというわけではないのだが――

まあ、慌てるそぶり見せたら塾長の思うつぼだ。

ここは冷静を装って、

「……へえ。これは意外だな。」

京子はお嬢様だからこういうの苦手なのかと思つてたよ」

「あら。碧くん、それは偏見だわ。」

お嬢様だからつて、家事ができないわけではないわよ」

「そうですよ。碧さん。」

こう見えて京子さんは小さい頃から私がしつかりと育ててきましたからね」

「塾長がそう言うことを言うのは少し怖いですね……」

「……お祖母様つたら、あたしが子供のころから何かをサボると、呪術を使つてお仕置きしてきたのよ。」

だからいろいろな習い事とか真面目にするしかなかったのよ……」

「つまり私の教育のおかげで、京子さんは碧さんから褒められることができたのですね」
「お祖母様の教育に歪まずやってきた、あたしの健気さの賜です」

精一杯抵抗の意思を見せる京子。

そんな京子の抵抗をまるでなかったかのように流し、
ところで、と塾長。

「あなたたち、昨日会ったばかりなのに仲がよろしいのね。

もしかして、お付き合いしているのですか？」

「ぶっ」

京子が思わず吹き出した。

「あら、どうしたの？ はしたない」

確かに食事中に吹き出すのは良くないと思う。

これには塾長に同意せざるを得ない。

すまん京子。

「お、お祖母様が急に変なこと言うからでしょ!？」

「変なこととはなんですか。大切なことですよ」

塾長は真面目な顔をして顔で言った。

「一人の女性として、男性とのお付き合いを経験するのは、とても重要な事よ。」

ましてや、京子さん。あなたは倉橋家の娘なのですからね。

妙な輩に騙されないうよう、私は京子さんがどのような殿方とお付き合っているのか知っておく必要があります」

「それはつ……そ、そうかもしれないですけど……」

「でしよう？　——それで、どうなの？」

碧さんとお付き合っているの？」

「い、いや、その、あの……」

「確かに碧さんの土御門という家格は申し分ありませんし、既に資格をとっていることから本人の陰陽師としての資質も問題ありません。」

それに私自身、碧さんの人柄も気に入っているんですよ」

塾長はこのように前置きしたあとこうも言った。

「碧さん、あなた大連寺鈴鹿さんとお付き合っているのではなかったのですか？」

——二股はいけませんよ。

京子さんの祖母として、これをそのまま見過ごすわけにはまいりません」

二股って、おいおい。

まるで僕が悪者みたいじゃないか。

いや、確かに何も言わない僕が悪いのかもしれないが……。

うーむ。 どうしたもののか。

昨日といい、今日といい、僕の知らないところで話がどんどん進んでるところが怖いのだが。

とにかく今の流れはまずい。

脳内でいろいろ考えながら弁明しようとした瞬間、

「ち、違います。 お、お付き合いだなんて……。」

碧くんとは小さいころ一度お会いしたことがあつて、昨日久しぶりに再会したことがきっかけで親しくしているだけです」

「あら？ 京子さん、碧さんと小さい頃に会ったことがあるのですか？」

「え、ええ。 土御門の屋敷に連れられていったときに一緒に遊んだことが——」

「あらまあ!! それで運命的な再会を果たしたと。」

でしたら尚更——」

「だから、ち、違いますっ!」

「顔を真っ赤にしながら言ったところで説得力ありませんよ。」

それで、本当のところはどうなの? どこまでしたの?」

「つ——どとどと、どこまでつて……」

ききき、き、昨日の今日で、ど、どこまでもなにも——

てか、何を言わせる気ですか!?! な、何もしていません! するわけないでしょ!?!」京子は半ばパニックになりながらも顔を真っ赤にしながら否定した。

そんな京子の言葉を聞いた塾長はやや残念そうな顔をし、

「でも、残念ね」

「え?」

「倉橋の女としては本当に残念だね。」

碧さんほどの有望株は陰陽塾、いいえ、陰陽界全体を見てもそうそう見つかるものでもないでしょ。

そんな彼をみすみす鈴鹿さんに渡してしまうのだから、これは本当に残念だね」

「っ——!」

「でも二股されるよりはマシかもしれませんね。」

「——ただ、私としては大切な孫娘が選んだ殿方なら応援したい気持ちもあったのですが。」

「どうやら気のせいだったようで、杞憂でしたね。」

「そういうことでしたら今朝の話もなかった——」

「さすが長く一緒にいただけのことはある。」

京子がいいように振り回される様を見ながら僕は感嘆とじていた。

そして塾長のこの言葉が京子の琴線に触れたのか、

「——好き……」

「あら？」

「ええ、ええ、そうです！　あたしは碧くん、土御門碧くんが好きです！

あの日あたしの大事なりボンを探してくれた碧くんと昨日偶然再会したときには運命を感じたわ!!

そんな彼のこと、好きで、好きで、昨日は眠れなくらい碧くんの事ばかり考えていました!!」

半ばヤケクソになりながら、目は涙目になりながら言った。

それを聞いた塾長は満足げな表情をし、

「京子さんが、そこまで、そこまで、碧さんのことを思っているのなら、まあ、いいでしょう。」

今朝の件、京子さんの好きなようにしなさい」

ん？　急に話の流れが変わったぞ……。

僕が好きとかそういう下世話な話じゃなかったのか？

「え!!?　本当？　お祖母様！」

「かわいい孫娘の恋愛ですもの。」

応援することはあつても、反対する理由はありませんよ」

先ほどまでとは打つて変わりやさしげな表情で京子に語りかける。

塾長は「ただし」と付け加え、

「定期的に連絡はするように。」

いくら私が応援すると言つても、あなたはまだ未成年なんですからね」

だめだ、話がまったく見えない……。

そんな僕に対して塾長はこちらを見て「それと」とも付け加えた。

「碧さん、京子さんを泣かすようなことがあれば——わかっていますね？」

まるで有無を言わせないような塾長の言葉。

先ほどの優しげな表情はどこへ行ったのか。

僕に向けた塾長の表情はまさに不動明王だった。

これはもう弁明とかそういう状況ではなくなつたな。

それが僕の回答だった。

一言「はい……。」と。

☆

食事も終え塾長室をあとにする僕と京子。

一方は解せない表情で、もう一方は満足顔だ。

京子からストレートに好意を示されたのも束の間、塾長と京子の謎会話である。

その会話の事について、恐らく当事者である僕は、改めて考えてみるも、やはり身に覚えが無く。

結局よくわかっていない僕は京子にこう質問した。

「あのさ、塾長との会話がまだ理解できていないんだけど、今朝の話とか定期的に連絡とか、一体何の話だったの？」

「えっ!? あ、あー、アレね……」

問われたことに対し慌てて、何かを隠すように言葉を濁す京子。

しかし何も考えていなかったのか結局白状した。

「…………ごめんなさい。」

お祖母様には碧くんの家にしばらく泊まるって伝えたの……。

ほ、ほらっ、魔術を使えるまで二、三週間くらい動けなくなるって話だったじゃない

?

それでお祖母様に魔術の部分はぼかしてお話ししたら同棲って勘違いしちゃって

……」

「そういう理由か……」

僕は魔術回路を意識させるためにあることをする予定だ。

それをするとな京子の言うようにしばらく身動きが取れなくなるのも事実。

でも、だからといって、まさか押し掛けてくるとは……。

「で、でも、碧くんを好きな気持ちは本当なんだからねっ!!」

「ねっ!!」って言われても……なあ……。

嬉しいことは嬉しいのだが……。

いかんせん、僕はこういう事には疎いのだ。

「……京子からそういうことを言われるのは素直に嬉しいんだけど——」

「迷惑……かな……?」

「いや、そんなことはないんだけど……なんていうか……」

「なんていうか……?」

「そういう好意を持たれたのが初めてで、どう反応していいのかわからないんだ」

「え! うそっ!?!」

「いや、ホントに……。」

だっつてうちの田舎、周りに同年代の異性すら居なかったから、そういう接点無かつた

し……」

「でも、鈴鹿ちゃんとか……」

「あれは面白がつているだけだろ？」

「……そんなことは無いと思うけどなあ……」

「え？」

「う、ううん、なんでもない！」

「でも、そうねえ……」

京子は少し考えるような仕草をしながらこちらに向き直りとびきりの笑顔。

僕の目を正面から見つめながらこう言ってきた。

「あたしとしては素直に喜んでくれると嬉しいなあ」

真剣でいて、やさしくも、でも期待する気持ちが入り交じった、恋する少女の目。

僕はその笑顔に僕は見とれていたのかもしれない。

まるで魅了の魔眼のような強制。

正常な判断が出来なくなった僕は「そうか、そうだな……」と呟いたあと、

「ありがとう、京子」

そう言いながら京子の手を握り、その場を去っていった。

——という、一部始終を塾生に見られていた。

人の噂というものはすぐ広まるらしく、まもなく塾舎内に知れ渡ることとなった。鈴鹿と京子、二人を僕が二股しているという噂が。

以降、僕は肩身を狭くして塾舎に通うこととなるのだが、それはまた別の話。

2—4. 陰陽庁（後編）

「それじゃあ、碧、約束通り付き合ってもらおうよ」

そう切り出したのは鈴鹿だ。

僕と鈴鹿、京子の3人は、講義も終わったため合流したのち塾舎を出て屋敷へ戻る途中だった。

「ああ。それはかまわないけど、どこに行くつもりなんだ？」

「陰陽庁」

「は？」

「だから陰陽庁だって」

「……」

「鈴鹿ちゃん、いったい陰陽庁にどういう用事があるの？」

「あたし、十二神将じゃん？」

人事権も長官付なんだよね。特殊だっていうのはあたしが塾舎に通っている時点で分かっていると思うんだけどさ。

それで住む場所も勝手に移すことができないわけ。

「だから——」

「魔術を習うためにうちに移住するから説得に付き合えて話か」

「わかつてんじゃん」

「……昼間にも似たようなことがあつたしな……」

「どういふことよ碧？」

実は、と、昼間の一件で京子が僕の屋敷にしばらく住むことになった経緯を説明する。

「つまりキョーコも碧の屋敷に……」

「そうなのっ！ 鈴鹿ちゃんよろしくねっ！」

「—— だから、抱きつくなあー!!」

と、鈴鹿に抱きつく京子と嫌がる鈴鹿。

本当に仲がいいよなこの二人は。

まあ二人がうちにくるのはこの際些細なことだ。

だが問題なのはそれを実現する過程。

京子は昼に解決したが、鈴鹿のは少々厄介である。

なぜならば——

「一人も二人も同じだ。 鈴鹿がうちにくるのもこの際もういい。

それはいいが——

「ただどその説得する相手って長官なんだよな？　長官ってたしか——」

「そう、キョーコの父親。　倉橋源司だよ」

倉橋源司……陰陽庁長官にして祓魔局局長を務める陰陽師のエリート中のエリート、陰陽界のトップに君臨する人物だ。

双角会……テロ集団の巣窟になっている陰陽庁でトップに君臨しているのだ。

先の霊災テロだってこの人物が囁んでいる可能性は十分にある。

それに昨年夏の事件だって……。

そんな人物が塾長のように情に訴えてどうにかなるとも思えない。

つまり鈴鹿の移住の許可を取り付けるのは難しいと言わざるを得ない。

——いや、まてよ……？

交渉材料として霊災テロのことや夏の事件のことは使えないこともないか。

確証がないとはいえ、そのことはやった本人に聞けばいい話だ……。

せっかく陰陽庁に乗り込むんだ。

これは試してみる価値はあるかもしれない。

僕は思案にふけていたのだが、それを見た京子が心配そうに声を掛けてきた。

「……あたしも行くのか？　力になれるかわからないけど……」

やや複雑な表情をしながら遠慮がちに、京子なりにフォローできるかもしれないと同

行を申し出てくれた。

しかし僕はその京子の申し出を断った。

「いや、ここは僕と鈴鹿だけで行くよ。」

相手は陰陽庁の重鎮。いくら親子だからといって情に訴えてどうにかなる相手とも思えない」

も思えない」

京子もそれが分かっていたからこそ、遠慮がちに言ってきたのだ。

僕がそう言うところまたやや残念そうではあるが、あつさりと引いてくれた。

それに京子にはこれからやって欲しいこともある。

「悪いけど京子には秋乃と一緒に、これから必要になりそうな生活用品の買い出しを頼

めないかな?」

「え? 秋乃ちゃん?」

「うん。ほら、家にまだ何もないだろ? それにこれからさらに二人増えるんだ。

何もかもが足りなさすぎる……」

僕は一枚のカードを取り出し京子に渡した。

「で、でも……あたしが選んでいいの?」

「京子じゃないとダメなんだ」

僕はぼろ。鈴鹿は……見た目、生活面においてしつかりしているとは思えない、

たぶん、おそらく……。

僕や鈴鹿よりは、お嬢様ではあるが家事に関しては問題ない京子のほうが適任なのだ。

「わ、わかったわ。とにかく秋乃ちゃんと合流して行けばいいわけね」

「ああ、たのむよ京子」

頷く京子。

僕は秋乃に連絡を取り京子と一緒に買い出しに行くように伝えた。

そして屋敷に戻り荷物だけ置いたあと、僕と鈴鹿は京子と別れ秋葉原近辺に移動した。

向かった先は陰陽庁。

その庁舎が、今、僕と鈴鹿の目の前へ現れた。

☆

アポなしで行ったのだが、どういう訳か受付へ行き長官へ連絡を取ってもらったらずんなり通してもらえた。

案内してくれた女性に促されエレベーターに乗る。

向かった先は最上階。

しばらくするとエレベーターは停止した。

僕は鈴鹿を伴いエレベーターから降りると、ある違和感を感じた。

人払いの結界である。

だがまあ人払いの結界が僕たちに不利なものでもないため無視することにした。

恐らくこの場では僕たち以外の人を避けたいのが理由なのだろう。

案内の女性が長官室の扉をノックして部屋の中へ入った。

僕たちもそれに続き部屋に足を踏み入れた。

女性は用が済んだため一礼した後そのまま退室する。

辺りを見渡す。

豪奢で古びた内装をしており時代背景は昭和を連想させるものだ。

床には絨毯が敷かれ奥の窓からは秋葉原のビル群が建ち並んでるのが見える。

この部屋の主、倉橋源司は席から立ち上がりながら、「そちらへ……」と、一言動作を

交えながら応接用のソファアに座るよう僕たち二人に勧めた。

彼の格好は束帯姿。

厳格な雰囲気身を纏い静かな動作で僕たちが座った対面のソファアに腰掛け彼は

言った。

「はじめまして、土御門碧君。倉橋源司だ」

鋭い眼光で僕を見据えるその瞳。

低音の声も相まってこれまでの経歴を物語るように感じさせる。

「お初にお目にかかります。倉橋さん。噂はかねがね聞いております」

「ほう……。———そうか、君は今年陰陽塾に入ったのだな。私の母や娘から何

か聞いていてもおかしくはないか」

「お二方共に親しくさせて頂いておりますが、塾長やご息女からは貴方に関することは何も……。

私は一般の情報媒体から知っただけに過ぎません。

それだけ貴方が有名人と言うことですよ」

「……———そうか。まあ私も夏目君の弟である君に興味があつてね。受付から連絡を受

けたときはよい巡り合わせを感じたよ」

姉さんの弟の僕に興味……か。

なるほど、なかなか意味深なことを言う。

「—————それで、私に何か用があると聞いたのだが」

「ああ、そのことです、実は隣にいる彼女の住居を移転させたくてお願いにきたので

す」

「……鈴鹿君の住居を？」

「はい。実は私、塾舎の近辺にそこそこの大きい屋敷を購入しまして。

それで一人では管理が大変なので鈴鹿に住み込みで手伝ってもらおうと考えているのです」

「ほうっ！ 塾生の君が屋敷を？ それは面白い」

「幸いにも個人資産は掃いて捨てるほど潤沢にありまして、いい物件もあつたので購入しました」

「塾舎近くに屋敷を個人で購入できるだけの資金力……。

——半信半疑ではあつたがやはり噂は本当だったのだな。

財界に名を馳せる土御門の名は……」

「おや、知っていましたか」

「この地位に立つと様々な人物とも合うことも多い。

君ほどの名なら自然と私の耳に入つてこよう。——スターマイン社の元会長

土御門碧。

だが、年齢、15の少年と同一人物とはな……」

「まあたいしたことではありませんよ。」

趣味で始めたものが大きくなっただけに過ぎません。

貴方のように実力でその地位に上り詰めたものとは比較にもならないでしょう」

「ほう……。君はずいぶん私を買ってくれるのだな」

「それはもちろんです。でなければこの陰陽庁をまとめることなど到底出来ないでしょう？」

「……」

僕は言葉を継いだ。

「——それで、どうでしょうか。鈴鹿の件について」

「……それはやはり出来ない相談だな。」

——君も知っているからこそへ来たと思うのだが鈴鹿君は国家一級陰陽師だ。

今は資格停止をしているが緊急時にはその限りではない。

その場合、鈴鹿君には私の指示した場所に居てもらわなければならない。

つまり鈴鹿君が住む場所も人事権に含むものであつて、場所を移すことを許可することとできないな」

「なるほど。まあ予想通りの回答ですね」

「お、おい。碧っ！」

「まあ待て……」と鈴鹿を制す。

倉橋源司の回答は予想できていたことだ。

そのままこちらの要求を示したところで拒否されるのは道理で、あるならば、やり方を変えるまでだ。

「——ところで倉橋さん。先の霊災テロでは兄さんがお世話になったみたいで」
「その件か。ああ、確かに陰陽庁から要請し夏目君に手伝ってもらったな。礼を言おう」

「いえ、私がしたことではないので、そのこと自体はどうでもいいのです」

「なら何を——」

「双角会」

「っ——！ な、に……？？」

「霊災テロの首謀者は双角会。それは夜光信者の組織母体だ……」

そして連中の目的は土御門夜光の覚醒……

そんな連中が絡んでいる事件に、倉橋さん、あなたは知ってて兄さんを巻き込んだんですか？」

「それは泰純も同意の上だ。何も私だけの判断では——」

「では昨年夏の事件。」

貴方は鈴鹿をみすみ泳がせましたね？

十二神将とはいえ鈴鹿は戦闘が得意な陰陽師ではありません。

そんな彼女を止められないわけじゃないでしょう」

「……あの時は人が居なかったのだ」

「ではもつと根本的な話をしましょうか。」

——鈴鹿が術式を構築するために見た泰山府君祭の資料は父親の大連寺至道が作ったそうですが、術式そのものに明らかな間違いがある。

御霊部に居た彼がそんな初歩的なミスをするはずもないでしょう。

なぜ土御門の靈気を摂取する必要があったのか、なぜ土御門が管理する祭壇でなければならなかったのか。

これは大連寺至道が作った資料を見た術者……鈴鹿のミスリードを誘うためだ。

そして大連寺至道はなぜこのようなことを行う必要があったのか」

隣で息を呑む声が聞こえる。

が、今は無視して言葉を紡ぐ。

「倉橋さん、一つ問います。大連寺至道の肉体はともかく、魂はまだこの世に存在しているのではないのですか？」

「つ——！！ し、知らんな！！ 知るわけがない！！」

「まあいいでしょう。 ですが——」

僕は中空で点と点を結ぶように一本の線を指で引く。

「事象というのは必ず発生する理由がある。」

そして事象一つ一つでは完結しているかのように思えるモノでも点と点を結んだ先に何かが生まれることがある。

今回の場合、点と点を結んだ先に一つ行き着くトコロがあるんですよ。——そ

う、夏目兄さんにね」

僕は一息ついてから続ける。

「そしてこれは信頼できる情報筋からのものですが、陰陽庁には双角会のメンバーが多数居ると。」

そしてそれらは中枢にも及んでいる……」

「何が言いたい……?」

「倉橋さん、貴方……双角会のメンバーですね?」

目を見開く。

そして、

「ふ……フハハ……フハハハハ——」

突然笑い出した倉橋源司は表情を一転させた。

「何をバカなっ!　そこまで言うのなら!　土御門碧!!　証拠はあるのかね!?　証拠だ

よ証拠!!!」

「残念ながら私の手元には証拠はありませんね」

「はっ! ……君は私をバカにしているのかね!?!」

興奮気味の倉橋源司を僕は平然と見返した。

そしてさらなる火種を彼に注いだ。

「バカにしているのではなくバカだと申し上げているのです」

「なんだと!」

彼は激昂しソファァーから飛び出す勢いで立つて僕を見下ろした。

「不愉快だ! どうやら時間を無駄に過ごしてしまったようだ」

「どうされたのですか。 さあ、お座り下さい。 まだ私の話は終わっていませんよ」

「もう君から話を聞くことはない。 お引き取り願おう!」

もう話しことはないと言いつつ切った倉橋源司。

だが僕の考えはそうではない。

「いいえ。 貴方には全て話していただきます。 貴方がここに人払いの結界を張った

のは失敗でしたね」

左目に意識を強く集中させ、正面にあるもの全てを視界に捉えた。

「なん……だと——っ!!!?」

反転する世界。

この世の理から外れた神秘が世界の秩序を崩壊させる。

その瞬間、僕の魔術は完成した。

それに対抗する手段を持たないこの世界の住人にとってこれは致命的だった。

身動きが取れなくなったために再びソファアへと戻る身体。

まるで信じられないものでも起きたような表情でこちらを見据える。

「いったい何を……」

おおよそ見当も付かない術に嵌っているであろう自身の現状に対して愕然としていた。

これは十二神将のトップに君臨する彼にとって俄かには信じられないことだったのだ。

「あ、碧……これはどういうこと……？」

「倉橋さんにはこれから全てを話して貰うだけさ。時間も惜しい。さあ、では早速話して貰いましょうか」

その瞬間、倉橋源司の瞳から光が消えた。



「ではまず貴方は双角会のメンバーなのですか？」

「……違う。私は双角会などではない」

「では貴方と双角会はどのような関係なのですか？」

「……あれは我らの目的を達成するための手足に過ぎない」

「我らとは？」

「……同志」

「同志とは何です？」

「……かつて土御門夜光を支えた我が倉橋と相馬のことだ」

「ではその目的は？」

「……土御門を筆頭とし夜光の遺業を継承すること」

「ふーん。それで夜光の転生体と噂される兄さんにつきまとってたのか。その同志とやらに迎えられるために」

「……そうだ。だが真に欲しいのは土御門であつて夜光ではない」

「———— どういうことだ？」

僕がそれを確認しようとした瞬間、空間に揺らぎが発生した。

そこにはモノクルをかけた20前後の若い青年が立っていた。

だがそれは人間などではない。式神だ。

「おっと……それ以上は答えることはできないな。——おい、倉橋」

突如として現れた青年は術中にある倉橋源司に問いかけてみるも反応はない。

当然である。

彼は今、僕の魔眼に捕らわれている最中なのだ。

知識のない人間がいくら解除を試みようとしたところで解けるはずもない。

「無駄ですよ。倉橋さんは僕の術に掛かっています。僕が解除しない限りそれを解

くことは不可能です。ところで貴方は？」

「僕かい？ 僕は夜叉丸。ただの式神さ。——そして君の隣にいる鈴鹿の父親

でもある」

緊張、恐怖が入り交じった表情をし小刻みに震える鈴鹿。

この鈴鹿の反応を見る限りどうやら本物のようだ。

僕は彼女を落ち着かせるため手を握って「大丈夫だ」と言う。

すると震えは止まり緊張した表情も少しは取れたようだった。

僕は目の前の青年に向き直り再び話し始めた。

「ああ、やっぱり魂は残っていたんですね」

「いやー、君には正直参ったよ……こんな予定外のこと起きるなんてね。——

いくらなんでもイレギュラーすぎないかい？」

「そうかもしれないですね。ですが僕だつてここに来ることは予定外だつたんですよ」

「ははは、じゃあお互い様つてことかな」

「そうみたいですな」

はははと笑う大連寺至道と僕。　なんだこれ。

そんなやりとりをしながら、その雰囲気を作つた本人である大連寺至道が話を切り出した。

「すまないが倉橋を元にもどしてはもらえないだろうか？」

「かまいませんよ」

「本当かい？」

「ええ、ですが条件があります」

「鈴鹿のことだね？」

「はい」

鈴鹿を引き取る条件として倉橋源司を解放する。

悪くない提案だ。

僕は大連寺至道の同意を確認した後、倉橋源司を魔眼の戒めから解放した。

「大丈夫かい、倉橋」

「あ、ああ……」

これで当初の目的は達成した。

僕がここに居る必要もなくなったわけだが、今後いろいろと暗躍されても面倒だ。

僕は最後に二人に忠告をする。

「お二人がどのようなことをしようと僕には関係ないことなので積極的に関わろうとはおもいませんが……」

二人が何をしようが僕には関係ない。

勝手にやっていたらいい。

しかし――

「僕の回りに危険が及ぶようであればその限りではありませんので、そこのところ重々注意してください」

「わかったよ……」

「……」

その二人の反応を見届けたあと、僕は鈴鹿の手を引いてソファから腰を上げる。「行こう、鈴鹿」そう言って、入り口の扉の前まで鈴鹿を伴い歩いて行く。

鈴鹿の顔を確認するがやはり表情はすぐれないままだ。

やはり鈴鹿をこのままにはしておけないな。

僕は思い出したように言った。

「ああ、それと。こんなところに鈴鹿を置いておくわけにはいかない。鈴鹿は本日

付で陰陽庁を辞めます。よろしいですね？」

「……オーケーだ」

渋々納得といった表情ではあるが素直に同意を示した。

そして今度こそこの場から立ち去ろうとしたとき倉橋源司が言った。

「おまえは陰陽庁という組織に対して個人で立ち向かうつもりがあるとでもいうのか
!？」

僕はその言葉を聞いて振り向いた。

個人的にはそんな面倒なことやりたくないのだが、僕の身近な人が苦しんでいるのに
それを見過ごせるほど僕は機械的ではない。

鈴鹿を見るとやはりすぐれない表情をしている。

僕はそんな彼女の顔を見て、その顔をさせた原因に少し苛立っていた。

「そんなことをして何になる！ バカバカしい!!」

「貴方がたは仕掛ける側だからわからないのかもしれない」

「なに？」

「常を守る側のことを少しでも考えたことがありますか？

夜光、実験道具……

そんなものに振り回されて好き放題されなお何もできない。　バカバカしいのは僕らの方だ。

僕らは貴方がたのおもちやではないんだ。

——これ以上、僕らに何かしてみろ」

僕は言った。

「やられたらやり返す、倍返しだ！」

2—5. 戦闘

「一体なんなのだ、あいつは!!」

いまいましげに彼らが退出した扉を見ながら倉橋源司は言った。

「はは……彼にしてやられたね。君も僕も」

「何が倍返しだ! そんな子供じみたことっ!!」

「彼はまだ子供だよ」

「ぐっ……」

やれやれと呆れたようにため息をつく大連寺至道。

未だ怒りの収まらない倉橋源司に対して「少し落ち着け」と肩をぽんぽんと叩き諭す。

それで冷静さを取り戻したのか興奮も収まったようだ。

「……すまない。少し気が立っていたようだ」

「かまわないさ」

倉橋源司の謝意を受け取りつつもそれはさらりと流し今後について問う。

「それで、彼をこのままにしておくつもりか?」

「……あの心臓を素手で握られたような感覚。土御門碧、奴は危険すぎる……」

術に掛かったときの感覚が舞い戻り震え出す。

陰陽界の最高権威にして呪術において高い理解を示す倉橋源司をもつてしても、その埒外にある術を行使した土御門碧はそれほどまでに畏怖の対象なのだ。

「……迂闊に手を出すことはできません。だが——」

「何か策でもあるのか？」

「計画の前倒しをする。我々の目的に必要な土御門夏目がいる以上、遅かれ早かれ奴はいずれ我々の前に立ちふさがる」

「それも致し方ないな。……まあ、姫はそっちの方が喜びそうではあるけどね」

「鴉羽織を陰陽塾から手に入れる。だが鴉羽織の封印は母がしている。まずは説得を試みよう。邪魔するようであれば——切る」

「これは穏やかではないねえ」

「我々の目的が達成してしまえば奴のことなど取るに足らない問題となる」
「まあ普通に考えればそうなんだけどね……」

しかし本当にそうなのだろうか。

大連寺至道の頭ではイレギュラーの言葉が反芻される。

数の暴力に対して一人で何かできるはずもない。

普通に考えればそうなのだが……。

「いや……よそう。彼に対して何か分かつているわけではない。不足している情報を元に不確定要素を作るのは愚かだ」

今は自分たちにできることをやって早々に目的を達成すればいい。

そう自身に言い聞かせ頭からその疑問をかき消す。

「倉橋、僕は姫に計画の前倒しを説明してくるよ」

そう言い残し大連寺至道はこの部屋を後にした。

その彼を見送った倉橋源司は計画を進めるために行動した。

☆

「なんだあ〜？ 大連寺のゴスロリ娘じゃねえか」

エレベーターから降りた途端、横からけだるそうな声がかけられた。

額に大きなバツテン。

銀髪刈り上げにサングラス、ファー付きのジャケット。

僕とはまた違った方向にファッションには趣のある若い男だ。

「なんでお前がここにいるんだ？ お前いま資格停止中だろ？」

男が鈴鹿に話しかけるが鈴鹿に反応はない。

先ほどのことがまだ尾を引いているようだ。

そんな鈴鹿を疑問に思ったのか、今度は鈴鹿の顔をのぞき込みハツとした表情をして言った。

「その面ア……。もしかしてお前、怯えてんのか？」

ようやく合点がいき疑問が晴れた表情。

そんな男に対して鈴鹿は聞き取れないほどの小さな声で何かを言う。

「……………——ささい」

「あん？」

その言葉を聞き取れなかった男は鈴鹿の言葉を聞き取るために、さらに顔を近づける。

それは男に悲劇を生んだ。

「うるせーつつつてんだよ！ テメーには関係ねーよ、この馬鹿!!」

鈴鹿の怒声がフロア内に響き渡る。

そんな凶悪な一撃を至近で受けたのだ。

結果は言うまでもないだろう。

男は一瞬のうちに床にのたうち回ることとなった。

ゴロゴロと転がり続ける男の情けない姿を横目に見ながら僕は男のことを聞いてみた。

「こいつは十二神将の鏡伶路。……見ての通りのバカよ」

へえーバカなのか……などと鈴鹿の言葉を真に受けようとしているところを察したのか、本人が謎の気合いとともに立ち上がりその言葉を否定した。

「誰がバカだ！ つーか、何しやがる！ このアマ!!」

「チツ——」。シネばよかつたのに」

あからさまな舌打ちと共に露骨に嫌な表情をしながら言う。

しかし人間このような露骨に拒否反応を示されるとついつい反論してしまうものである。

そしてその先にあるものは意味のない罵り合いだ。

現に今も——

「んだとおく！ このアマ、合うなり行きなり……じゃあなんだ、テメエは隣の冴えねえ野郎とお手々つないで恋人ゴツコか!? この陰陽庁で!？」

「ぶっ!! な、ななな、にやにいつてんのよ!!。 つ、つーか、自分がモテねーからつて

嫉妬かよ！ うぎ！ マジうぎッ！」

「誰が嫉妬だ！ 誰がア！」

「バーカ、バーカ！」

もはや子供のケンカである。

だが人の往来の多い場所だ。

こんなところで暴れていては他の人のいい迷惑だ。

「鈴鹿、元同僚と会ってうれしい気持ちがあるのはわかるけど、もうその辺でいいだろ」

「誰がこんなヤツっ！　いくら碧でも言っていていいことと悪いことがあるよ！」

「……誰だテメエは。　っーかなんだよ元同僚ってよお」

「自己紹介が遅れました。　僕は土御門碧。　元同僚っていうのはそのままの意味です。　鈴鹿は本日付で陰陽庁を辞めましたので」

「はあ!？」

「本日はその件で倉橋さんを訪問致しました。　その帰りに鏡さん、貴方と遭遇したわけです」

「マジなのか？」

「マジなのか？」

まじまじと鈴鹿を見ながら言う鏡。

その彼に対して首肯する鈴鹿。

そんな反応を示した鈴鹿を見て思案に耽る。

しかしそれも束の間、

「しかし局長がそれを許すとはねえ……ん、土御門？ お前、夏目と春虎の身内か？」
「どうやら彼の興味は僕に移ったようだ。」

「はい。 夏目は僕の兄で、春虎兄さんは従兄弟です」

僕の回答に対して獰猛な笑みを浮かべる。

まるで目の前にいいおもちゃを見つけたような悪い顔だ。

「おい、お前。 少しツラ貸せや」

横柄に彼は言った。

しかし僕はその彼に付き合う理由がない。

僕は彼を見返し平然と言った。

「申し訳ないですが、これから鈴鹿と用があるのでお断りします」

だがしかし目の前の男はそんなことでは振り切れはしなかった。

「そんなこと言うなよ。 夏目と春虎を世話してやったんだ。 少しくらいいいだろ」

「そういえば面識があるみたいですね」

「なあに……少し前の霊災テロで霊災から守ってやったんだ」

「それは知りませんでした。 ありがとうございます」

守った……ねえ。

とてもそういうことをする人とは思えないけど。

だが、まあ、姉さんは事実無事だった。

怪我したなどとは聞いてはいない。

目の前の彼の言葉をそのままを信じることはできないが、まあいいだろう。

そういうことなら仕方がない。

少しくらいなら付き合うか。

僕が彼に同意を示す中、鈴鹿が青ざめた表情でこちらを見て、

「や、やめなつて……こいつバカだけど強いのは確かだから……」

心配そうに鈴鹿が言う。

まあ少し遊ぶだけだからといって頭を撫でてから、彼に向き直り言う。

「で、何をするんですか？」

「せっかく付き合つてもらうんだ。十二神将の俺がお前を鍛えてやるよ」

「十二神将の貴方と素人の僕が？」

一塾生を捕まえて何を言うかと思えば鍛えてやるなど……。

何をやったのかは知らないが姉さんと春虎兄さんはよほどこの男に気に入られたようだ。

それがどちらの意味かは言うまでもないだろうが。

「何でもアリでいいぜ」

「それはどーも」

ありがたいことにこの男は何をしてもいいと言った。
ならば僕のやることは一つだけ。

早々に引き上げたい僕の目的と何でもありと宣言した男の言葉通りのことをする
で。

「こつちだ、付いてこい」

そんな彼に僕と鈴鹿はついて行つた。

☆

外は闇。

庁舎を出たときに日は既に落ちていた。

京子たちの買い物も終わりそろそろ屋敷に帰る頃だろう。

いよいよこんなことに時間を取られている場合ではない。

そう考えるのも束の間、目的地が見えてきた。

連れて行かれた先は陰陽庁のトレーディングルーム。

庁舎に隣接された大きめの屋内施設だ。

陰陽庁にいるプロの陰陽師はここで日常的な呪術訓練を行っているようだ。

塾舎の地下にある呪練場より二回りほど大きいこの場所は陰陽術の訓練を行うには十分な施設といえた。

この時間この施設をまだ使用中の人たちが多く残っていた。

鏡伶路はそれらを無視しながら呪練場の中央へ歩いて行く。

その彼を避けるように今まで施設を使用していた人たちは呪練場の脇へと散り散りになる。

彼は猛禽な笑みを浮かべながら僕を誘った。

「おい、早くこいよ。 さっさと始めようぜえ」

決して大きな声ではないがよく響き渡る声。

僕は隣で心配そうな顔で見つめる鈴鹿に「すぐ終わらせる」と言い彼女から手を離し彼の元へ歩いて行く。

僕と鏡はお互い呪練場の中央で相對する。

距離にして5メートル。

攻撃性の術ならば不可避の間合い。

だが鏡は既に呪的防御結界を張った状態で臨戦態勢と言える。

「いつでもいいぜ。 こいよ、土御門碧」

「わかりました。ただしその結果、絶対に解かないでください」
 「なに？」と鏡が呟く。

それが開始の合図となった。

高速で印を結ぶ。同時に詠唱して呪文を組み立てる。

元々の帝式の術を崩し再構築。

特殊な発音による言葉と必要最小限に押さえた韻を踏み、詠唱そのものは数瞬のうちに終わった。

その間、僕の身体は呪力を練り上げ霊圧を上昇させていた。

鏡もその異常に気がつく。

だがもう遅い。

真つ直ぐに腕を伸ばし、指で天井を指し示す。

「改・九天応元雷声普化天尊!!」

天井に向けた指から呪力が天空に飛翔し雷神の鉄槌のごとく落雷が突き立った。

轟音と共に天井を破壊。

地震のような衝撃。

目も眩むような稲妻による暴拳が視界を奪う。

改・九天応元雷声普化天尊……帝式にある術式を改変。

十字経による雷法で方術の一種である元々の術式を呪文の組み立てを再構築して、さらに高速詠唱を取り込むことで詠唱時間を短縮。

術の発動までに掛かる時間は1秒と時間を必要としない。

相手に動かれる前にこちらの術式が発動しているのだ。

人間の反応速度を超えた落雷から逃れる術はない。

普通の陰陽師ならこれで終わるはずである。

普通の陰陽師ならば……

先ほどの衝撃で壊れたのか明滅しながらもあたりを照らす照明。

僕の真上にあるそれは光と影を作り出す。

落雷で壊れた天井、目標の場所に直撃し破壊された床。

高く舞った爆煙が周囲を隠した。

平面による視界はゼロ。

爆煙の中、背後に揺らぎを感じたときにそれはきた。

——足！

レーザーの靴と共に僕の脇腹めがけて飛んできたそれを身体の向きを変えつつ腕をクロスしながら防ぐ。

どすつ。

鈍い音と共にくる衝撃を受けながら爆煙の外へ飛び退く。

痛え……。

攻撃を受けた場所に鋭い痛みを感じる。

どうも接近戦は苦手だ。

自慢じゃないが僕は今まで筋トレなんかしたこともない細身の身体だ。

そのため重量差がある相手では絶対的に不利になる。

いや……鏡相手ではまともに一撃を食らえば致命傷となり得るだろう。

だが相手の動きが分かっていた上でしっかりと防御したし受けた方向へ逆らわずに飛ぶことで衝撃を流した。

ダメージこそあるが骨に問題はない。

瞬時に自己分析を行い戦闘続行の判断を下す。

しかし追撃はこなかった。

爆煙が晴れる。

現れたのは身体のあちこちに焦げ跡のある、片膝をつきながらこちらを見据える息の

上がった鏡だった。

どうやら僕が攻撃した瞬間、身体を灼かれながらも逃げ切ったようだ。帝式に霊脈を移動する超高難度の術式がある。

呪練場に通っている霊脈を移動し僕の背後へと回ったのだろう。

十二神将か……なるほど、大した精神力だ。

「——うは兎歩ですか？」

聞くと荒い息を返すだけで返事がない。

どうやら返事すらもままならない相当なダメージを負ったようだ。

まあ雷に打たれたのだから当然と言えば当然か。

呪的防御結界を張っていたとはいえ落雷を構成した温度は約3万度。

生物が一瞬にして蒸発するそれを鏡は受けたのだ。

生きているだけで奇跡と言わざるを得ない。

それを受けてなお兎歩を使用してからの反撃……さすがに十二神将と言ったところか。

「テ、テ、メ、エ、……」

落雷で声帯にまでダメージを負ったのだろうか。

発声がうまくできない鏡。

僕がしたこととはいえなんとも痛ましい姿である。

「お見事です、鏡さん。直撃を受けながらも背後に回つての反撃。さすがは十二神将ですね。ですが受けた代償は大きいようだ。貴方はもう何もできない」

さすがにこれ以上続ける意味もない。

僕は鏡に言った。

しかし鏡の答えは

「うゝるゝせゝえゝ！」

反抗の意思と共にふらふらになりながらも僕に向かってくる鏡。

だがそれは僕を油断させるための演技だった。

肉体的にはそれほどダメージはなかったのか、途中から全力で僕に向かってきた鏡はおよそ8メートルはあつた距離を一気に縮る。

驚いた。

一瞬。

ほんの一瞬だ。

不意を突かれた僕は防御が遅れ鏡の拳を頬にもらつた。

「ぶっ！」

一撃。

たった一撃でこのダメージ。

たまらず膝が折れる。

そのまま一瞬意識が飛びかけたがなんとか思いとどまる。

しかし僕の眼前には既に鏡の足があつた。

とつさに左腕で防ぐ。

だが勢いよく振られた鏡の蹴りは僕の細腕を折るのには十分だつた。

ばきん。

嫌な音を立てて僕の腕が折れる。

「くっー！」

痛い！

マジで痛い……今は痛みを声に出しているところではない。

追撃をかけるために再び足を大きく振り上げる鏡。

バックステップでその蹴りを躲し距離を取る。

振りかぶつた蹴りは僕に当たることはなかったが、勢いの付いた蹴りで靴の底に付い

た砂が剥がれ僕の視界を奪った。

「くっ、そっ!!」

忌々しげにこちらを見据えながら空振りした蹴りを戻す。

だが僕の視界を奪ったことに気がついた鏡は猛禽な表情をしながらこちらへ向かってきた。

はあ……。

自身の甘さのため息がでる。

あのとときもう一撃追撃しておけばそれで終わっていたのだ。

だが鏡の猛進を許した。

あまつさえ彼のその姿に目を奪われるなんて……。

自身に対して反吐が出る気分だ。

ほんの一瞬の油断。

その代償がこのザマだ。

鏡の蹴りで折られた左腕には痛みだけで動きはしない。

これではまともな印は組めやしない。

それに眼だ。

視界が悪い。

左目に至っては砂が入って痛い上に眼が開かない。

そんな自分の状況を鑑みる。

痛い……いろんな意味で痛い、この痛みが返って僕の頭を冷静にさせた。

陰陽師と殴り合い……というか、生まれてこの方殴り合いなどしたことのない僕にとつて今のこの状況は不思議な状況だった。

だがこのことが僕のウイークポイントだったのだ。

肉弾戦では僕は鏡には勝てない。

いや、鏡どころかそこそこ体格のいい男にも勝てやしない。

この事実を知れたことでも十分な収穫だ。

無意味な訓練という名の戦闘行為だと思ったのだが、どうやらそれは違ったようだ。

今まさにこちらへ猛進してこようとしている鏡伶路には感謝をしなければならぬらしい。

だが――

もう痛いのはごめんだ。

「鏡さん、貴方の楽しみを奪って申し訳ないが、これで終わらせる――」

「その、な、り、じ、や、な、に、も、で、き、ね、え、!!」

勢いそのままに僕の顔面に拳を叩き付けようとする。

鏡にしてみれば目も見えない、印も組めない陰陽師など取るに足らない存在。

自身の物理的な攻撃でも十分に倒せる、そう考えているのだろう。

しかし鏡が十二神将であるように僕もまた普通の陰陽師ではない。

ばちん、と指を鳴らす。

確実に僕の顔をめがけて振るった鏡の一撃を、霞む視界の中、僕は体勢を低くすることです。

直線的な攻撃ほど読みやすいものはない。

僕は低くした体勢のまま鏡の腹部に右手を当てる。

この距離ならば視界が悪くても関係ない。

シングルアクション
一 工程のごくごく単純な魔弾。

魔力回路を銃身として放つごく単純な魔術式だ。

魔力という架空の存在を实在させ熱量へと変換している。

そのため破壊力は僕が扱える魔力量に比例する。

一 工程とはいえ侮るなかれ。

繰り出した一工程は鏡を吹き飛ばし意識を刈り取るには十分な威力だった。

「この勝負、僕の勝ちだ」

その言葉と共にこの場における戦闘の終了を宣言した。

2—6. その後

「鏡！……こんなところで何をしている!?!」

その声が聞こえたのは、ちょうど僕が鏡を吹き飛ばしたときだった。

魔力を少し入れすぎたのか、存外にも吹き飛んだ鏡の巨体はきれいな放物線を描き――

「っ、うわっ――!?!」

今まさにこの場へ入ってきた男に直撃した。

人と人がぶつかる鈍い衝突音。

僕のゼロ距離からの魔弾スナツツで鏡は沈黙。

さらにその鏡がどこからともなく飛んできたおかげで、恐らくこの訓練を止めに来たであろう人も沈黙。

なんともいえない結末に、この場は静寂が支配していた。

「あ……」

なんとというタイミング。

まさに飛び出し。

僕が鏡を吹き飛ばした先に人が湧いて出たのだ。

こんな絶妙のタイミング、誰が予想できるのだろうか。

不可抗力だ！ あの男に当たったのは鏡だ！ 僕は悪くねえ!!

当たる方が悪いんだよ、バアアア力!!

……腕や眼が痛くて再び冷静さをなくしてしまったのだろうか。

普段の僕なら言うはずもない、らしくない汚い言葉を内心に抱えていた。

……とはいえ、当てたのは僕だ。

それに恐らくだが、あの男は鏡を止めに入るためにこの場に現れた、恐らくいい人なのだろう。

そんな人に鏡を当てたのだ。

一応、無事かどうか様子を見に行った方がいいだろう。

僕は「大丈夫ですかー？」などとありきたりな言葉を投げかけながら、人集りのできている人身衝突の現場へ向かった。

現場に行くと男がお腹を抱えて痙攣しながら悶絶していた。

どうやら衝突したときに鏡のどこかの部位が鳩尾に入ったようだった。ふむ、と、僕は考える。

足……だろうか？

鏡は革靴を履いていた。

であるならば、衝突したときの衝撃とその革靴の硬さも相まって、鳩尾に入ればさぞ苦しいことだろう。

と、どうでもいいことを目の前で蹲っている男を見下ろしながら考えていた。

僕は今まさに必死に呼吸を整えようとしている男の肩に手を置きながら「大丈夫ですか？」などと声をかけてみる。

すると男は手で大丈夫だとジェスチャーしながら答えてくれた。

そうこうしていると鈴鹿がこちらに駆け寄ってきて、ハンカチを取り出しそれを僕の口元に当てた。

「？」

よくわからない、といった表情をすると鈴鹿が答えてくれた。

「血……出てるよ……」

ああ、と納得した。

先ほど鏡のパンチが僕の頬を捉えたときだ。

あのときに唇を切ったのだろう。

「ありがとう、鈴鹿」

「バカ……心配したんだからっ！」

「ごめんな」

涙目をしながらうったえてくる彼女に対して、頭をぼんぼんとして応える。

すると彼女は何を思ったのか、僕に思いつきり抱きついてきた。

もちろん動かない左腕を巻き込んで、だ。

「っ——!!!? 行ってええええええええ!!」

「きやつ」

彼女の腕の中で必死に藻掻く僕。

まさか暴れられるとは思っていなかっただろう。

彼女はかわいらしい悲鳴を上げて僕から離れ、びつくりといった表情で言った。

「あ、碧。 さっきので左腕ケガしてたの!？」

一瞬の油断を突かれた代償。

この腕のケガはその最たるものだった。

戦闘中に油断などあつてはならないことだ。

それを僕は犯した。

これほど恥ずかしいものはない。

僕は目の前にいる彼女に対して苦笑しながらも正直に答えた。

「はは……ちよつとボキツつと……」

ははは、笑えよ鈴鹿。

だが、そんな僕の考えとは裏腹に、目の前にいる彼女は青ざめた表情をしながら、
「な、なにやってんのよ！　すぐ病院行かないと——」

と言った。

どうやら僕が思っている以上に、彼女には心配をかけたようだ。

なんだかとても悪いことをした気分だ。

怪我を負ったことは確かにしてはならなかった。

これは油断したことで彼女に心配をかけたしまったことだ。

だが、怪我そのものは僕にとっては大した問題にはならない。

僕は鈴鹿に心配をかけまいと冷静につとめながら淡々と言った。

「ああ、それなら大丈夫。　たぶん明日の朝には治っているから。

……病院はいいよ」

魔術刻印。

それがこの答えである。

僕の右腕にはこの世の神秘を内包した魔術刻印と呼ばれる魔術師の証が宿っている。仮に脊椎を折られようが、僕自身がまだ生きているのなら、刻印が無理矢理にでも僕を生かす。

左腕の骨折程度なら明日の朝には完治しているだろう。

——だが、これはこの場で話す内容ではないな。

「悪い。心配かけちゃったな……。ま、そのあたりは帰ってから話すよ」

「……うん」と心配そうな表情で見つめる鈴鹿。

そんなやりとりをしていると、ようやく僕の目もようやく両目ともハッキリと見えるようになった。

そして悶絶していた男も呼吸を整え復活したところだった。

年代物のフライトジャケットに、膝の抜けかけたジーンズ。

鏡と同じく僕とは対照的ながつしりとした体躯。

そして先ほどまで悶絶していた人物とは思えない、厳しい表情に眼光を鋭く光らせながら僕を見た。

一瞬、男は足下に倒れ臥す鏡を見下ろし、今度は困惑の表情をしながら僕に問いかけてきた。

「君がこの鏡を？」

「すいません、ちよつと勢いあまって鏡さんを当ててしまいましたね」

やや軽い口調で返す。

ますます困惑が深まった表情をして男は唸った。

だが次の瞬間にはこちらを真つ直ぐに見て、そして、

「いや、こちらこそ鏡が迷惑をかけた。すまない」

一塾生にすぎない僕に対して目の前の男は頭を下げた。

まさかこの人から頭を下げられる事になるとは。

目前で頭を下げているこの人を僕は知っている。

テレビでよく見るからだ。

十二神将の木暮禅次郎。

祓魔局の若きエースとされる新進気鋭の独立祓魔官である。

そんな人物が一塾生に頭を下げているのである。

にわかには信じられない光景だ。

僕はやや驚きながらもそれに応えた。

「鏡さんの話に乗ったのは僕です。木暮さんは謝る必要はないですよ」

「それでも一塾生相手に十二神将が動いたんだ。何かあつてからでは遅い」

「結果論ですが、見ての通りです。それでいいじゃないですか」

「——その結果が俄には信じられないんだがな……。君は一体何をやったんだ？」

呪練場の惨状を見渡しながら木暮は言った。

「ちよつとした術を使つただけですよ。逆に鏡さんには物理的にボロボロにされましたが」

拳を受けた頬に指を指しながら苦笑し答える。

「なるほどな。しかし鏡が陰陽術で後れを取るとは……。いや、それよりも今後

このような事にならないように鏡には俺から言い聞かせておく」

「助かります。では僕はこれで失礼しますね」

鈴鹿の手を取りその場を後にしようとしたところ木暮から声がかかった。

「大連寺はなぜここにいる？」

「あ……」と鈴鹿が答えようとしたが僕が遮った。

「鈴鹿は僕が引き取りました。

本日付でこの陰陽庁は辞めましたので。

本日陰陽庁を伺つたのはそのためです。

詳しいことは倉橋さんにも聞いてください」

「ま、待て！ き、君は一体……」

僕は「土御門碧」とだけ返答し鈴鹿を伴ってその場を去った。

☆

屋敷に戻ってからみんなで食事を済ませた後、京子に事の成り行きについて順を追って説明した。

京子の父親のこと。

鈴鹿の父親のこと。

そしてその二人が繋がっていて双角会を裏から操っていたこと。

さらに今後その二人が何かをしようとしていること。

補足に鏡と遊んで怪我を負ったこと。

刻印によって怪我はすぐ治るといふことを少々。

その話を聞いた京子はやはり落ち込んだ。

だが、思っていたよりその反応は薄かったといえる。

それとなく聞くと、小さい頃から京子のことは塾長に任せっきりで、お互いあまり接点がなく、京子が父親の実態を知らなかった事に起因するらしい。

たまに顔を合わせればあれこれ言われるため、厳格というイメージは持っている。

しかし、その内面……彼がどのような人物なのかまでは分からないのだ。

僕からこの話を聞いたとき、倉橋家として思うことはあつたとしても、娘としては思うところはないという。

鈴鹿にしろ京子にしろ親子とはいえ、その実態は冷めた関係だった。

……まあ、僕が踏み込む領域ではないな。

「まあ、この話は京子が塾長と決めればいいさ。何か僕にできることがあれば言ってくれたら出来る範囲で対応する」

「……うん」

これは京子、延いては倉橋家の問題だ。

倉橋家の問題であれば京子や塾長が結論を出すだろう。

僕は倉橋源司が何か仕掛けてきた場合に対応すればいい。

それよりも――

「僕らには今、ここで決めなければならないことがある。部屋割りだ！」

おもむろに予め用意していた屋敷の見取り図を取り出し三人に見せながら言った。

僕らがこれからこの屋敷で生活する上でもっとも重要なことだ。

この屋敷は平屋で、居間、客間、それに個人的な生活をするための部屋である寝室や

書齋の主は三つの棟で構成されている。

居間や客間はその目的が違うため個々の部屋には使えないが、寝室や書齋の棟だけでも部屋数は5つ。

4人がそれぞれの部屋を持ったとしても十分に賄えるだけの部屋数はあった。

「この寝室・書齋棟で好きな場所を選んでくれ」

「碧はどこにするの？」

「そうそう。碧くんがこの屋敷の主なんだから碧くんが最初に決めないと」

「僕はどこでもいいよ」

ゆっくり寝られるなら寝床はどこでもいいのだ。

好きな人が好きな部屋を選べばいい。

そのように伝えると、

「つて言われてもね……」と京子と鈴鹿が顔を見合わせて悩んでいる。

二人が悩み唸っていると、その隙を突いて秋乃が鋭く発言した。

「じゃあ、碧はここ。で、わたしは碧のとなり！」

「!？」

ハツとした表情をする二人。

部屋は5つ。

だがこの中にはグループが3つ存在する。

2、2、1といったグループだ。

まず廊下の奥から進んでいくと、左手に二部屋、右手に一部屋、途中二つの廊下が合流する。

その合流するもう片方の廊下を進み、直角に左に曲がった先の左手側に二部屋といった間取りである。

秋乃が指した僕の部屋となるのは最初に説明した二部屋だった。

特に反対する理由もないため、

「じゃあここにするか……」

「やったあー！」

満面の笑みを浮かべる秋乃。

僕と秋乃の部屋が決まったかのように思われたその時、

「だ、だめよっ！」

「そうよ、絶対ダメ！」

断固反対と言った声が上がった。

理由は何となく察しが付く。

が、あえて聞こう。

「一応聞くけど……、なんで？」

「秋乃ちゃんと碧くんが隣どうしなんて……。ほ、ほらっ！ 秋乃ちゃん女の子だし！」

「そ、そうよ、秋乃つちは女の子でしょ！ 何か間違いがあつたら遅いじゃない!!」

二人は……特に鈴鹿が凄いい剣幕で訴えてきた。

その迫力に気圧され「ひいっ！」と悲鳴を上げる秋乃。

期待していた答えとは違ったが、二人の言い分は、なるほど、確かに一理ある。

何も知らない傍から見れば、10歳くらいの女の子と隣同士というのは些か問題があるかもしれない。

だが――

「ああ……そういうことか。

ないない。それは絶対にない。

今までだつて一緒に生活してきたんだし、それはありえないよ。

それにそんなことしたら隼人にぶん殴られる……。

ああ、隼人っていうのはスターマイン社陰陽推進部の部長で――」

と、どうでもいい補足を含めて説明した。

二人が懸念するのはもっともな話ではある。

僕も年頃だし、女の子といちゃつきたい心は少なからず持っている。

だが、さすがに10歳の子にそんなことをする趣味は持ち合わせてはいない。

「で、でも……」

「まあ、二人も隣どうしのこの二部屋でいいんじゃないか？」

と、僕と秋乃の部屋とは少し離れた二部屋を指した。

二人はそれでも抵抗の構えを見せたが、特に反論もみあたらなかったようなので結局そこに落ち着いた。

捨て台詞を吐いて。

「チツ——このロリコン……」

おい、聞こえているぞ鈴鹿。

まあそれはいい。

部屋割りはこれで決まったし屋敷は自由に使ってもらって構わないわけだが——

。

……ああ、そうだ。

大事な事を伝え忘れていた。

「外の土蔵。

あそこは僕の研究室として使うよ。

下手をすると危険なモノであふれかえるから僕が居ないときは絶対に立ち入らないように」

庭の隅にある土蔵。

ここを僕の魔術的な研究室にするつもりでいる。

厚さ30cmはある漆喰の大壁。

魔術というあまり人には見られたくないものを扱う場所として、この土蔵は最適といえた。

同時に危険なモノも取り扱うため、事前に伝えておかなければならなかった。

「危険って……ヤバい術式の研究でもするわけ？」

「降霊術を研究しようと考えていてね。」

その場所が危険というよりも、知らないまま入って変なモノが出てくるかも知れないという意味で危険なんだけど……」

「ほら」と言いながら鏡に殴られた顔と折られた腕を示しながら言った。

「鈴鹿は見ていたから分かると思うけど、僕は殴り合いは得意じゃないんだ。……と
いうより相当弱い。」

今日、彼と戦ってみてそのことを思い知らされたよ」

僕はあれから殴り合いでも負けない方法を考えた。

しかし肉体的に弱い僕が今からがんばったところで急に強くなることはできない。ではどう強くなるのか。

「僕自身は弱い。これは変えようのない事実だ。

——ならば常に守ってくれる肉弾戦の強いボディガードを付けなければいんだ！」

なんとという暴論、と思うかも知れない。

だがもう物理的に痛いのはだけは嫌なんだ。

なりふりなど構ってはいられない。

「碧の暴論はさておき、それなら高等人造式でもよくない？」

「そうよねえ……。それに土御門家なら春虎のコンちゃんみたいな使役式もあるんじゃない？——というより降霊術って何？」

二人の言うことは正しい。

高等人造式のような自我を持った式神だったり、霊的存在を使役する使役式を使う手もある。

とういか春虎兄さん式神持ってたのか……。？とういかコンちゃんって何？

……まあ今はあまり関係なさそうだから置いておこう。

——話が逸れたが、結論からいうと前述の二つの式神を使うことはできない。

なぜなら簡易式でさえやつと扱える程度の僕が、自我を持った高等人造式など使えるはずもなく、

また使役式にしても北斗は姉さんが使っているし、土御門家に殴り合いが得意な式神がいるなどとは聞いたこともない。

夜光に仕えていた飛車丸や角行鬼が、まだ土御門家に仕えていたらよかつたのだろうが。

父さんからそんな話は聞いたこともない。

……まあ無いものねだりをしてもし方がないことだ。

僕はこれらのことを説明した上で言った。

「つまり僕にはその二つのどちらも不可能なんだ！」

「威張っていうな！　つーか、簡易式でもやつと扱える程度って……、あんた二種持つてるとて言ってたじゃん！　それにあの馬鹿に使った帝式が使えて、なんで簡易式がまともに使えないのよ！」

「……意外、かな。　あたし碧くんがなんでもできるんだって勝手に思っちゃってたわ」
「二人とも僕のことを何だと思っているんだ……。」

それに二種持っているからって普通の陰陽師がいとも簡単にできることが僕にでき

るとは限らないだろ。

陰陽術でも得手不得手くらいあるよ」

起源に起因することなのかはつきりとしたことは分からない。

だがモノを破壊することは得意でも、それ以外は苦手だ。

特に刻印のサポートを受けることができない陰陽術ではそれが顕著である。

さすがに10年以上も鍛錬しているので全くできないということはないが……。

「……まあいいわ。それで、碧はどうするつもりなわけ？」

「さっき言ったとおり降霊術だよ。

降霊術っていうのはね、霊的存在を降ろして使役する、いわば護法、使役式みたいなものだよ。

ただ僕のしようと考えているものはただの霊的存在ではなく、神話や伝説の信仰によつて精霊の領域に至った守護者の召喚。

——サーヴァントの召喚だよ」

「さ、さーばんと？」と鈴鹿と京子は顔を見合わせており、よく分からないと言った表情だ。

「そう。サーヴァント。

そうだな……。

例えば日本で有名なのは役小角や安倍晴明、果心居士、弁慶なん

かがそうかな。

つまりそういうった有名人を召喚して使役しようって話」

ここでようやく得心したような表情になった。

「話を聞くかぎりではすごそうな術式ね……。でも、そう簡単にできるようなものなの？」

「そうよ。リスクとかないわけ？」

当然、普通に考えれば出てくる疑問だろう。

もちろん簡単にできるわけではない。

刻印から得られた知識では、サーヴァントを召喚するためには聖杯と呼ばれる儀式に必要な道具……魔術礼装が必要だ。

真偽はともかく、最後の晚餐でキリストが弟子たちに自分の血だと称してワインを振る舞ったという杯だ。

その後、この聖杯は弟子たちの手によって各地に運ばれ、その土地で様々な伝承を成した。

そして聖杯を手にした者はあらゆる願いを叶えるという逸話があり、同時に最高位の聖遺物とされる。

そんな規格外の魔術礼装など持っているはずもない。

また魔術にしろ陰陽術にしろ、何かをしようとすれば必ず対価が必要になる。いわば等価交換が原則だ。

その原則に則るならば伝説級の人物を召喚、使役することがノーリスクでできるはずもない。

「当然簡単にはいかないしリスクもある」

だが、それを解決する鍵が土御門家にはあった。

「鍵になるのは泰山府君祭だよ」

「なっ——！」

鈴鹿はぎよつとした顔になり言葉を失う。

そう、泰山府君祭だ。

僕の目の前で驚いた顔をしている鈴鹿が執り行った、魂を操作するための儀式。

何代も前のご先祖様が作ったのか、それとも土御門家ではない人物が作ったシステムなのか。

魂の操作……いや霊的存在をいとも簡単に使役することができるのだ。

どこぞの誰とも知らないが、想像もできない程の天才が作ったそのバックボーンには、巨大な魔術式が組み込まれていると想定できる。

それこそ聖杯に匹敵するような……。

神話や伝説級の式神を使役したという事実は文献を見る限りはないが、それでもこれは規格外と言わざるを得ない。

いわば聖杯システムの下位システム。

泰山府君祭で使う祭壇や詠唱は、そこにアクセスするための術者と魔術式を繋ぐための小規模なシステム。

この在り方によってその結果が大きく変わる。

つまり正しい条件や手順を踏めばサーヴァントも召喚可能なのだと考えている。

では泰山府君祭がそのまま聖杯の代わりになるのかといったら、そう単純にはいかない。

聖杯を使って召喚する場合は英霊の座と呼ばれる領域にアクセスするが、泰山府君祭ではその領域まで行くことができない。

なぜなら泰山府君祭を使う人間は陰陽師であって魔術師ではないのだから。

泰山府君祭がどんなに高度な術式であろうともそれは変わらない。

陰陽術は夜光が作り上げた、いわば魔術から分化したものだ。

神秘的にはこの上なく地に落ち、使いやすさで言えば誰でも使えるようにしたものだ。

その陰陽術では英霊の座の前にある門を開けることはできない。

したがって、泰山府君祭がどんなに高度な儀式であろうとも、陰陽師では英霊を召喚……いや、正しくは英霊の情報を元に造られた分身を召喚することは不可能だ。

陰陽師ではね……。

つまり泰山府君祭の方法さえわかれば、あとは条件の問題だ。

「ということで鈴鹿」

唐突に鈴鹿に近寄り左肩に手を置きながら話を振ってみた。

「な、なにっ!？」

身体をビクつかせながら反応する鈴鹿。

僕はそんな鈴鹿をまつすぐに見据えながら言った。

「泰山府君祭について教えてくれ」

2—7. 召喚

部屋から出て廊下から外を見ると小粒の雨が降っていた。

まるでこれから行うことを見透かすかのように、空はどんよりと色は薄暗い。その環境が僕を憂鬱な気分へといざなう。

ふと、外に視線をやると——

ピピピピピッ、と、小気味よい早さで鳥の鳴く声が聞こえた。

天気というものは鳥に関係ないのだろうか。

「雨が降っているというのに元気だな」

僕は独り言を呟いた後、居間へ向かった。

今日は土曜日。

時刻は8時。

陰陽塾は休みのため、いつもに比べると比較的ゆっくりとした朝だ。

昨日のことだ。

僕は鈴鹿に泰山府君祭のことを確認した。

すると、曰く、二つの条件がありそれを呑むなら教える、とのこと。

一つ目の条件は泰山府君祭の研究内容が間違っているため、そのままの術式では使えないとのこと。

あの泰山府君祭未遂事件では兄を生き返らせるはずが、術が失敗して霊災が湧いて出たんだとか。

僕が魔弾で屠ったあの霊災です。 わかります。

まあ、それはひとまず置いておいて。

鈴鹿は泰山府君祭が失敗したというが、術の成否については定かではない。

そもそも、何を以て成功なのか、それとも失敗なのか、ということである。

鈴鹿の視点でいうのなら、兄を蘇生できなかった時点で失敗なのだろう。

しかし術だけを見るならどうだ。

霊災とはいえ、召喚できたではないか。

これは失敗ではない。

想定したものでなかったのかもしれないが魔術式へのアクセスは成功しているのだ。

この鈴鹿の意図しないものが出てきた原因は、その手順にこそある。

祭壇……これがそもそもこの術式を歪ませた原因なのだ。

確かにあの祭壇を、魔術式と術者との間に挟むことで、誰もが使うことができるようになったのかもしれない。

しかしその反面、魔術式への介入も制限された。

さらに祭壇に細工が施されていた場合に意図する結果になりはしない。

ともすれば祭壇を使わない方法を取るべきだ。

僕が泰山府君祭で知りたかったのは魔術式へのアクセスにある。

泰山府君祭についての鈴鹿の話聞き終えたとき、僕の中ではその方法についてある程度の理論はできた。

だが所詮は机上の話だ。

実際のところ何が出てくれるのかやってみなければ分からない、というのが実情だ。ならばそれを実践して確かめるまで。

そうこう考えているうちに居間についた。

居間には京子がいて、お茶を飲みながらくつろいでいるところだった。

「おはよう、京子」

「碧くん、おはよう。……あら？ 秋乃ちゃんは一緒じゃないの？」

「秋乃は朝が苦手だからあと一時間は起きてこないよ。……ところで鈴鹿は？」

「起こしたんだけどね……。ふふつ、秋乃ちゃんと同じみたいね」

苦笑しつつ答える京子。

そんなやりとりをしつつ朝の挨拶を済ませた。

そして京子が、

「お食事用意できているけど、先に食べる？」

「そうだね。今日はこれから用事があるから先に食べるよ。悪いけどお願いできる

？」

「わかったわ。用意してくるから少し待っててね」

そう言い残し京子は台所へ向かった。

言うに及ばないが食事の管理は京子がすべて取り仕切る事になった。

案の定、鈴鹿も料理全般苦手、というか作ったことなどなく、そうなれば自動的に京子が担当するのは必然。

しかし京子にすべて押しつけるのも気が引けたため、料理以外の家事については他の3人が分担することで落ち着いた。

少しすると食のそそる香りを漂わせながらトレイを持った京子が戻ってきた。

食卓に料理を並べていく京子。

ご飯に味噌汁、鮭の塩焼き、おまけに卵焼きと漬け物と、よく見かける和食だ。

見た目は簡素……、いや、簡素と一言でいうが、まるでよく見かける朝食の見本のようなそれができるだけ大したものである。

実際に作ってみるとそれなりに時間は掛かるのだろう。

この朝食を作るために一人早起きしたであろう京子に感謝しながら出された料理を口にする。

「美味い……」

おもわずポロリと呟いた。

すると、その言葉に反応した京子が、すすつと僕の隣に寄り添ってきた。

……なにこの……何……？

「……どうしたの？」

「せっかくの二人つきりなんだし、いいじゃない。……だめ？」

「……ダメじゃないけど……。——ごめん、少し食べにくいかも」

「じゃあ、あたしが食べさせてあげるっ」

「はあ!？」

「ほらあ、あーん」

そう言つて鮭の切り身を小さく上手に切り崩して、その欠片を僕の口へと運んでいく。

しかし、なんだろう。

今日の京子はいつにもまして積極的な気がする。

……僕自身こういう行為自体、嫌いではない。

むしろ姉さんと春虎兄さんを見ていた影響か、こういうことをしてみたいなどと漠然と考えていた時期もあつたくらいだ。

が、いざ本当にこのような行為を目の前になると、臆しているのだろうか、対応に困つてしまう僕がいた。

なんともチキンな性格である。

だが察して欲しい。

僕はこのよう経験に乏しいのだ。

積極的な女の子を前にたじろいでしまうのは致し方のないことだ。

しかし、いつまでもこうしているわけにはいかない。

僕は魔術を扱う要領で精神を集中させ気持ちいを冷静に保つたまま、腹をくくつて京子に合わせることにした。

「あ、あーん……」

ぱくつと京子が持った箸に食いつく。

もぐもぐもぐと、口の中をもごもごさせながら味わう。

しかし、うん、だめだ、口にしたもののが全く分らん。

それから味噌汁に至っては「フーフー、フウフー」と冷ましてくれた。

あえて突つ込むことはしなかったが……。

そしてその行為は食べ終わるまで続いた。

これなんてプレイ……？

なにはともあれ、京子の美味しい朝食をいただけただけなのだ。

労いの言葉の一つでもかけてあげるのが気遣いというものだろう。

「……行為自体はともかくとして、味は美味しかったよ」

「本当!？」

「もちろんさ。それに見た目は簡素だったけど、かなり手間かかってたみたいだね。味が深かったよ」

「倉橋家伝統の味だから碧くんの口に合うかどうか少し不安だったの。でも碧くんの口に合ってたよ」

「うん、本当に美味しかったし僕にも合ってたよ。昨日のお昼に食べた料理もそう

だったけど、京子って本当に料理が上手なんだね」

「……なんだかそんなに褒められると照れるわね。——でもそんなに美味しく食

べてもらえると、あたしも作った甲斐があるわ」

本当に美味しかったので、これからも作り続けて僕らを養ってくれることを切に願う。

……特に秋乃のような育ち盛りには正しい食生活は基本だ。

今までの食生活といえれば外食ばかりだったので、これは非常にありがたい。

全く関係のない理由からここへの下宿が決まったというのに、この存在感……。

僕にはできないことを平然とやってのける京子には頭が上がらない思いだよ、まった

く。
食事も終わり、京子が出してくれたお茶をすすりながらくつろいでいると、京子から今日の予定について聞かれた。

「それで、さつき言ってた用事って……。今日はどこかに出かけるの?」

「ん? ああ、降霊術に必要な道具の調達に行ってくるよ」

僕が京子にそう言うと、

「あたしも一緒にいっちゃだめ……かな？」

上目遣いで僕に聞いてきた。

かわいい。

10人に聞けば10人が同行を認めるだろう女を武器にした上目遣い。

僕も普段なら同行させていただろう。

だが、

「今日は僕一人で行くよ。 見てもあまり面白くないだろうし、それに——」

今日ばかりは京子の同行を認めたくはなかった。

いや認めるわけにはいかなかった。

降霊術に必要な道具の調達。

これには生け贄の血液などが含まれている。

これから魔術に関わっていく京子だが、先ほどのようなやりとりを好む無垢な京子に、儀式のような血なまぐさいのは向いてない。

僕はそう判断した。

「それに？」

「……いや、なんでもない。

——とにかく、降霊術の準備ができれば、鈴鹿も含め

て呼ぶよ」

そう。

昨日、鈴鹿から突きつけられた条件の二つ目がこれだ。

泰山府君祭のことを教えてもいいが、降霊術の現場を見せろ、というのが鈴鹿の要求。そしてそれまで静観していた京子が一言。

「鈴鹿ちゃんが見るなら、当然あたしも見るわ」と。

……いや、まあ、いいんだけどね。

なんだかいつものようになし崩し的になっているけど、今更考えてもどうにもならないことだ。

それに準備さえできれば、あとは召喚儀式だけになるのだから、鈴鹿や京子が見ても特に気分を悪くするようなことはないだろう。

僕は頭を切り換えて、二人の見学を認めた。

「そういうわけだからさ、このお茶飲んだら早速出かけてくるよ。　昼前には戻ってくるからお昼も美味しいもの頼むよ」

「ふふっ、まかせて。　期待していてねっ！」

これは昼食も期待が持てそうだ。

僕はお茶を飲み干し、昼食を楽しみにしながら屋敷から出た。

「接続」

右腕の刻印に火を入れる。

右腕をナニカが這うような疼く痛み。

同時に服の上からでも分かるくらい、右腕から怪奇な紋様が青白い光と共に浮かび上がった。

皮膚の下の血管。

いや……血管というには余りにも太い、そう、まるで蛇のようなモノが右腕を這っていた。

普段は塗り薬で隠しているが、今日は休日だったため何もつけていない。そのため刻印は青白い光とともに紋様のはっきりと見て取れた。

鈴鹿は泰山府君祭で一度見ているが厚手の服を着ていたため、光っていることは確認できても、ここまではつきりと見えることはなかっただろう。

京子にいたっては初めて見るモノだ。

刻印が活発化している右腕を見たからだろう。

背後から息を呑む音が聞こえた。

これは人間の身体にはない、別の十二カだ。

痛ましいとでも、おぞましいとでも感じたのだろう。

二人の反応は当然といえた。

二人の反応をよそに僕は詠唱を始めた。

「告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

我の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ——」

全身に感じる異物の感触。

体内の魔術回路が収縮しながらも、さらに這うように蠢く悪寒と苦痛。

それを完全に無視するように、詠唱を続ける。

「誓いをここに。 我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者——」

魔術刻印は術者である僕を補助するため、独自に詠唱を始めて、大気より大源^{マナ}を取り

込んでいく。

回路は神経を侵していく。

視界は閉塞する。

今、この身は人であることを忘れ、一つの神秘を成すための駒、現実と奇跡を繋ぐための回路に成りはてている。

その狭間によつて悲鳴を上げていている痛覚を無視し、身体に流れる魔力の奔流をさらに加速させ、詠唱を続けていく。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

僕が最後の一文を詠ったとき、暗闇だった辺りは反転。

世界は白い世界に包まれた——

☆

「——おい、お前。名は何と言う」

声が聞こえた。

この白い世界に急に飛ばされた右往左往していたときである。

振り返ると背後には白い装束を着た美人なお姉さんが立っていた。

「——え？」

僕が間抜けな気の抜けた声を出したかと思えば、彼女は、

「名前だよ、名前。まさか、「え」という名前というわけではないのだろうか？」

それはそうだ。

僕もそんな名前になった覚えはない。

彼女が何者なのか、ここは何処なのか、僕はなんでこんなところにいるのか、など、分からないことだらけだ。

だが、その答えは彼女が持っているのだろう。

ならば彼女に付き合うのは道理。

僕は改めて彼女に向き直り話した。

「僕は土御門碧といいます。あなたは誰ですか？」

「私か？ 私は、そうだな……、ここの管理者とでも名乗ろうか」

……つまり僕には彼女の名を聞くに値しないということだろうか？

僕が彼女の思惑に思考を働かせていると、

「おっと、気を悪くしないでくれ。私はどうの昔に名を捨てた身だ。そのような名を今更話しても意味がないということだ」

……思考が読まれている？

「その通りだ。だから思ったことをそのまま口に出してもいいぞ」

「……なるほど。 思考を読めるのなら話が早い。 正直僕には分からないことだらけだ。 ここがどこなのか、 召喚儀式をしただけなのに、 なんで僕はこんなところに居るのか」

「なぜって……、 そりゃあ、 私がお前の意識をここに引き込んだからに決まってるだろ」「意識をつて……そんな簡単にできるわけ——」

「できるさ。 というよりも、 お前から私に回路を繋げてきたんだぜ？」

「あー、 もしかして貴女は……」

「うん、 そう。 お前が召喚儀式で使ったモノさ」

「やっぱり……」

これは驚きだった。

つまり彼女は泰山府君祭で核となっている魔術式そのものだったのだ。

「なるほど。 何で僕がここに居るのか、 ということは理解しました」

端的に言うなら今の僕は彼女に身体の自由を奪われた状態ということだ。

意識だけこの世界に連れてこられたというか、 視覚や聴覚などの五感を彼女に操作されてる状態、 といったところだろうか。

迂闊……だったのかもしれないな……。

「確かに、 お前、 迂闊だよな。 無闇矢鱈に知らない奴の回路に自分の回路を繋げない方

がいいぜ？ 悪意を持った奴なら殺されても文句言えんぞ」

「はい。その点は反省ですね。でも貴女はそういうことはしないでしょっ？」

僕をこの世界に引き込んで何をするわけでもなく、今みたいに雑談に勤しんでいるのだ。

彼女の言うように悪意を持ったヤツなら、こんな回りくどいことはしない。

「まあ、そうだな。——お前をここに連れてきたのは他でもない。お前に頼みがあるからさ」

「僕に頼み……ですか？」

「ああ、私からの依頼だ。見ての通り器となった私の肉体に自由はなく、こうして意識だけが残っているワケだが——」

器……つまり彼女自身がこの巨大な魔術式に成ったことで、人間というカタチを維持できなくなり自由がきかないモノとなった。

魔術回路のおかげか、意識だけは残っていたようだが……。

僕は彼女の言葉を待った。

「頼みというのは他でもない。門を閉じるのを手伝って欲しい」

門、というのはあちら側の世界とこちら側を繋ぐ通路のことを指すのだろう。

門を閉じるということは魔術式の停止、つまり泰山府君祭というシステムの崩壊を指

す。

一度閉じれば彼女が再び開かないかぎり、僕はもとより全てのものたちが泰山府君祭を使うことができなくなる。

しかし彼女はなぜこのようなことを言い出したのか？

彼女はここの管理者であり、意識のある彼女なら門の開閉は彼女自身ができるはずである。

「お前の疑問はもつともだが……ある時を境に誰でも自由に私に繋ぐことができるようになってな……」

彼女の表情に影が差す。

彼女の意思に反して誰でも自由にここへアクセスすることができる。

つまりそれは、

「あの祭壇のせいですね」

「そうだ。もともとこれは私と私の考えに同調した者たちの理想を叶えるためだけのモノだった」

彼女はそう言い、一呼吸置いた後、再び続けた。

「だがそれは同時に悪意を持った者たちに手を貸すことにもなったようだ。」

あの祭壇が私を束縛したのだ。仰々しいだけあって強力でな……以来、門を閉じる
ことができなくなつたわけだ」

乱暴な言い方をすると、蛇口の水が止まることなく出続けるようなもの。

水とは霊災というカタチとなつてこの世に顕現を果たす。

彼女にとってあの祭壇は強制力の強い呪具となつている。

そのため彼女の意思ではその水を止めることが叶わなく抗うことができないとい
うことのようなのだ。

「普段はこちら側とそちら側が開いていないから、そちら側に大量に何かが行くとい
うことはないが、それでも漏れ出しているはずだ」

あたりまえの話ではあるが、水が流れ続けているのなら、今ごろ日本中既に水浸し、霊
災まみれである。

しかしそこはたとえばの話。

祭壇が彼女を強制しているといつても、ここと祭壇が常にオープンというわけではな
い。

なので日本中が霊災で溢れかえるということは今のところはない。今のところは
……。

だが、彼女の言うように漏れ出した霊災が東京では日常的に発生している。

これはその影響というところか。

「祭壇を起動すると、こちら側とそちら側が繋がる関係上、そちら側に何かが一気に流れるはずだ。これは祭壇の術式が取捨選択せずに、全てを呼び寄せているからだ」

「呼び寄せるモノと結びつきの強いモノで縛っていいんですからね、アレそのものは……」

彼女は頷いて同意する。

祭壇自体には呼び寄せるものを限定する機能はない。

それができるとするならば、祭壇の機能を把握し、それを改竄できる知識を持った術者のみ。

つまり知識のない者や悪意を持った者が祭壇を使えば、そこは靈災で溢れかえり靈災テロになってもおかしくない、というわけだ。

「人間という種、肉体という有限から解き放たれ魂という無限を得る。もともとの私たちの目的はこうだった。

当時の私たちの世界は戦や流行病、飢餓、さらには寿命も短く、儚くも人という生き物はあつげなく世から消え去る弱者だった。

私たちはそこからの解放を願った。

万物を手には、あらゆる真理を知り、誰にも届かない世界へと行く。

あらゆる憎悪、あらゆる苦しみを、全てを癒やし、まだ見ぬ理想郷へと辿り着くために」

彼女は続けた。

「だが……だが、これは私の望むところではない。私は……私はこんなモノのために、この命を捧げたわけではないんだ……。混沌を生むために使われるのなら、私は消えたい」

彼女は後悔と悲しみが入り交じった表情をしながら言った。

そして、

「勝手なことを言っているのは分かる。だが、それでも協力して欲しい……。頼む！！」

彼女たちが目指したものが何かは言うまでもない。

それを目指してまで彼女が叶えたかった理想。

当時の世界がどのようなものだったのか知らないし、恵まれた世界に生まれた僕には推し量れないものだ。

だから彼女の理想について何かを言うことはできない。

それに真理への到達は魔術師なら誰もが目指すものだ。

同情こそすることはあっても、彼女を貶めることはしたくない。

いずれにしても彼女自身がどうしようもないというのなら、僕が協力するしかないというのだ。

「分かりました。出来る限りの協力はしましょう」

「本当かつ!？」

「ええ。ですが、協力といっても僕が取れる行動はそんなにありませんが……」
選択肢としては二つある。

まず各地に点在する祭壇を破壊してこちら側にアクセス出来ないようにする。

次に彼女自身、本体そのものを破壊する。

前者は祭壇を破壊した後、祭壇を再現する者が現れたとき、それを防ぐ手立てがないということ。

禁呪とはいえ、散々研究された泰山府君祭だ。

祭壇が再現されないとも限らない。

後者は本体を破壊するのだ。もう二度と泰山府君祭を行う者が現れることはないだろう。

が、それは同時に僕も召喚を行うことができなくなることの意味する。

それでは意味がない……。

ない、のだが……くっ、これしか方法がないのが現状だ。

「はあ……」

僕はため息をついてから彼女に言った。

「分かりました。貴女に接続したことで本体がどこにあるのかも分かりました。貴女が望むのならそこに行つて完全に破壊しましょう」

「すまない……」

「仕方ありません。」

それに泰山府君祭は僕にも少なからず因縁のあるものでね。

それを巡つての騒動が無くなるのなら僕も手を貸しましょう」

「そう言つてもらえると私も助かる」

少なくとも泰山府君祭さえなくなれば、霊災騒ぎも今後収束していくだろう。

ならばここは一つ彼女に協力するのもありだと前向きに考えることにした。

よし、方針は決まった。

ならばここに長居は無用だ。

あちら側が大変なことになつていなければいいが……

「では僕はもう行きます」

「そうか。……いや、少し待て」

「何か？」

「そういえば英霊を使役するために召喚儀式を行ったんだっただな？」

僕は首肯にて回答する。

「英霊とは人間とは次元の違う位に位置するもの。その右腕に物騒なモノをぶら下げているお前の中身は知らんが、いずれにしても人間の枠組みにいるお前では、英霊を使役などできなかつただろうよ」

まあ……それは薄々は考えていたことだ。

今回はその検証のための実験。

その程度のもりでやったのだが、まさかこんな展開になるとは誰が想像するだろうか。

「しかし、これならお前にも使役できよう」

ほら、と言つてこちらに青い何かを投げてきた。

「なんですかこれ。……ゴムマリ、いや、鳥？」

「私も詳しくは知らん。

そいつ自身はプロイキツシャーと言つてたな。

あの門から出てきたのを捕獲したんだ。

私の頼みを聞く代わりといつてはなんだが、よかつたら持つて行つてくれ

特に何か出来るというわけではないが、ソイツ、殺されることだけは得意なんだ」

捕獲つて貴女……

それにプロイキツシャー……??

どこかで聞いたことがあるようなないような……

というか、殺されることが得意つて……、それつて、何の役に立つんだ?

……突つ込みたいことは色々ある。

しかし、まあ、なんだ。

「貰えるものはありがたく貰つておきます」

「そうか」

彼女は満足げな表情で頷いた。

今のところこれが何の役に立つのか考えが及ばないが、彼女がくれたものだ。

何かの役には立つのだろう。

僕はそう納得し、そして、

「では僕はもう行きます」

「ああ。すまないが、よろしく頼む」

最後にもう一度、彼女は念押しするように僕に言った。

向こうに戻つたらなるべく早く彼女を解放してあげよう。

僕はそう心に留めて、

「はい。頼まりました」

その言葉を最後に白い世界は消えていった。

☆

「誰かが僕を呼ぶ声が聞こえる。」

……ああ、そうか。戻ってきたんだな。

となると、僕を呼ぶ声の主は——

床からひんやりとした感覚が伝わってくる。

どうやら徐々に五感は戻ってきたようだ。

意識を少しずつ覚醒させる。

そして、

「碧っ！ 碧ってばっ！！ 返事してよおっ！！！！」

「碧くんっ！ 目を覚ましてっ！」

「——そんなに大声で叫ばなくても聞こえてるよ」

ゆっくりと身体を起こす。

すると、

ゴスッ

鈍い音と共に僕の身体に強い衝撃がおきた。

鈴鹿と京子が僕に体当たりをしてきたのだ。

女性とはいえ、二人分の衝撃だ。

僕はその衝撃で勢いそのまま、硬い床に頭をぶつけて再び意識を失った。

2—8. 魔術回路（前編）

意識を取り戻した僕は二人を軽く諫めた後、二人を連れて屋敷へと戻り、これまでの経緯を二人に説明した。

僕の行った降霊術は英霊の召喚に失敗。

逆に僕がきれいなお姉さんに意識を持つて行かれ、彼女の依頼を受諾することになった。

依頼は泰山府君祭の核となっている彼女自身、本体の破壊。

破壊する理由は祭壇を悪用された場合に霊災が大挙してこちら側に押し寄せてくるから。

それを懸念した彼女の望みが、核となっている彼女自身の破壊だった。

彼女の理想を追求し昇華させたものが泰山府君祭という彼女と彼女の同胞達のためのシステムだった。

彼女には彼女の理想があり、その理想を悪用されることを彼女は良しとしない。

そのことは僕も共感できる。だから彼女に協力することにした。

彼女からはその見返りにプロイキツシャーと呼ばれる使い魔をもらった。

その後のことは鈴鹿と京子、二人にタツクルされて気を失って今に至る、といったところだ。

「要するに碧が考えなしに召喚儀式を行ったせいで、下手したら死ぬところだったワケね」

「まてまて、今の説明でなんでそうなる？」

「だってそのきれいなお姉さんに意識奪われて昏睡してたじゃない」

いや、まあ……その通りといえはその通りなのだが……。

魔術回路を不用意に繋げたせいで五感を乗っ取られてしまうなんて素人みたいなことをしてしまったのだ。

……しかし危険はなかったのだから、その、死ぬということはなかったような……。

口には出さないが言い訳を頭の中で考えていると、京子が微かに震えながら言った。

「碧くんっ！」

「は、はいっ！」

びつくりしたあ……

今まで見せることがなかった凄みのある表情と声で呼ばれた。

京子ってこんな表情をすることがあるんだな。

やっぱり今回のこと怒ってるのかな……？

「あたし、碧くんのこと好きだけど……ううん、好きだからあえて言わせてもらおうわ。碧くん、今回の行動は少し軽率だったと思うわ。」

魔術のことについて詳しいことはわからない。でも、死ぬかもしれないようなことを、あたしたちに大した相談もせず不用意にやるのはよくないと思うの」

「そうそう。キョーコの言う通りだわ」

「こらっ、鈴鹿は煽るんじゃない！」

まったく鈴鹿は……

火に油を注いで面白がってるし……僕も人のことは言えないが。

しかし、困った。

苦手なんだよな……こういうの。

「あたしね、碧くんが倒れたとき、呼びかけても反応が無いし……本当に、死んじやつたって——」

嗚咽を漏らし、そして、ついにはぼろぼろと涙を零して泣き出してしまった。

しかし、そんなに泣く程までに心配になるくらいの時間、反応が無かったのだろうか？

僕は鈴鹿に聞いてみた。

「なあ、鈴鹿。僕、そんなに長いこと反応無かった？」

「時間にしたら10分程度よ。でもキョーコ、すっごく青ざめちゃってさ。あ、あたしは碧のことだからなんとなく大丈夫だとは思ってたけどつ。

——でもね」

「でも?」

鈴鹿は目元に涙を溜め込み、一呼吸した後、

「あたしだってキョーコと同じよつ! 2、3分ならともかく、10分も反応がなければ、あたしだって心配になるわよつ! 碧のアホつ!!!」

鈴鹿の手元の近くにあつた座布団を投げつけた。

「おわっぶ——!」

座布団は僕の顔面を見事捉えることに成功し、それを見届けた鈴鹿もまた溜まつていたものが決壊し、すすり泣き始めた。

京子、鈴鹿の反応を見るに、どうやら二人には大変な心配をかけたみたいだった。

ここは下手な言い訳をせず素直に謝っておこう。うん、それがいい。

僕は姿勢を整え二人に真つ直ぐと向き直つた上で頭を下げた。

「京子、それに鈴鹿。心配かけて本当にごめんなさい」

シンプルで飾り気の無いものだが、二人への素直な気持ちで謝つた。

それから二人が落ち着くまで、ぎこちないながらも宥めることに終始した。

☆

彼女たちがようやく落ち着きを取り戻し、普通に話せる状態になった頃には、日が傾き始めそうな時間になっていた。

「もう一人で危ないことはしないこと」

切り出したのは京子だ。

泣き止んで落ち着いたのか、先ほどの錯乱状態とは打って変わり、有無を言わせないような断定的な言葉だった。

しかしどんなに注意を払ったところで魔術という行為自体が死と隣り合わせなのだ。危ないことをしなくても、結果的に危ないことに足を突っ込むのである。

京子の気持ちは分からないでもない。しかし――

「京子の言いたいことはわかるけど、魔術を扱う以上は今日みたいなことはよく起きるよ。それは以前に説明したとおりだ。

魔術っていうのは常に死と隣り合わせなんだ。そしてそれは僕に限らず京子と鈴鹿、二人にも言えることだよ」

「っ――」

鈴鹿は息を呑み、京子は何かを考える仕草で反応する。

「僕の姿を見て怖くなつたのなら、やはり二人が魔術を覚えるのは辞めたほうがいい。僕はそう思う」

これは二人にとつてはよく考えて欲しい問題なのだ。

僕はさらに二人に考えてもらうために、過去に魔術に関わろうとした人物の話をした。

「——7、8年前だったかな。

僕が魔術を覚えてからというもの、ある人にことあるごとに魔術を教えて欲しいと言われててね。

……でも当時の僕は誰かに魔術を教えようとは思わなかった」

魔術の本質は隠すことだからね、と僕は続けた。

「ある日、僕は魔術の鍛錬中に魔術が暴走したことが切っ掛けで、骨折や深い裂傷などの瀕死の重傷を負つたんだ。

幸いこの刻印のおかげで死ぬことはなかった。……いや、それでも1週間程度の入院をすることになったんだけど」

魔術刻印によつて生命活動が止まることはなかったが、重傷なものには変わりが無い。

全身に刻印を刻めば瞬時に復元することも可能なだろうが、あいにく僕の魔術刻印

はそこまでの復元能力を備えていない。

「問題なのは、重傷を負った僕の姿を目前でその子が見ていたことなんだ。

その子は当時は10に満たない子でね。その僕の姿というのが堪えたんだろうね。

しばらく心身自失っていうのかな。憔悴してひどい状態に陥ってさ」

僕はあの日のことを思い出す。

傷も癒え家に帰ると、あの子が食事も殆ど取らずに自室にこもったままだと聞かされた。

直ぐに様子を見に行くと、その子は僕を見るなり、やつれた顔のまま泣き出した。

そしてごめんなさい、ごめんなさいと呪詛のようにならずと言いつつ続けた。

それを見かねた僕は父さんにある事を相談した。

今のままでは体力的にも精神的にも潰れかねない。

だからあの日のことを忘れさせることにした。

そして父さんから了承をもらったあと直ぐに実行に移し、魔術による暗示であの日の記憶を全て忘れさせた。

同時に魔術を覚えようと思いが向かわないようにもした。

「結局のところあの子は以前の状態を取り戻た。その代わりあの子が魔術を覚えることはなかったけどね」

「ここまで話したところで京子が疑問に思っていたことを言った。

「その子って、やっぱり、夏目くんのこと？」

「うん。今でこそ元気な姿でいるけどあの時は本当もうダメかと思ったよ」

「夏目つちにそんな過去があつたなんてねえ……」

「トラウマっていうのは心身を容易く壊すんだ。感受性の高い年頃なら特にね。

……繰り返しになるけれど、京子も鈴鹿も今回の件で少しでも魔術が怖いと思つたのなら、今からでも遅くはない。魔術のことは諦めた方がいい」

だが彼女たちにはこの問い自体が愚問だつたようだ。

先に切り出したのは京子だ。

「……あたしは、諦めたくない。ううん、今回のことでその思いは強くなつたわ。

あたし、あの時、碧くんが倒れたとき、何も出来なかつた自分がすごく嫌だつた。

もしもあの時、あたしが魔術を知つてたら碧くんを助けることができたかもしれないって。

たらればの話つてことは分かつてるっ！でも、でも……もう、あんな思いは嫌なのっ！碧くんの隣に立つて共に歩んでいくためにも、あたしは魔術を知りたい!!」

やや感情的になりながらも自分の無力さを嘆き、それをよしとしない京子。

そして京子の胸の内を聞いた鈴鹿が続けて言った。

「あ、あたしも、もちろん魔術は諦めないわよ。怖くなったただなんて愚問ねっ！」

京子に気圧されたのか、少しどもりながらも魔術を諦めたくないという鈴鹿。

まあ二人とも諦めるつもりは、さらさらないらしい。

「はあ……」

姉さんのことを話したら気が変わると思ったが、彼女たちはそんなに弱くなかったよ
うだ。

……いや、もうやめよう。

散々言ってきたことなんだ。

彼女たちの意思はもう十分すぎるものだ。

「わかったよ。悪かった。試すようなコトしてごめん」

そんなやりとりをしていると僕の頭上から声が聞こえてきた。

「ご主人もたいへんツスねー」

声が聞こえてきた方向に目を向ける。

しかしその方向には何もいなかった。

だがその代わりに僕の方向に視線が二つ。

京子と鈴鹿が僕を凝視していた。

「え……？　な、なに？」

その視線に戸惑いを隠せずにいると、鈴鹿が僕……いや、僕の頭上を指さしながら、
「碧……その、頭の上の青いの、何？」

頭の上とは何だ、と思いつつも手を頭上にやり、そいつをむんずと掴んだ。

「ぎゃふっ！」

あまりにも有り体な断末魔をあげる青い物体。

ああ、なるほど。　これが彼女の言っていた——

「おまえ、プロイキツシャーってやつか？」

「そ、そうツス……。　あの、ご主人。　その手を早く放してもらえるとありがたいッ

ス」

「ああ、すまん」

そういい手を放すと青い鳥は宙に舞い再び僕の頭に留まった。

解せぬ……。

「……なんで僕の頭に留まる？」

「いやー、ご主人の頭、なんとなく留まり心地がいいツス」

「……はあ。　まあいい。　それで？　おまえ、僕の使い魔っていうカテゴリーでいい

わけ？」

「あ、それで合ってるツス。それとお前じゃないツス。ロスト・ロビン・ロンドって
いうマイ女神に付けられたちゃんとした名前があるツス。ロビンって呼んで欲し
いツス」

「あれ？ プロイキツシャーが名前なんじゃないの？」

「プロイキツシャーは自分を含めた使い魔たちの総称ツス」

「使い魔たちってことは、ロビン以外にも似たようなのがいるんだ？」

「そのとおりツス。でも、こちらの世界には自分しかいないツスからその括りも不
要ツスね。　ハハハ——」

「ふーん」

「ああっ！　そのまるで興味がなような返答！　ご主人が聞いてきたのにあんまりツ
ス!!」

「いや、まあ、実際あまり興味ないし……」

「ひどいツス！　自分、ご主人の使い魔なのに……」

「それだけ分かれば十分だよ。一応ラインの繋がりも感じるし、僕の使い魔というの
は間違いないみたいだ。まあ、用があれば呼ぶから外で遊んできな」

「わー。　使い魔にもプライベートな時間を提供する配慮。　ご主人優しい人ツスね。

わかったツス。　お言葉に甘えて呼ばれるまで外で待機してるツス」

騒がしいのが翼をばたつかせて外へ出て行った。

どうやら言われたことを都合のいいように解釈する脳をしているようだ。もつとも僕にとっては扱いやすいため、その方がいいわけだが。

しかし、なんだ。

初めての使い魔があんな訳の分からないヤツになるとはなあ。

視覚等の共有もできないみたいだし、でもそのくせあの規模の使い魔にしてはそれなりの魔力を使っている。

一般的な使い魔ではないのかもしれないな。

……あまり気は乗らないが今度ロビンからそのあたり聞いてみるか。

僕が使い魔のことで考え巡らせていると、それまで僕とロビンのやりとりを啞然として見ていた二人が気になったことを聞いてきた。

「碧くん、あの青い鳥はなに？」

「んー、僕も詳しくは分からないんだけど、先ほど話したお姉さんからもらった使い魔、陰陽術的に言うなら、護法式のようなものだよ」

「あつ、あれ護法だったんだ？ てつきり本物の鳥かと思ったわ」

「……本物の鳥はしゃべれないわよ、キョーコ。それで、あの鳥は何ができるの？」

「特に何もできない、かな。 感覚共有もできないし、戦闘に長けているわけでもなさそ

うだし。あれをくれた彼女が言うには殺されることだけは得意っていったよ」

「殺されることだけは得意って……何の役にも立たないじゃない」

「そだね」

「なんでそんなのを護法にしたのよ？」

「いやあ、彼女が僕にやるっていうものだから。じゃあ、貰えるモノは貰っておきま

しょうということだ」

「……そんなんでいいの？」

「いいんじゃない？ まあ、ロビンは会話による意思疎通ができるし、鳥の形をしているから偵察くらいは出来ると思うよ」

「そう。碧がそう言うのならもういいわ。——でもさ、根本的に碧の問題は解

決していないわよ？ ほら、強いやつを使役するって話」

「あつ……」

「はあ……忘れてたわけね……」

「ふふつ……碧くんって意外とそういうところが抜けてるのよね」

鈴鹿には呆れられ京子には笑われてしまった。

完全に頭から抜けていた。

そうだ。鈴鹿の言う通り僕が降霊術をしたのは近接戦闘の強い使い魔を使役する

ためだった。

彼女の依頼やロビンのことにリソースを取られ、当初の目的が頭から完全に消えてたよ……。

だが、どうする……？

英霊を召喚することはもはや不可能。

……ならばやることは一つしかないな。

「……造るか」

ボソツと呟いた言葉に、

「造るって何を……？」

ごく自然な反応を鈴鹿がした。

何をつて、そりやあ衛兵センチネルに決まっている。

幸いその手のものには詳しい。

ならばヒトガタの衛兵センチネルを造ればいいのだ。

最初は穩便フアマリアに使い魔のカテゴリ内で収めておくように考えていたが致し方ないだろう。

少々物騒な代物ではあるが、全ては僕を困らせた鏡が悪い。

文句なら鏡に言ってくれ。

ふはは、これで勝つる。

……とは言ったものの、素体や道具は手元にはなく、実家に嚴重に封印してある。

少々手間だが取りに行くか。

「ああ、いや、なんでもない。独り言だよ。——この話は忘れよう。いずれに

しても英霊の使役が無理だと分かった以上、どうすることもできないのだから」

「そう?」

ヒトガタの制作過程はエグいものがある。

制作過程を見せたくないというのが僕の本音だ。

鈴鹿と京子にこれを見せるわけにはいかない。

しかしタイミングのいいことに二人はこれから魔術を覚えていく。

その第一歩として魔術回路を強制的に開いてもらう。

この工程を踏むと恐らく二人とも一、二週間は身動きが取れないだろう。

そうなれば僕個人の十分な時間を取ることが出来る。

ならばその間に造ってしまえばいいのだ。

よし、方針は決まった。

ならば善は急げだ。早いところ計画おもいつきを実行に移そう。

僕は二人に「少しここで待ってて」と言い残しある物を取りに部屋へと戻り、再び居

間へと戻った。

そして二人へ持ってきたものを見せて、

「二人には今日の夜から魔術について覚えてもらうよ。その第一歩としてこれを使つてもらおう」

二人に見せたのは親指サイズのやや大きめの青と赤の宝石。

これには僕の魔力が溜め込んでいる。

余談ではあるが僕はこの宝石を使って魔術行使をすることはできない。

石に魔力を溜め込むことはできても、系統の異なる魔術系統では、そこから発展させることが出来ないからだ。

だが、なにも宝石を使った魔術が使えなくても、この宝石には他の使い道があるのだ。

「わあ……きれいなサファイアとルビーねえ。———どうしたのこれ？」

「ホント、やけに高そうな宝石ね……」

高そうではなく、相当に高い。

宝石の値段など知らなかった僕を驚かせるのに十分なものだった。

ならばゴミくずのような宝石でもよかったのではないかと思うだろう。

僕も最初はそう考えてゴミくずのような宝石で魔力を溜められるかやってみた。

しかし結果は失敗。

結論としては値段に比例することに魔力を溜めることができるといことが分かった。

もちろん単純に高ければいいというものでもない。

しかし高いものにしか魔力を溜めるのに適した宝石がないのだ。

魔力を溜め込むことのできる適正のある宝石というのが、長年日の光を浴びることのなかったものに限定される。

こういった宝石というのは、それなりの値段になって市場へと流れてくる。

ともすれば高くなるのは必然。

僕は少なくとも金額を払って魔術的には最高級の宝石を手に入れたのだ。

しかしそれは決して無駄ではなかった。

宝石魔術についてド素人の僕が、この宝石に魔力を溜め込もうとしたところ、すんなりと成功したのだ。

値段に見合った宝石であるということは、このことからいっても十分と言えた。

「高いのは否定はしない。でも値段に見合ったものだと言えるよ」

僕はこの宝石に対する率直な評価を言った。

だが、その言葉を違った形で受け取った人物がいた。

「こ、これ、あたしたちが貰っていいわけ？ な、なに、プロポーズのつもり？」

その鈴鹿の言葉を聞いた京子が素早く反応。

「えっ?! そうなの、碧くんっ?!」

言い方がまずかったのか、どうやら二人とも斜め上の反応をしてしまった。

申し訳ないがその幻想はブチ壊す。

「勘違いしているところ悪いんだけど、プロポーズではないよ。そもそもそれが理由

なら宝石を装飾もしないで渡すわけがないよ」

それはそうだと納得する二人。

そう、これはプロポーズなどではない。

一般的には投薬によってじつくりと魔術回路を開くのがセオリーなのだろう。

しかし陰陽師というのは変に魔力を使っているせいもあって、投薬によるものでは十分な成果が得られない可能性があった。

宝石ならば本人たちに負荷は掛かるかもしれないが確実だ。

なにより手間が少なくて済む。

彼女たちが魔術回路に悪戦苦闘している間に、僕は僕の目的のために行動をする必要がある。

ならば方法としては、これ以外にありえない。

「今日の夜くらいから京子と鈴鹿には、この宝石を使って魔術回路を強制的に開いても

らう」

僕は高らかにそう宣言し、
計画おもいつきを実行に移そうとしていた。

2—8. 魔術回路（後編）

「さて、それじゃあ早速始めてもらおうか」

夕食や入浴などを済ませて身には寝間着を纏い、おおよそ本日行うことを終え、あとは寝るだけといった時刻にさしかかった頃、僕はおもむろに二人へ催促した。

例の宝石を二人に渡して、しれっと。

「ねえ……。 ホントにこれ、飲み込まないと駄目なの？」

鈴鹿がまるで信じられないというような疑問を口にする。

鈴鹿の疑問はもつともな話である。

なぜなら親指サイズはあろうかという宝石を飲み込めというのだ。

普通に考えたらそんなの無理に決まっているだろうと考えるだろう。

しかしこれをしなければ何も始まらないのは確かだ。

「ああ。 飲み込まないと駄目だ。 嫌がる気持ちはわからないでもないけど、これが

一番確実なんだ。 —— さあ、一気にいっちゃって」

その言葉を聞いてそれまで静かに話を聞いていた京子が意を決したように、ルビーを口の中に放り入れ、ごくりと、それを一気に飲み込んだ。

隣で見ていた鈴鹿も意を決し、京子に続けとサファイアを手に取りそれを口に運んだ。

二人の表情が苦痛に歪む。

やはり大きすぎたのか、なかなか苦しかったようだ。

「ううう……、喉が痛いわ……」

「碧、なんてもの飲ませるのよ……。いくらなんでも大きすぎるわよ……」

「うん。よくがんばったね。えらいえらい」

そう言つて僕は京子と鈴鹿の頭を撫でた。

「……それでこれから何をすればいいの？ つーか、宝石なんて飲み込んじゃつて大丈

夫なんでしょうね？」

「それは大丈夫。体内でちゃんと溶けるから安心していいよ。それよりもそろそろ

溶け始めるころだから意識をしっかりと持っておかないと気絶するよ」

「……どういふことよ？」

鈴鹿が疑問をぶつけてきたときに、それは隣から起こった。

「うっ——、くう……」

「えっ!? な、なに? どうしたの、キョー……、——!?」

二人はその場に崩れ落ち、力なくうめきだした。

「どうやら二人ともきたようだね」

だが彼女たちから一切の反応は無かった。

いま彼女たちが苦しんでいるのは他でもない。

魔術回路を強制的に開いたためだ。

いわば彼女たちが希望した魔術がようやく使える状態になったということだ。

様子を見てみる。

玉のような汗を流しながら頬は赤く熱っぽい感じだ。

なるほど、相当苦しそうだ。

もつとも初めて魔術回路を開いたのだ。

いままで体験したことのない未知の苦しみが、彼女たちの心身に相当な負荷をかけている状態を鑑みれば今のこの状態は無理もない。

「話さなくていいから、その状態のまま聞いて欲しい。……といっても話す余裕はないと思うけどね」

彼女たちに反応はない。

僕は続けた。

「いま二人の状態というのは宝石の効力で魔術回路を強制的に開いた状態といっておくよ。」

……といつても解りにくい。

まあ、魔術回路っていう疑似神経を体内に作つたつてこと。

これによつて晴れて二人とも魔術を使える身体になつたんだよ。

そして二人が感じている身体のだるさや熱っぽさは1〜2週間くらいは続くと思う」
彼女たちがこの状態に慣れていくのには時間が掛かるのは想像に難しくない。

しばらくはまともな行動もできないだろう。

当然、陰陽塾もしばらく休むことになるのだが、それは明日にでも僕から塾長に伝えておこう。

1〜2週間とは言ったがこれには個人差がある。

が、二人とも陰陽術のセンスがあるのだ。

魔術にもセンスがあつて然るべきだし、そうするともつと早く慣れるのかもしれない。

「魔術回路を作るのは最初の一度だけ。

一度これを体験して魔術回路を作つてしまえば、あとは意識的にそれを切り替えるだけがいい。

この切り替えるイメージっていうのは人によつて様々だから、京子と鈴鹿に対してこれだとは断言できない。

ちなみに僕の場合は魔術回路に繋げるイメージで、自身の中でオンとオフを切り替えて魔力を成してるんだ」

僕の場合は指を弾いたり「接続^{セッ}」という言葉によるものでそれを行っているが、彼女たちはどういふものでイメージをするのだろうか。

おっと大切なことを言い忘れた。

「そうそう、その今の開いた状態を閉じる方法なんだけど、いまの状態を落ち着かせるようにしていれば身体が勝手に閉じてくれるよ。」

「回路を閉じることで今の苦しみからは大分解放されると思う」

「——、そ、それを、早くいいなさい、よ……」

「……そ、そうね。あ、あたしも、早く、聞きたかったわ」

「へえ……、もう喋れるなんてね。どうやら二人とも陰陽術をやっていたせいか、センスがあるみたいだ。」

「……ん、わかった。もう喋らなくていいから、いまは身体の状態を落ち着かせることに専念してくれたらいい」

彼女たちはわずかに頷き、額から汗を流しながら苦しそうな表情で、必死に僕の言葉通りの行動を遂行していった。

それから1時間くらいが経っただろうか。

ようやく彼女たちは落ち着きを取り戻すことに成功したようだ。だがその身体は相当疲弊しているように見て取れた。

「それじゃあ、二人とも相当疲れているようなので、手短に終わらせるよ。」

先ほども言ったように今回は宝石を使って外部からの刺激を与えることで強制的に二人の魔術回路を作ったんだ。

これによって次からは意識的に切り替えることで魔術回路を扱うことができるようになったわけだけど……

急に切り替えて言われてもピンとこないかもしれない。

まあ、そのうち明確にイメージできるようになるよ。

あとはそれを意識的に切り替えるようにして、そのスピードを速くするだけなんだ」
僕の言葉に反応はした。

したが、その声に力はなく、

「……わかったわ」

「……気持ち、悪い」

今すぐにでも昏倒しそうな状態で、これ以上は続けられそうもなかった。

一応、回路の制御についての一通りの説明はした。

それに短時間で魔術回路を制御した。

これは大きな前進であり、大したものである。

ならばあとはいくつくりと休ませて問題ないだろう。

「今日はもうやめにしよう。」

それとしばらくは身体の熱っぽさやだるさがあるから、何かあつてはいけない。しばらく行動は控えて、陰陽塾にも行かないほうがいい。

そのあたりは僕から塾長に話を通しておくから、二人はゆっくりと体調の回復を待つていてくれ。

というわけで、今日はお開き。二人ともお疲れ様」

僕が話し終わると、二人は頷いたあと、ゆらりと立ち上がり、ふらふらしながら歩き、そして再びその場に崩れた。

これは一人じゃ無理だな。

僕は部屋にいる秋乃を呼び、二人をそれぞれの部屋に運ぶのを手伝ってもらった。

運び終わったあと、秋乃からは「二人ともどうしたの？」と聞かれ、そのまま魔術を教えた旨を伝えた。

そしたら秋乃は「なんでそんなめんどくさいもの覚えようとするのかな？」などと真剣に悩んでいた。

いまを楽しく生きているからか、性格がものぐさだからかは分からない。

秋乃にとって二人の行動というものは理解しがたいのだろう。

しかし、秋乃がそう考えるように、京子と鈴鹿にもそれぞれの考えというものがあるのだ。

僕は秋乃に「秋乃も一緒にやれば二人の気持ちも分かるかもしれないよ」と言ったが、返ってきた言葉は「やだよ」。そんなことするなら昼寝してたほうがいいもん」と秋乃らしい回答だった。

僕は苦笑しながら頭をぼんぼん撫でて、一緒にそれぞれの部屋へと向かった。

☆

あれから1週間が経った。

京子と鈴鹿は未だ完全回復には至っていない。

京子と鈴鹿の魔術回路を開いた翌日、僕は倉橋家に赴き、京子と鈴鹿の件で塾長と話をした。

なにしろ入学して早々1、2週間ほど陰陽塾を休むのだ。

塾長からは何か言われることを覚悟していたが、しかし、予想していたほど何か言われることはなかった。

どうも僕がここに来る前に京子から連絡を受けていたらしい。

もちろん魔術ということはボカして、陰陽術の開発というように伝わっているみたいだが。

つまり塾長は僕がここに来る前に、事前にある程度の事情は承知していたということだ。

そのおかげで事が進むのは早かった。

僕は塾長に、京子と鈴鹿、そして僕を含めた三人の陰陽術の開発・研究という名目の休暇申請を行った。

その結果、特例ではあるが、2週間の自宅研究を言い渡された。

代わりにその研究に関するレポートの提出と引き替えにという条件付きでだが。

僕はその塾長の条件を呑み、了承の意を示した。

これでここでの用事はこれで終わった。

ならば長居は無用。

塾長に弄られる前にここから撤退だ。

和やかな表情で見送る塾長を尻目に、そそくさと倉橋家をあとにした。

倉橋家から逃げ出すように出てきた僕は、その足で実家へと向かった。

目的は素体と道具の回収。

実家へと着いた僕は父さんへの挨拶もそこそこに自分の部屋へと向かった。

部屋に着くと早速、机の引き出しの奥にある鍵を取り、部屋の隅にある畳一畳分はあろうかという物入の鍵穴に鍵を差しした。

そして「接続」と紡ぎ、物入れの解錠処理を行った。

するとガチャリと施錠が解除された。

この物入れは鍵と僕の魔力を流すことで解錠する仕組みになっている。

もしこれ以外の方法で開こうとしたり壊そうとすると、物入れに施された一千字のルーンが対象を襲う。

これが起動すれば対象を骨も残らず燃やし尽くしても余りあるオーバーキルの火力になるのは明白である。

僕がなぜここまで厳重な管理をしてあるのか。

それはこれまで魔術の研究をしたときに作った数々の品々が保管されているからだ。

当然、中には危険きわまりないものもある。

その最たるものが物入れ下段に保管されている人形である。

人形は全部で3体。二体は完成品。もう一体は未完成。

僕は一考した後、完成品一体と未完成の人形ヒトガタを取り出し、道具と一緒に特注の大きなトランクに詰め込んだ。

僕はトランクを引きずって父さんへの挨拶もそこに足早に屋敷から出た。

そして――

「ふ……ふは、ふはははっ！ つ、ついに完成したぞ!!!」

深い夜、時計は午前一時を指している。

あまりの達成感に土蔵の中で一人大声で叫んでしまった。

僕が大きなトランクを引きずってこの屋敷に戻ってから早1週間。

京子と鈴鹿の体調が万全でないことをいいことに、人目を避け細心の注意を払い、土蔵の中でコツコツと人形作りに没頭した。

その結果、未完成だった人形ヒトガタはついに今日完成したのだ。

我ながらすごいものが出来たと自画自賛である。

過去に造った完成品の人形とは異なり、これは人間そのものだ。

誰が見ても人形だと気づく者はいないと断言できる。

見た目はもちろんのこと、内部構造に至るまでだ。

この人形のモデルになったのは姉さんの式神だった北斗。ボーイツシユな装いの似合いそうな、ショートカットの髪をした少女である。北斗をモデルにしたのは単に制作の途中で容姿に悩んだからだ。そのときに姉さんの式神を思い出して真似ることにした。しかし、今はまだこれが動くことはない。

なぜなら——

僕が脳内で考えに耽っていると、土蔵の扉が開く音がした。

「誰だ——!!!?」

僕は絶叫に似た声と共に開いた扉に振り返った。

☆

「うう……体が熱い……。——ダメだわ。やっぱり寝付けない……」

時計を見ると午前一時前。

あの日、碧くんに魔術の指導を受けてから1週間が経った。

あの日から比べると幾分楽にはなったが、熱っぽさは相変わらずだ。

今日みたい寝付けないこともしばしばある。

こういうときは縁側で夜風に当たるとよく寝付けるためいつもそうしている。

「この屋敷の夜風って気持ちいいのよね」

あたしは縁側へと足を向けた。

縁側へ着くと先客がいた。 鈴鹿ちゃんだ。

「あら、鈴鹿ちゃんも涼んでるのね」

あたしはそう言いながら年下の少女の横に腰を下ろした。

すると呼ばれた少女はこちらを向き、やや怠そうに答えた。

「んー、キョーコ？ あんたもまだ熱っぽいの？」

「そうなの。体が火照っちゃって、なかなか寝付かなくて」

「……これ、いつになったら治るのかな？」

「さあ……。でも碧くんは1〜2週間くらいは続くっていつてたから、そろそろ治る

んじゃないかしら」

「……なんていうか、魔術って、地味にキツイわね」

「そうねえ。一瞬の痛みよりも、こう地味に長く続く方がしんどいわね」

「はあ……」と二人そろって溜息をつく。

すると土蔵の方から大きな声がした。

「な、なに、今の」

「土蔵の方からだったわよね……？　もしかして碧くん？」

あたしは念のため、碧くんの部屋を見に行き、碧くんがいないことを確認した。

そして再び鈴鹿ちゃんのところへ戻ってきた。

「どうだった？」

「部屋にはいなかったわ」

「となると……」

「土蔵で碧くんの身に何かあったと考えるべきね」

あたしたちは顔を見合わせて頷いたあと、重い体を引きずりながらも土蔵へと走って行った。

土蔵の扉を半開きにして中の様子をうかがう。

白熱灯による光が中を薄暗く照らしている。

中央には動く影が一つ。

暗がりによく見えないが、たぶんあれは碧くんだ。

あたしは碧くんに声をかけようと扉を全開にした。

すると、

「誰だ——!!!?」

と、大声で怒鳴られた。

「きゃあ——!!!」

びつくりしたあたしと鈴鹿ちゃんは悲鳴を上げその場に尻餅をついた。

「いったーい！ ちよつとなんなの!! 大声出さないでよ、碧」

あたしも何か言おうとしたが、碧くんの顔を見てその考えは消えた。

なんだろう、酷く狼狽してる？

碧くんの普段見せることのない顔がそこにはあった。

「碧くん？ どうかした？」

あたしは立ち上がって碧くんの方へと近寄った。

すると碧くんはあたしが近寄った分だけ後ずさった。

どうしたんだろう……?」

あたしはまた一步碧くんに近寄った。

するとやはり碧くんは一步下がった。

「碧くん？」

「な、なにかな？」

「ねえ……。何か隠してない？」

「そ、そんなわけないよ。何も隠してないし」

あやしい。

どうも碧くんの後ろにある何かを隠しているようだった。

「その後ろに隠してるの、何？」

「なんでもないよ。ほら、もう夜も遅いから戻ろう、な？」

意地でも見せないつもりなのね。

いいわ、そこまであたしたちに見せたくないものなら逆に見たくなつたわ。

あたしは鈴鹿ちゃんに目配せをした。

そして――

「今よっ！」

そう叫んだ瞬間、あたしは碧くんを捕まえて、鈴鹿ちゃんは直ぐに立ち上がり碧くんの背後にある物のところへと走った。

碧くんは必死に鈴鹿ちゃんを捕まえようと暴れたけど、あたしの力でも意外なほど簡単に押さえることが出来た。

碧くん見た目通りあまり力ないのね……。

必死に暴れながらも「やめろおー」と断末魔を上げる碧くん。

なんだかあたしたちが悪いことしたような気分だわ。

そう考えていると鈴鹿ちゃんのかすれた声が聞こえた。

「なに……これ……」

その瞬間、碧くんから力が抜け落ちて項垂れながらその場に崩れ落ちた。



いずれ見せるつもりだった。

だが今はまずい。

なぜなら——

「碧。……この子、一体どうしたの？」

僕を捕まえてた京子もそれを見ようと鈴鹿のそばに駆け寄り

「えっ!? ……女の子、しかも裸……」

そうなのだ。

今二人の目の前にある人形のモデルは北斗。ボーイツシユな女の子なのである。

しかも完成したばかりなので、その子には何も着せていない。

そしてこれから彼女たちが連想するであろうことは想像に難しくない。

「碧。この子どうしたの？　つーか、どこから連れてきて、この子と今まで何してたのよ!!!」

「碧くん。」

「この子、なんでこんなところで寝てるの？　しかも服どころか下着すら着

けていないし、一体何をしてたのかしら!」

ほらね。

案の定、京子と鈴鹿は僕に詰め寄り胸ぐらを掴みながら問い詰めてくる。

薄暗い中、全裸の女の子と一緒に何かをしていたのだ。

指摘されないとと思う方がおかしいだろう。

僕だって事情を知らなければ気にはなる。

「はあ……」と溜息を一つつき、僕は彼女たちに説明した。

「つまり、この子は本物の人間と変わらない人形だっていうの？ ……碧、嘘をつくならもうちよつとマシな嘘をついたほうがいいわよ？」

半眼で呆れているような、軽蔑がやや入ったまなざしで僕を見る。

ま、普通はそう思うよな。

鈴鹿の反応は正しい。

しかし、

「それが嘘じゃないんだなー、これが」

この人形は誰が見ても人形だと気づくことはない。

なぜならそうなるように造ったのだから。

「そんな……、嘘よ……。だってこの子、どこからどう見ても普通の女の子じゃない

!？」

「この人形のコンセプトは人間。人間以下でも以上でもなく、普通の女の子と同等の

性能を持った人形なんだ。

鈴鹿の言うように見た目もそうだけど、中身の構造、血液や筋肉の繊維に至るまで人

間と完全に同一体。

僕の魔術には人体工学も含まれるから、こういったヒトガタを作ったりもするんだよ。

でも、ここまで本物と区別できないほどのものを造ったのは初めてだけどね」
それを聞いて絶句する鈴鹿。

すると今度はそれまで静かに聞いていた京子が質問してきた。

「ねえねえ、碧くん。この子、人間と同じってことは、動いたりしゃべったりできたりするの?」

京子は鈴鹿とは方向性の違った内容の質問だった。

「これはただの器で、この子がこの子である唯一のもの……、魂がないんだ」
「魂……?」

「そう。ここには人形というカタチのものは存在するけど、この人形を動かすものはない。」

つまり、今はまだ動かないししゃべりもしないってこと」

「なんだ。ちよつと残念ね……。こんなにかわいい子ならおしゃべりしたら楽しいかと思っただけだ」

「楽しいかどうかはわからないけど、近いうちにこれ、動く可能性はあるよ」

「え!? 本当?」

「うん、本当。ただそういう可能性もあるってだけ。あまり期待されても困るけど」

この器に入る人が拒めば無理だし、承諾すれば京子の期待に応えることができる。

すべては彼女に次第といったところだ。

まあ、僕に出来ることはやったつもりだし、こればかりは今考えても仕方のないことだ。

ふと、僕と京子がそんなやりとりをしていると、

「この子、どこかで見たことあるのよね……」

と呟いた。

そして、

「あーっ！ 思い出した！ 春虎と一緒にいたあの女だわ」

この人形は姉さんの式神だった北斗を模したものだ。

そして去年の夏に鈴鹿が姉さんたちと接触した際に、どうやら北斗にも接触しており、この人形を見て思い出したようだった。

「ああ、そうか。 鈴鹿はあのととき、この子を見たことがあるんだね」

「ええ、見たわ。 というか、あの式神を壊したのもあたしなのよ……。 それで春虎が

シヨック受けちゃって……」

それは初耳だな。

そういえばあれ以来、姉さんが北斗を操作しているところを見たことが無かった。なるほど、鈴鹿に壊されたせいだったのか。

「そんなことがあったんだな……」

ただ、あの式神、北斗って言うんだけど、その北斗を操作していたのは姉さんなんだ。なんでも男装するためにボーイッシュな女の子を作って練習していたみたいだよ。それと鈴鹿が北斗を壊してくれたおかげか知らない。

けどあの事件前後で、姉さんと春虎兄さんの仲が以前より明らかに親密になってき、結果論だけど逆によかったんじゃないかと思うよ。

ま、鈴鹿が気になるなら、姉さんと春虎兄さんに一言謝っておけばいいと思うよ」

「はあ!!? あの女が夏目つちの式神い!!? つーか夏目つちと春虎ってそういう関係だったの!!!」

「あ、あ、碧くん!! それホントなの!!」

「え? あ、ああ。春虎兄さんは気がづいているのか微妙な節があるけど、姉さんは昔っから春虎兄さん一筋だよ」

「そ、そうなんだ……。意外だわ。まさか夏目つちと春虎がそういう関係だったなんて……」

「あたしも驚いたわ……。で、でも、そ、そうよね。夏目くん女の子だものね……」
「うん。まあそういうわけだから。それと、鈴鹿。謝りに行くなら僕も一緒にっ
いて行くから、行くときは声かけてくれ」

「う、うん。 ありがとう……」

僕と鈴鹿がそんなやりとりを見せているなか、京子は何かを見つけたのか、奥の方へ歩いて行つた。

「あら？ あれは何かしら……？」

京子が奥にある何かを見つけたようだ。

だが、ちよつとまで。 やめろ、それはマジでやばい。

「京子、それ以上そつちに行つてはいけない。 理由はあとで話す。 だからこつちに

戻つてくるんだ」

「え？ どうして？」

土蔵奥の暗闇からがさついた音が聞こえる。

暗闇のため全容は見えない。

が、不吉な二本の足と共にそれは一歩、また一歩と近づいてくる。

Solitari^{ひと}putris^り in^でferos^腐.
 Vivimus^{私は眠り} in^のsonnis^{中で生きている}.

Hodie^{今日} mea^{は私の} obit^{の命} die^日, et^で mea^{あり、そ} natus^{して} die^誕.
 T^{さあ、貴方に会いに行こう。} obire^{いこう。}.

A^私u^のt^未e^来m^の m^未e^来a^の f^はu^殺t^さu^魂r^はa^は n^はe^不c^滅a^でt^す a^す e^す r^す a^す m^す.
 A^生n^命i^の m^の a^の e^の d^定e^義f^はi^あn^いi^まr^ま a^いm^いb^いi^いg^いu^いs^で e^す t^す.
 M^私a^は n^はe^亡s^で s^靈u^で s^す u^す m^す.
 C^どo^うn^かv^夢e^でn^会i^いe^まb^まa^しm^しu^いs^い i^まn^し s^しo^うm^うn^うi^うu^うm^う i^うp^うs^うa^う.”
 T^憎e^らo^らd^らi^ら, i^らe^らt^らe^ら a^らm^らo^ら.”
 ま^まず^ずい^い……。

あれは実家に封印してあった完成品の内の一体。

持ってきたはいいが、北斗（仮）の作業を先にしていたせいで、あれはまだ改修が済んでいない。

もともとこの人形は実家防衛用の衛兵^{センチネル}として造ったもだ。

そのため複雑な命令処理は行っていない。

僕や家族を除く者が人形を中心とした半径数メートルに入った侵入者を感知したら襲うようにしてあり、解除方法は僕が直接触れるか、人形の完全破壊しかない。

先ほど京子が近づいたことで、どうやら起動してしまったようだ。

衛兵は既に詩文を囁いている。

この詩文は呪詛だ。

呪詛は対象を自分自身として、負の連鎖を発生させている。するとどうなるのか。

呪い呪われる事で魔力を発生させているのだ。しかも永久に。

詩文を囁きだしたということは魔力が発生しているということ。

つまり人形は攻撃態勢にある！

そう思った矢先、人形の眼が赤く光った——

「っ——京子、伏せて!!」

咄嗟に言った言葉だが、京子は悲鳴を上げながらも反応してみせた。

衛兵が眼から呪いガンドを飛ばした瞬間、僕の言葉に反応した京子は地面に伏せてやり過ぎたのだ。

よくやった、京子！

だが褒めるのはあとだ。その余韻に浸っている時間はない。

僕は人形が次の攻撃に移る前の一瞬の隙を突いて回路を起動しながら衛兵へ向かって走り、そして、

「お前の出番は今じゃない！」

衛兵に触れ強制停止の術式を起動した。

一瞬の静寂が場を包む。

が、次の瞬間、衛兵は糸が切れたようにその場から崩れ落ち完全に機能を停止した。とにもかくにも被害には至らず終わりを見せた。

2—9. 出発

「怪我はないか、京子？」

「一体なんなのよ……もう……」

ガンドを避けたときに強く打ったのか、お尻をさすりながら涙目な京子。

そんな京子に手を差し出す。

京子はその手を掴み起き上がった。

「ごめん。 対侵入者用の人形が誤作動したみたい」

「してみたって……」

誤動作であたしは狙われたのかと、ますます涙目になる京子。

そんな彼女を必死に慰め、そして落ち着きを取り戻したときを見計らって、

「とにかく、もういいだろう。 もう夜も遅いし話は明日だ」

僕は強制的にここでの話を打ち切り、二人と一緒に土蔵から出て嚴重に鍵を閉め屋敷

へと戻った。

「というわけで——」

「何が、というわけ、なのよ。 誤魔化さないで昨日の夜の話をしなさい。 昨日の話を」

朝。

いつもよりも早く朝食を取り終え秋乃が部屋に戻ったときのこと。

僕がこの場から逃げだそうと席を立とうとしたとき、鈴鹿に服をつかまれて、それは未然に阻止された。

逃げられないと悟った僕は溜息を一つ。 鈴鹿の要求に応じて昨日の出来事について説明した。

「碧くんのことだもん。 このくらい普通のことなのよね、きつと……」

「はあ……もういいわ……。 でもそんな物騒なものそこら辺に置いとかないでよね」

「正直スマンカッタ」

平謝りでなんとか許してもらった。

とところで鈴鹿。

「なんだか今日は調子がいいみたいなのよ」

「あら、鈴鹿ちゃんも？ 実はあたしもなの」

「なんだ。京子も鈴鹿ももう体調が回復したのか？」

「昨日の夜までは体が火照ってたんだけど。今朝起きたらすっごく調子よかつたのよ」

鈴鹿の言葉に、うんうん、と頷く京子。

「そうなんだ？ ——それじゃあ早速、今日から魔術やってみる？」

「え？ マジにつ!？」

「本当なの？ 碧くん？」

「マジもマジ。本当だよ。といつても最初なので基礎の基礎から」

そういつて僕は二人に紙を渡す。

紙を渡された二人は何か仕掛けがあるのかと見るが、いたって普通の白い紙だ。

僕も同様の紙を手取る。

「これは種も仕掛けもないただの紙だよ。そしてこの紙を強化してもらおうつもり。

こうやってね——」

僕は指を弾いて紙に魔力を通した。

すると紙は魔力に反応し一つの神秘を成した。

僕は強化した紙を鈴鹿と京子に差し出して、二人が手元に持っている紙と比較してもらった。

「これ……重さは変わってないけど硬いわね」

「ええ。それに折れない。まるで何か別の……そう……金属ね。信じられないことだけど、鉄板のようだよ……」

「これは魔術の基礎中の基礎。強化の魔術なんだ。ただ基礎といっても難易度としてはそこまで低くはない。

対象に魔力を通すことで存在を高めて、文字通り強化の効力を発揮する。

その紙のように硬質化させたり、包丁に使えば切れ味を増したりね。

極めれば自分以外の他人を強化することもできる。もっともこれは習得難度としては最高だけだね」

「つまり使い手次第で奥義にもなったりするわけね？」

「碧くんは、その他の人を強化したりできるの？ 例えばあたしとか鈴鹿ちゃんとか」

「……人体構造は把握しているから理論上は可能かな。だけどどうだろうな、試した

ことはないけど、僕の特性上そこまで器用なことができるかどうか……。残念だけど

現時点では僕にも他人を強化することはできない。

今僕ができるのは自分自身の強化まで。なかなか上手くはいかないさ」

「碧でも出来ない魔術があるんだ？」

「それはいくらでもあるよ。特に魔術っていう括りにおいてはね。

あまりにも分野が広すぎるんだ。一つのことを極めようとするとそれだけで一生を終えてしまう。いや、一生掛かっても極めることができないかもしれない。

そういうことだから僕は出来ないことの方が多いし、それは鈴鹿や京子にも言えることだよ。

それに魔術師っていうのはそれぞれ属性を持っているから、自分の属性にあつた魔術を覚えるのも必要だね」

「属性……？」

「そう。属性。五大元素といって「地」「水」「火」「風」「空」の五つ。

魔術師はこのうちのどれか一つは持っているんだ。正確にいうとこの五つ以外にもあるんだけど例外なんで今は置いとく」

「ねえ、碧。あたしの属性はなんだか分かる？」

「今はまだ分からない。それはこれから魔術を覚えていく中で見つけていくしかないね。

ふとしたことで自分の頭の中で得意な属性が浮かぶこともあるし、……この手のものは僕でも判断が難しいね」

「参考までに聞いていいかしら？ 碧くんはどの属性なの？」

「僕？ 僕は五大元素っていう属性だけど？」

「……5つ全部持つてるなんて反則くさいわよ」

「そんなことないよ。 その五大元素全てを持つていたとしても使いこなせなければ意味がないからさ。」

僕の場合はちよつと特殊だね。 起源が色濃く出ちゃつてて、その属性全てを使いこなせてないのが現状なんだよ」

「起源……？」

「うん。 起源。 これは魔術師に限らずあらゆる存在が持つ、あらかじめ定められた本質というやつだね。」

その本質が強く表に出ると通常の属性を使った魔術との相性が悪くなってしまう弊害があるんだ」

「そうなんだ……ちなみに碧くんの起源はなんだつたの？」

「それがよく分かっていないんだ。 どうにも二つあるみたいでさ。」

一つは「破壊」なんだけど、もう一つは分からない。 その一つも、ある人から聞いただけだからホントかどうか……。」

とにかく「破壊」という本質があるせいで僕の魔術はその特性による傾向が強いんだ

「よ」

「破壊ねえ……。 あー、そういえば碧つて陰陽術も攻撃性の強いものが出来て、簡易式なんかは苦手だつて言つてたわね。

「これも何か関係あつたりするの？」

「いい質問だね。 うん。 実は関係があつたりする。

陰陽術も魔術が分化したものだから、その属性や起源に左右されたりもするんだ。

「つまりその逆も然りつてことだね」

「ええつと……。 つまり陰陽術で得意なことが魔術でも得意な分野になるつてことなのかしら？」

「そういうこと。 ただあまりそればかりに囚われるのもよくない。

陰陽術という狭い範囲では魔術特性を捉えられない事も多いから、あくまで参考程度にした方がいいね」

二人はなるほどと納得し、再び手元の紙に目を落とした。

結局のところ今はまだ京子と鈴鹿の属性や起源なんてわからない。

ならば目先のをコツコツと積み重ねて行くべきなんだ。

魔術特性の判断はそれからでも遅くはない。

「それで話を戻すけど、二人が持っている紙の強化方法について。

まず魔術回路はもう繋ぐことができるよね？」

「出来るわよ。夢の中で聖書が出てきたわ。それを開くと繋がるみたい」

「あたしはなんだか普通のボタンだわ」

「ま、そこは単純であればあるほど繋ぐまでに時間が掛からないから二人ともいいイメージだよ。」

それじゃあ二人とも、魔術回路に繋いでみて」

首肯にて了解の意を示す。そして、

「——接続セツト」

二人は僕と同じ呪文で魔術回路へと繋いだ。

「次は手元にある紙をよくイメージして、よく集中して。その紙を構成する重要な部分、そして材質。それらを解析、解明するんだ。それができたらその強化対象となるものを把握し、そして魔力を流すんだ。その紙を補強するようにね」

「——つて、いきなりそんなこと言われても難しいわっ!!」

「そうね……。紙を解析だなんて……」

「デスヨネー」

初めての魔術でいきなり成功されても困る。

だが二人にはいい機会だ。

僕はこれから所用にて外出するが、二人にはまず紙を知るところから始めてもらおうとにしよう。

そう考えているとタイミングよく秋乃から声が掛かった。

「碧く？ 準備できたよー」

「おお、今行くから玄関でまっつて」

そう秋乃に返事をしたあと、京子と鈴鹿に、

「僕はこれから秋乃の学校の編入手続きがあるから昼くらいまで留守にするよ」

「あー、そういうえばそんなことも言ってたわね……」

「秋乃ちゃんの学校、今日からだだったんだ？」

「うん。 まあそういうわけだから行つてくるよ」

「わかったわ」と頷く京子と鈴鹿。

僕はそれを見届けたあと席を立ち、部屋に戻った。

クローゼットに掛けてある昨日新調したばかりのスーツを取り出し着込む。

ネクタイを締め、久しぶりのスーツに窮屈な思いをしながら、身だしなみを整えた。必要な書類を鞆に入れて再び居間へと顔を出す。

そして、

「二人共、引き続き強化魔術の練習をすること。——僕からのアドバイスは紙をよく識ること。そうすれば魔術もそれに応えてくれるよ」
「そう言い残して二人に別れを告げ、そして玄関にて待つ秋乃と一緒に学校へと向かった。」

☆

今、僕と秋乃は入学する小学校の校長室で個別に説明を受けている。

というのも、入学経緯が特殊であつたためだ。

秋乃が編入する学年は5年生。

今まで学校に通つたことのない秋乃は、一般の生徒とは異なり編入試験を経ての入学になる。

昨年から僕ともう一人で秋乃に勉強を教えていたおかげで入学試験は無事パス。そして今ここで面談という名の説明を受けているところである。

「——であるからして、我が校は……」

と、先ほどから頭に残らないような長い定型文を延々と繰り返している。だが、どうやらそれも終わりを告げようとしていた。

校長がある担任の名前を呼んだとき、その人は静かに部屋に入ってきた。20代前半だろうか。身なりのしつかりとした品のいい綺麗な女性だ。

「では先生、お願いします」

校長のその言葉に「はい、校長先生」と答えた女性教師。

そして僕と秋乃の方へと視線をやり

「わたし、周瀬律架と申します。土御門さん、よろしくお願いしますね」

大人の女性の余裕のある雰囲気できて、表情は穏やかに手を差し出してきた。

第一印象だが、まあ、少なくとも悪い人ではなさそうだ。

大事な妹である秋乃を預けるのだ。

変な担任にならなくてよかったと内心でホツとした。

「こちらこそ、秋乃がお世話になります」

僕はそんな先生に釣られるように彼女と握手をした。

先生は僕に続いて秋乃とも挨拶を交わし、そして今後の予定について話し始めた。雑談を伴った説明もひと段落したころ。

これから先、先生は秋乃を伴って教室に行つてそのまま授業を始めるそうだ。

そして、僕はこれにてお役御免。

「では周瀬先生。秋乃をよろしくお願いします。——秋乃、勉強がんばれよ」

僕は先生に秋乃を預けて学校を後にした。

☆

屋敷に戻った僕は再び京子と鈴鹿に魔術を教える。

といつても伝えることは朝に伝えたので、聞かれた質問には答えるが基本的には見ているだけだ。

強化の魔術を必死にやる姿はなかなか微笑ましいものがある。

そんな彼女たちの姿に目を細めながら、僕も陰陽塾に提出するためのレポートを作成していく。

休みと引き替えに引き受けた研究している陰陽術のレポート提出。

本来の休みの目的とは違うため、当然そんな陰陽術など研究しているはずもなく。

僕は一考し、そしてあることを決定した。

昨日京子を襲った人形。

この人形は自動詠唱オルゴールエンジン永久機関によって術者とは切り離して独立して永久に動くようになっている、いわば自動人形だ。

この自動人形を式神・人造式として扱うための研究レポートをまとめようと考えている。

もちろん今のままでは兵器そのものなので、このままというわけにはいかない。

具体的に、まずこの自動詠唱永久機関を変更し、術者から動力まじよくを得るように変更。

武装に関しては眼はガンドを投影する水晶製。対象を呪い殺すことのできるフィンの一撃すら投射可能なこの眼はあまりにも強力だ。

手の余るこの武装は外す。

他は両腕が蛇腹に分割することで10メートル程度伸び対象に物理的ダメージを与える機能、両手には接触した対象の術式行使を一定時間妨害する機能がある。

これらは対陰陽師、対式神用に作ったものだが、術者に対してただちに致命傷を与えるものでもないので残してもいいだろう。

劣化版の人形の変更仕様はこうだ。動力は術者から供給、武装は伸縮自在の両腕と、両手に内蔵された術式妨害機能。

僕はこれらの内容でレポートをまとめる作業に入った。



夕方。

秋乃が学校から帰ってきたころ。

僕は土蔵へと足を運び出かける準備をした。

土蔵には昨日完成した北斗人形がある。

あれから誰も触っていないため昨日のまま放置されてあった。

当然なのだが、全裸である。

僕はその重なる重大なことに気が付いた。

北斗人形が完成したのはいい。

だが服はどうする？ 彼女がこれを使ったとしてどうやってここまで帰ってくる？

これはごくごく普通の、一般的な常識内の話になる。

間抜けな話であるが、北斗人形の服をどうするのかという、その考えが今日の今までなかつた。

まさか彼女を裸のまま帰らせるわけにはいかないだろう……。

僕の服を着せてもいいが……

いや……、ここは京子と鈴鹿に相談だな。

僕は北斗人形をトランクに詰め、屋敷の居間へと戻った。

☆

「京子か鈴鹿。どちらでも構わないけど服貸してくれないか？」

「——え？」

「……はあ？」

居間で魔術の練習を続けていた京子と鈴鹿。

僕が服を貸して欲しいと伝えたとき、京子と鈴鹿は魔術の練習を止めてこちらに振り返った。

そして京子は困惑した表情、鈴鹿は急に何を言い出すんだコイツと違ってそんな冷めた顔をしながら僕を見た。

「……あの、その……碧くんが欲しいなら、その、いいけど……。一応、その、何に使うか教えて欲しい、かな……」

「そうそう。碧のこういう行動はよくあるから今更だけどさあ。でも女の子の服を欲しいなんていくら碧でもないわー。せめて理由をいいなさい理由を」

「ああ、それはこれに着せるつもりなんだけど——」

そう言つてトランクから北斗人形を出し二人に見せた。

一糸まとわぬ人間にしか見えない人形がそこにはあつた。

それを見て二人は納得。

だがそれと同時に新たな疑問も生んだようだ。

「北斗ちゃんに着せるためだったのね。それならあたしはかまわないけど、サイズ合

うかしら……?」

「あたしもたぶんサイズ合わないわよ? ……何のサイズとは言つつもりはないけど」

……そうか、サイズは合わないのか。

今の話から察するにサイズ的には大きい方から京子、北斗、鈴鹿という順番のようだ。なるほど、勉強になった。その知識が必要かどうかはともかくとして。

僕が内心で二人に下した失礼な評価を考えていると鈴鹿がまた新たな質問を投げかけてきた。

「でもなんで急に服を着せようと思ったわけ？ 裸を隠したいだけなら布でも被せておけばよくない？」

鈴鹿の言う通り、動かない人形なんだ。

何もする必要がないのなら布でも被せて保管していればいい。

しかし、今日にでも彼女のところへ行って早いところ問題を解決したいのだ。

一日二日遅れたところでどうという話でもないが……、北斗人形ができた今、問題を先送りにする必要もない。

「ほら、降霊術を失敗したときに話したろ？ 彼女に会いに行こうと思うんだ。彼女は既に肉体がないといっている、いわば魂だけの存在なんだ。」

そして可能であれば彼女の魂をこの北斗人形に入れて連れて帰りたいってわけ」

「なんかとんでもないこと口走っているように思えるけど。まあ、碧のことだから今更ね。」

それで？ 別に明日でもいいじゃない？ しかもどこへ行くかわからないけど、もう夕方よ？」

「北斗人形ができた今、行くなら早いに越したことはない。それに場所が場所だけに夜の方が都合がいいんだ」

出来ることならなるべく人目に付かない夜がいい。

北斗人形を入れた大きなトランクを持ってあんなどころへ行ったらまず間違いない不審者だ。

人通りが少ないとはいえ、どこで誰が見てるとも限らない。

一応認識障害の魔術で人目は避けるが、念には念をだ。

すると京子からこんな提案があつた。

「ねえ、碧くん。急いでいるなら今からその北斗ちゃんに着せる服、買ってくるわよ？」

「ここ渋谷だからお店も近いしすぐ行けるわよ？」

「ええ？ 本当？ 本当ならすぐ助かるよ」

「ええ、いいわ。でもその前に北斗ちゃんのサイズ測つてもいいかしら？」

そう言つて、どこから出したのか分からないが、メジャーを取り出しテキパキと北斗人形のサイズを測り始めた。

そしてサイズを測り終えた京子は「1時間くらいで戻るから」と言い残し、鈴鹿を連れて買い物に出かけて行つた。

それから1時間もしないうちに京子と鈴鹿はニコニコしながら戻つてきた。

買い物から戻つてきた京子は「とりあえず一式買つてきたわ」といつて、鈴鹿と一緒にこれまたテキパキと北斗人形に服を着せていく。

どうでもいい話ではあるが下着は白と清楚な感じ。

服は上は半袖の白いシャツ、下は黒つぼい多段状になっているミニスカートと、北斗人形にとても似合った動きやすそうな組み合わせだった。

そして服を着せ終えた京子と鈴鹿は居間から出て行ってどこかに行ってしまった。

どこに行つたんだろうと思いつつも、服を装備した北斗人形をトランクにしまい出かける準備をした。

そして、さあ出発だと席を立とうとしたとき、京子と鈴鹿、なぜか先ほど学校から戻つたばかりの秋乃までがそこにはいた。

「それじゃあ碧くん、行きましようか?」

「碧、なにぐずぐずしてるのよ? 早く行くわよ」

「碧、どこか行くの?」

なぜそうなる、と突つ込みたくもなるが、ま、考えるだけ無駄かと思ひ直し、「そうだな」と行って僕を含めた4人は屋敷から出て駅へと向かった。

駅へと向かう途中、鈴鹿がみんなを代表してこんな質問を投げかけてきた。

「それでどこへ行くこうつてのよ?」

みんなが聞きたいであろう内容。

現在18時。

これからもう夜だというのに一体どこへ行くこうというのか。

当然すぎる疑問に対して僕は一言とある場所を告げた。

「奈良だよ」

2—10. 時を越える者

「我が妹よ。そなたの決意が固いというのはわかった。——だが、やはり私は賛成できない」

私の決意をくみ取つてなお、やはり自分は賛成できないと反対の意思を示したのは私の兄上だった。

兄上は椅子から立ち上がり私の隣へ来て腰を下ろした。

そして私の肩へと手を置く。

「少し冷静になるんだ」

冷静でいてそれで優しく私を諭すように語りかける。しかし今回ばかりはたとえ

兄上でも止めることはできない。

もう悲劇には飽きたのだよ、兄上。

「いいえ、兄上。もう冷静になる必要などない。皆を救うにはもうこれしかないのだ」

皆の救済。私たちが問題にしているのは今この瞬間にも増え続けているであろう犠牲者の事だった。

「昨今、突如として発生した流行病や大飢饉、その不幸は我が国に猛威を振るい深刻な被害を与えていた。」

「苦しめられる民たち。既にその犠牲は我が国だけでも数万という人たちが犠牲になつていた。」

「この数万という数字は我が国のほぼ半数を指す。」

「過去を顧みてもここまでの被害にあつたということは記憶にない。」

「なぜだ……？　なぜお前だけがそのような重荷を背負わなければならぬのだ……」

「肩に置いた手を震わせながらどうにもならない現状を嘆く兄上。」

「普段は絶対に見せることのないその姿はとても弱く、そして小さく見えた。」

「そんな兄上を優しく包み込みながら囁くように言った。」

「兄上も知つているだろう。それが我が使命だからだ。盟約なのだよ、これは。」

「神託を受けたときに決まったことなのだ。」

「なに、兄上が悲しむことはない。私は未来永劫生き続けるのだから。そしてそれが皆の希望になるというのだ。」

「これほど嬉しい事はないだろう？」

「そう。民が次々と倒れ苦しんでいく絶望の中、神子^{みこ}である私は神託を受け取つたのだ。」

神は私にこう囁いた。

死者を蘇らすことはたとえ奇跡を持つてしても不可能だ。

だがその魂を人という器から解放し無限にすることはできる。

あらゆる憎悪、苦しみを癒やし理想郷へと導くために手を貸そう。

私が答えを出せば私たちを苦しめているものからの解放しよう。

私はそれに縋るしかなかった。

最初から私に選択肢などなかったのだ。

私は決断を下し、そして神との契約を果たした。

気づいた時には変異した魔術回路、そして溢れんばかりの知識がこの身には宿っていた。

「しかしっ！　しかし、それではお前があまりにも、救われないではないか……」

「兄上、これはもう決まったことなのだ。今更何者にもそれを覆すことはできない」

「っ——」

私のその言葉を聞いて返答に窮する兄上。

苦虫を噛み潰した顔をする兄上に私は苦笑しながら言った。

「そう悲しい顔をするな。　なに、兄上が寂しいというのならいつでも会いにきていいぞ。　私はいつでもそこにいるのだから」

肉体はこの国の礎となり朽ち果てるだろうが魂まで拘束されるつもりはない。

兄上が私に会いにくるといふのなら歓迎しよう。寂しいというのなら慰めもする。

もう互いに触れあうことはできないだろう。しかし私たちの心の繋がりを絶つことは何人たりともできはしない。それがたとえ神であったとしても……。

私は兄上からそつと離れて、私は私の戦場へと向かった。

「——ああ、必ず会いに行く」

背後から兄上のそんな言葉が聞こえてきた。

そしてそれが兄上と交わした最後の言葉となった。

☆

東京から電車を乗り継ぎながら揺られること4時間。

それからまたタクシーに乗り、さらにそこから徒歩で移動。

ようやく現地へと着いたところには、あたりは静寂の闇に包まれていた。

腕に巻いた時計に視線をやる。

時計の針はちょうど夜10時を半分回ったところだった。

「碧。真つ暗で何も見えないけど、こんなところに一体何があるっていうのよ?」

「辺りは田園かしら。それと……目の前に小さな山？」

碧くん。 本当はここなの？ 何かあるとおもえないけど。

——それに、ここ、言葉では表せないけど、何だか変な感じがするわ……」

「碧く。 暗いよ……」

秋乃には悪いが今ここで光を照らすわけにはいかない。

僕は空いている方の手で、秋乃の手を握って目的地へと歩いて行く。

そして京子の疑問に歩きながら答えた。

「京子の感じている違和感はこの辺り一帯を覆った人避けの結界によるものだよ。

周りを見ても何も無い。 知らず知らずのうちに、ここをみんな避けているのさ。

ただ違和感を感じるところを見ると綻びがあるのかもしれないね。 大分古いもの

みたいだからさ」

この山を中心とした周囲数kmはあるだろうか。

山を起点に張られた結界は長い間、人目を避け、さらにここに留まらないように働き

かけるような効果があるみたいだ。

普通は人避けの結界なのだから、結界が張つてあるということを気づかれるようなこ

とがあつてはならない。

だけど長い間放置されていたためか、その結界にも綻びがあるようだ。

京子は敏感にこの違和感を感知したようだ。

「京子のその違和感は別に害があるものでもないから、さして気にする必要もないよ。

——よし着いたな」

着いた先は小さな山の正面入り口。

そこには小さな鳥居が立っている。

僕たちはその鳥居を潜り抜け木の生い茂った山の中へ登っていった。

山の山頂、といつても大した高さではない。せいぜい20メートルに満たない山頂へと辿り着いた。

すると山頂には不自然な、大きな岩が置いてあった。

先ほどとはまた別の結界になるのだが、どうやらこれが入り口になっているようだった。

そして10分ほどで結界も解け、目の前に現れたのは地下へと続く道。

ここならもう大丈夫だろう。

僕はポケットからスマホを取り出して電灯代わりに真っ暗な通路を照らした。

「さあ。じゃあ行くこうか」

そう言つてトランクを引きずりながら進もうとすると後ろから声が掛かった。

「ちよつと待つて。そろそろいいでしょ？ この入り口どこに続いているのよ。そ

れにここは何なの？ いい加減に教えなさいよ」

彼女に会いに行くのと夕方家を飛び出し、4時間以上掛けて着いた先は木々の生い茂った小さな山。

その山の山頂には謎の入り口が出現。

不自然な違和感、それに結界で人目を避け、そして入り口を隠す必要があった。

それらのことを鑑みて、ここが何か重要な場所だということだけは漠然と分かるが、それ以外は何もわからない、もやもやした気分、といったところなのだろう。

確かに鈴鹿の言う通りそろそろ話してもいい頃合いだ。

僕は先に進みながら鈴鹿の質問に答えた。

「僕が降霊術で彼女に繋いだときにここを把握したということは以前言ったとおり。

ここには彼女と彼女が造り上げた巨大な魔術式が残っている。それは分かっていたんだ。

けど、今ここには何があるんだろうって疑問が浮かんでね。好奇心から調べてみたんだ」

鈴鹿と京子は静かに聞き入っている。

秋乃は眠そうだ。

僕は続けた。

「いま僕たちがいるこの小さな山は古墳なんだよ」

「古墳……つてあの、昔の権力者が亡くなつたときに作られたお墓よね？」

「そうだよ。京子のいうようにここはあるお方が祭られているお墓なんだ」

「そのあるお方つて？ 碧の言い方からすると嫌な予感しかしないんですケド……」

鈴鹿の言う通り、嫌な予感というのはあながち間違つてはいない。

古墳というのは京子のいうように一般的には昔の日本で作られた権力者や位の高い者たちのお墓だ。

そう。権力者である。

権力者の中には、当然、帝やその帝族が含まれる。

そしてこの古墳も例に漏れず帝陵と言うことになる。

つまり帝族のお墓だ。

そしてここで祭られているお方は——

「やまともそひめのみこと大和百襲媛命だよ」

「やまともそひめのみこと……？」

「とある帝の妹君。そして、一般には裨ひ神子みこと呼ばれている、止ん事無きお方だよ」

「——」

あまりにも有名な人物の名前に絶句する二人。

そうなのだ。ここは大和百襲媛命、いわゆる裨神子のお墓、帝陵になる。

その帝陵は宮内庁が管理しており、その立ち入りには厳しい制限が掛けられている。日本の学術団体の調査要求でさえ拒否しているのだ。

一般の僕たちが正規の手続きを踏んだところで入れるわけがない。そこで僕は人目がかからないように夜を選択したのだ。

「あ、碧くんっ！ こ、こんなところに、あ、あたしたちが入ってよかったの!？」
「碧っ！ あ、あんた、これってもしかして盗掘になるんじゃないのっ!？」

盗掘だって。人聞きの悪い。
そんな犯罪者紛いのことするわけないだろう。

なぜなら——

「まあまあ。盗掘だとか立ち入り許可だとかさ、細かいことはなしにしようよ。

なんたって、このお墓の主がいいって言っているんだから」

そもそもこのお墓に用があるのは他でもない。彼女の依頼があったからだ。

僕たちはこのお墓の主に招かれた、いわば当事者だ。

お墓の主に招かれたなどと、言葉をそのまま受け取ったら気味が悪いだけだが、彼女の肉体は朽ち果てたかも知れないが、ああして魂は生きています。

本人がいいといったのだ。

ならばなぜ部外者に口を出さなければならぬ？

僕は半ば強引ではあるが、その考えを二人に伝えた。

二人は溜息交じりに、「まあ、いつものことね」と呆れたように呟いた。……解せぬ。

それはそうと、僕はここの主についての説明を続けた。

「裨神子は降霊を専門とした巫女だった。そして彼女はこの泰山府君祭の核となつて

いる巨大魔術式を造り上げた。

裨神子が強力な術で民衆を惑わしたという説はある。それが本当のところどう

だったのかは分からない。

けど、この巨大な魔術式を見る限り、少なくとも彼女が途方もない天才ということは

確かみたいだね」

話し込んでいると暗い入り組んだ道を抜けた先に光が見えた。

僕と鈴鹿、京子、そして秋乃の四人はその光に向かって歩いて行った。

視野一面に広がる広大な空洞。

いや、空洞というには余りにも広すぎる。

直径にして数キロはあるだろう視界一面に広がるそれは、荒れた大地そのものだ。

そしてその正面奥には大きな建造物があった。

僕たちはその建造物に向かって歩き出した。

建造物に近づくとつれてその全容が明らかになってきた。

その建造物は石を積まれて造られており、高く積み上げられたその中央には頂上へと続く階段が設置されていた。

僕たちはその階段を上つていき頂上へと向かった。

頂上へと辿り着く。そこは祭壇になっていた。

祭壇の裏側に回り込むと眼下に映つたのはこの空洞を象徴するような巨大なクレーター。

そしてそのクレーターの中心には薄暗く光る一柱の巨大な柱がそびえ立っていた。

「うわっ！　すごっ!!」

「これが碧くんの言っていた魔術式なの？」

「そのようだね。そしてその魔術式の中心がどうやらあの柱みたいだ」

僕は巨柱を指さした。

指で示したその先には、まるで生き物の鼓動のように光が明滅していた。

あれは柱自体が魔術回路のようなものだ。

柱に固定化されたソレは、あのように視認できてしまうのだろう。

そして回路から作られた途方もない魔力が光源となつてこの空洞を照らす。僕は眼下に広がる光景を説明する。

そして京子と鈴鹿が眼下の光景に目を奪われているのを尻目に準備に取りかかった。トランクから北斗人形を取り出し、それを背中に背負い準備完了。

北斗人形の重さにやや挫折そうになりながら強化の魔術を使つて人形の重さから逃れその気分を霧散させる。

その状態を維持したまま再び祭壇の裏へと回り込んだ。

「碧。それで、これからどうすんの——つて、アンタなにしてんの!？」

僕が北斗人形を背負い、眼下のクレーターをのぞき込むように身を乗り出して着地予定の足場を確認していたときに、僕の姿に気づいた鈴鹿が驚いた声を上げた。

京子もそれに気が付き「あぶないわよ」といつて窘めようとする。

僕はそんな二人に大丈夫だと伝えてから、

「これからあの柱に行つて彼女に接触してくる。鈴鹿と京子と秋乃はここで待つて」

それじゃあ行ってくる。

三人にそう言つて躊躇なく祭壇から飛び降りた。背後から悲鳴が聞こえるが気にしない。

祭壇からクレーターまでの高さはビル五階分、およそ20メートルといったところだろうか。

軽量化と重力調整の魔術で体を軽くし、先ほど確認した地点へと無事着地した。

上の方から「怪我不い？」とか何か色々いっているようだ。

振り返り上を見ながら片手を上げて大丈夫だと応える。

そして再び柱へと向かってクレーターの中を歩いて行った。

着いた先は祭壇から見た巨大な柱だ。

北斗人形をそつと寝かし、目の前にそびえ立つソレに手を添えて回路へと繋いだ。

☆

意識集中する。あの白い世界へと。

するとすぐに後ろの方から声が掛かった。

「なんだ、また来たのか？」

僕は声の主を知っている。

今回は何事もなく普通に彼女へ振り返った。

「ええ。 約束通りここを破壊しに来ました。 いまあの柱から直接あなたに繋いでいます」

「別にここに来ないで一思いにやっちゃってしまってもよかつたんだがな」

「最初あなたから依頼を受けたときはそう考えていたんですが……、気が変わりました。

ああ、ここを破壊するつもりはあるのですがね——」

つい1週間ほど前に実家に帰って人形を見たとき、ああ、これだと考えた。

彼女はここを破壊して欲しいと言った。

つまりそれは彼女ごとこの世から葬り去るということだ。

しかしそれが彼女自身の願いとはいえ、一度話した相手を、しかも綺麗なお姉さんを僕自身の手で殺めるのは正直なところ戸惑いがあった。

ならば彼女を救った上で彼女の依頼を達成してしまえばいいのではないのだろうか。

そう考えた僕は人形を改修して北斗人形を造った経緯がある。

彼女は怪訝な顔をしながらかちらを見ている。

「？」

「そうですね……。 まずあなた……いえ、やまともそひめのみこと大和百襲媛命……姫とお呼びした方がいい

ですか？」

そう彼女の名前を呼ぶと少し驚いたような顔をしたが、すぐまたもとの表情へと戻った。

「……ま、調べればすぐわかるよな——。あー、名前などどうの昔に捨てたのだ。

呼び方はなんでもいいぞ。好きに呼べ」

「じゃあモモちゃん様で」

「おいっ！ なんだよモモちゃん様ってというのは!？」

彼女に付けた呼称に何やら文句をいつているが無視だ。

いいじゃないか。モモちゃん様。

かまわず僕は続けた。

「モモちゃん様はさ。その魔術の知識とかどうやって知ったんですか？」

「無視かよっ!」

僕が彼女の呼称に対して無視を決め込んでいると溜息一つ。話に乗ってきた。

「……ま、まあいい。好きに呼べと行つたのは私だ。不本意だがもういいよ、それ

で。

で、魔術に関する話だったな？」

「はい。この巨柱の魔術回路もそうですが、これだけの魔術式を構築するだけの知識をどうやって手に入れたのか、ということですよ。」

僕はモモちゃん様が生きた時代のことは詳しく知りません。知りませんけど——

この魔術式、根源の渦に繋がっているわけではなく、おそらくその下位機能なのでしよう。それでも規格外なのは確かですが……。

これは魔法に匹敵するものだし、いくらモモちゃん様が天才だったからといって、こんな規格外のもの造れるのだろうか。

もしそうであればモモちゃん様が生きた時代は魔術が発展したのにもかかわらず、なぜ現代では完全に失われてしまったのかということに疑問符が付いたんですよ[「]

今僕が生きる時代、この世界における魔術は「シンギユラリテイ根源の渦」に触れた僕だけの特異性だ。魔術は全てオカルトとして扱われている。

そう。現代における魔術とは失われた知識なのだ。

が、彼女は魔法に匹敵するものを顕現するのに十分な知識持っており、それは周りのレベルもそれ相応のものがあつたことを意味する。

ではなぜ彼女の時代、魔術はそこまで発展していたのに、今は失われてしまったのか、ということになってくる。

少なくとも何らかの形で……、例えばこの魔術式の再現方法が載った書物など残っていても不思議ではないのだ。

しかしそれらしいものは一切残っていないかった。

それはなぜか。その答えは目の前にいる本人が語った。

「何から話そうか……」。

……まあ、そうだな。まず誤解を解こうか。

私の生きた時代にも魔術なんか大してできるやつなどいなかった。

それこそお前たちが使う陰陽術だったか。それに毛が生えたようなものに漏れず私も似たようなものだったよ」

「それじゃあなんで……?」

「——少し昔の話をしようか。」

当時、私たちの国は存亡の危機に遭っていた。

どういいうわけか不幸が重なってな。

流行病や飢饉などが立て続けに起こって、国の民の約半数が息絶えたんだ」

「そんなにもですか?」

「そうだ。さすがにこれだけの民がいなくなると国としても立ち行かなくなる。

が、それ以上に民が苦しみながら逝くという情景は耐えがたいものだったんだ。

特に子供の餓死というのは……。今でも鮮明に蘇ってくるよ」

彼女が放った言葉は微かに震えを含んでいた。

餓死などというのは現代っ子の僕には想像もできない世界だが、どうやらそれは彼女にとって精神的外傷になっているようだった。

「——すまん。少し昔のことを思い出してつい感傷的になってしまったな……」
「いえ……」

「今思うと、あの時の私は少しどうかしていたんだと考えるときもある。

そんなときだ。あるとき私は神の声を聞いたんだ」

「神の声……ですか……？」

「私はもともと神子……神からの神託を受ける役割を担っていたんだ。それが関係したかどうかは分からないが、あるとき夢で声を聞いたんだよ。

ソレが現れたとき言葉では言い表せない不安が過ぎつたが、ソレは私にこういったんだ。

答えを出せば救ってやる、ってな」

彼女の言うソレというのは恐らく抑止力。

彼らがどう判断したのか、ということは彼女のその話から察するに、要するに彼女らにとって彼女たちは存続対象として認識されたのだろう。

彼らのすることだ。どうせ「気まぐれ」だ。

つまり考えるだけ無駄。結果だけ見ていればいい。

しかし「救つてやる」か。偉そうなこつた。

内心で毒づきながら彼女の話に再び耳を傾けた。

「たとえ奇跡を起こしたとしても、死者を生き返らすことはできない。だが、その魂を人という器から解放し無限にすることはできる。あらゆる憎悪、苦しみを癒やし理想郷へと導くために手を貸そう。私が答えを出せば私たちを苦しめているものからの解放しよう」と。

我が儘を言うなら死者を生き返らせろと言いたいところだが、そんな非現実的なことを言われるより、よほど現実的に聞こえたよ。ソレの言葉はね。

だからこれは神託なんだろうなって自然にそうおもつたんだ。あれは神だと。

私は喜んでソレの言葉に縋すがつたよ。

そしてその夢から覚めたときには理想を現実のものにするだけの回路と知識を身に宿していたんだ」

彼女は泉ユミルからそれを可能にするだけの力を掬すくつたのだ。

扉を開いたかどうかはさておき……、いや、察するに一部の知識だけを引き上げた感じか。となると扉は開いていないのかもしれない。

いずれにしてもそこへ至つたが故に魔術式を造るだけの回路と知識を得たということになる。

「経緯はどうであれ私は皆を救うだけの力を手に入れた。

そして私が国の礎となることで泰山府君祭という儀式は完成。死んでいった民の代わりに式神という新たな力を上手く使つて国は救われたというわけだ」

「なるほど。モモちゃん様がこの魔術を成したのは、民を救うという結果を求めた過程だったというわけなんです。そして結果、国も民も救われた、と」

「ああ」

「でも」

「ん？」

不幸かな、国の危機によつて否応なしに力を手にした彼女はその身を以て犠牲になることで多数を救うことができた。

しかしそれは、そこには――

僕は先ほどとは打つて変わり真剣に彼女を見ながら言った。

「そこにはあなたがいない。あなたは救われていないですよ」

「僕はそれはあつてはならないことだと、そう考えています。

多数を救うために一人が犠牲になることは……とても、とても悲しいことなんだ」

「っ――」

目を見開き言葉を失う彼女。

しかし次の瞬間、彼女は決壊したかのように感情を爆発させた。

「しかしそうは言ってもどうすることもできない！ 確かにあの時の私の判断というのは少し正常ではなかったと、今してみればそう思うこともある……。」

だがあの時はああするしかなかった！ あの声に従うしかなかったんだ！ 私さえ我慢すればよかったのだ。そして皆は救われた。それでは駄目だということのか!?

お前はその判断が間違っていたと説教でもするつもりか……!?

「いいえ、そんな気は毛頭ありません。むしろその時代その時の判断というのは尊重すべきだと常々僕は考えています。それを否定するのは過去のあなたがやったことへの冒涇だ」

「ならばどうする。いずれにしても既に肉体は消滅し魂を縛るモノから解放する手立てなどない」

自嘲ぎみに半ば投げやりに彼女は言葉を零した。

彼女を縛るモノから解放する手立てはない。自分を救う方法などないのだと。

そうだ。彼女には彼女自身を救う方法がないのかもしれない。

だがしかし、それは彼女には、という前提の上での話だ。

「ですから僕があなたを救ってみせます。そのために僕はここへ来たのだから」

「なん……だと……？」

呆然とした表情で呟く彼女。

「あなたは十分に役目を果たし、そして皆を救ったんだ」

彼女は国を救った後も一人この薄暗い洞窟の中で過ごした。

枷に魂を縛られながら、誰にも気づかれることもなく。

「今度はあなたが造った術で、あなた自身が救われなければならない」

国を救った代価は十分に払った。

ならば彼女も同様に救われなければならない。

「これより最後の泰山府君祭の儀を行います」

泰山府君祭の泰山とは中国にある道教の聖地を指す。

ここには泰山府君と並び碧霞元君へきかげんくんが祭られている。

碧霞元君はどのような願いも聞いてくれる万能の神。

ならばそれに従い彼女の願いもまた妥協などせずに最後まで聞いてあげるのが筋だ。

彼女自身を救うことで泰山府君祭この魔術は真の意味で完成する。

「あなたはもう自由だ」

僕は彼女に手を差し出した。

そして彼女もまた

「……いいのか、本当に？」

戸惑いながらも僕の手を握った。

ここに答えは出た。

あとはそれに応えてやればいい。

「もちろん」

僕は彼女の手を放さないようにしっかりと握り返し、そして——

意識を肉体へと戻し右腕の刻印に集中。

「謹んで泰山府君、冥道の諸神に申し上げ奉る」

それは泰山府君祭で詠う最初の一文。

そして泰山府君祭の終焉を飾るに相応しい最後の暗示^{ことば}。

僕は引き上げてきた魂^{モト}を解放する。

彼女の感触を確かめながら。

そして泰山府君祭を完遂した。

2—11. 後日談

部屋から出て居間へ向かっていたときに、ふと縁側へ目をやると彼女が柱にもたれかかりながら庭を眺めていた。

彼女を救ったあの日から三日。

彼女の魂を人形へと移したあと、僕はあの場所を破壊した。

魔術式の核となっていたあの巨大な柱はもちろんのこと祭壇に至るまで、既にあつたクレーターが何力所にも増えて点在するかのようには徹底的に。

あの空洞はあまりにも巨大な空間だったので時間は掛かったが、元々なにかあつたのか分らないくらい破壊のかぎりを尽くした。

それから空洞から来た道に戻り、念のため入り口も物理的に破壊した上で結界による再封印も行った。

これだけのことをやった以上、もう二度とあれが機能することはない。外に出ると空は薄らと明るくなりかけていた。

それからタクシーを拾い、駅まで移動。

重い体を引きずりながら電車で揺られ、また数時間掛けてようやく屋敷へと戻ってきた。

出発したのが昨日の夕方。そして今時計を見ると丁度午前10時を回ったところだ。

さすがに無理をしすぎたため、みんな疲労困憊の様相を呈す。

屋敷へ帰るやいなや、それぞれの部屋へと戻り寝息を立てた。

気丈な彼女もまたその例に漏れず、さすがに疲労を隠せない様子だった。

慣れていない体での移動だ。その疲労も想像に難しくない。

とりあえず彼女は僕の部屋で休ませることにした。

みんなが各々の部屋で休んでいる間、僕は今回の後処理を行った。

まず秋乃の学校へ連絡。

昨日入学したばかりの秋乃が休むというのは体裁としてよくはない。

が、秋乃を連れ回した僕が言うのもなんだが、もう済んだことだ。

気は進まないが秋乃の現状を伝えるしかないだろう。

嘆息した後、僕はスマホを取り出して秋乃の学校へ連絡を入れると、ちょうど休み時間だったらしく担任の律架が電話に出た。

するとどういいうわけか律架は「ほら、私の推理通りっ！」などとケラケラと笑っていた。

どういいう意味か問いたただしたところ、実は昨日僕たちが駅でどこかに行くのを見ていたそうだ。

そこから推理を働かせ秋乃が今日休むことも推測済みだったというわけだ。

律架から秋乃が登校しなかった確認の連絡が来なかったのも、そういった理由からということらしい。

どうやら自身の推理には絶対の自信を持っているようだ。

それを証明するかのように電話を終える前、あろうことか

「奈良のお土産楽しみにしています。 あっ、私の推理合ってます？ てへっ☆」などと台詞を残し電話を終えたとき僕は律架に対する警戒を強めた。

たとえ駅で僕らを目撃したとしても行き先までは予測できないだろう。

どこからどうやって推理したのか理由が全く分からないが律架の推理侮り難し。なんだか昨日の律架の雰囲気とも違うし……

今後は律架への接し方も考えた方がいいな。そう心に刻み込み次の連絡先を読み込んだ。

読み込んだ先は父さんの連絡先。 今回の件の事後報告をするためだ。

土御門家は代々、泰山府君祭を取り仕切る役割を担っていた。

その泰山府君祭が今後使えなくなったのだ。

理由はもちろん僕が泰山府君祭の核となつていて魔術式をぶつ壊したから。

その経緯を説明するためにも父さんに話をしなければならぬ。

泰山府君祭の成り立ち、そして泰山府君祭のバックボーンになつていて魔術式を徹底的に破壊し、今後泰山府君祭ができなくなったこと。

それから大和百襲媛命の魂を新しい器に定着させてここに連れてきたこと。

本来であれば行動する前に相談をした方がいいのだろうが、ある理由からそれをすることはなかった。

それは姉さんを取り巻く問題から端を発している。

姉さんが夜光の転生体という噂は周知の通り。

そしてそれを強く裏付けているのは夜光が泰山府君祭によつて転生そを行つたとされているからだ。

泰山府君祭とは端的に言えば肉体からの魂の解放。 魂を自由にすることにより新

たな器へ移すことも可能なのだ。

夜光が行つた転生にそれを当てはめると2つの可能性が考えられる。

一つは魂だけを抜いた場合。

これは夜光が転生するために泰山府君祭を行った際に自分の肉体から魂だけを抜いて、転生先の器が現れるまで門あちらの向こゝにいる。

そして協力者が泰山府君祭にて夜光の魂を現世に降霊させることで転生を成す方法。もう一つは既に転生を果たしている場合だ。

噂では姉さんに転生すると言われているが、既に他の何かに魂を移していることが考えられる。

そしてその何かから姉さんに魂を移すことで転生を成す方法。

どちらの方法も既に夜光の肉体から抜けて魂だけの存在になっているが、例えば前者の方法で考えた場合は転生をさせない方法として祭壇を壊す方法が考えられる。

土御門家の屋敷の裏山にある泰山府君祭の祭壇とかね……。もつともこれは既に泰山府君祭の執行が不可能となった今は無意味なのだが。

だが今までそれをしなかった理由とはなんだ？ 土御門家が代々管理してきた儀式だから？

しかしそれは姉さんの命よりも大事なことなのだろうか？

僕と父さんの価値観の違いと言われればそうなのだろう……

だが少なくとも、目に入れても痛くない大切な姉さんを守るためなら現状分かっ

る対策は取るべきだ。僕はそう考えている。

それにもう一つ、姉さんの男装のしきたりというのの意味が分からない。

が、あんなにもかわいい姉さんに男装をさせるなど……、姉さんの女子用の制服姿を見るのができないなんて血の涙が出そうになるくらいに悲しい！

——つまるところ父さんは僕にすら何かを隠していることがあるということだ。

父さんが夜光の転生を望んでいるのかどうかは分からない。

しかし、僕にすら隠さなければならぬ何かがあつて、それを成そうとしていることは分かる。

父さんがその信条を胸に抱いて何かを成そうとするのなら、僕も僕以外の誰でもない僕の信条にも基づいて行動するだけだ。

それだけの話。

それに今回の泰山府君祭の件は、そんな建前の話よりも、僕が彼女の依頼を受けたのだから最後まで全うするのが人としての務めと考えたからだ。

事をなす前に話をしたくはなかった。たとえそれが家族であつたとしてもだ。破壊するのを反対されてはかなわないからね。

ならば全て終わった後に事後報告という形を取ればいい。それであれば相手は否

が応でも納得せざるを得ないのだから。

……しかし、まあ、僕があれこれ考えたところで、父さんは僕が何をしようとしていたのか把握していたはずだ。

優秀な星詠みだからね、父さんは。

報告はあくまで形式上するだけのこと。

僕はスマホの発信ボタンを押してコール音を鳴らす。

するとすぐに父さんに繋がり事情を説明した。

すると電話越しに父さんは「早すぎる……」と呆れるような声で呟いたあと、何かを思い出したように僕にこのことは口外しないようにと伝え慌た様子で電話を切った。

何をそんなに慌ているんだろう？

だが、まあ。一応父さんには報告したしもういいだろう。

そこまで考えたところで急激に眠気が襲ってきた。

居間にいた僕はそこに横になったところで意識を手放した。

起きたときは日も沈みかけた夕方。

みんなの疲れもようやく取れたときのこと、食卓を囲んだときに改めて彼女のことについて話をした。

国を救うために自ら犠牲となった。ちなみに当時の彼女は14歳。僕より一つ下の年齢でその決断を下した。

すると京子と鈴鹿は涙を浮かべ頷きながら話を聞いていた。

まあ、多数を救うために自らを犠牲にして成り立つ話はないよね、やつぱり。

……ああ、そうそう。

彼女の呼称について、僕がモモちゃん様と呼んでいたら京子と鈴鹿に咎められた。

なんでも彼女に対してその言い方は躊躇われるとのことだ。

じゃあ京子や鈴鹿が彼女に相応しい名前を付けてくれと言うとそれも恐れ多くてできないという。

それならば彼女自身に付けてというのと、僕に付けて欲しいという。

回りに回って結局僕が付けることになったのだが、下手な名前を付けるとまた同じことを繰り返すのは目に見えている。

ということであらうと少しはじめに考えることにした。

ふむ……。

彼女を象徴するものといえればやはり「泰山府君」だろうか。

この泰山府君をもっと単語に区切っていく。

すると「泰山」「府君」になる。

「府君」とは泰山を敬う言葉。

なので「泰山」をもっと掘り下げていく。

泰山といえば中国の道教の聖地。

これを含んだ言葉に「泰山北斗」という言葉がある。意味は学問などの分野におい

て優れた能力を持った人物を仰ぎ尊ぶというものだ。

北斗とは北斗星、つまり北斗七星のこと。

泰山も北斗も、誰もが仰ぎ見る存在であることから、この泰山北斗という言葉が生ま

れたという。

偶然ではあるが、彼女のモデルとなった少女の名付け親は「北斗」という名を付けた。

ならば彼女もまた「北斗」という名前を冠するに相応しいのではないだろうか。

そのように僕の考えをそのまま伝えると満場一致で北斗という名前で決まった。

それから最後に、北斗の部屋は僕と秋乃の部屋の向かい側にある空き部屋に決まっ

た。

回想もそこそこに僕は北斗へと近寄り声を掛けてみた。

「また庭を眺めているんですか？」

「——ここは良いところだな。信じられないくらい高い建物が並び、車や電車といった魔法のような乗り物、そして人々は多い。

文明は発展を極め、今この世に在る人々はそれを謳歌している……」

北斗は転生を果たしてから、この時代のことに驚きつばなしだった。

奈良からこちらへ帰るときに車タクシに乗れば驚き、電車に乗ればまた驚き、建物を見れば驚き。

そして東京へ着いてからはさらに驚きの連続だ。

高く聳そびえる高層ビル、そして人の多さには唾然として言葉をなくしていたほどだった。

そんな北斗もこの屋敷に着いてからは落ち着きを取り戻し、緊張の糸が切れたのか僕の部屋ではぐつつすり眠っていたようだ。

そして翌日からはこの庭の眺めが気に入ったのか、今のように縁側に座りながら庭を

眺めることが多い。

無理もない。時代がまるで違うのだ。北斗からすると浦島太郎のような気分なのだろう。

北斗にはこれからゆつくりと時代の差異を受け入れられるようフォローするようにしようというのが僕と京子、鈴鹿の共通した認識だ。

「人々がここまでやってこられたのは北斗が人々を救った結果でもある。だから北斗はこのことを誇ってもいいんですよ」

「そうか……」

北斗は一瞬、僕へ視線を向けたあと、再び庭へと視線を戻した。

静寂が場を包む。

僕は会話を続けるため他の話題を振ってみた。

「そういえばその体、馴染みました？」

「馴染んだと言えば馴染んだが……」

「何か違和感のようなものが出ました？」

器となる体は完璧に作ったが、魂との拒絶感からくる痛み……まあ、いつてしまえば錯覚のようなモノを伴う可能性がある。

それが北斗に起こったことは考えられるのだが——
どうやらそうではなく、また別の問題のようだ。

「いや、なに。この体そのものは完璧なんだよ。まだ多少の違和感はあるが、相性も
いいようだ。この体が完全に私と調和するのも時間の問題だろう。」

ただ回路の方がな……」

彼女はそれを確かめるように眼を閉じ神経を集中させた。

そして眼を開き再びこちらへと顔を向ける。

「やはりそうだな。」

……大した話ではないのだが、魔術回路がああを聞く前のカタチに戻っているんだ。
あの声を聞いたあとに回路が変異したはずなのだがな……。

これでは大規模魔術の行使は難しいかもしれないな」

一度変異した回路がもとのカタチに戻った、か。

僕は一考したあと、「推測ですが」と一言前置きしたあと、僕は自分の考えを言った。
魔術回路は魂と結びついているため、新たな器に魂を移した後もその回路は元々の体
にあつたものと同じものになる。

だけど北斗の場合は泉ユミルから力をすくい上げたときに回路が変異したという経緯があ
る。

はつきりとしたことはわからないが、彼ら抑止力がそれを許したのは、北斗たちが存亡の危機に立たされていたためだと考えている。

現代においてその危機は去ったわけだから、回路を元に戻すことでアレを再現することを良しとしないという判断なのかもしれない、という僕なりの考えだ。

「なににせよ、アレを再現する事態にはしませんし、させません。僕がいる以上は北斗にお手間は取らせませんよ」

「それは頼もしい、のだがな……。 ……何か嫌な予感がするんだ」

「……それは神子みことしての能力ですか？」

「いいや。 そんな大層なモノじゃなく本当にただ漠然と碧殿を見ていたらそういう予感がしたんだ」

予感、か……

僕を見ていたらと前置きした上で言われたということは死相みたいなモノでも出ていたのだろうか？

北斗がそれを想像した背景はわからないが北斗は神子みこだ。 本人は気づいていないだけで、星詠みのような能力が備わっているのかもしれない。

いずれにしてもこのことは留意した方がいいだろう。

「わかりました。 北斗のそれには恐らく意味があると見た方がいいかもしれません。」

ひとまず屋敷の警護を強化するために結界の敷設と衛兵センチネルの改修を急ぎましょう」

これで今日の僕の予定は決まったな。これは早いところ済ませてしまおう。それとこの屋敷とは別に警戒すべきところへの監視だ。

これは北斗からもらったロビンに頑張ってもらうことにしよう。

「ロビン、陰陽庁の監視を頼む。何か不審な動きがあったら報告をしてくれ」

「了解ッス！」

どこからともなく現れた青い鳥は、元気よく返事をするど直ぐさま空の彼方へと飛び去っていった。

今のところ不審な動きをしそうな組織というのは陰陽庁双角会に限られる。

できれば支局や内部組織も同時に監視できればいいのだが、ロビン一体しかないのではそれは無理だ。

だが不審な動きがあるなら陰陽庁で何らかの動きが見られるはずだ。

「私に変なことを言ったばかりに、すまないことしたようだな」

「いえいえ。むしろ神子みこである北斗のそういう助言は助かります。

僕が、というわけではないのですが、僕の周囲はなにかと騒動に巻き込まれやすくて。なのでそういう降りかかる火の粉を僕が払っているんですよ」

僕がそういった危険察知能力、つまり予測や予知をできればいいのだが、父さんのよ

うな星詠みでもなく、また未来視のような特別なものを持っていないわけでもない。

僕に出来ることといったら身の回りを固めることや情報収集、そして集めた情報を下に何が起るかを推測することしか出来ない。

こういった環境では何かが起こってから動いたのでは後手後手になるのは必然。

ならば北斗が何かを察知したのであれば早めに動いた方がいい。

何も起こることはなく無駄になることがあるかもしれない。しかし何かが起こったときにそれは必ず有効になる。

可能性が低いからやらないのではない。少しでも可能性があるのなら、それを想定して対策をするのだ。

そうすることで未然に惨事を防ぐことができるし僕も動きやすくなる。

いずれにしてもここから先は僕の領域だ。

「あとのことは僕に任せて、北斗はいまを楽しんでください。

それと、他に困ったことや何かやりたいことがあれば言ってください。

僕が連れてきた手前、可能な限り便宜を計らいますよ」

北斗は少し考えたあと、躊躇うように、しかし意を決して言った。

「それなら一ついいか？」

躊躇うくらいの何かとんでもないことなのだろうかと一瞬身構えてしまったが、北斗

の言ったそれは普通の女の子らしい願いと違っていいものだった。

いや、北斗のような立場だからこそ憧れるものなのかもしれない。

いずれにしてもその北斗の願いはなるべく早く実現させてあげたい。

僕は北斗に

なるべく早くそれを実現させることを約束した。

2—12. 轉換期

「よし、それじゃあ行くかうか」

僕は玄関の前で待つていたみんなに声をかけて出発の準備が整ったことを伝えた。

あれから数日。自宅研究期間も終了して再び陰陽塾へ通い始める日を迎えた。無人となった屋敷の戸締まりをしたことを確認した後、僕たちは数寄屋門を潜り屋敷の外へと出て歩き出した。

道中、秋乃の通っている学校が見えてきた。この学校は屋敷と陰陽塾のほぼ中間に位置しており、秋乃は僕たちと一緒にこのように学校へ行くことになっている。都会といえど、いや、都会だからこそだろうか。犯罪に巻き込まれる可能性があるため、なるべく僕たちや、他に信頼の出来る人たちと一緒にいるようにしてもらっている。帰りは会社へと向かうことになっていて、徒歩でも行ける距離だが、僕の専属秘書が秋乃の迎えを担当するようになった。

秋乃はスターマイン社の社員だ。今のところ何ができるといわけではないが、勉強も兼ねて研究のお手伝いをしてもらっている。秋乃は生成りで普通の人にはない見鬼の才能があり、これは僕たちの部署では四人としない珍しい才能だ。こんなにも

貴重な技能保有者、いまから大事に育てていけば将来的に我が部署に多大な利益をもたらすだろう……

——と、まあ、取って付けたような表向きの打算はあるのだが、結局それを決めるのは秋乃本人だ。秋乃が将来的に僕たちの部署で研究者として活躍するもよし、それ以外の道を選ぶもよし。兄としては妹があきの何事もなく無事に日々を幸せに過ごすことができるのならそれでいい。

そんなことを考えていると秋乃が手を振りながら元気よく校舎内へと入っていった。秋乃を見送ったあと、僕たちは4人は再び陰陽塾を目指し歩き始めた。

陰陽塾へ着くとまず向かった先は塾長室。自宅研究の報告をするためだ。

エレベーターから降り塾長室と書かれたプレートのあるドアをノックする。すると中からすぐに返事があつたので、それを聞いた僕たちはドアを開けて中へと入った。中へ入ると奥の席にちよこんと座っている塾長が見え、そしてその隣には入塾式のときに会った大友先生がいた。

二人ともこちらを確認するとニコニコしながら僕たちを迎えた。

「お待ちしていましたよ、みなさん」

「おうなんや、みんな揃って。久しぶりやな」

「塾長、大友先生。この度は無茶言つてすみませんでした。おかげさまでいい研究成果が得られました」

「それはよかつたですね」

塾長はにこやかにこちらに語りかけてきた。実は塾長とは自宅研究期間中に何度か会っているので大友先生のように久しぶりに会つたというわけではない。というのも塾長には、僕からのさらなるお願いをする必要があつたからだ。

最近、塾長に対する依存度が高くなつてきている気がするが……、致し方ないだろう。あとが怖いが……、なに、取つて食われたりするわけじゃないんだ。なんとでもなるさ。

そんなことを考えていると、僕たちの面子の中に新たな顔があることに気が付いた。大友先生が声を掛けてきた。

「その子、見かけん顔やな」

大友先生の視線の先には女子用の白い制服に身を包んだ北斗がいた。

「ああ、そうでした。大友先生は初めてでしたね。——彼女は北斗。僕の妹です」

「……は？　ちよい待ちいや。　碧クンの妹って……、夏目クン以外に兄弟おったんか？」

「はい。　僕の二つ下の妹です」

僕は今現在15歳なので年齢が二つ下の北斗は14歳ということになる。　戸籍上そういうことにした。　というのもその歳が北斗が没した年齢だからだ。　精神的には2000歳くらいになっているはずだが……

「二つ下？　でもその子、うちの制服きとるやないか。　碧クンの二つ下ってことは、この子まだ中学生とちゃうんか？」

陰陽塾は基本的に義務教育を終えてから通うことになる。　大友先生の疑問はそこにあつた。

「大友先生の疑問はもつともなんですけど、いろいろと事情がありました」
「なんやその事情って？」

うーむ……。　大友先生突っ込んでくるなあ。　もつとも中学校に通っている年齢の女の子が突然陰陽塾に通うというのだ。　気にはなるか。　まあ北斗が陰陽塾に入塾するようになった経緯を話してもいいが、それには大友先生が信頼するに値する人物かどうかを知りたい。

僕は一瞬、塾長に目配せして確認をとる。　すると塾長は僅かに頷いた。

「……なんや？ 塾長と隠し事か？」

「——失礼しました。ただ、僕としてもこのことは個人的な事情になりますので話す相手は見極めさせて欲しいというのがありました」

「そうか……。それで碧クン。僕は君の事情に踏み込んでええと判断されたんか？」

「そう、ですね……。——大友先生は随分と塾長から信頼されているようで」

「大友先生は生徒想いのとてもよい先生ですよ。相談事は大友先生に任せておけば大抵解決してくれますから」

「……さりげなくそんなこと言って僕の仕事増やそうとせんといってもらえます？ どうせ言ったところで聞き入れてくれないんでしょうけど」

辟易した表情で塾長の言葉を聞き流す大友先生。だがそれは大友先生が塾長に対して冗談を言えるくらいの関係を持っているとも言えた。

まあ、大友先生なら話してもいいか。

「わかりました。お話ししましょう」

「ええんか？」

僕は頷いて大友先生に応えた。少なくとも塾長が信頼している人にならある程度話しても問題ないだろう。もちろん塾長が知っている範囲のことに限るが……

「先ほど話したように北斗は妹です。 といつても双子というわけではありません。 養子……、つまり義妹ということになりますね」

「そら知らなかったわ。 夏目クンからもそんなこと聞いたこともなかったからな」
「兄さんが知らないのは当然です。 なぜなら北斗はつい先日、妹になったばかりなのですから」

「どういうことや？」

説明不足の僕の言葉に怪訝な表情をしながら疑問を口にする大友先生。 夏目姉さんが知らないのは僕が話していないからだ。 そして姉さんと父さんが連絡を取り合うことはない。

姉さんと父さんは仲が悪いというわけではないのだが、二人ともどういうわけかお互いに苦手意識のようなものがあり、積極的に何かを話したりしようとはしない。 そのため父さんからも姉さんに対して連絡はしないし、その逆も然り。 だから北斗や秋乃のことはまだ姉さんは何も知らないはずだ。

この間の入塾式で姉さんに会ったとき、秋乃のことだけでも話しておけばよかったのだが、あの時は時間もなかつたので仕方がなかつた。 なんにしてもこの短期間で妹が二人できた、なんて話を姉さんが聞いたら、今の大友先生のような反応、いや、予期しない出来事に弱い姉さんのことだ。 もしかすると錯乱するかもしれない……

「すみません。最初からお話しするとですな……、僕を含めて兄弟は4人。兄の夏目兄さん、そして僕。一つ下の妹、北斗。最後に一人、五つ離れた秋乃という妹が一人いるんです。この中で北斗と秋乃は義妹になります。二人とも訳ありで、最近土御門の養子になりました。——いまのところ兄さんは二人が妹になったという事実をまだ知らないんです」

「なんや唐突すぎて頭が混乱してきたわ……。——塾長。このこと知つとったんですか？」

「ええ、もちろんですよ。その件でつい先日もお話したところなんです」

「塾長の言う通り妹のことはそのときにお話ししました。そして北斗がこの陰陽塾へ通えるように塾長の力をお借りしました。——塾長。その節は本当にありが

とうございました」

塾長にお願いした内容は北斗が陰陽塾に通うための助力だ。北斗と縁側で話をしたときに北斗から、僕たちのように陰陽塾へ通いたいと申し出があった。

むかしは学校なんてものは当然存在してはいない。仮に存在していたとしても北斗の立場がそれを許さなかっただろう。今の北斗はそんなしがらみから解放され自由になった身だ。僕は今まで自分の感情を押し殺してきた北斗の願いはできるだけ叶えてやりたかった。だから塾長への依存度が高くなったとしても僕は割り切つて

塾長に頭を下げた。

「いいのですよ。 将来の孫の頼みですもの。 このくらいは当然です」

「その言い方、反応に困りますが……、それはともかく。 塾長のお力添えもあつて北斗は僕たちと同じくこの陰陽塾へ通うことになりました」

「……なんやもう話が急すぎてついていけないわ……」

「先生。 碧くんの行動は考えるだけ無駄です。 そういうものだと思わないと身が持たないですよ」

「お、おお……そうか。 そういうもんなんか……」

「そうよ。 碧のこういうのは今に始まったことじゃないんだから」

「酷い言われようだな。 まあいいけど。 まあ、それはそれとして、大友先生。 北斗の担任になることはないと思いますが、これから北斗のこともよろしく頼みます」 北斗

「そういつて僕は頭を下げて、同様に北斗も同じようにする。 大友先生はやや混乱しつつも、そこはさすが先生と言ったところだろうか。 すぐに気持ちを切り替えて「よろしゅうな、北斗くん」と言つて北斗と握手をした。 そして京子や鈴鹿、北斗たちと大友先生が話し込み始めた。

手持ち無沙汰になった僕は荷物から今回の自宅研究の研究成果を取り出し、それを塾長の机に置いた。 一束、二束、三束、と積み上がる資料。 塾長はその中から一部を

手に取った。

「式神運用の新たな可能性……。このレポートは……。式神に関するものですか……？」

パラパラとページを捲って内容を確認していく。その目は段々と険しくなっていく。

ふと、塾長が夢中になって資料を読んでいると、女の子たちとの話しが終わったのか大友先生がこちらに来て、塾長の読んでいる資料に興味を示してきた。

「なんやこれ？」

興味津々に見ていた大友先生に、僕は塾長の机に置いた資料の一部を渡した。渡された資料をパラ、パラ、パラ、とページを読み進める。すると大友先生の表情もまた険しくなった。

そして、最初の冒頭部分を読み終えた塾長が僕を見た。

「碧さん、このレポートの内容、貴方の口から説明してもらえるかしら？」

塾長が難しい表情をしながらこちらを見ながら言った。大友先生は視線を鋭くしてこちらを伺っている。僕は京子たちをこちらへ呼びつつ机の上にある資料の一部を手に取った。

「はい。そのタイトルに書いてある通り、式神の新たな運用方法の提言です」

僕は資料に沿って説明を開始した。

「ご存じの通り今現在、式神として定義されるモノは大きく二種類あります。靈的存在を使役する使役式と形代を核に呪力を込めて作る人造式です。これらの式神には共通しているものがあります。それは式神を陰陽師しか扱えないこと。式神は実体がなく見鬼以外には扱えません。僕たちは今回これを問題と捉えました」

「それは資料に書いてあったように式神が犯罪に使われたときの対処が難しいということやな？」

「はい。その通りです。そしてその犯罪を追うことができるのは陰陽師に限られません。例えば使役式であれば追い詰めたとしても事前に結界等の準備をしていなければ霊体化されて逃げられてしまいます。それに人造式でも実体がないため通常の道具、武器や拘束具が使えないため陰陽師以外での対処が難しいです」

「しかしそれは私たちにとって当たり前のことで仕方ないことでもあります」
「……陰陽師に対抗できる手段は陰陽師以外にはありえない。塾長の言う通り陰陽師の常識はそうですね。ですが——」

僕は一端区切ったあとと言葉を紡いだ。

「それが我々陰陽師を腐敗させる原因になった根本の原因なんです。現状、陰陽師は野放しに近い状態です。陰陽術が犯罪に使われることは多いし、それを止めなければ

ならない陰陽庁の人間は靈災の対応に追われ人材が不足。手が回っていないのが実情です」

「せやけど、やっぱりそれは仕方ないことなんちゃうか？ 陰陽庁以外には一般人しかおらへんのやから」

「だからこそ変えていく必要性があります。ここは原点に戻ってゼロベースで考えるべきなんです。本来、犯罪に対応する組織は陰陽庁以外にちゃんとした組織がありませんね？」

「……それは警察つちゆうことやろか？」

「その通りです。本来であれば犯罪捜査は警察に任せるのが筋です。しかし警察組織には陰陽師がいません」

「そら陰陽庁が抱えとるからな」

「ええ。大友先生の言う通り陰陽庁が陰陽師をほぼ独占しているといつていいでしょう。そして一般人と陰陽師は様々な能力において隔絶した差があります。これは変えることのできない純然たる事実です。僕たちはこの一般人では陰陽師の犯罪を止めることが出来ない現状に一石を投じたいんです」

「……具体的にどうするのか考えているのですか？」

塾長が本筋を進めるべく続きを促した。

僕は頷き話を続けた。

「そこで今回の研究のメインテーマがそれになります。つまり一般人が陰陽師を捕まえるための方法論です」

資料を確認してもらおうべくページ数を指定しながら説明した。

基本的に一般人では陰陽師に対抗できない。倫理観を排除すればその限りではないが……。だがそれは例外。決められたルールの中で一般人が陰陽師に対抗する手段や方法。そのためにながが必要か、ということである。

「反呪術能力です」

「反呪術能力!? ……その言葉から大体想像はできるんやけど具体的にどんな能力なんや?」

大友先生はその質問に、塾長も期待に満ちた顔で僕を見た。反呪術能力という単語から大体の想像は付くだろう。しかしこれは未だかつて誰も実現したことのない新たな試みである。もしそれが本当に実現可能ならば期待しないという方が無理だ。

「反呪術能力……、カウンターマジックアビリティかたしろともいいますが、これは触れた式神の霊体化の強制解除や形代かたしろへの強制返還、陰陽師相手なら陰陽術を一定時間使えなくなるという能力です」

想像していたものよりもすごかったのか、塾長と大友先生は目を見開き絶句した。

言葉通り受け取るならば陰陽術への対抗手段、カウンター攻撃、術の無効化が考えられるが、それらの思想とは少し違う。これは対象の陰陽術の発動を妨害することで効果を発揮するため、正確に言葉を表すならば反呪術能力の分野の術式妨害が正しい言い方になるだろう。だがそこはあえて術式妨害という呼称にはしない。これを使用する人たちは一般人を想定している。一般人には術式妨害というよりも反呪術能力としたほうが伝わりやすいからだ。だが同時に陰陽師相手には術式妨害とした方が驚きは大きいだろう。今日の前に居る二人のように驚かない方がおかしい。なぜなら陰陽術にとって陰陽術の発動を妨害されるということはそれは即ち致命傷となるからだ。一般人と陰陽師の違いを喩^{たと}えるならそれは術が使えるか使えないからだ。

その違いが術式妨害によって一切なくなるのだ。それは陰陽師が一般人に成り下がることを意味する。このように言葉通り受け取ったあとにその効果を実際に聞くと目の前の二人のように驚くはずである。反呪術能力と呼称したのはそこにこそ意味があるからだ。陰陽師たちには気づいた時には既に遅いと理解してもらい自分たちの置かれた状況に驚き^{おの}慄^{おの}いてもらわないと困る。

「驚いているようですけどこのくらいの能力は当然ですよ。なぜならそれが出来て初めて一般人と陰陽師の差を埋めることができるのですから」

「いやしかし、そんなことが本当にできるんかいな？」

「実際に試してみますか？」

そういつて僕は大きなトランクから人間大の人形を取り出した。塾長と大友先生はその人形をみて唾然としている。

見た目はアンティーク人形の素体。そして取り出した人形は独りでに動き出し、その動きは見た目には反して生身の人間のごとくなめらかに動くのだ。その妙に気持ちの悪い動きは見る者を驚かせても仕方がないかも知れない。

この人形は家にあつた衛兵センチネルを改修したものだ。僕から動力魔力を供給する方式に変更したり人形の操作方法を変更したりと色々と手を加えている。

動作確認をしていると塾長が質問してきた。

「碧さん、その人形は一体……？」

「これですか？ 一応、式神に似た存在ですよ。」

衛兵センチネルと呼称しています」

「衛兵センチネル、ですか……」

「はい。ただ今までの式神とは設計思想が完全に異なります。既存の式神と違い核

は形代かたしろでもなければ霊的存在でもありません。素体は人形……、つまり実体があり、

そしてより戦闘に特化した存在です。この人形の役割は陰陽師敬から術者一般人を守ることに

です。その存在の在り方から衛兵センチネルと呼称しています」

この人形を扱うインターゲットが一般人であること。ここで言う一般人とは「見

鬼の才がない」かつ「靈氣がある」人たちだ。つまり魔力靈氣はあるが見鬼ではなく陰陽師になることのできなかつた人たちである。

これらは多くはないが存在する。例えば昔の春虎兄さんのような人たちだ。まあ春虎兄さんの場合は実際には封印されていただけでそれとは違うのだが。ただこういった人たちは見鬼ではないため靈氣も多くないことが多い。だから元々実体をかたどっている人形の方が魔力供給が少なくて済むため都合がいいという理由もあるのだ。

一通り動作させて問題ないことを確認したあと僕は説明を続けた。

「この人形の両手には先ほど言った反呪術能力を搭載。触れた陰陽術師を完全に無効化させることができます」

「……………」

塾長は絶句。大友先生も驚きを隠せない様子だ。だが聞くべきところはしつかりと聞いてきた。

「ま、まさかもう実用化させるとはな……。な、なあ。その人形の反呪術能力は具体的にどのくらいの時間効果があるんや？」

これだけの能力、永続的に続くはずもない。そう考えるのは普通だ。もちろんこの反呪術能力は時間制限がある。

「個人によって差がありますが、平均して1時間といったところでですね」

「1時間やて!?! なんやその化け物じみたスペックは!?!」

大友先生はその能力の高さに驚いた。これだけの能力が1時間も効果があるということは、それはすなわち時間という欠点はないに等しい。例えば警察がこの人形を使って犯人の陰陽師を追い詰め、陰陽術を無効化させて確保するならせいぜい効果が数分続けば事足りる。それが1時間続くというのだ。追い詰められる側からすればそれは時間的制約がないのと同義だ。

「気になるなら実際に触って試してみますか?」

人形の両手を差し出して大友先生に向けた。

大友先生は嫌な顔をしながら両手をブンブンと振って拒否の構えだ。

「いや、遠慮しとくわ……。その反呪術能力の効果時間が本当に1時間ならええけど、下手に触って一生術が使えなくなってしまうと職失うなんてことになったら笑い話にもならんわ」

確かに。僕の話のまま鵜呑みにしたら1時間で効果が切れるのだろう。だがその言葉が正しいという保証はない。能力が能力だけに大友先生が警戒するのは当然だ。

「ははは。そもそもそんな設計になっていませんしテストも十分しましたから大友先

生の言うようなことにはなりませんよ。……でもそうですね。もしもそういう事態になったのならうちの会社に来てください。好待遇で歓迎しますよ」

「なんか怖い勧誘やけど……。その前になんやその会社ゆうんは？」

塾長もこの会社のこととはしらないため、怪訝な表情をしながらこちらを伺っている。そこで名刺を大友先生、それに塾長にも差し出した。

事情を知らない二人は驚き、案の定質問攻めとなった。

しばらくして落ち着いたところを見計らって、

「そういうことなんで、今度この人形を元にうちの会社で製品化をします。月末には警察庁向けにこのプロトタイプを使ってデモを兼ねたプレゼンを行う予定です」

「碧クン……、やっぱこれ陰陽庁が扱うべきやないんか？　こんだけの能力、現体制を根本から覆さねかねんで」

「それは……」

塾長を見た。すると塾長は一瞬目を閉じ、小さく頷いた。

僕が塾長に確認を取ったのは陰陽庁に関する話をこれ以上続けると倉橋家の問題に行き着くからだ。先日陰陽庁へ行き倉橋長官から聞き出した内容は京子から塾長へ報告している。だがその倉橋家の問題をどういう結論としてまとめたのか僕は知らない。だから大友先生の質問に答える前に塾長へ確認を取る必要があった。

「碧さん。大丈夫です。大友先生には今日はそのことで相談しようとしていました」

「塾長。一体どういうことですか？」

大友先生は塾長のその言葉に怪訝な顔で反応した。

なるほど。僕たちが塾長室に入ったときに既に大友先生がいたのはそういう理由からか。

そして今度は京子から声がかかった。

「碧くん。お願い。力を貸して！」

短く、でも京子のそれは明確な答えだった。

僕は再び塾長を見た。

「塾長。よろしいのですか？」

「ええ。碧さんが息子から聞き出した話は、恐らく私たちではかえって手が出せないでしょう。家督を息子に譲った影響で呪術界への影響は息子に分がありますから、私たちが下手に動けば様々な制限がかかってしまいます」

塾長の言うように確かにあの時、帰り際の倉橋長官の反応からすると組織の力を存分に使えるだけの自信があつたように思える。

「こんなことを貴方に頼むのも心苦しいのですが……、でも京子さんの信じる貴方なら

できる。私はそう考えています」

僕は頷くことでこの件を了承した。

そして僕はこの件に関して関わり合いがあるであろう鈴鹿にも確認を取った。

「鈴鹿？」

すると鈴鹿は無言で頷いた。

これで塾長や京子、そして鈴鹿からこの件を託されたことで倉橋源司や大連寺至道の処遇は僕に一任されたことになる。つまり僕は彼ら二人を直接的に邪魔する大義名分ができたということだ。

倉橋家や鈴鹿の問題だったので積極的に関わろうとは思わなかったが、ここに来て事態は大きく動こうとしていた。

「わかりました。話を続けましょうか。——ただまあ、話を続けはしますが、大友先生には話の最後に結論を出してもらいますよ?」

「結論ってどういうことや?」

「なに、そんなに難しいものでもありませんよ。2択、いや、3択かな。その中から選んでもらうだけです」

「なんや、ようわからんけどまあええわ。その結論とやらを出せばええんやな?」

僕は首肯で応えた。

そして大友先生の同意も得られたことを確認したあと再び話し始めた。

「大友先生の言うように、陰陽庁にこの人形を卸せば、陰陽庁のさらなる戦力の向上が見込め、今抱えている人材不足が解決するかも知れません」

陰陽庁には陰陽師と名乗ってはいるが見鬼ではないものも多く存在する。それらの職員にこの人形を装備させれば本当に人材不足が解決するかも知れない。だがしかしそれは、その手法は絶対にとつてはならない。なぜなら——

「陰陽庁は双角会と繋がりがありません」

「っ——!?!」

「そして陰陽庁のトップ、倉橋源司はその双角会を操っている張本人です」

「なんやて!!!? そんなバカな話があるかいな!!!」

「事実です。これは僕の術によつて倉橋源司本人から直接聞きだしたことです。そしてその場には鈴鹿も同席していましたので確認をするならどうぞ」

「鈴鹿クン、ほんまか!?!」

「本当よ。あたしもその場で聞いたから間違いないわ」

「んなアホな……」

肩を下げ愕然とうなだれる大友先生。大友先生と倉橋源司がどういふ関係かは知

らないが、まるで信じていた者に裏切られたようなショックを隠しきれない態度だった。

「彼はなにやら兄さんを使って何かしようと思んでいるみたいですね」

「……何かつてなんや？」

「そこまでは分かりません。なにせそれを聞き出そうとしたときに邪魔が入りましたので」

「邪魔……?」

「ええ。大連寺至道に邪魔されたんですよ」

「っ——!?!」

「もちろん肉体は上巳じょうしのおおほらえの大祓おほらえの時になくなったらしく、式神として復活を遂げたみたいですね」

「……………」

あまりの衝撃に言葉を失う大友先生。

「このことから僕は今の陰陽庁を信用していませんし、その陰陽庁に対して支援することもありません。陰陽庁自体が腐敗しているのなら他の組織を使ってそれを是正しなければならぬ。そしてその役割を担うのは犯罪捜査の専門組織である警察庁なんです」

北斗の懸念を聞いてから僕はロビンで陰陽庁を監視した。するとやはり不審な動きが随所に見られた。あまりにも不自然なほど簡単にそういった現場を見せるものだから最初は罨かと思つたのだが、単純にロビンのことに気が付いてないことがわかつた。何かとやかましい使い魔ではあるが、こと監視任務においては優秀な一面を見せていた。そのロビンから報告を受けてすぐに僕は会社へ赴き説明して計画を実行に移した。

警察庁へは元々うちのシステムを扱ってもらつてゐる関係上、繋がりはあつたのでコインタクトを取るのには容易だつた。さらに少し説明をしただけが陰陽術絡みの犯罪とはいへ、陰陽庁に自分たちの仕事を奪われるという辛酸をなめつづけてきた警察庁にとつて今回の話は僥倖うかつただつたようだ。掴みとしては上々。先方からも今後未永くうちと付き合つて行く用意があるとの回答を得てゐる。あとは形だけのプレゼンをしていく段取りになつてゐる状況だ。ただまあ実際に正式に運用されるのは予算を計上した来年度からというようになるだろう。人形の単価もさることながら、陰陽術関連の犯罪と向き合うためにはそれなりにまとまつた人形の数が要になるからそれだけ費用も必要になつてくる。

だがそれも今日の話で少し事情が変わりそうな雰囲気である。

「元々は来年度からの運用を予定していましたが、その計画を前倒しする必要があるよ

うですね」

塾長たちから正式な依頼が来た今、この大義名分を盾に計画の前倒しを考えていいだろう。

具体的には今年度から試験運用という名目で運用を開始して、人形はうちの会社から警察庁へ今年度限りの無償貸与という内容だ。これであれば警察庁にしてみれば費用もかかけないで試験運用ができるメリットが発生する。うちの会社にしても試験運用の結果をフィードバックできるメリットがある。これは今後の開発において投資するだけの価値がある話だ。お互いにとってメリットのある話。この方向で一度話をする必要があるだろう。

僕は考えをまとめた上で、呆然としている大友先生に聞いた。

「僕の話はここまでです。そしてここまでの話を聞いて大友先生に質問があります」

「……なんや？」

「僕たちの側に付くか、陰陽庁に付くか。それともどちらにも付かないか。3択ですな」

「さっきまでの話を聞いたあとやと、その内容がまるで脅迫のように感じるわ……」

「人聞きの悪いことを言いますね。そんなに悪いようにはしません。僕たちの側に付くならもちろんですが、どちらにも付かないなら大友先生に対して何もすることはあ

りません。大友先生が職を失ったとしてもうちの会社で好待遇で歓迎しましょう。

もちろん大友先生さえよければですが。———ですが陰陽庁に付くならそれなりの覚悟を持ってくださいいね」

僕は「大友先生になつこりと笑顔で言った。

大友先生はその顔を見て引きつった表情をしている。しかし腹は決まったのか、すぐさま答えを出してきた。

「……わかつた、わかつた。碧クンの敵にはならん。……あとが怖くてかなわんわ」
「殊勝な心がけでなによりです。———それで結論は？」

「とりあえず傍観させてもらえんか？ 僕も自分の目で確かめたいことあるし」

「わかりました。それが大友先生の意思である以上尊重します。無理強いはしませんしよ」

「すまんな」
「かまいません。僕は「大友先生の答えが知りたかつただけですから」

正直なところ僕としては大友先生が敵になろうがなるまいがどちらでもよかつた。ただ敵になるというのなら早めに知りたいし、何より僕の周りであらゆるさされるのが一番嫌だつた。邪魔さえしなければ大友先生がどういう行動をとろうと気にはしない。

そこで塾長がタイミングよく声を掛けた。

「では結論もでたようですし、みなさん。そろそろ講義の時間ですよ」
塾長のその言葉でこの場は解散となった。

2—13. 陰陽塾襲撃（1）

関東地方が梅雨入りして六日目。このところ毎日のように雨が降っていたがこの日は曇天。どんてん

ようやく雨はあがったもののジメジメとした湿った空気が体に纏わり付き不快な気分へと誘う。

いつものように屋敷を出た僕たちは秋乃を学校へと送り届けたあと陰陽塾を目指した。

自宅研究期間以降も相変わらず同じメンバーで陰陽塾に通っている。京子、鈴鹿、北斗だ。

鈴鹿や北斗とは違い実家のある京子だけは偶に実家へと帰っているのだが、既に既成事実化しているのか殆ど僕の屋敷へ入り浸っている状態だ。

もつともそれに困っているわけではないのでそこは京子の好きなようにさせている。

それに食事面で大変助かっているし、なにより京子がいる方が家の中が賑やかだ。そういう意味で京子には大変感謝している。

また魔術面でも京子は進歩を見せた。

元々京子が僕の屋敷で寝泊まりするようになった理由は魔術の習得のためだ。ただ単に鈴鹿たちと戯れるためにいるわけではない。

京子と鈴鹿は強化の魔術の鍛錬をしていた。鈴鹿は元々研究者だったためか強化の魔術に深い理解をしてしていた。才能があつたと言つていいだろう。

しかし京子には強化の魔術は残念ながら才能がなかつたと言わざるを得ない。せいぜい物を強化するくらいしかできず、強化より少し上級の変化の習得には至らなかつた。

だが強化の魔術を教えたことは無駄にはならなかつた。京子の強化魔術は実戦にこそほど遠い練度だが、それは強化の魔術に必要なイメージが京子にとって難しかったというだけなのだ。

そこで僕は京子にルーン魔術を教えた。これは北欧に伝わるルーン文字によって神秘を成すものだ。

工程が一工程シングルアクションなので初心者にも比較的扱いやすい魔術に分類される。また属性も多彩であるため京子自身の属性を探すのにも向いている魔術だった。

そしてその思惑通り京子の属性でいくつかのルーン魔術を使うことが出来るようになった。

京子はルーン魔術を覚えるのにさほど時間は掛からなかつた。強化の魔術で培つた

経験値はここにきて確かな効果をもたらしていた。

一つ一つ積み重ねて自身のモノにしていく様は京子自身の在り方を表していると言えた。

「碧くん？」

京子を見ながら考えていたら、それに気づいた京子が不思議そうに首をかしげた。

「いや……。なんでもないよ」

「そう？」

そんなやりとりをしていると、横で聞いていた人物が僕をからかおうと爆弾を投げた。
きた。

「どうせキョーコをじろじろ見ててエツチなことでも考えていたんでしょ」

爆弾を投下したその人物とは鈴鹿である。

彼女にもまた京子と同じように魔術を教えている。

最初に教えた魔術は京子と同じく強化だ。しかし京子とは対照的に鈴鹿は強化の魔術をよく理解していた。

物質の強化が出来るという点では京子と同じだ。しかし、こと紙に関してはさらにその少し上級の変化にまで理解が及ぶようになっていた。

鈴鹿は陰陽術でも符術を得意としていたがその傾向が現れてきたのだろう。これは

彼女の属性が関係している。

五大属性の枠から外れているため他の魔術を扱うことは容易ではないが、この短い期間でここまで習得できたのだからたいしたものだ。

もつとも鈴鹿は京子よりも魔術回路の数が少ないので京子と同じようにルーン魔術を使っていたら攻撃的な鈴鹿のことだ、ボカス力撃ちまくってすぐに打ち止めカス欠になってしまう。そういう意味においても鈴鹿が特化した属性だったことは僥倖ギョウコウといえた。

京子が一つ一つを積み重ねていく秀才タイプなら鈴鹿は特化した天才タイプだった。

その天才は今まさに僕にとって天災となり得るわけなのだが……。

この鈴鹿の発言は下手に反論したところで僕の立場を危うくする。

だから僕はその爆弾を被弾することはせずに持ち主へそのまま返すことにした。一言。

「そうだよ」

「んな——っ！」

それを聞いた鈴鹿はまともに反応できずに驚き、そして京子は顔を真っ赤にした。

思った通りの結果に満足した僕は笑いながらこう言った。一言。

「嘘だよ」

呪術の神髄が嘘とは誰かが言っていた言葉だが、誰でもこんなに簡単にあしらうこと

ができれば楽なんだろうなあと常々思う。

からかわれたことに気が付いた鈴鹿はその場で地団駄を踏み、顔を真っ赤にしていた京子はやや残念そうにこちらを見ていた。

そんな彼女たちからなかったことを適当に謝りつつ陰陽塾を目指して歩いていった。

☆

「前方に人集りができてるな」

いま僕たちが歩いているところは陰陽塾の後方100mあたりだろうか。ふと北斗のその言葉に釣られて前方へと視線をやると確かに人集り、というか行列が出来ていた。

何かあったのだろうかと行列の最後尾に居る人に状況を確認してみた。

するとどうもアルファとオメガの入退出認証がいつもよりも厳しいものになっていて、塾舎内になかなか入れずにこうして行列ができているということらしい。

「何かあったのかしら? ……キョーコ。あんたのお婆さんから何か聞いてないの?」

「あたしは何も聞いてないわよ」

「そう……」

「……………」

ふむ……。京子には何の連絡も入っていない……。か。

あの塾長のことだ。何か重要なことがあれば京子に連絡を入れていてもおかしくはないはずだが……。

このような行列、僕が入塾してからは一度もなかった。が、現にこうして行列ができている。

認証を行っているアルファとオメガを管理しているのは塾長だ。そしてこの行列の原因となつているアルファとオメガの認証行為も塾長の指示によるものだ。

恐らくそうしなければならぬ事態に陥つたと見るべきか……。

とりあえず現時点で考えられることは極めて少ない。

京子に連絡も入れられないくらいの逼迫ひっぼくした事情があると見た方がいい。

そしてその理由は、これだけの嚴重な入室の管理。何者かの侵入を拒むものだと推測できる。

……ここまでは推測が出来るのだが……。果たして陰陽塾に一体誰が侵入するというのだろうか？

陰陽塾に侵入して何の得がある？しかも塾長に知られるようなことをしてというオ

マケ付きだ。

ここまで警戒レベルを上げられた状態で一体ドコの誰が好きこのんで侵入するとい
うのだろうか？

夜光信者が姉さんを狙った犯行だろうか？ いやそれならこんな大げさなことをせ
ずにコソコソと姉さんに近づけばいいだろう。

しかし塾長がここまで警戒する犯人か。……想像しにくいな。要注意人物の倉橋源
司やその一味であれば表だって警戒しないだろうしな。

……現時点で判断できるのは犯人や犯行の理由は不明だが何かが起こるのは確かだ
ということだ。

とりあえずそれを踏まえた上で行動するか。

「みんな、聞いてくれ。たぶん今日、この陰陽塾で何かが起こる」

「そりゃあ、この状況だもの。見りゃわかるわよ」

何、当たり前のことを言ってるんだと言いたげに僕を見る鈴鹿。

「まあ……そうだな。……ただその何が起こるかかってことだよな」

「碧くんは何が起こるのか分かるの？」

「いや分からないよ。だけど塾長がこれだけ警戒していて、しかも塾長は事前に何か起
こるのか把握しているようだ。これはある意味犯行予告だよな。……それなりの人物

が来るんだろうね」

「お祖母様が警戒するそれなりの人物……。——あつ！」

「京子？何か知ってるのか？」

僕と鈴鹿、北斗が首をかしげて京子を見る。

「……蘆屋道満あしやどうまん」

「つ——！！！！」

鈴鹿が絶句した。鈴鹿は何か事情を知っているようだ。

「あしやどうまん？誰だそれは？」

北斗は首をかしげながら京子に問う。

京子と鈴鹿は何か知っているようだが、僕も北斗と同じく蘆屋道満が何なのか知らない。
い。

……正確には僕は名前だけ知っている。僕のご先祖様である安倍晴明のライバルだった蘆屋道満だ。ただまあ僕もそれくらいしか知らない。本当に名前を知っているというだけだ。だがその人物と京子の言う蘆屋道満が同一人物なんだろうか、というところで疑問符が付く。同一人物であればその蘆屋道満という輩は何年生きているんだって話になる。泰山府君祭で器を入れ替えて生きながらえたにせよ、これはもう怨霊の類いじゃないか。

……なんにしても解らないことだらけだ。

僕は北斗に蘆屋道満について僕の知っている範囲で説明したあと京子に説明を促した。

「京子と鈴鹿は事情を知っているみたいだから、その蘆屋道満について教えてもらえるかな？」

「わかったわ。……といつてもあたしも蘆屋道満本人を見たわけじゃないからお祖母様から聞いた話になるのだけれど」

「どんな話なんだ？」

「えっと、この前起きた上巳じょうしのさいはらえの再祓さいはらえのことは知っているわよね？」

「じょうしのさいはらえ？」

北斗がなんだそれほと京子に問うた。

「あー、そっか。北斗ちゃんには知らなかったわね。北斗ちゃんがここへ来る数ヶ月前に双角会じゅうかくかいが霊災テロを起こしたのよ。それが俗に上巳じょうしのさいはらえの再祓さいはらえと呼ばれているの」

京子の言う通り双角会が霊災テロを起こした事件である。

当時、僕も鈴鹿も陰陽塾へ通う前だったため話を聞いただけに留まるが、京子はその事件当時、姉さんたちと共にその霊災テロに係わった当事者だった。

「その上巳じょうしのさいはらえの再祓さいはらえで出たらしいのよ。蘆屋道満本人が」

「……それは誰かが目撃したってことか？京子は見てないんだろ？」

「それが夏目くんたちの前に姿を現したらいいの。挨拶しただけだったみたいだね。その報告をお祖母様が聞いてあたしにも気をつけなさいって注意していたのを出したのよ」

「なるほどね。しかしそんな有名な人がよりにもよって姉さんの前に現れるなんて……。なんだろう、不幸体質なのかな？」

「ふふっ……なんだか碧くんの不幸を一身に背負ってた感じね」

苦笑しながら冗談交じりに言う京子。

確かに京子の言う通り、なんだかんだで僕には不幸が降りかからない。が、その反動か周りが不幸を被ることが多い。そしてその対象は主に姉さんが多いわけだが。

「なんだか姉さんに悪いことした気分になるよ……。と、まあ、冗談はそのくらいにして。——鈴鹿？」

「……あ、あたしもこの眼でみたわけじゃないわよ？」

「鈴鹿が見てないということは誰かから蘆屋道満についての話を聞いたってことだよな？」

「話を聞いたというか、噂程度にね。……ほら、あたし陰陽庁にいたからさ、そういう呪搜部絡みの話とかも聞こえてくるわけ。通称『D』なんて呼ばれてね、なんでもこの

前の上巳じょうしのさいはらえの再祓では木暮や鏡まで煙りに巻いたつて話よ」

「へえ……。十二神将二人を相手に。それはすごいな」

「すごいなつて……。反応軽すぎよ！碧のそれはいつものことだけど……。でも蘆屋道満よ！十二神将を二人も相手に逃げ切つたのよ！」

「いやあ、素直に驚いているよ。鏡さんは実際戦つてみて強かつたし……。それに粘着質だつた。同じように木暮さんも強いんだろう？」

「それを分かっているならもつとこう！なんていうか!!」

鈴鹿は自分の焦りを理解してもらつていないと勘違いしたようでやり場のない憤りを感じていた。

そんな彼女を諭すように肩に手を置いて彼女の顔を正面から見つめた。

「まあ落ち着けて」

「これが落ち着いていられるかー!!」

「焦る気持ちは分かるけどもうすぐここに来る相手だ。今更どうしようもないじゃないか。そして僕たちに来ることはこれからどうするのかということだけさ」

「蘆屋道満なんて化け物相手にあたしたちに何ができるんだよ!!つーかキョーコもホクトも怖くねーのかよ!?!」

「あたしは碧くんと一緒なら怖くないわよ。……。あのとき碧くんのそばで共に戦うつて

決めたし」

「私はその『あしやどうまん』が知らないからな。怖いも何も判断基準がないから測りようがない」

京子と北斗はそれぞれの感想を述べた。

京子は何かが吹っ切れたのか、もう何が出てても怖くないような言い方をしていた。

北斗は……、まあ、たとえ蘆屋道満について正確に認識していたとしても彼女を驚かせる存在になつていたかというところは考えにくい。

なぜなら蘆屋道満が本物だったとしても所詮それは平安時代の人間だ。古代より存在している北斗からしたら赤子も同然だのだ。呪術面ではどうかしらないが、それにしてても北斗は回路が元に戻つて量が少なくなつたとはいえ、彼女は究極の知識を得た稀有な存在だから蘆屋道満が驚くべき対象かといったらそうはならないように思える。

僕にしてもその北斗と同じだ。舐めているわけではないが油断さえしなければ負けるとは思えない。

ただ急な話だったので準備不足なのは否めないが。

「こんなことになるのなら衛兵センチネルを持つてくればよかつたが、今から屋敷に戻つてみんなバラバラになるのも危険だ。それに見た限り陰陽塾の呪的防御結界は強い。余程のことがない限り破れないだろう。衛兵センチネルがなくなると心許ないのは事実だけど今の戦力でやるだ

「けやってみよう」

「で、でもっー!」

鈴鹿の不安はもつともだ。だがないものを嘆いたところで現状がよくなるわけではない。ならば現在の戦力を正確に把握した上で何が出来るのか考えなければならぬ。今回の僕の任務は鈴鹿や北斗、京子以外に姉さんたちのグループを守りながらの戦いになる。僕が矢面やおもてに立つて蘆屋道満を相手にするつもりではいるが、蘆屋道満に仲間がいた場合は僕だけでは手が足りなくなるだろう。鈴鹿たちには悪いがそうなったときは自分たちの身は各々で守ってもらうほかないが……、本当にヤバくなったらいいよアレを使わざるを得なくなるだろう。

いずれにしてもこの状況だ。なるようにしかならん。

「心配するな。みんなは僕が必ず守ってやる」

鈴鹿の頭を撫でて場を紛らわす。鈴鹿は顔を赤くしながらもなすがままにされていく。

そして京子と北斗を見ると力づくよく頷いた。どうやら彼女たちは既に戦闘準備ができていた。なんとまあ頼もしいことだ。

そしてそうこうしているうちに塾舎の入り口にできていた行列も捌けたよう次第が僕たちの番になっていた。

「さて僕たちも中へ入ろう」

順番にアルファとオメガの認証チェックを受けて塾舎内へと入る。

そしてそれぞれのクラスへと分かれる前にここが襲撃されたときの手順の確認を取った。

とはいっても合流までの方法だけだ。その後のことなどその時にならないとわからないだろう。

「京子。もし授業中に襲われたら僕たちが京子のクラスへ行つて合流するから動かないでくれ」

「わかったわ」

とりあえずの方針は決まったが、あとはロビンの報告を受けて陰陽庁でも動きがないか確かめなければならぬ。

陰陽塾がこれだけ動いているんだ。当然、陰陽庁もその動きを把握しているだろう。このドサクサに紛れて何かされても困るからな。

そんなことを考えながら僕たちは様々な思いを胸にそれぞれのクラスへと向かった。

2—13. 陰陽塾襲撃 (2)

「結局何もなかったわけだけど、取り越し苦労だったのかなあ……?」

僕は塾舎の食堂で定食のおかずを突きながらぼやいた。

昼前に報告をロビンから受けた。どうやら陰陽庁でも物々しい雰囲気になっていくらしく、その原因はやはり蘆屋道満あしやどうまんで間違いないようだった。

蘆屋道満からは陰陽庁に対して本日、鴉羽織からすばおりを奪いに行くという宣戦布告めいた予告状が届いていた。

そのため陰陽庁は庁舎内にある鴉羽織からすばおりを守るべく厳戒態勢を引いているというという。

だがそのロビンの報告だと、現在の状況の説明に結びつかない点がある。

鴉羽織からすばおりが陰陽庁にあり蘆屋道満がそれを奪いに行くのであれば、なぜ陰陽塾まで厳戒態勢にならなければならないのだろうか。

それに、だ。蘆屋道満は鴉羽織からすばおりを手に入れて何をするつもりだ?

鴉羽織……それは陰陽庁で禁呪指定を受けた土御門夜光が作った呪具だ。呪具、という何らかの武器や防具などのように聞こえるが実際はそうではない。

実家にある資料で読んだことがある。

特殊な式神なのだ。人造式の式神だがその様は使役式のようにまるで意思を持った生き物のように振る舞い、姿形は三本脚の金の鳥の姿をしたり在るときは夜光の羽織をしたりと形態を変える。霊力も高く姉さんの式神の竜と同等ということだ。

だがそれだけの話。

確かに変な機能が付いてはいるが、あんなものは少し不思議な式神というだけに過ぎない。

陰陽庁を敵に回してまで手に入れるほどのモノか、と僕なら考える。

ア、ア、ア、ア——ワケワカラン……

頭を抱えて心の中で叫ぶも全てがバラバラ。蘆屋道満の考えが全く解らない……。

「はあ……」

「何ため息付いているんですか」

そう突っ込んだのは姉さんだ。いま僕の対面に座って同様に昼食を取っている。

僕は普段、京子が弁当を用意してくれるため鈴鹿や北斗、京子と教室で昼食を取る。

しかし今日はいつもとは異なる。今日は食堂で昼食を取っているため姉さんや春虎兄さんや冬児、天馬もいる大所帯だ。

事情が事情であるためこのようにまとまっている方がいいからという理由からだ。

「何って……それは決まってるじゃないですか。蘆屋道満のことが全くわからないから悩んでいるんですよ」

「そんなのぼくたちに解るわけないだろ。それに碧も言ってたじゃないか。陰陽庁にからすぼり鴉羽織があるって。本当にそれが目的だったら陰陽塾が襲撃される理由もなくなるだろ？」

「これまでの経緯は姉さんに話してある。何でそんなこと知っているのかと突っ込まれたがそこは適当にボカした。」

「だが確かに姉さんの言う通りだ。蘆屋道満の予告状通りなら陰陽塾が襲われる理由が全くなくなる。」

「だけど、それならなんで陰陽塾はこんなにも厳戒態勢なんだろう？ 塾舎内への入退室はもちろん結界の強度が昨日までとはまるで違う」

「そ、それは……」

「僕の疑問に言葉を詰まらせる姉さん。その姉さんをフォローしようと姉さんに代わって春虎兄さんが言葉を紡いだ。」

「それはアレだろ。何かあったときのための保険ってヤツだ」

「それはそう……なのだろう。そうではないと説明が付かないのだから。」

「……確かに春虎兄さんの言うように、その線が今のところ一番濃厚みたいですな」

「だろ？ だからそんなに悩んでないで早くメシ食ってしまおうぜ」

まったく春虎兄さんのその細かいことに囚われない思考が羨ましいよ。だが、まあ、春虎兄さんの言う通りだな。解らないことをあれこれ悩んだところで答えなど出るはずもない。

よし。僕も春虎兄さんに習って早いところ食事を取ってしまおう。

そう考えていた矢先、姉さんから声を掛けられた。出鼻をくじかれた僕は姉さんに視線を向ける。

「この子、ぼくたちと会ったのは初めてだよね？ 何度か見かけたことはあるけれどもこうして直接話す機会は初めてだし、せっかくだから紹介してよ」

この子とは北斗のことだ。なんだかんだで姉さんとうとうして面と向かって対面するのは初めてだ。

紹介するのはいいが、どう紹介したものか……

というか姉さんは北斗のことに気づかないのだろうか？

元々今ここに居る北斗のモデルとなったのは姉さんの作った簡易式の容姿を参考に作っている。

確かに北斗が魂を宿してから1、2ヶ月が経ったため髪が伸びて雰囲気も変わっている。が、しかし、北斗のモデルとなった簡易式を作ったのは姉さんなのだから気づいて

もおかしくないハズなのだが……

……まあ、今更考えるだけ無駄だな。ここは春虎兄さんを習ってそのまま言ってしまう。うん、それがいい。

そして僕は小さく呟いた。

「……妹」

「え？」

「だから妹。僕の妹であり兄さんの妹。14才で僕の1つ下だよ」

「ええ~~~~~~~~~~~~!!!」

姉さんの叫びは食堂フロアに響き渡った。視線がこちらへと集中、食堂は静寂へと包まれる。

だがそれも一瞬のこと。またあいつらかと言わんばかりに興味が失せたのか何事もなく視線は霧散し、また先ほどのように喧噪に包まれた。

姉さんは固まったまま。それに習うように春虎兄さんも箸を落としたまま固まっている。冬児と天馬も食べるのをやめてこちらに注目していた。

「こちらは僕の兄さんでキミの兄さんでもある。名前は夏目。16才で僕の1つ上だよ」

同時に北斗に向かって「実際は姉なんだけどね」と声には出さず周りには隠すように

口だけを動かした。もっとも北斗はそのあたりの事情を知っているため言うまでもなく無言で頷いた。

「私は北斗と言う。よろしく、兄上?」

僕の隣に座っていた北斗は席を立てて対面にいる姉さんに手を姉さんに差し出した。姉さんもそれに釣られるように、おずおずと手を差し出し握手を交わした。

「……よ、よろしく。僕は夏目……、つて、あれ? ……北斗?」

握手をしながら北斗の発した発言を反芻し、はんすうようやく違和感を感じ取ったようだ。

そしてそれは姉さんだけに留まらなかった。

「北斗……だつて?」

横から口を挟んだのは先ほどまで固まっていた春虎兄さんだ。そして北斗を凝視した春虎兄さんの疑問はやがて確信へと近づいていく。

「言われてみれば似てる、気がする……」

「似てる? いや、髪が伸びて雰囲気が違うが……、これは間違いなくあの北斗だろう」
春虎兄さん、それに冬児も姉さんと同じように北斗に確信を持ったようだ。

ああ、これは面倒くさくなるパターンだな。僕は現実逃避するように食事を再開した。

だが、机を挟んだ対面にいる人物がそれを許さなかった。

「(っ)(っ)(っ)(っ)これはどういうことですか!? 碧!!」

僕の襟首を掴みながら前後に揺さぶり脳が激しく揺れる。その脳を揺らされた状態で必死に言い訳を考える。

姉さんがここまで取り乱すのも無理はない。今まで妹がいることなんて説明しなかったし、そしてその妹が姉さんの簡易式に似ていればこうなるのは当然といえるだろう。

いつも陰陽塾に通っているのだから当然姉さんと接する機会もあったのだが、北斗と姉さんがこうして一緒になったのは今回が初めてだし北斗の紹介を求められたのも初めてだった。

塾舎外では姉さんたちに会うこともなかった。例^人の件^形で忙しかったからね。こう見えていろいろと奔走しているのだ。

だがそんな僕の事情などは今は関係ない。どうかこの場を落ち着かせなければ……

あれこれと考えると再び春虎兄さんから声が掛かった。春虎兄さんのその目は真つ直ぐと僕を捉えていた。

「碧。なんで北斗がここにいいのか説明してくれないか?……もしかして北斗を操っていたのはお前だったのか?」

「……コイツ、北斗がいなくなつてから色々と気に掛けてたんだ。悪いがこいつの些細な頼みを聞いてやってくれないか？」

そして冬児が春虎兄さんをフォローするように言葉を付け加えた。

しかし今の春虎兄さんの話は変だ。なんで春虎兄さんは簡易式の術者ことを知らないんだ？

昨年、鈴鹿が起こしたあの事件の前日、姉さんと春虎兄さんが痴話げんかの仲直りをしたときに、その話もしていたと思つたのだが……

これはどういうことだ、と姉さんに視線を向けるとパツと視線を逸らした。

ああ、なるほど。そういうことね。よく分かつた。

ならば僕が全てのネタバレをしてあげよう。

「わかりました。春虎兄さん。どうしても北斗について知りたいのなら全てお話ししよう」

「うわああああああ、だめだめだ——め——!!!」

僕が何を言おうとしたのか気が付いたのか、姉さんは慌てて僕の口を押さえようとす
る。

僕は必死に姉さんの手をかいくぐる。しかし姉さんの手は僕の逃げ道を塞いだ。一
進一退の攻防。

周りはその様子をポカーンとしながら見ていた。すると全くの外野から大きな声と共に衝撃的な情報が舞い込んだ。

☆

「おいっ！ビッグニュースだ！ついさつき陰陽庁が襲撃を受けたらしいぞ！」

食堂中の視線が一人の男子生徒に集中した。

その報を聞いた僕は姉さんとのじゃれ合いをやめて勢いよく立ち上がった。その勢いで地面を引き摺った椅子が大きな音を鳴らす。

ガタツ！

「きたか……!!」

僕は立った勢いそのままにその場で一言呟いた。

すると姉さんは呆れ顔をしたまま僕に突っ込みを入れた。

「……なに言ってるの。碧？」

「なんでもない……」

いや、本当に、自分でも何を言っているんだと突っ込みたくなる。と、冗談はここま
でだ。

ようやく騒ぎの原因となつてゐる人が動き出した。そして大方の予想通だ。僕は椅子を元に戻し席へと着いた。

「どうやら蘆屋道満は陰陽庁へ向かつたようですね」

「そうみたいね。まあ、よかつたじゃない。厄介ごとが来なくて。はあ……よかつた。本当に……」

「そうよね。あたしも朝はああ言つたけれど、さすがに少し怖かつたわ」

「私はその蘆屋道満とやらがどういふ者か見たかつたので少し残念だな」

「ちよ、ちよつとやめてよ北斗……」と鈴鹿がひくつく。

鈴鹿と京子は蘆屋道満が来なかつたことに安堵。北斗は残念といつた様子。

姉さんたちも安堵が半分、拍子抜けが半分といつた様子だ。

「……ハハ。まあでも、いい予行練習になつたじゃないか」

そう言つて春虎兄さんは席を立ちふらつと窓際へ行つた。その様子を目で追う。

春虎兄さんは外を眺め何かを探しているようだ。そして顔が下を向いた次の瞬間、その視線が一点に釘付けとなつた。

「春虎兄さん？　そこから何か見えましたか？」

「——蘆屋道満……」

「あつ……」

やつべ。ホントに来ちゃった。

☆

僕は席を立つて春虎兄さんと同じように窓の外へと目を向ける。確かに塾舎の入り口あたりに車と何者かがいるのがわかった。しかしこの高さではハッキリとはわからない。春虎兄さんは何か確信めいているようだがよくこの高さから分かるものだ。

そう感心しながら僕は目に強化を施す。すると今度はその人物がハッキリと見て取れた。

春虎兄さんが見ている視線の先。黒いリムジンの横に一人の白髪的眼鏡を掛けた老人が立っていた。

隣にいる春虎兄さんを見ると体を強ばらせて固まっていた。その反応から察するにどうやらあれで間違いないようだ。

僕は春虎兄さんの肩を軽く揺さぶる。すると我に返ったのか、ようやく気づいた。

「……す、すまん。ちよつと動揺してた……」

「構いません。得体の知れないものとの接触はそうなっても仕方ありません。それより

もみんなにも報せましょう」

「あ、ああ……」

僕は姉さんたちをこちらに呼び下の様子を見せながら状況を説明した。

その説明を聞いた鈴鹿は見るからに顔色を悪くしていた。

まずは蘆屋道満がこちらに現れた理由。考えられることは二つ。

一つは予告状に書かれていた目的が嘘だったということ。蘆屋道満は怨霊めいたものとはいえ陰陽師だ。正面からバカ正直に行く方がワケがない。相手の視線を引きつけるためにわざと鴉羽織を奪うという嘘をついた可能性がある。陰陽庁の鴉羽織を奪うという目的は囿で、実のところは陰陽塾の何かが本当の目的だったということ。

もう一つは陰陽庁にある鴉羽織が偽物もしくは最初から陰陽庁に鴉羽織は存在せず、本物の鴉羽織が陰陽塾にある可能性だ。蘆屋道満は何らかの方法でその嘘を見抜き、陰陽庁に陽動をかけたあと陰陽塾へ来た可能性だ。

これは単純な乙種呪術だ。もつとも僕たちに対してその効果は極めて限定的だが。「つまり僕たちはまんまと騙されたワケだ」

「そんな悠長に言つてないで、これからどうするのか考えなさいよっ！」

僕がしらつと言つた感想に対して、顔をぶくーつと膨らませた鈴鹿がすかさず突っ込みを入れた。

そんな鈴鹿の頬を指でツンツンと突きながら、

「まあまあそんなに焦るなって。」

——そうだな。まずはここから下の様子を見ようじゃないか。逃げるにしても迎え撃つにしても相手がどう動くか見てからでも遅くないだろ？」

とりあえず相手の出方を見ないことには何も始まらない。

ここへ来た可能性だけなら蘆屋道満が陰陽塾へ遊びに来ただけとか色々あるじゃない？ ま、そんなわけないけどね。

と、その時、姉さんが呟いた。

「倉橋さん。あれ、塾長の式神じゃない？」

姉さんの視線の先には確かに小さな影が動いていた。

確かに塾長が使役している三毛猫が蘆屋道満に歩いて行くのが見て取れた。

「お祖母様!？」

京子がそう叫んだ次の瞬間。蘆屋道満と目される老人は手にした杖で黒いリムジンをトントンと2度叩く仕草を見せた。

するとリムジンの背部、トランクが爆発。弾け飛び散った。

塾長の猫はその爆発にあえなく飲み込まれ、同時にその爆発から黒い影のような何かが全方位に対して飛び出した。

黒い影は飛び散りながら形を形成していった。出てきたものの正体は蜘蛛。恐らくは装甲鬼兵・土蜘蛛を模した式神なのだろう。鈴鹿が持ち出した装甲鬼兵と同じ姿だ。だが鈴鹿の時とは違い、それらは数え切れないほどの群体で塾舎の壁をよじ登ってきている。移動する早さもなかなかのものだ。

そしてその一体が窓を突き破ろうとする仕草を見せる。

「春虎様！」

今度は春虎兄さんの後ろから何か飛び出してきた。

その正体は白いモコモコとした何か。あ、いや。幼女だった。

その幼女は春虎兄さんと窓の前に割って入る。

どうやら春虎兄さんの式神のようだ。幼い容姿ながらも鬼気迫る表情で必死に主を守っている。

なるほど。京子が言っていたコンちゃんとはこの子のことだったのか。色々と興味深い式神ではあるが、いまは聞くべきではないな。

ガンツ、ガンツ、ガンツ

式神は窓を突き破ろうとするが窓が破れる気配はない。

「ば、化け物!？」

「式神だよ、バカ虎!」

春虎兄さんの台詞に姉さんが叫びながら鋭くツツコミを入れる。すぐく息の合った連携だ。

ここに来て食堂にいる僕たち以外の塾生たちも状況を理解したのか、悲鳴を上げパニックになった。

悲鳴を上げる者、声も出せず床にへたり込む者、我先にと逃げ惑う者。

それぞれがそれぞれの行動を取っていた。

そしてその中には当然攻撃しようとする者もいた。

しかしそれは未然に防がれることとなった。

「ダメだ!」

一言、姉さんが怒鳴りその塾生の動きを止めた。

「塾舎の結界が効いている。こちらから攻撃することで結界にダメージを与えることになる!」

姉さんのその指摘に、攻撃しようとしていた塾生、そしてそれ以外の塾生たちもハツと冷静さを取り戻し、そして、窓の外にいる式神たちの動きに注視した。

このフロアからでは全部を見渡すことはできないが、窓から上下を見た限り、式神た

ちはこの塾舎を包囲するように埋め尽くすように這っている。数が数だけにその様相は異様だ。

「こいつら、中には入ってこれないようだな」

現在の状況を冷静に冬児が分析する。そしてその冬児の台詞に夏目は頷いた。

「この結界はそうそう簡単に破れる代物じゃないよ」

姉さんの指摘は全く以て正しい。この塾舎の結界は式神程度ではいくら数を重ねたところで破ることはできない。それほど強固なモノだった。

現状は大丈夫といったところだろう。……が、全く破る手立てがないというわけではない。そして敵とはそういうところを突いてくるものだ。

「十二神将相手に大立ち回りする蘆屋道満だ。これで終わりじゃあないだろう」

「そうだよっ！こんな余裕かましていいわけねーだろ!!」

僕と鈴鹿は冷静にこの成り行きを分析している姉さんと冬児に釘を刺す。

その言葉に周りも表情を硬くする。

だが確かに今は膠着状態だ。ならば行動を起こすのであれば今しかない。

食堂には大勢の塾生がいる。いくらなんでも何かあったときにコレを全部守るなんてことは不可能だ。

「ひとまず今は結界や塾長たちが対応しているおかげで膠着状態を維持している。そし

て行動するなら今が最大のチャンスだ」

そう。この好機を逃す必要はない。まずは塾生たちを何とかする方が先決だ。今のままでは蘆屋道満を相手にするにしても僕たちも身動きが取れないのだから。

「食堂にいる塾生を呪練場に移動させよう」

この塾舎でもっとも呪的防御に優れたところは呪練場になる。塾舎とは別に呪練場自体にも結界が張られており、いわば二重結界になっている。

ここならば塾生たちを丸ごと収容できるし待避する場所としては打って付けだ。応援が来るまで塾生たちはここで籠城した方が得策だろう。

僕たちは手分けしてここにいる塾生たちを食堂から呪練場へと行くように誘導を開始した。

慌てず冷静に落ち着いて行動するよう声を掛けながら。

塾生たちも先ほどのやりとりで大分冷静になっており、我先にと行動を乱すような者は一人も居なかった。

さすが名家が多いだけある。現在の状況を冷静に分析し自分たちが何をしなければならぬのか正確に理解していた。

そして塾生たちの移動も半ばにさしかかったその時だった。複数の講師たちが食堂に飛び込んできた。

「みんな聞こえるか？ たつたいま陰陽塾が、正体不明の——あ、あれ？」
「今すぐ避難を開始——え？」

食堂の状況を見て困惑気味な講師たち。想像していた状況と異なったのだろう。

僕は代表してその講師たちに近づき状況を説明。そして講師たちも塾生を呪練場へと移動させるためにここへ来たらしい。

それならばと、僕たちは講師たちに誘導作業を引き継いで、再び一カ所に集まった。

「さてと——」

辺りを見渡す。皆が一様に緊迫した面持ちだ。

僕はその表情を一瞥して皆に聞いた。

「これからどうしますか？」

僕たちも呪練場へと避難するのか、事態を傍観するのか、それとも——

その問いに対して最初に口を開いたのは姉さんだった。

「陰陽庁が襲撃されている以上、あちらから応援が来るのは遅れるハズだ。それに——」

姉さんが思い詰めた表情で言った。

「ぼくががみんなと同じ場所へ逃げたら、そこが標的になりかねない……」

「お、おい。夏目?」

姉さんの思い詰めた表情を心配した春虎兄さんが声を掛けた。

なぜだか分からないが姉さんは自分が標的になつていてるかのよう^{じようし}に話した。

上巳^{じようし}の再祓で蘆屋道満と邂逅したから? 姉さんと蘆屋道満の接点なんてそれくらいしか知らないが……、それで目を付けられたと思つてゐる?

もしもそうだとするならばそれは勘違いだ。

「予告状の鴉羽織は嘘だったんだ。——蘆屋道満は……あの陰陽師は双角会との繋

がりがあると見られているんだよ? だったら今回の襲撃は、双角会の……、つまり夜光信者の可能性だつてあるんだ。なら……」

「本当の狙いはぼくだ」、そう掠れる声で姉さんが言つた。今にも泣き出しそうな顔をして。どうやら相当自分を追い込んでいたようだ。

自分のせいで大勢の無関係な人間を巻き込んでいるというのだ。姉さんの性格からすれば自己犠牲に思考が働くのも無理もない。

だがその姉さんの考察は間違いだ。どこから聞いた情報を元に考察したのか知らないが、蘆屋道満と双角会は無関係だ。

なぜなら今回の襲撃は陰陽庁も対象なのだから。

蘆屋道満が双角会に属しているのならば双角会の総本山である陰陽庁を襲うはずが

ない。

「それは違うよ。兄さん」

「えっ……？」

「蘆屋道満と双角会は関係ない。少なくとも今はね」

「で、でもっ！」

姉さんは負わなくてもいい業まで背負いすぎなんだ。そうでなくとも夜光の転生なんて噂を押しつけられたせいで被害を被っている。

姉さんはもつと自分の現状に対して怒っていい。だが優しい姉さんはそれをしようとはしない。自分の運命だと半ば諦め受け入れている節まである。

それならば僕は姉さんに対してもつと真摯に向き合わなければならぬ。

全ての情報が出そろったわけではないが、そろそろ話してもいい頃合いかもしれない。

姉さんを取り巻く環境というものがどうなっているのか。

「この件が片付いたら僕の家に来てよ。北斗のことも含めて話をするから。——春

虎兄さんもそれでいいですか？」

「あ、ああ……」

春虎兄さんも頷くことでそれを了承とした。姉さんも同様に頷いた。

ひとまずこの場はこれで収束したようだ。

辺りを見渡すとこの間に塾生たちの避難も済んだようだ。講師たちの姿も見当たらないところを見ると一緒に避難したのだろう。残るは僕たちだけ。

僕は窓側のほうに視線をやる。僕らのやりとりを律儀に待っていていた御仁へ挨拶するためだ。

「お待ちせして申し訳ないです」

式神は僕の声すぐさま反応した。

「ほっ。気づいておったか」

その声に気づいたコンが「春虎様っ！」と叫び、しつぽを逆立てながら刀を抜いて土蜘蛛を威嚇する。みんなも反射的に構えを取る。

そして声の先、その姿を確認すると一部を除き皆が絶句。

そこには一体の、他のものよりも一回り大きな土蜘蛛がべったりと張り付いていた。

式神の声は妙に若々しく、先ほど見た老人の容姿に似付かわしくない声に少し驚いた。が、それは心の中に押しとどめて話を続けた。

「それだけ視線を向けられたら嫌でも気づきますよ。蘆屋道満殿。初めまして。僕は土

御門碧と申します」

「ほほほ。この状況でその冷静さ。お主は若いのに出来た人物のようじゃの」

「ありがとうございます。道満殿にそう言ってもらえて光栄です。——それで、陰陽塾へはどのようなご用件でおいでになったのですか？」

「何、ちよつとした野暮用よ。ある物を奪いに来たんじや」

「それは予告状通り鴉羽織を奪いに来た、ということでしょうか？」

道満は僕の問いに一瞬、考える素振りをするかのように間を開けて再び口を開いた。

「……なんじや。知っておったのか。そうじや。こつちにある本物を取りに来たのよ」

本物を取りに来た、ということは、つまり陰陽庁にある鴉羽織は偽物で陰陽塾に本物があるということになる。

皆が皆、この乙種に騙される中、蘆屋道満は正確に本物の場所を見抜いた。その洞察力、いや、情報網というべきか。さすがと言わざるを得ない。蘆屋道満とはそれだけの力を持った人物だということだ。

それはいい。想定内の話なのだから。

しかし乙種の話は解せない。

何故そんな皆を騙すようなことをしなければならなかった？ 陰陽庁がそこまでし

て鴉羽織を隠す理由が分からない。いや……恐らくこの情報は陰陽庁でも知っている

人間は限られるはずだ。例えば倉橋源司や大連寺至道などといった極一部の人間だ。

なぜなら陰陽庁の人間は庁舎の警備に追われていて手が回らず、陰陽塾の警備は塾舎の職員だけで行っているのだから。少なくとも本物の鴉羽織は陰陽塾にあるという情報が陰陽庁内で周知されていれば、このような人員配置はしなかつただろう。もしも知っていればこちらにも警備が来るはずだからね。

さらに言うと、いくら陰陽庁が双角会というテロリスト集団で固められているとはいえ、それが陰陽庁を構成する全てではない。中には本当に善意で働いている人たちもいる。事前に陰陽塾がターゲットにされていると知っているならば、陰陽塾にいる何も知らない無関係の塾生たちを巻き込むことは良しとしないはずだ。少なくとも体裁を保つためにこちらへの警備も行はず。しかし今回そういった体制は取らなかつた。これらのことから、陰陽庁の人間の大半は陰陽塾に鴉羽織があるということを知らなかつたという結論になる。

それに、だ。そもそも陰陽塾で保管するメリットが見当たらない。

考えればすぐ分かることだが、陰陽塾よりも陰陽庁の方が圧倒的に強い。建物の結界はもちろんのこと、こういった襲撃への対応方法などにだ。それに十二神将までいる。

もしも陰陽庁へ襲撃をかけて目的を達成できるかといったらそれは考えにくい。

襲撃されたときのことを考えると鴉羽織がどちらにあるかという情報の有無に係わ

らず陰陽塾で保管するメリツトの方が少ないのだ。

だが、実際はそれとは真逆。本物は陰陽塾にあった。

今回の一連の事件の大元の原因……、陰陽庁に鴉羽織があるという嘘を付き、陰陽塾へ鴉羽織を保管した人物は陰陽庁や倉橋源司などとは全くの別の別の第三者による仕業の可能性が高いようだ。

「なるほど。よくわかりました。ありがとうございます」

「何。気にする必要はない」

道満からもたらされた情報は非常に有用だ。それに話にも付き合ってくれている。もしかすると案外いい人なのかも知れない。

ならば、ここは彼からさらなる情報を引き出せるかやってみよう。

「ではもう一つ。僕たちの前に現れた理由をお聞かせください。まさかこのフロアに鴉羽織があるわけでもないでしょう？」

彼の目的は鴉羽織だ。だが、その目的を達成せずに、こんなところで油を売っている理由はなんだ？

「……式神を放つたら見知った顔をみつけての。それでここへ来たんじゃ。……せつかくじゃ、お主らとは少し遊んで行くのでしょうか」

言葉に威圧を込めてカラカラと笑いながら言った。

その言葉に対抗するように冬児が「のまれるな！」と一喝。表情は強ばりながらもみんなその場に踏みとどまった。

僕はその様子を一瞥。誰も異常がないことを確認し、再び式神に視線をやる。

……なるほど。ただの気まぐれか。久しぶりの見知った顔を見て悪戯したくなる気持ち。まあ分からなくはないが、それは今じゃなくてもいいだろうと思ってしまう。

「しかし、どうやって中に入るつもりですか？ 解っているとは思いますが、この塾舎の結界は中々に堅い」

僕はその言葉に続くように京子が毅然と言った。

「碧くんの言う通りだわ。塾舎の結界は貴方でもそう簡単に破れるとは思えない。お祖母様が綻びを残すはずがないわ」

そう。この結界に綻びはない。そしてこの結界は外部からの攻撃に対して強い。さすが塾長といったところだ。

だがもしも敵が定石通りの手順を踏むならば——

「これはしたり。確かに外からでは難しいの。じゃが儂が何の土産も持たず、主らの宿を訪問したと？ この道満、左様につまらぬ真似はせんぞ。既に土産は主らに持たせておる」

式神が大きく仰け反り、再び窓に体をぶつけた。

そして、

「優秀な結界とは総じて堅いものじゃ。ならば如何とする？ 答えは中から開ければよい。……近頃はこう言うのだったな。——急急如律令^{オホ}」

そういつた瞬間、天馬の制服のポケットが激しい光を放った。制服を突き破り光は収束。一つの光源となつて宙を舞った。

その正体は一枚の呪符だった。

「——っ！ 伏せろっ！」と冬兎が叫んだ。

その声に反応するように姉さんたちは床に身を投げ出した。

僕はその呪符を無力化すべく咄嗟に回路を起動しながら呪符に向かつて手を伸ばした。が、その前にその呪符に対して手を伸ばす人物がいた。——北斗だ。

北斗はそれを臆することなく掴み、一言。

「遅い」

片手で呪符をクシャッと握りつぶた。直後、握りつぶした手から炎が舞い上がり、そして呪符は込められた呪力ごと消滅した。

その一連の流れを見ていた式神、道満は驚きのあまり動きを止めてた。

姉さんたちも何事もなかったことに気づき、体勢を立て直した。

その様子をみて北斗が口を開いた。

「先ほどからお前がどのような人物か様子を窺っていたが、子供を苛めて楽しいのか？
皆が一樣に恐れる人物だからどのような人物か興味があつたのだが……。少し期待
外れだな……」

そう道満に言い放ち、この場は一瞬の静寂に包まれた。
それは嵐の前の静けさのようだった。

2—13. 陰陽塾襲撃 (3)

道満は取り繕うかのように口を開いた。だがその口調は威圧的で北斗を値踏みするかのようだった。

「——お主。見た目通りの年齢ではないな？ 一体何者じゃ？」

北斗はそんな道満のことなどお構いなしに平然と返した。

「女性の年齢を詮索するとは失礼なやつだな。私はこれでも14才の乙女だぞ。そんな失礼な輩に名乗る名などない」

「やれやれ。つれない乙女じゃ」ため息をつく道満。その依代となっている式神も、前足を使って微妙な動きでため息をつく動作を再現する。いちいちやるのが細かい道満である。

「じゃが儂の呪符は半端な術者が破れるようにはできておらん。……やれやれ。簡単な仕事かだとばかり思っていたのだが……、どうやらそうではなかったようじゃの」

道満にとっては今回のミッションは塾長や塾講師を蹴散し鴉羽織を確保するだけの簡単なものだと考えていたのだろう。だがその目論見は北斗の行為によって覆されようとしていた。

道満の使った呪符には呪符そのものに結界が張られていた。これは呪符を確実に使うためだろう。

呪符を破いたりするような物理的な破壊行為や陰陽術を使って呪符を破壊しようとしても結界によって阻まれるようになっていた。道満が言ったように半端な術者が簡単に解けるようなものではなかったということだ。

だが北斗はそれ平然とやってのけた。道満が土産とまで言った、ある意味において切り札だった呪符をあの一瞬で壊したのだ。道満が戸惑うのも無理はない。

これで道満は塾舎の結界を壊すことが出来なくなったわけだが、果たしてどうでてるか……

「それで道満殿。これからどうしますか？ お土産とやらはこの通り、北斗によって破壊されました。大変申し上げにくいのですが、ここからでは結界を破ることは難しいのではないですか？」

道満を軽く挑発してみる。だがその挑発を気にする様子もなく平然と返してきた。

「ほっほ。儂をこき下ろすとは主ら面白いの。じゃが案ずるでない。ここでお主らと遊んでいる間に結界は正面から破っておる。じきにお主らのところにも儂の式神が来るであろう」

なんともまあ。すごいなこのお爺さん。

捌め手が上手いというかなんというか。

さきほどの呪符で結界を内側から破壊してもしないでも、他の場所から結界を解いていたというのだ。

つまり僕らのいるこのフロアを先ほどの呪符で破壊しようがしまいが、他の場所でも手を打つてあるから、結果としてどちらに転んでも目的を果たせるようにしていたということだ。

どうやら本当に遊ばれていただけ……、この老人との会話に付き合わされていただけのようだ。

……北斗の様子を窺うが表情は険しく同じような様子だった。当然である。やられた僕らからすると些か面白くない。

他は顔が引きつって……、まあ分かり易い表情をしていた。

「では農も行くとするかの」

そう言い残し、式神は張り付いていた窓から手を放して下へと落ちていった。

僕らはその様子をただただ眺めていることしかできなかつた。

☆

「はあ……」

僕は先ほどの道満とのやりとりを思い出し、ため息を吐いた。

道満の進入をここから食い止めることはできた。道満の出鼻を挫いたことはいい。だが道満は別の場所からの進入に成功した。

結局のところ面倒くさいことになったことには変わりないのだ。

そんなことを考えているとまったくの外野から逼迫ひつぱくした声が掛かった。

「皆さんっ!!」

突然届いたその声に、全員がその方向に視線をやった。

その声はよく聞き慣れたある人物の声だった。

「塾長!」

「お祖母様!」

視線の先には一匹の三毛猫。塾長の式神がいた。

先ほど、道満が襲撃してきたときに起こした爆発に巻き込まれたと思っていたが、どうやら無事だったようだ。

「良かった! 皆さん無事のようなね。早速ですがついてきてください。安全な場所まで避難します!」

猫は踵きびすを返すなり、先導するように歩いて行く。

僕たちはその猫に続くように行って行こうとした。

が、猫が飛ぶように食堂へ舞い戻ってきた。

次の瞬間。

ガタガタガタツと何かをなぎ倒すような音と共に、塾舎の備品を破壊しながら土蜘蛛が食堂へとなだれ込んできた。

「くっ!?!」

苦虫を噛み潰したように僕たちの前まで後退する猫。

「どうやら蘆屋道満の行動の方が早かったみたいですね」

僕は猫の様子を見て一人呟く。

道満との先ほどのやりとりからまだ数分と経っていない。さすが道満。こちらが動く前に式神を超越すとは行動が早い。

だがなだれ込んできたのは式神だけで肝心の道満は見当たらない。ならば本体が到着するまでに早々に式神を片付けて行動するのみ。

「塾長。道を切り開きますので、少し後ろに下がって下さい」

「碧さん……」

僕は塾長からの返事を待たずしてある真言を唱え始めた。

みんなの前に出て一人式神へと向かっていく。

「お、おい、碧っ！ 出過ぎだ！」「碧っ！」

春虎兄さんと姉さんが揃って声を上げるが振り返らずそのまま前へと進む。

そして道満の式神たちも僕を目標にして一斉に迫ってきた。距離にして15メートル。

僕は陰陽師だ。

「ノウマク・サンマンダ・ボダナン——」

あの日千鶴さんに教えてもらった大切な呪文。僕の得意とする陰陽術の一つ。印は帝釈天。

僕は一瞬のうちに呪力を練り上げ霊圧高めていった。

迫り来る式神たち。数は10。僕はその式神たちに向かって右腕を突き出す。

「インドラヤ・ソワカ!!」

この一撃、一瞬で片を付ける。

式神との距離、10メートルのところで顕現した雷撃は、迫り来る式神の一つを飲み込み形代ごと破壊した。

その勢いは留まるところを知らない。

荒れ狂う雷の嵐は視界に映るもの全てを容赦なく蹂躪した。

コンクリートの壁や床。食堂にある机や椅子などの備品。そして式神たち。

視界に映るありとあらゆるものを無差別に破壊。最後に一際眩しい光を放ちこのフロア全体が真つ白な光に包まれた。

「うわっ!!」

背後から聞こえる悲鳴。

すべてが終わったとき視界に映るそこには何者の存在も許されない廃墟と化していた。

僕はその様子を一瞥。振り返って塾長へ先導するよう促す。

「塾長。行きましようか」

「……………」

「塾長?」

「え、あ……。ご、ごめんなさい。少しビックリしたものですから……」

戸惑いを隠せない様子の塾長。

今の攻撃を見て驚いたのだろうか?

確かに僕の陰陽術は同じ術でも普通の陰陽師が使うものとは威力・精度共に桁違いに強い。これは僕の起源に起因するからだ。だが、ただそれだけのことだ。

道満がまだ残っている以上、これからいま以上の激しい戦闘が予想される。

「塾長があ程度のことで驚かれても困りますよ。これからが本番なんですから」

だがそんな僕の懸念は全くの的外れだった。

塾長の戸惑いは斜め上を行っていた。

「いえ、そうではなくて。この惨状をどうしようかと思ひましてね。碧さん。これ保険使えるかしら……？」

チラツチラツと僕を窺う猫。

式神を屠ったことよりも被害状況に目が行く塾長に対して、危うく「そっちかよ!」と突っ込みそうになるが、なんとか踏みとどまる。

ま、まあ。塾長なのだから陰陽塾の被害状況については頭の痛いところなのだろう。

とはいえ、どこの保険会社と契約しているのか知らないが保険金が下りなかった場合はどこからか修繕費をどこからか調達する必要があるのだろう。

道満に出させるか……。まあ捕まえてもしい限り無理だな。

では塾長の個人資産？ これはありえないな。陰陽塾は私物ではなく公共の施設だ。

個人がお金を出すような話にはならない。それに塾長は被害者だ。よってこれは調達

対象から除外される。

だが、僕は別だ。このフロアを破壊したのは紛れもなく僕だ。塾舎全てではないにしても、このフロア分の賠償請求が来てもおかしくはないか。もともと魔術で復元してしまえばすぐに終わる話なのだ。

……いや、それも面白くない話だ。だってそうだろう？　僕はただ巻き込まれて迫り来る火の粉を払っただけなのだから。それで僕が賠償するなんておかしな話だ。

だがしかしこれだけの被害だ。責任の所在は明らかにしておかなければならない。ならば残る手は一つ。

「保険でどうにかならない場合は陰陽庁に出させましょう。元はといえば道満を放置した陰陽庁の責任なんですから」

塾長に対して僕は払う気はないと高らかに宣言すると同時に陰陽庁へ丸投げをした。

そう。陰陽庁に責任を取らせればいいのだ。それが一番正しい在り方だ。

なぜならば陰陽塾は陰陽庁にぶら下がった組織なのだから。まずは陰陽庁に請求するのがよいのではないだろうか。

予算がどう管理されているか、なんてことは僕の知ったことではない。陰陽塾の問題を陰陽庁以外に誰が責任を負うのかという話だ。

よしそれで行こう。いや、それしかない。

しかしこの塾舎。ビルだからなあ。立て直すとすると高そうだな。

僕はもう既に他人事のように明後日の方向を向いて現実逃避を始めた。

「はあ……。まあいいでしょう。息子がなんというか分かりませんがそれで通してみましよう。それと碧さん？」

「はい！」

若干声が高くなってしまった。

「あまり壊さないようにお願いしますね」

うふふと笑いながら話すその姿は以前見た有無を言わせない塾長そのものだった。

僕は猫に睨まれた鼠のごとく唯々その言葉に従うほかなかつた。一言「はい……」と。

僕の答えに猫は満足気に「にゃー」と言った。

こう言われてしまつては仕方がない。

だが僕の陰陽術は破壊に特化しているため周りを巻き込まずに倒すなんてことはできない。

一人で多くを相手にする場合陰陽術は便利なのだが、今回のように周りの被害を考慮しなければならぬときに融通が利かなすぎるな。

ならばどうするか。

敵を倒す方法を変えるしかないだろう。

これより先、陰陽術は封印。呪符と魔術のみで対応する。

僕は刻印に火を入れていつでも対応できるように臨戦態勢を取った。

「それではみなさん。私に付いてきてください」

塾長は僕らを先導する。僕たちも塾長を追って駆けだした。

☆

食堂から飛び出して廊下へ躍り出ると、そこはやはり道満の式神たちで溢れかえっており行く手を阻んだ。

式神たちは僕たちを認識すると次々に襲いかかってきた。

僕たちはその式神たちを各個撃破するべく前衛と後衛に別れて攻撃を繰り返している。

前衛は春虎兄さんとコン、そして京子の式神である白桜はくおうと黒楓こくふうで対応、後衛に僕、北斗、姉さん、鈴鹿、冬児、そして天馬が呪符を式神に投げつけて対応している。

後衛が呪符で式神の気を散らしながら、その間に前衛が式神にトドメを刺すスタイルなのだが、いかんせん、数が多い上に次々と増援が来るため一向に減る様子はない。

「これじゃキリがないな。……急急如律令^{オウ}」

目眩まし程度に火行符を投げつけ春虎兄さんの援護をする。

その隙を付き春虎兄さんが雄叫びを上げて式神を向かっていく。

「うおおおっ！」

靈気のこもった錫杖を思いつき振りかぶり式神へ渾身の一撃を突き刺した。

式神は激しいラグを伴って、そして消滅した。

「ふう……。式神一体一体にこんな体力使っていたら正直体が持たないぞ……」

食堂を飛び出してから式神を倒したの数は既に二桁を超えている。

みんな慣れていない実戦で体力的にもキツくなる頃合いだろう。そんな状況を象徴するかのようには式神一体を倒したことに安堵し気を抜く春虎兄さん。

そこを狙ったかのように式神が一体、春虎兄さんの背後から急襲してきた。

「あぶないっ！」

「えっ……っ？」

ダメだ気づいていない。だが呪符では式神を倒すには力不足。あまり見せたくなはな
いがこうなったら使うしかないか。

僕が右腕を突き出して魔術を発現させようとしたその時、横から勢いよく飛び出してきた影があった。

ファーストシールド
「第一封呪、解除！」

冬児が呪文を詠唱すると、冬児の体は鬼へと変貌を遂げた。頭からはそうかく双角が生え、口元には鋭い牙。体には部分的に鎧が出現した。

冬児は春虎兄さんに襲いかかろうとしていた式神を吹き飛ばし、春虎兄さんは難を逃れることができた。

冬児は鬼の生成りだったのだ。

「冬児さん。その姿……」

「まあそういうことだ」

暗い眼をしながらこちらを見て言う。

恐らく察しろということなのだろう。しかし鬼の生成りか。通常あまりお目にかかれないタイプなのだが、僕は過去に冬児以外の生成りと会っている。

そう。十二神将の鏡伶路だ。だが彼は冬児みたいに変異しなかった。この話は鈴鹿に聞いたのだが倉橋源司に鬼の呪力を封印されているため冬児のような変異はできないということだ。

しかしまあ、こうあからさまに変身されると、

「かつこいいですね、その姿。何かのヒーローみたいで」

「……は？」

「ぷっー」

冬児は唾然とし、春虎兄さんは吹き出した後、大声で笑い出した。

変身といえばヒーローが最初に浮かぶ。仮面のやつとか戦隊ものとか。特撮やアニメの世界が現実のものとなったのだ。小さな子供たちから憧れの眼差しで見られる対象がカツコ悪いわけではない。

まあ、こんな状況だ。暗い顔されるよりは冗談を言つて笑つていられた方がマシだろう。

世間では生成りは蔑んだり忌避することが多い。そのため本人はその生成りという在り方を忌み嫌うことが多いようだ。冬児がこれまで鬼の姿を見せなかったのもそのせいだろう。

生成りになった経緯など知るよしもないが、生成りだからといって何か変わるわけでもない。

それに秋乃も生成りだ。今更身近な人間に生成り一人や二人増えたところで何だと

いうのだ。

それに、

「今はその攻撃力がありがたいですよ」

「な、碧はそういうやつじゃないって言っただろ？」

「そう、みたいだな……」

冬児は戸惑いながらも自分に折り合いをつけた様子で呟いた。

「後方から援護しますので前衛お願いします」

「ああ、頼んだ、ぜっ！」

そういつて先ほど吹き飛ばした式神に勢いよく飛びかかり拳を突き出す。僕は冬児を援護するため木行符を放ち式神の手足を絡め取り動きに制約をかける。

動きが止まる式神。

冬児はその好機を逃すことなく靈気を纏った渾身の一撃を式神にたたき込んだ。

式神はその衝撃で壁に叩き付けられ、激しいラグを伴いながら、やがて消滅した。

「ふう……、しかし一匹倒すだけでこれだけ厄介なのか……」

「ああ……。これじゃあ俺たちの方が先にバテちまう」

すると姉さんが二人に声を掛けた。

「冬児の今の攻撃でようやく道を開くことができました。無理に倒す必要はありません

！ いまは余計な消耗は避けて目的地向かいましょう！」

確かに姉さんの言う通りだ。道が開けたのなら、ここは早々に退散するに限る。

なぜならこんな通路の狭い場所じゃ動きにくいことこの上ない。この人数で固まってここで敵とじやれ合うよりも適当にあしらって逃げた方が消耗も少ない。

僕たちは戦鬪に一区切りつけて、姉さんの言葉に従い猫を先頭に廊下を駆け抜けた。それでも式神はこちらの事情などお構いなしに襲ってくる。だが、無理に倒す必要が無い今、足止め程度なら木行符だけで事足りる。

僕たちは向かってきた式神に対して一斉に木行符を投げつけ相手が拘束された。そして運がいいことに式神と木行符同士がうまく絡み合って通路を塞ぐ壁のようになった。

これは予想外……、だが時間稼ぎにはなるだろう。僕たちは運がいいようだ。僕たちはその光景を見届けたあとその横を駆け抜けた。

しばらく廊下を走っていると行き止まりにぶち当たる。

だがそこには塾長本人が立っていた。

塾長は自身の式神である猫を抱きかかえると大きな声で叫んだ。

「開門！」

塾長がそうが叫んだ瞬間、行き止まりだった壁に一本の縦線が入り観音式の扉になった。

扉はゆつくりと開いていき、その奥には上へと続く階段があった。

「みなさん、この階段から屋上へと出ます。そこにある結界の中に入りますよ！」

なるほど。下に降りずにここに来たのは屋上へ行くためか。とすると屋上には安全を保証するだけの何かがあるということになるが……、まあその何かはもうすぐ分かることだ。今は階段を上ることにしよう。

塾長は階段を上り始めた。だが老体には堪えるのか非常にゆつくりだ。

僕たちは塾長の後ろ姿を見て本当に大丈夫なのだろうかと多少不安にはなったが、塾長をサポートするべく塾長を支えながら屋上を目指した。

階段をようやく上りきり屋上へと出るとそこは一面平坦な空間が広がっていた。縁には落下防止用のフェンスはなく、せいぜい膝までの高さしかない低い塀があるだけだった。

よくあるビルの屋上からフェンスを取った感じだろう。こんなところには人が入らないのだから、そもそも落下防止用など必要ないということなのかもしれない。防災上それでいいのかということはこの際置いてくとして。

だがこの空間の中に一点だけ他のビルには見られないものがある。

「みなさん、あそここの祭壇にある結界の中に、早く！」

塾長が叫びながら祭壇を指で示した。

そう。目的地はどうかやらあの祭壇のようだ。その祭壇とは実家の裏山にあった祭壇と同じ、泰山府君祭で使う祭壇だった。

姉さんの方をみると案の定戸惑っている様子だ。なぜこんなところにこれが、とか、誰が、何の為に、ということとは事情を知らなければ戸惑うのも無理はない。

泰山府君祭の祭壇は何も実家にあるモノが全てではない。あれは北斗の作った巨大な魔術式に接続するための中継地点に過ぎない。だから各地に点在している。

だがもう泰山府君祭に意味はない。なぜならその巨大な魔術式はこの世から消え去り既に使えなくなった儀式なのだから。

僕は姉さんに声を掛ける。

「今は姉さんが考えている疑問よりも、まずは結界内に入って安全を確保しましょう」
 そう言つて戸惑う姉さんに行動を優先することを促し、姉さんもその言葉に頷いた。
 僕たちは祭壇へと向かつて走つた。

全員が祭壇内に入るやいなや塾長が懐からおもむろに鏡を取り出しそれを掲げ結界起動の呪文を唱える。

「聖域を閉ざし、邪気を遠ざけん——てんだんふういん天壇封印！」

鏡面から溢れるまばゆい光が飛び出し、そして祭壇の四方からも光が伸びてその光が交わる頂点を起点として祭壇を囲むように結界が形成された。

塾長は小さく息をついて結界の起動に使つた鏡を再び懐へしまった。

結界を張つたことでみんなの緊張も解け、一様に安堵の表情を浮かべた。

まだ道満の式神もここにはいないし結界も張つた。ひとまずは安心といったところだろう。

冬児は「再封印リプリント」と呪文を唱え、その直後ふらつき地べたに腰を下ろした。辛そうな

表情をしているところをみると、変身は心身に大きく負荷をかけているようだった。自身の能力以上の力を発揮するのだから当然と言えば当然であった。

京子は自身の式神である白桜はくおうと黒楓こくふうの実体化を解いた。

とりあえず一息つけそうか。

そう思った矢先、タイミングよく式神がぞろぞろと出現し始めた。

僕たちが上つてきた階段から黒い波が押し寄せる。どうやら足止めにしていた木行符の壁を突破されたらしい。

屋上は道満の式神たちで埋め尽くされ、そしてその式神たちは僕たちを包囲するように取り囲んだ。

その数は既に目視で判断できる数を超えていた。おそらく100は下らないだろう。

式神たちは結界の前で動きを止めている……、というか何かを待っているようだった。

と、その時、式神たちが左右に分かれ一本の道が出来た。

その奥から現れたのは一人の老人。蘆屋道満だった。背は小さく、髪は白髪。見た目はそこらにいる老人のようななりだが、その身に宿しているモノからはドス黒い気配を

漂わせていた。

「——待たせたの」

道満はこちらへと足を運びながら言った。

その言葉に反応するように、先ほどまで緊張の糸を解いていたみんなが一斉に再び構えを取った。

道満は掠れた声で笑いながら結界の正面へと立つ。

「待たせたの」

もう一度、先ほどの言葉を繰り返した。

「さっきは土産も不発に終わって済まなかったの」

こんなことを言い放った。

なんと道満は先ほど北斗と僕にコケにされたことを根に持っているようだ。なんと器の小さいヤツ。

「蘆屋道満ともあろうお人がそんなことを一々気にするなんて意外でした」

「ほっほ。なに。この時代において儂にそのような物言いをする者も少ないからの。それに少し遊ぶと言ったであろう。約束を違えてはこの蘆屋道満の名が廃るといものじゃ」

不敵に笑いながら言う道満。

そんな約束破ってもらっても構わないです。ええ、僕は一向に構いません。というかあなたのその名前はどちらかというとな名譽な部類だろう。

口には出さないが道満に突っ込んでいると、横から北斗が道満に対して反論した。

「廃つてもいいだろう。どうせ貴様の肉体は腐っているんだ。何を好んでその身体に転生したのかしらんがな。だが貴様のような輩を生み出す為に私は身を捧げたのではない」

「なに……？」

「碧殿、私はこいつが嫌いだ」

うわ、顔こわっ……

どうやら北斗は道満のことを本当に嫌っているようだ。

まあ、北斗の気持ちは分からないでもない。

北斗が泰山府君祭を完成させた理由は国の民を救うためだ。もちろんそれを使う人間を選ぶことはできない。北斗もそれを承知の上で泰山府君祭を完成させた。

だが道満のような私利私欲で動く人に使われたくないという気持ちもあるのだろう。

「まあまあ、北斗。落ち着いて」

僕は北斗を宥める。北斗の気持ちは分かる。だが今はこの状況を打破する方が先だ。

囲まれた状況の中、果たしてこの結界がどこまで有効となり得るのか……

「……お主が何に対して怒っておるのか儂には分からんが、まあそれはよいか。儂は儂の目的を先に果たすでしょう」

道満は北斗から興味をなくし、塾長へと視線を向けた。

塾長はその視線に呼応するように道満に話かけた。

「それで目当てのものは見つかりましたか、法師？」

「いや。生憎と儂の式からその報は受けておらんのだ」

「法師。残念ですが法師の探しているものは見つかりませんわ。あれは今ここにはないのです」

「ならば何処にある？　よもやこの期に及んで陰陽序など戯れ言をいうでないぞ？」

「……存じません。それに知っていたところでアレは法師が手にしているいい物ではありません」

「ほっほ。その強気どこまで持つかの」

道満は塾長に対して怒りも苛立ちもせず、若干恫喝を含み淡々と答える。

そして一歩前へと進み結界に手を掛けた。すると結界に干渉した道満は力づくでその結界を破った。ガラスが碎ける音をしながら崩壊する結界。

塾長がアテにしていたそれは道満によって脆くも崩れ去り——

そして今ここに僕たちと道満を隔てるものはなくなつた。

「さあ、今度は何をして遊ぶかね？」
道満は悠然と威圧的に言った。

2—13. 陰陽塾襲撃（4）

窮地に追い込まれたときほど正義のヒーローとは登場するものである。そしてここにもその例に漏れずヒーローが登場した。もつともヒーローとは颯爽と登場するものだが、現れたのは飄々とした青年だった。

「法師。ええ歳した爺様が、か弱い子供や婆様を苛めてどないします」
道満の後方から義足を鳴らし登場したのは大友先生だった。だがその雰囲気はいつもとは全く異なっていた。

普段はよれたスーツ姿がトレードマークになっている彼も今日ばかりはまじめな装いだ。けつてきのまう 闕腋袍を纏い、袴を穿き、石帯を巻いた、そくたいすがた 束帯姿……。いわゆる昔の人が着ていた正装だ。

色は白を基調としている。一般的に認知されている束帯とは真逆の色だ。
もちろんこの装束をするのには意味がある。

この束帯姿は陰陽庁が定めている正装なのだ。というのもこの束帯にはぼうしやう 防瘴、つまり瘴気しやうきや呪いなどから身を守る機能がついているからだ。

よほどの高レベルの靈気の持ち主でない限り、基本的に陰陽師は瘴気や呪いに対して

無防備である。受けてしまうと体調を崩す。この辺りは一般人となんら変わらない。

つまり陰陽師は無防備の状態だと霊災から発せられる瘴気に当てられて体調を崩してしまうので、こういった束帯などの防瘴装備がないと仕事にならないのだ。

霊災を処理する役割を担っている陰陽庁は、霊災から身を守るためにこういった道具を用いているというわけである。

見た限りだが大友先生の霊気は弱くはないといっている。だが、蘆屋道満を相手にしてその霊気を維持しながら戦えるのか、そんな余裕があるのか、といったところなのだろう。

自分の力を過信せず使えるものは使う。

大友先生のこととはよくは知らないが普段見せている姿は周りを欺くための演技で、実際のところは合理的な人なのかもしれない。

そういうえば初めて会ったときにしていった隠形。僕でも気が付かなかったところを鑑みるとその実力は想像に難しくもない。

能ある鷹は爪を隠すとはよくいったものだ。

「塾長?、これ時間外手当とか付きますよね?」

いつものように本気で言っているのか冗談で言っているのか分からない態度を取る。

そんな大友先生の台詞に塾長はニコニコしながらとんでもないことを言った。「そうですね……。法師の撃退に成功したら検討します」

その言葉を聞いた大友先生は眉間にシワを寄せ片手で顔を覆いながら左右に振りゲンナリした表情、道満もまた呆れた様子をしていた。

しかし気を取り直して再び塾長を見る。

「わかりました。その言葉、忘れんといってくださいね」

「もちろんですよ。ふふふ……」

この二人、やりとりは不気味なものがあるが、もめている内容は実に程度の低い内容だ。

時間外手当を欲しければ道満を撃退しろという塾長もだが、それを受ける大友先生も相当アレである。

まあ、本人たちがよければそれでいいのだろう。少なくとも見ている分には害はない。

大友先生と塾長がそんなやりとりをしていると、春虎兄さんが口を開いた。

「大友先生!!」

「おう、春虎くん。遅れて済まなんだな」

もう安心していいと語りかけるように、いつもの砕けた口調で声を掛ける大友先生。

大友先生は僕たちに目をやって、最後に塾長と目配せをして頷いた。

そして大友先生と僕たちとの間にいる道満に視線をやり、道満もまた大友先生に向き直った。

「法師」

大友先生は道満を呼んだ。

「再びお目にかかれて光栄です。うちの塾生たちがえらいお世話になったようで」

淡々とそして静かに言った。

その大友先生の言葉に反応するように道満が答えた。

「うむ。お主の教え子というだけあってなかなか将来に期待が持てそうな子供たちじやの。最小限度の力に押さえ無駄な消耗はせず、僅かな勝機を窺っておる。そういう意味において、お主よりは狡猾こつこつさに欠けると言えよう。その点はまだまだ子供といったところじやな」

僕たちの戦闘を式神を通してずっと観察していたのだろう。

これが道満の僕たちに向けた評価だ。

式神から逃げる際にみんな力を押さえた状態で戦ってここまで逃げてきた。後衛が呪符で攻撃、前衛がトドメを刺す。適度に手を抜きながらここまでやってきたのだ。

姉さんなら竜ほくの式神く、僕なら魔術といった具合に、誰も手の内は見せてはいない。

道満の言う通りこれからが本当の戦いになるだろう。そしてこの戦いに全力で挑み勝利をもぎ取る。これが僕たちのこの戦いにおける最善だ。

もつとも道満も式神を放っただけで手の内を見せていない。式神の数は確かに多いが、それが道満の全てではないだろう。

戦いにおいて手の内を先に見せた方が負けなのだ。これは戦いにおける常識である。その手の内を相手に出させるために道満も僕たちも様子を見ていたといった状態だ。

だが、道満の言い方からすると過去の大友先生は僕たちとは異なる選択肢を選んだようだった。

「……あのとき、お主はひたすら逃げに徹した。ろくな手合わせもせず、己の片足を投げ出してまでの」

大友先生を横目で見る。しかし大友先生は微動だにせずにただ静かに道満の話を聞いていた。

大友先生が義足になった理由が道満によって語られた。どういう状況下でそういった事態になったのかは知らないが、僕たちのように反撃などせずに完全に逃げに徹した。その結果、代償として片足をもぎ取られたようだ。

片足を投げ出してまで逃げに徹した理由は、単純にその時は勝てないと判断したから

だろう。大友先生の実力不足かそれとも道満側の戦力が多かったか……。

いずれにしても片足の犠牲だ。決して安くはない。

傷程度ならまだしも欠損となると僕でも少し考える。僕の場合は魔術によつて完全に人間と同位体の義足を造れるが、僕以外の人たちにはそれは不可能だ。その時の大友先生的心情は想像を絶するものだろう。

なるほど。道満の言う通り大友先生は確かに狡猾だ。……いや、人の執念といったところか。大友先生もなかなか暗い過去を持っているようだ。

大友先生は片足を犠牲にしてまでも逃げきることに集中した。次の機会をにその落とし前をつけようと。

そしてどうやら今回がその日のようだった。

「お主は今日のような日を待っていたのじゃろう？ 儂が一人になるこの時を」

道満が大友先生を挑発する。しかし大友先生はその挑発には乗らず、あくまで冷静に答えた。

「……法師。一つ聞いていいですか？」

「なんじゃ？」

「いま一人といましたが、連れの護法は今日はおらんですか？」

「あやつらには陰陽庁を襲わせておる。先ほど言ったようにここには儂一人しかおらぬよ」

「……ふつ。それを聞いて安心しました。しかしまさかとは思いますが法師ともあろうお人がつまらん嘘などつかんといて下さいよ?」

「疑り深いやつじやの。安心せい。この儂の名にかけてこの言に嘘偽りはないと保証しよう」

「ならばもはや語ることは不要。あのときの借りを返させてもらいましょう」

大友先生が杖を鳴らし構えを取った。

「ほっほ。ようやくやる気になったようじやの。……じやが、儂も今回はあのときのように片足だけで済まそうとは思っておらん。いや、そうはさせぬ」

道満は大友先生を逃がすつもりはなく、ここで完全に決着を付けるつもりのようなのだ。

威厳に満ちた台詞はこの場の空気を一変させるのに十分なものとなった。

白髪老体の陰陽師と鬪^{けつてきのまっ}腋袍の陰陽師。二人の間で静かに戦いの幕が開けた。

先に仕掛けたのは道満だった。

僕たちを包囲するしていた式神を数匹、大友先生へと向けた。主の命令に忠実に従った式神数匹は大友先生へと殺到した。

しかし——

「散れっ！」

一言だけ。一喝したその言葉に呼応するように式神たちは散り散りとなった。

「これは甲種言霊こうしゅごんどうたま!? しかも一度であの数の式神に影響を与えるなんて……」

驚いた姉さんが言葉を漏らした。

そう。大友先生の放った言葉は甲種言霊と呼ばれ、呪力を言葉に乗せて相手の精神に働きかけて強制力を行使する呪術の一種だ。一応、帝式の扱いとなっているので使い手は少ない。

大友先生は甲種言霊で式神から距離を稼ぐと同時に右足の義足で素早く印を描いた。それに気づいた道満も追撃をするべく片手で刀印を結び、そして大友先生に斬りつけた。しかし大友先生の方が一瞬ほど早かった。

大友先生の姿は道満の攻撃が届く直前に陽炎のように揺らぎ、そして文字通り消えた。

隠形術と歩行法に幻術を組み合わせた複合術式。レベルの高い術を繰り出す様はまさに大友先生の実力を示していた。

大友先生はその隠形を維持したまま僕たちの方へとやってきた。

道満を含めみんなは気が付いていない。僕も一瞬だけ大友先生の方を見て気づかないふりをしようとした。しかし大友先生に視線をやった瞬間に、大友先生と目が合ってしまった。

大友先生は少し驚いた表情をしたが、合図のつもりか片目を瞑り表情を戻した。

僕もその合図に従い視線を外した。

そして大友先生がこちらに着いた丁度そのころ、道満は痺れを切らしたのか、先ほどの刀印を、横薙ぎに切り返した。

するとその動きに連動するかのようにビルの屋上全体に強烈な風が吹き荒れた。

この強風で大友先生を見つけようとしたのだろう。

だが、大友先生は逆にその風を利用して反撃に出た。

「急急如律令！」

僕たちの目の前で響いた大友先生の言葉にみんなビククリする。道満はその声に反応するように声とは逆側へと大きく飛び距離を取った。

そして大友先生の投げた一枚の呪符が強風に逆らうように中空を舞った。

瞬間。

風が呪符の炎で燃え上がった。

この風は金気を帯びている。それを瞬時に見破った大友先生は火行符を投げたのだ。

火剋金。火は金属を熔かす。ぶつかり合う炎と風。その相剋で屋上の大気が激しく揺ぎ、隠形によって隠れていた大友先生の姿があらわになった。そして五行相剋の理に基づき炎の勢いにやられた風は勢力を落とし始めた。

「そこにおつたか」

道満は大友先生に視線をやり言った。

「じゃが……、火剋金とは些か早計であつたの」

その言葉を言い終えた直後、炎よつてに押されていた風の勢いが再び増した。道満が風に込める呪力を増したのだ。

呪符による炎は衰えることはなかったが、風をかき消す力は既に失われていた。いや、逆に風よつて炎を支配されようとしていた。

五行相侮だ。相剋したと思つていたものが、気がついた時にはその関係が逆転したのだ。そしてこれは金侮火。金属が強すぎると少々の火では相剋できない。

呪符に込められる呪力などたかが知れている。道満自身から発している風に対抗するには呪符に込められる呪力だけではとても足りないのだ。

風はその姿を変異させ道満の手前を起点に急速に回転し始めた。ビル全体まで広がっていた強風が圧縮される。

その姿は竜巻。そして呪符の炎を纏ったその竜巻はさらにその姿を変貌させた。

火災旋風。風と炎によって出来たそれは凶悪なまでの熱気を帯び、道満の手前でその姿を高速回転させながら次の指示を静かに待っていた。

「チィッ——」

大友先生が舌打ちする。

僕は後ろから大友先生を見ているためその表情は確認できない。が、これはひよつとして……、いや、かなりまずい状況なのではないだろうか。

「……大友先生？　これ大丈夫ですか？」

すると大友先生は苦笑いをしながらこちらに振り返り答えた。

「……すまんな、みんな。正直言うと、ちよつとこれはマズいわ。本当ならみんなを守りながら戦うつもりやったんやけど……、どうもその余裕はないみたいや」

その言葉にみんな一様に青ざめた顔をする。

しかし、まあ、そうだよな……。

周りには式神、正面には火災旋風と道満。僕たちは結界もなく無防備。どうみても絶体絶命です。本当にありがとうございました。

「分かりました。僕たちは僕たちで何とかしますので大友先生は戦いに集中してください」

「いやゴメンやで。ホンマ堪忍な」

相手は道満だ。いくら大友先生とはいえ、これは仕方の無いことだ。

大友先生としては初手で僕たちの正面に立って道満の攻撃を受けつつ応戦したかったようだが、その初手で使った呪符が決定打となるとは予想もしなかったことだろう。

僕もこんな展開になるなんて思いもよらなかつたよ。

しかしこの状況、なんとかしなければこれで終わりだ。少なくとも大友先生の邪魔にならないように僕たちは僕たちで何とか対策しなければならなかつた。

僕は念のため、鈴鹿に結界を張ってもらうようお願いした。

もう結界でどうにかなるレベルを通り越しているが、無いよりはマシだろう。

鈴鹿は僕に領くと直ぐさま祭壇を囲うように結界を張った。

結界の外には緊張した面持ちの大友先生と、にやけた表情の道満が対峙していた。

「次は何を見せてくれるのか楽しみじゃ。——それとももう降参かの？」

「なにをおっしゃいます。これからですよ、これから！」

大友先生はそういって前面に五枚の呪符を投げつけ、そして息をつく間もなく詠唱に

入る。

呪符は陰陽庁製の既製品の呪符ではない。恐らく自作のものなのだろう。先ほど呪符を逆手に取られたことでやり方を変えたようだ。

「東海の神、名は阿明、西海の神、名は祝良、南海の神、名は巨乘、北海の神、名は愚強、四海の大神、百鬼を退け、凶災を祓う。急急如律令！」

気合いのこもった声と共に呪文を唱える。

正面に投じた五行符が光を放ち、放たれた光が呪符同士を結びつける。すると大友先生の前面に五芒星が完成した。

五芒星には強力な靈気が宿っており、まぶしい光を放ちながら展開している。その光に照らされて道満の式神たちは絶叫しながらもがき苦しんでいる。

道満もその術に驚いた様子で、火災旋風傍らに置いたまま大友先生をじつと観察していた。

これは夜光が作った帝式にある術だ。百鬼夜行を退けるとされる秘術。

まさか大友先生がこんな術を使えるとは思ってもみなかったが、確かにこれなら道満の式神は退けることが出来るだろう。

だが大友先生の術はまだこれで終わりではなかった。

大友先生は懐からあるモノを取り出し足下へと置いた。笹の葉に包まれた小石。

それを見た道満の表情がみるみるうちに激変した。

大友先生の行為はそれで終わりではなかった。さらに懐から取り出したのは折りたたまれた小さな紙。

大友先生はその紙を開き、中に入っていたモノを小石へと振りかけた。

そして――

「此の竹葉たかばの青むごとが如、此の竹葉の萎しほむが如、青み萎しほめ！ またこの塩の盈みち乾ひるが如、盈ち乾よ！ また此の石の沈しずむが如、沈み臥こせ！」

大友先生の叫びに呼応するように術式が起動する。

すると道満の頭上に、薄暗く燃える炎が一齐に灯った。その数は目視では判断できないほどの数になっていた。

一体これほどの呪符をいつの間に……。

最初から用意していたのか、はたまた最初の攻防の際にばら撒いたのか。

いずれにしても高度な隠形術によって隠蔽された呪符は、道満を含め、この場にいる誰一人として気づくものはいなかった。

薄暗く燃える炎は明滅するように脈を打つ。そして明滅を繰り返しながらだんだんとその明るさを強くしていった。

次第に炎は光源によって細く伸びる一筋の光、光芒を作る。そしてその光芒が重なり

合つた瞬間だった。

光芒と光芒が重なり合つた瞬間、蜘蛛の巣のように急速に広がった。

その術式は道満の頭上で展開されドーム状となり、先ほどの火災旋風ファイアストームごとく包み込むように覆つた。

そして道満を包み込んだ術式に強烈な呪力が展開された。

周りから息を飲む声が聞こえる。

誰が見てもドン引きするような禍々しい呪力が術式の中に充満する。さらに火災旋風ファイアストームの呪力、そして熱量も加わり地獄絵図を再現したかのような見るも無惨な光景になつていた。

だが――

「まさかよー！」

術式の中から道満の声が響いた。

「よもや『八目の荒籠鎮めの呪詛』とは！ このような古の呪詛いにしえなど帝式にも残つておるまい。しかも自ら手を加え、意表を突くに留まらず、さらに儂の術まで利用して呪の威を高めるとはな！ ふはははははっ！ 良い！ 貴様、儂の期待以上じゃぞ！」

道満は笑いながら興奮気味に語つた。

これだけの術式の中で慌てることなくまだ笑うだけの余裕があるとは、さすがに長い

こと生きてきただけはあゝ。

「さすがの儂もこの呪詛の返しは知らぬわ。いやさ、仮に知っていたとしてもこの拘束された状態からでは無理じゃの。ククククツ。なんともあくどい術式よ」

なれば、と眼光鋭く大友先生を見つめ、そして——

「なれば儂も本気を出さん。無料を承知で、力業ちからわざにいかせてもらおう！」

道満の声が術式の中から響く。と、同時に道満から強大な靈気があふれ出た。その靈気は留まるところを知らない。

ただでさえ術式の中は荒れ狂う呪力で満たされている。にもかかわらず道満が出した強大な靈気の放出。その二つがぶつかり合い、そして靈圧が急激に上昇していった。

「うっ……」

誰かがたまらず呻き声を漏らした。

声の方向へ視線を向けると北斗、鈴鹿、京子、そして僕を除きみんな顔色を悪くしていた。

「天馬!? 夏目くん!? それに春虎も、……冬児もっ!? ——え!? お祖母様まで!?」

京子が叫ぶ。姉さん、春虎兄さん、塾長、冬児、天馬。

みんな今にも吐きそうに、そして貧血ぎみに身体を崩しばたばたと倒れていった。

印を組みながら結界を維持している鈴鹿を除く京子と北斗は、すぐにみんなの介抱にあたる。

大友先生が仕掛けた八目の荒籠鎮めの呪詛とはその名の通り呪いなのだ。

そう。道満が霊圧を高めたことよって呪詛が周囲に漏れ影響が出たのだ。

僕や北斗、鈴鹿、京子は魔力回路を持つており、そのおかげでこの程度の呪詛なら魔力の壁よって呪いによる影響が出ることはない。

だが普通の陰陽師はそうはいかない。

呪いとは結界を張っているからといって無防備でいられるほど甘くはない。

大友先生のように關腋袍けつぎのほうよって抵抗力の底上げをするなどしないと、呪いの抵抗力の弱い人では今のみんなのような状態へと陥ってしまう。

「はあ……」とため息をつく。

仕方が無いか。大友先生は今、自分のことで精一杯だし、自分たちのことは自分たちで何とかすると言った手前、僕たちでなんとかしないとイケないだろう。

それに――

僕は姉さんを見る。

とても……、とても、苦しそうにしている。

道満への対処は大友先生に任せてはいるがこの術の応酬は周りへの影響が大きすぎる。

さすがに姉さんに影響が出てしまつてはこのまま放置というわけにはいかないだろう。少なくともこの呪詛を何とかしなければ……

祭壇から下り、結界の内周まで進む。位置的には大友先生より5メートル程度後方だ。

「碧……？」

「鈴鹿、一端結界を解いてくれ。式神は大友先生の術式のおかげで今は動くことが出来ない。……けど、この呪詛まではどうすることもできないから何とかしてくる」

「碧くん……、一体何をやる気？」

「大友先生の邪魔をしないように、この呪詛を遮断してくるよ。——鈴鹿開けてくれ。そして僕が出たらもう一度、結界を展開して」

「わ、わかつたわ！」

そう言つて鈴鹿は結界を解き、そして僕は結界の範囲外へと出た。

僕が出ると鈴鹿は再び結界を展開。祭壇を囲うように結界が構築された。

「鈴鹿はこのまま結界を維持。京子と北斗はみんなの介抱をお願い」

振り向きざまに指示を出した。もつとも介抱といっても背中をさするなどの気休め

程度な方法しかない。呪いによる影響は治癒府ではどうにもならないのだ。

「ほっほ。お主の教え子が一人、結界の外へと出てきたの」

多少意外だったのか、僅かに驚いた表情をしながら楽しそうに言う道満。

「碧クンっ!?!」

視線だけこちらに向けた大友先生が、斜め後ろからでも分かるくらいに表情が驚愕に染まる。

「大友先生は気にせずそのまま戦闘を続けてください。この呪詛の影響が出たので何とかするだけですから……」

呪詛は食い止める。だがそれも大友先生次第といったところか。

このまま呪詛をばら撒き続けられてもかなわん。状況次第で僕も戦闘に参加するつもりだ。結界から出たのはそのためなのだから。

「そちらまで影響がでておったか。気づかずにすまんの」

「いえ、思う存分やって下さい。ただ願わくば——」

「なんじゃ? よい、申してみよ」

「……そんなに戦いたいなら他でやって下さい、と。あなた方の本気とやらはこの狭い屋上でやるには少々影響が大きすぎますので」

しゃべっている間にも呪詛がこちらへ飛んできた。僕は自身の正面、大友先生との間

に魔力による壁を作った。

見た目はただの濃霧。その濃霧に吸い込まれるようにして呪いは消えた。そしてこの濃霧の後ろには呪いを通ることは一切なかった。

これは魔術でも陰陽術でもないただの魔力による障壁だ。本当にただの魔力をぶちまけただけ。

いかなれば呪いという水鉄砲を濃霧という編み目の細かい布で防いでいるようなイメージ。

これは物理的な攻撃ではないもの、実像のない呪いだからこそ可能な、まあ、裏技みたいなものだ。

大友先生と道満は驚きつつも僕の取った行動をじつと観察していた。

「……」

「クククククツ。面白い小僧じゃ。よい、よい。……確かに今回は些か無関係の人間を巻き込みすぎたかの。すまんかったの」

だがその言葉とは裏腹に道満は霊圧をさらに強めていき、そして、

「だがこの勝負はこのまま続けさせてもらう！」

爆発的に上昇した霊圧は大友先生の術式を引きちぎろうと猛烈に暴れ回った。

大友先生はそれに対抗すべく次の手を打った。

「くっ！——バン・ウン・タラク・キリク・アク！」

大友先生の前面に展開する五芒星^{セイマン}をなぞりつつ真言^{マントラ}を唱えた。すると今まで式神に向いていた指向性に変化があった。道満に対する圧力がより一層強まったのだ。これはおそらく百鬼夜行に対抗するための五芒星^{セイマン}に変化を加え対道満用に強化したのだらう。

しかし、道満はそれを苦ともせず術式の中から両腕を繰り出した。

「返すぞー！」

道満の叫びと共に、道満を縛っていた蜘蛛の巣のような術式はブチブチと千切れていき、そして、中から一気に爆発した。

激しい熱気を含んだ衝撃波は大友先生の五芒星^{セイマン}に直撃。五芒星^{セイマン}は激しく明滅を繰り返しながら衝撃を受け止めている。

大友先生の後方にいる僕にもその衝撃は伝わってくる。いくら五芒星^{セイマン}によって守られているとはいえ正面で受け止めている大友先生への影響は計り知れない。

しかし大友先生は激しい衝撃に揺さぶられながらも足下にある笹の葉に包まれた小石を道満へと蹴飛ばした。これを近づけることによって術式の圧力を強めようとしたのだが、その行為もむなしく、小石は衝撃に飲み込まれ散り散りとなった。

もはやここまでか。幾分の余裕もない間に五芒星^{セイマン}も破られるだろう。

僕はある魔術の準備をしながら待機した。

が、大友先生はその五芒星^{セーマン}が破られるまでの時間を使って次の行動へと移った。

「あんたりをん、そくめつそく、びらりやびらり、そくめつめい——」

この状況で唱える呪文にしては恐ろしく長い呪文。大友先生が唱えている呪術は、帝式にある神仙道系の遠当て……、遠距離からの物理攻撃だ。

五芒星^{セーマン}が弾け飛ぶのが先か、詠唱を終えるのが先か……

一種の賭けだが大友先生には束縛を解いた道満に対抗する手段はあまり残されていないなかつた。

そして、

「——あうん、ぜつめい、そくぜつ、うん、ざんざんだり、ざんだりはんっ！」

長い、この場で唱えるにはとてつもなく長いその呪文が五芒星^{セーマン}が崩壊する前に完成した。

パンツ！

大友先生はこの術式を締めるため両方の手のひらを合わせ鳴らした。

そしてその音に術式は呼応する。

バンツ！

大気が振動しながら弾ける音と共に道満に炸裂。凄まじい物理衝撃が道満を襲った。

「ぬおおおおおおおおおおおお!!!」

藻掻くような絶叫。さすがの道満もこれは堪えたようだ。

しかし道満もやられっぱなしではなかった。

苦痛を含んだ声をしながらも、さらに霊圧を高めていきその衝撃を押し返そうとしていた。

これには大友先生も意表を突かれたのか体勢を立て直し、衝撃に備えようと足をしっかりと固定した。

大友先生の物理衝撃を含む呪術と道満の霊圧が拮抗。その中心で大きな力の波が渦巻き——

そしてその均衡が破られるかのように中心で大爆発を起こした。

密度の高い霊気と呪力。それは石つぶてを含み爆風と衝撃波となつて大友先生を巻き込み、そして僕たちに迫ろうとしていた。

さすがにこれは魔力による障壁では防ぐことはできない。ならば、と。迫り来る衝撃に備え、僕は急ぎ空中にルーンを刻む。

「我が目前に勝利ありき——」

衝撃波を防ぐために刻印の力で強化した勝利トゥールの加護で障壁を張つたのだ。僕の前面

で煌めく障壁は、僕と背後にいるみんなを守るべくその姿を顕現させた。

ガンツガンツと、大小の石つぶてが障壁にぶつかり、けたたましい音を立てる。

しかしその障壁が破られることはなく、勝利トウリルの加護に守られた僕たちは無事この衝撃を乗り切ったのだった。

そして——

嵐が過ぎ去ったあと、屋上には二つの影が、いや、一つは健在、そしてもう一つは地面に倒れ臥していた。

2—13. 陰陽塾襲撃（5）

爆発によって辺りを包みこんでいた爆煙は、黒い呪力を含んだ風によって視界がクリアになった。

するとそこには、健在する道満と、身体を丸めるように倒れ臥す大友先生の姿があった。道満の装甲鬼兵は式符へと戻っていた。式神を維持できなかつたところを見るに、どうやら道満もそれなりに必死だったようだ。

すぐに駆け寄り状態を確認。すると僅かに身動きした。

苦悶の表情を浮かべながら身を蠢かせる。しかしこの怪我だ。動くだけでも激痛が伴うはずだ。

「ぐうっ……」

力尽き再び地面に俯せになる大友先生。

僕はすぐさま治癒符を取り出して大友先生に当てつけた。

「そのまま。動かないで下さい」

「す、すまんな碧クン……情けない姿みせてもうたわ」

相変わらず飄々とした口調で言う大友先生。だが、その身に負つたものは酷い有様

だった。陰陽術の影響か、髪は白くなっていた。顔は眼鏡も含めて綺麗なものだったが、しかし、反射的に腕で庇ったのだろう。その顔に負うはずだった代償はその他の部分にのしかかった。その証拠に鬨腋袍けつてきのほうの袖部分を一切残さず、またその他の部分もその殆どがこの世から消え去っていた。

顔以外の部分、特に顔を庇ったときに使った腕の損傷が酷い。露出した肌……、いや、肌と呼べたモノは既にそのカタチを成していなかった。皮膚はまるで本物の炭のように真っ黒に炭化し、それは目を覆いたくなるほどの酷い火傷を負っていたのだ。

大友先生がここまで酷くなった原因は道満と同時に封じ込めた火災旋風ファイアストームにある。道満が大友先生の術式を力業で破壊したときに封じ込めたはずの火災旋風が解放され、それによって生み出された凄まじい熱量が大友先生を直撃したのだ。

セーマンセーモンや鬨腋袍けつてきのほうによって幾分かその損傷を軽減できたようだが、それをしても有り余る熱量は大友先生自身を襲った。その結果この決して軽くはない代償を負ったようだ。

僕は太友先生の身体を詳細に調べるべく解析を行う。

見た目通り腕は重症だが、運がいいといつていいのか、それ以外の部分は先ほど使った治癒符により治癒できたようだ。

そうこうしていると、こちらへ走ってくる足音が聞こえてきた。

「大友先生っ!？」

京子は声を上げてこちらへと向かってきた。そして鈴鹿と北斗、それに顔色が悪い塾長も集まってきた。

京子は自分の担当の講師なので居たたまれないままこちらへ来たのだろう。鈴鹿や北斗はそんな京子を追いかけたといったところか。塾長はその身に呪いを受け調子が悪いながらも、その責務からこちらへ来たようだ。

そしてそんな皆を代表するように、京子が前へと出て状況の確認をしてきた。

「碧くん！ 大友先生の容態は!?!」

するとその京子を心配させまいと大友先生が答えた。

「……京子クン。心配せんでも碧クンに回復してもらったおかげでこの通り大丈夫や」

身体を蠢かせながら体勢を直し京子に振り返るように地面に座り軽口を叩く大友先生。だが軽口とは裏腹にその表情は苦悶に満ちたものとなっており全く説得力に欠けていた。

まったくこの先生はこんなときまで……

僕は皆に向き直った。

「大友先生の言うように、治癒府による応急治療で軽微な怪我や火傷のほどんどは治つたよ。もう大丈夫……と言いたいところだけど——」

僕は大友先生の容態を一通り説明したあと、大友先生の両腕に視線をやりその最大の

問題点を指摘した。

「その両腕は別」

「それはどういう……？？」

彼女たちにこの場で本当のことをいうのもどうかと思つたが、既にここに来て見ている以上、それをしたところで意味が無い。

僕は皆と、そして大友先生に現状を理解してもらつたために包み隠さず正直に話した。

「完全に炭化していて医療でどうこうなる話ではないです。同様に陰陽術でも治すことは不可能です。残念ですがその両腕はもう二度と使い物にはならないでしょうね」

「そ、そんなっ!？」

辺りは騒然とした。塾長はその調子の悪い表情をさらに悪くして苦渋の表情へと替えていった。それもそうだろう。先ほどまで時間外手当などと冗談を言い合つていたのだ。まさかこんな結末になるとは思つてもみなかったことだろう。……いや、それは正しくないか。塾長からしてみれば大友先生はそれだけ信頼に足る人物だったと言うことだ。

相手が蘆屋道満とはいえ大友先生が負けるはずがない。確信めいた何かがあつて、そう信じていたのだろう。そうでなければ冗談でも「道満を倒せば時間外手当を検討する」などと言うはずもない。

「はあ……さつきから全然動かんし感覚もないし薄々は感じとつたけど、まさか法師に脚だけじやのうて腕まで持っていていかれるとは思ひもよらんかったわ」

「意外と冷静ですね。もつと取り乱すと思つていました」

「まあ、僕が法師の力量を甘くみとつた代償なんやろな。法師一人ならなんとかなる。そうおもつとつたけど結果はこの両腕や。こうまで差を見せつけられると逆に冷静でいられるわ」

大友先生は努めて冷静に現状を分析した。状況を深刻に捉えている皆とは対照的なその様子は年季の差というのだろうか。それとも既に脚を失っていたが故の経験の差か。いずれにしても先生のその態度は皆の態度を少しは軟化させる役割を果たした。

「それで先生。これからどうするおつもりですか？」

「さすがにこの状態で法師の相手はちと辛い……、と言いたところやけど」

「まさか、先生っ!？」

京子が叫ぶ。

「そう悠長なことも言つてられへん事情もあることやし」

そう言つて立ち上がろうとするが、

「ぐっ……」

当然両腕を使えない体ではバランスを崩して再び地面へと倒れる。

「そんな体では無理ですっ!」

「あんた自分の状況分かってんのっ!? そのボロボロの体で何が出来るって言うのよ!!」

京子と鈴鹿が怒鳴りながら再び道満に対峙しようとする大友先生を止めようとする。しかし大友先生はそんな二人の忠告を振り切るかのように再びふらつきながら立ち上がった。

「すまん京子クン、鈴鹿クン。えらい心配させてしもうたな。せやけどな、君らの講師としてここは退く訳にはいかないんや!」

なんとまあ、講師の鏡のようなことを恥ずかしげもなく言う大友先生。ボロボロになりながらも、まだ道満とやり合う気のようにだ。だが、しかし、そんな身体で何ができるといふのだろうか。

「大友先生。僕にはその行動が理解しかねますね。そこまで無理をしなくてもいいでしょうに。少しはご自分の身体を労って下さい」

「そうよ! あんたはもうそこで休んで下さい!!」

「そうです先生。あとのことはあたしたちに任せて下さい」

「……生徒にこないなと言われるなんて、僕もとうとう焼きが回ったかな……」

「まあまあ、大友先生。そんなに自分のことを卑下しないで下さい。2人とも何の自信

もなくそういうことを言っている訳ではないので」

「……どういふことやっ」

「それはこれから見ることができると思えますよ。とにかく、蘆屋道満の目的は鴉羽織だ。僕たちじゃない。———そうですよね？」

僕は道満に振り向き質問を投げかけた。

そしてそれまで黙ってこちらの様子を観察していた道満は、僕の投げかけた質問に口の端をつり上げ満足げに頷いた。

「左様。目的はあくまで鴉羽織よ。お主らとの遊びはそのついでじやの———ぬ？」

当然だ。道満としては鴉羽織さえ手に入れることが出来れば、早々にここを立ち去りたいはずである。わざわざ陰陽庁へ陽動をかけたくらいだ。しかも陰陽庁襲撃にあたり護法という貴重な手札も使っている。そこまでして陰陽庁からの援軍を遠ざけたかった程なのだから。

つまり、この場をおさめる最良……とはいかなくとも、無難な解決策としては、この騒動の原因である鴉羽織の場所を開示して、道満には早々に立ち去ってもらうべきではないだろうか？

道満は未だに式神を使い鴉羽織を探しているようだが、そんなことをしないで、隠している本人に聞けばいい。隠している本人はそれをよしとしないのだろうか、塾長に

はもう戦力といえるものはない。少なくとも犠牲も払っているのだ。もう十分だろう。「ということですが、塾長はどう思いますか？ 鴉羽織さえ渡してしまえば、これ以上、被害を出さずに済む」

「そ、それは……」

「塾長。もう十分でしょう。大友先生はまだやり足りないようですが、勝負は決しました。残念ですが両腕を使えない陰陽師など戦力になりません。まして相手はあの蘆屋道満。次やり合ったら命はないですよ？」

「ははっ、これは手厳しいな……」

「小僧の言う通りじゃ。儂も両腕を使えない陰陽師を相手にするほど暇しておらぬ。次に相まみえんとするならば、その命で代償を払ってもらおうかの」

道満の言葉によどみはない。本気でその言葉通りのことを実行するつもりだ。次に道満の前に大友先生が立ちふさがれば言葉通り大友先生に未来はない。

「大友先生はあの蘆屋道満相手にあと一步のところまで追い詰めました。ここまでやってダメだったのですから、もう鴉羽織をくれてやってもいいんじゃないですか？」

これ以上、大友先生が戦うのは無理だ。結果など目に見えているし、僕の目の前で知っている誰かが、為す術もなく虐殺されるのを黙って見てやるほど僕はお人好しでもない。

そもそも鴉羽織など僕から言わせれば夜光が作ったオモチャに過ぎない。塾長が流る理由は定かではないが、そんなものさつきとくれてやればいいのだ。鴉羽織が誰の手
に落ちようと僕は一向に構わない。

塾長はしばし考えた後、決心がついたのか諦めともとれる表情で呟いた。

「……わかりました」

「塾長!？」

「いいんです。大友先生。貴方はよくやってくれました。ですが、これ以上は貴方を頼
ることはできません。そしてこれから起こることは全て私が責任を持ちます」

「くっ」

「ご理解頂けてなによりです。それで、鴉羽織はどちらに?」

「鴉羽織は——」

「ぐくり、と唾を飲み込むような音が聞こえてきた。

「ここには……この塾舎にはありません」

「……………え?」「はあ?」「ちよ、ちよっと! お祖母様!？」

あまりの衝撃に、一瞬、塾長が何を言っているのか理解できなかつた。

塾長の放った一言はこの場にいる人間に衝撃を与えた。その言葉の真偽は不明だが、
塾長は鴉羽織がこの塾舎にないと言った。今までそれを巡って攻撃を受けてきた僕た

ちにとつて、その一言はあまりにも衝撃が大きかった。そして僕たち以外にも衝撃を受けた人物が一人。

「なんと、ここにきてそのような戯れ言を……」

その場に立ちすくみながら声による威圧を強めていく道満。塾長は話を続けた。

「事実ここにはないのです。一月ほどまえに土御門の当主である泰純さんが鴉羽織をこの塾舎から運び出したのです」

「なん……だと……？」

あ、あまりの衝撃に思わず口から言葉がこぼれてしまった。

父さん……あんた一体何やってんだ……？

しかし一月前か……そういえば僕が北斗を連れ帰つて父さんに電話したときに少し様子がおかしかつた気がしないでもない。が、今さらそのことを言つたところでどうなるものでもない。

「私が鴉羽織について知っているのはここまでです。碧さん、あなたは泰純さんからそのことについて何か聞いていませんか？」

「いえ、僕は特に何も……そもそも知っていたら塾長にこんな話していませんよ……」

「そうですか……」

困つた。さすがに父さんが鴉羽織を持つていったのは想定外。寝耳に水だ。

そもそも塾長も塾長だ。そんなことが理由ならここまで引つ張らないでもいいだろうに。あらかじめこのことを知っていたら、事前に父さんに問いつめることもできたはずである。今さらだが……

「だいたいなんで皆が皆、鴉羽織を隠すんだ……何が珍しくてあんなものを欲しがるのだろうか。」

「おっと、思考が脱線してしまった。今はそんなことよりも、これからどうするのかに思考を割かなければならない。」

「父さんが鴉羽織を持つていった理由は不明だ。優秀な星詠みである父さんが何かの目的の為に動いていることは知っている。が、しかし、この件において責任の一端は土御門家の一員である僕にもあるということか。」

「事情は分かりました。土御門家の人間として僕に責任があるのでしよう。——わかりました、わかりましたよ、もう……」

「半ば自棄になる僕を皆が静かに聞き入る。僕は続けた。」

「いずれにしても、ここに鴉羽織がない以上、道満殿の目的は達成できない訳ですが。さて、道満殿」

「なんじゃ」

「「ここらで一度幕引きをしてもらえませんか？ 僕らもない袖は触れませんのでね」

「ふむ」

「とはいええ、それでは道満殿の気が済まないでしょう。貴方は塾長の隠し球である大友先生を下した。ゲームでいうならラスボスを倒したということだ。それならば鴉羽織というクリア報酬を手にするに値しているのだと思います」

「当然じゃな。さもなければお主たちにはそれ相応の代償を払ってもらう、そう思っていたのだが。じゃが……」

「お気づきですよね。お察しの通り、先ほど道満殿との会話中に拘束させていただきました。——これで貴方に自由はない」

その話を聞いたこの場に居る全員が驚愕した。

「一体いつの間に!?」 甲種の予備動作なんか全然しとらんかったやないか」

「ええ。僕にはそんなもの必要ないですのぞ」

「なんやて!?!」

「法師を止められるだけの強力な不動金縛……いえ、もつと別の何か……しかも動作を必要としない? ……碧さん、そんなことが本当に可能なのですか?」

「いろいろと疑問があると思いますが、それは見ての通り。とりあえず、いまは身体の自由だけ奪っています」

「……その左目か。その黄金の瞳。ちと異質すぎるの」

「さすが道満殿。その洞察力はさすがといったところですよ。——ですが、気づいたところでもう遅い」

既に僕の左目は濃紺色の瞳から黄金の瞳へと切り替わっている。先ほど道満へと質問を投げかけたときに投射した、僕の最速の「シングルアクション」工程。視線による拘束術式。

魔眼と呼ばれるこの世界に存在するハズのない神秘。その魔眼が不満顔の道満の姿を眼球に捕らえていた。

「碧殿!? その眼はもしかや……」

「うん。北斗が想像している通りだと思うよ」

それを聞いた北斗はドン引きしてすぐに目をそらした。

「そういえば、陰陽庁でも長官相手に似たようなことしていたわね。あのときは碧の顔を見ていなかったから解らなかつたけど、同じことやっていたの?」

「倉橋さんを捕らえたのも同じだね。ただし、あの時は身体はもちろん、彼の意識も僕の支配下にあつたけどね」

「……もう言葉もないですね」

「お祖母様。碧くんのことではいちいち驚いていたら身が持たないですよ」

「んなアホな……そんな術式、帝式以前にもあるわけがない……」

「うむ。儂もこのような術式、見たことも聞いたこともないの。……それ已前に、これは陰陽術なのかの？」

さすがにしゃべりすぎたか。道満が魔眼に疑問を持った。もつとも疑問を持ったところで対策をできるわけではないのだが。

「それにしても、その眼きれいね……」

「そうね。なんだか引き込まれそうになるわ」

「——鈴鹿殿。京子殿。あまりその眼を見ない方がいい」

「北斗つち？ どうして？」

「そこに捕われている蘆屋道満と同じ状態になりたいか？」

「なっ!？」

北斗の言葉に驚愕の表情に染まる2人。

「北斗の言う通りだよ。いまは意識して対象を道満殿に絞り込んでいるけど、基本的に視界に収まれば人だろうが式神だろうが拘束対象に含まれるから気をつけてね」

ニツコリと笑いながら答えると、道満以外がドン引きして、視界に入らないように、さーっと僕の後方へ引いていった。大友先生は京子と鈴鹿に抱えられながら移動した。

「それは後付けしたもののかの？ もつとも後付けだったものだとしてもどうやったのか見当もつかぬが……」

「安心して下さい。これは先天的なものですよ」

「……お主、それはずるくないかのう？ いや、ずるいぞ」

「いやあ、そう泣き言をいわれても困りますよ」

あの蘆屋道満が何やら泣き言をいつているが無視だ。無視無視。文句なら神さまにでも言ってくれ。

そんなことよりも僕の都合を優先させてもらおう。

「それに、こうでもしなければ落ち着いて話もできないでしょう」

「……納得はできぬが、ふむ。まあよかろう」

渋々ではあるが納得したらしい道満。

「……じゃが、その前に——」

そういうと黒い呪力が立ち上っていった。それは次第に強さを増していく。

やれやれ、この爺さんまだ何かやる気だよ……

「せっかくじゃ。一つ試させてもらおうかの」

道満が言うのと式符に戻っていた装甲鬼兵が再び形を成した。

「なんで!？」

「碧くんの術で身体を奪われているハズなのに……」

鈴鹿と京子の言うように僕は魔眼による拘束を継続している。文字通り、指一本動か

ない状態だ。自由が許されてるのは首から上と内蔵なかもみぐらい。陰陽師にとつて身体の原因が奪われた状態で呪力を練るのは困難を極める。まして、式神を、しかもゆうに100はいる式神を操るなど、陰陽師としては規格外もいいとこだ。

だが——

「言つたハズです。この眼の前では人も『式神』も無力だと」

僕は視線を装甲鬼兵へと向け、視界に入っている全ての式神の動きを止めた。だが、道満は動じた様子もなく淡々と言葉を紡いだ。

「この数の式神全ての動きを止めるとは、非常識も甚だしいの。お主のいうように視界に対象がいれば、その眼に捕らえられるようじゃの。じゃが——」

道満がそう言葉を発した瞬間、背後から複数の気配がした。恐らくはビルの壁などに待機させていた式神を僕たちの背後に移動させたのだろう。

なるほど。たしかに眼にカラクリがあると判れば、眼の届かないところからの攻撃を試みるのは道理。道満は正面の式神を全て囷にして、背後からの攻撃を試みたのだ。

——もつとも、それも想定内の行動ではあるが。

面白い。さて、これらをどう処理しようか。僕が魔弾で迎撃してもいいが……

いい機会だ。ここは少し趣向を変えてみましょう。

「北斗——」

僕は魔眼を閉塞しつつ背後にいる頼れる北斗いもとうとへと声をかけて行動を促した。

☆

正面にいた式神に魔眼を飛ばしている碧殿から私に声がかかった。私はその声を聞いて自然と口元が釣り上がった。おそらく嬉しかったのだろう。碧殿に頼られたということが。

私はすぐさま後ろに振り向きつつ、意識を切り替える。回路の調子はいつもよりいいようだ。

標的は5体。碧殿の魔眼を避けるために、建物の側面を伝ってきたのだろう。標的となっている式神は、素早い移動をしながら、こちらを攻撃しようとしていた。

——だが、所詮は移動速度。こちらの攻撃速度よりだいぶ遅い。こちらへ攻撃を加えるよりも、こちらが攻撃する方が速い。

詠唱を終えた私は、標的に向かって手を突き出した。

「炎天よ！ 奔れ!!」

私の声に応えるように、天上の業火が式神へと降り注いだ。

☆

小僧の後ろに控えていた少女がなにやら行動を起こした瞬間、突如として上空より降り注いだ炎が、濃の式神を消し去った。文字通り、式符ごとこの世から消え去った。

濃の不意打ち、それ自体は小僧に通用するとは思っていなかった。今回の不意打ち、あくまでも小僧の眼の効果範囲を計るためのものだった。恐らく小僧が何らかの方法で対応するのだろうと思っていたのじゃが……

この展開は想定外じゃ。

あの眼の有効範囲、それそのものは恐らく視界の正面に限定されたものじゃろう。それを計れたのは収穫じゃ。だが、その眼を使用しているときに、他の術を行使できるのかという疑念が小娘の行為によって妨げられたばかりか、その邪魔をした小娘がまた得体の知れない術を使いおった。

この場にいる者たちで注意しなければならない人物は得体の知れない小僧ただ一人。
——そう考えていたのじゃが、どうやらその認識は改めなければならないようじゃの。

「……何をした、小娘」

少女はこちらへと振り向き、口元を釣り上げながらこちらへと振り向いた。

「さてな。つまらん術式を消した。ただそれだけだ」

それだけ言うと言すことは終わつたといわんばかりに、小娘は視線をこちらから切つた。

むう。小娘はつまらん術式というが、この式神に使つた式符は儂自ら仕立てた特別製じゃ。故に並の陰陽師では、何をしようが式符ごと消し去ることなどできる筈がないのじゃがの。……忘れてはいたが、塾舎内で使つた儂の式符を消したのもこの小娘だつたの。

かわいらしい顔しておるが、なかなかどうして。この小娘も底が知れぬわ。

☆

「北斗。フォローありがとう」

「なに。この程度の事、気にする必要はない。……というよりも、もつと私を頼つてもいいのだぞ？ 碧殿には大きな借りがある。救ってくれたことや、この身体の事、それにこうして学校にまで通わせてもらっている」

北斗は陰陽塾の制服姿を僕に見せつけるように、くるつと回つてみせた。肩口まで伸びた髪が揺らしながら、女子用の白い制服に包まれている北斗の肢体は、その状態でも分かる女性特有の膨らみを強調させている。下はミニのスカートになっており、そこから健康的な太ももを惜しげもなく見せつけていた。

その北斗の姿にぐつと来るものがあつたのは確かだ。器を僕が作ったからとか、身内鼻貞とか、そういうわけではないが、北斗は間違いなく男を惹き付けるものをもっている。10人が10人、そういうであろうことは確信している。だから僕がそう感じるのは正常なのだ。大事な事なので繰り返すが、僕は正常だ。

冗談はさておき、恐らく本人も意識してやったのではないだろう。しかし北斗が僕に對して恩義を感じて何か積極的になつてきた事だけは伺える。

北斗はさらに僕との距離を詰めてきた。

「私としては少しでも碧殿を助けたい思いがある。だからもつと頼つてもらえると、私もうれしいのだがな」

腕を後ろで組み、上目遣いでこちらを見る北斗。

その行動、そして肉体年齢は僕よりも下であるが、精神年齢が高いためか、少女である中に艶かしいさを共有している不思議な雰囲気醸し出していた。

「い、いや、あ、あれは僕が好きでやったことだから……だからね、その、なんだ。……」

あー、つまりさ、北斗が恩義を感じる必要はないからね」

「私では頼りないか……?」

残念そうな顔をする北斗。

「そ、そういうわけじゃないよ」

いつになく積極的な北斗に、たじろぎながら視線をきる。

冷静になれ僕。相手は義妹いもうとだぞ。そして、その義妹に対して適当な事ばかりいつているんじゃない！ 真面目に答えろ、土御門碧！

と、脳内で自分自身を叱咤しながら、ひと呼吸置いてから北斗を正面に見据えて答えた。

「そうだなあ。北斗は強いし、そういつてもらえるのは頼もしいのだけれど……」

「何か心配事でもあるのか?」

「心配事というか、ごく単純な僕の兄としてのプライドというか。……妹に頼りきりの兄ってどうなの?」

すると北斗は呆れたような顔でこちらを見た。

「碧殿は変なところで生真面目だな。いつもは型破りのことばかりやっているのに」

「そうかな?」

「そうだぞ。だからもつと頼れ」

「はあ……わかったよ。北斗の言う通りにするよ。北斗のやりたいことをやらせると約束したのは僕だしね。——ただし」

「ん？」

「僕の指示に従うこと。これくらい条件は付けさせてもらうよ。危険な状況で北斗を頼って取り返しのつかない事態になったら僕は死んでも後悔しそうだ」

「碧殿は心配性だな。だが、分かった。あまり言うとは碧殿も困るだろう」

「分かっているなら自重してよ。北斗」

「ふふつ、わがまま言っでごめんさい。お兄ちゃん。だあーい好き」

北斗はいたずらっ子の表情をして僕に抱きつきながらこう言った。まさかあの北斗がこんな行動をするとは想像していなかった僕には完全に不意打ちとなった。

「ちよーっ！ 北斗!? それに、おつ、おにい!」

と、そこに今まで静観していた鈴鹿が僕と北斗に割って入り、両手を使って引き離れた。

「あー、はいはい。そろそろ兄妹でいちやつくのは止めてよね。つーか、妹に振り回されてるんじゃないわよ」

「べ、別に振り回されてなんかないし! 初めて『お兄ちゃん』なんて呼ばれてテンパっただけだし!」

「妹にお兄ちゃんって呼ばれたくらいでテンパってんじゃねーよ！ このシスコン!!」
「し、しすこん……」

最近、鈴鹿の僕に対する態度が容赦ない。……いや、冷静に考えたら鈴鹿は最初からそうだった。まあ、慣れというのもあるのだろう。それは歓迎すべき事なのだろう。

僕はそう自分に言い聞かせて気持ち落ち着かせた。

そして彼女たちに振り回されている僕を弄るように道満が口を開いた。

「ほっほ。儂を捕らえる程の実力がありながら、女には弱いとは情けないのう」
「くっ……う、うるさいっ!」

そもそもあんたが大人しく拘束されていればこんなことにはならなかったんだ、そう叫びたかったがグツと堪えた。ここで僕が喚いたところで何が変わる訳でもない。余計話が拗れるだけだ。百害あって一利無し。僕は頭を切り替えて道満を黙らせる方法について考える。

さすがに次から次へと事を起こされるとこちらもたまらない。何か巧い手は……ないな……

何やつてもものりりくったり躲かれそうだ。

ただ、このまま弄られたままというのは嫌だ。そもそも僕は弄られるキャラではないんだよ……

——ああ、そうだ。道満を黙らす事はできないのかもしれないが、とりあえず道満の想像もつかない方法で式神は排除しよう。そうしよう。

「鈴鹿、京子」

「ん？」「どうしたの碧くん？」

「魔術の実践といこうか。そろそろいい頃合いだ。2人とも試したいだろう？ それに

丁度いい装甲鬼兵もある」

僕は装甲鬼兵を見ながら2人に言った。

「え？ で、でも……」

戸惑う京子。

「……いいの？ 人目も多いけど……」

鈴鹿は僕の視線の先、道満の装甲鬼兵を一瞥、それから周囲を見回してこう聞いてきた。

『魔術は秘匿するもの』そう言ったのは他でもない僕だ。ここには、塾長や大友先生、そして姉さんたち、さらにはあの蘆屋道満までいる。そして彼らも遠くから見ているだろう。しかし、魔術を使う事について過度に神経質になる必要もない。なぜなら彼らは何も知らないのだから。再現性のないものを何度見せようがどうということはない。

「ああ、思う存分やつてもらってかまわない。何も知らないものたちにはいくらでも見

せつけてやればいいさ」

「ふーん。ま、碧がそういうのなら、鍛錬の成果を試させてもらおうわ！」

「え、ええっ!?! 鈴鹿ちゃん、やる気満々なの!?!」

「あつたりまえじゃない! 蘆屋道満の式神相手にどこまで通用するのか、しかも丁度いい的になつてくれてる。こんなチャンス滅多にないわよ? それにあたしみたく直接的なものじゃないキョーコの方がいろいろ試せるんじゃないの?」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「京子。装甲鬼兵は僕の支配下に置かれ、その身が動く事はない。難しい事は考えずに、ただの的だと思つて、やれるところまでやってごらん。フオローはするからさ」

「そう……ね。うん、わかつたわ。碧くんがそういうのなら……がんばってみるわね!」

京子もようやくやる気になつたようだ。

そしてこれから彼女たちは信じられないような体験をする事になるだろう。そしてこの場にいる観衆たちも。

「さあ、今宵の宴は始まつた。道満殿には悪いが、彼女たちの実験台になつてもらおうとしよう」

「………何じゃとっ?」

道満の表情が少しこわばるのが見て取れた。

それを確認した僕は口元を釣り上げ、右手を前に突き出した。そして、
「蹂躪せよ!!」

号令を発し、僕たちの反撃が始まった。